

ヤシマ

氏の軍義經の兵の影を見て、千餘人渚に上り戦はんとす、會々屋島に留りたる二百餘騎の將士馳せ來りて義經に従ふ、平軍未だ戦はずして又船上より、波に浮びて去る、義經已に屋島に平氏を破り、四國の將士亦敵する者なし、平將田内教能は其軍門に降り、河野通信は三十餘艘の舟師を率ゐて來り會し、

ヤシマノナイダイジン

八島内大臣

ヤシリ

平宗盛(タヒラノム子モリ)を見よ、

ヤシルシ

矢印 矢の體即ち箭に、射手の姓名を注したるをいふ、我が名を人に知らしめんが爲めなり、場所ば、羽中節、袖摺節、菅節の處、または香巻より上、もしくは羽本一寸許のけても書く(ヤシ参看)之を記すには焼繪(焼印)漆、墨等を用ひ、小刀の先にて彫りたるもあり、なほ犬道物などの時には、姓名を避けて我が家紋を書くは、人馬に我名を踏ませまじき爲なりといへり、平家物語に「香巻より一束ばかりおいて、和田小太郎平義盛と漆にて書付けける、太平記に「相模國住人本間孫四郎重氏と、小刀のさきにて書き付けける」など見えたり、おもふに平安朝時代の末年より起りし風なるべし(貞丈雜記)

ヤシロ

社(神社、社祠) 名義神祇を奉齋せる殿舎をいふ、屋代の義なれども、其解釋に關し、或は齋場を以て宮殿に代ふるとなし、或は縁に屋を成せりと爲すは、皆其始につきていふなり、又宮と

ヤシロ

も云ふ、御屋の義にして、之を尊びて稱するなり、祠もヤシロなれども、或はホコラと訓みて、小祠の事とも爲せり、(原注)神社は大神社より古きはなし、即ち大國主神が、自ら其靈魂奇魂を祀り給ひしに起る、然れども當時宮殿の制詳かならず、これに繼ぎては杵築神社あり、天孫瓊々杵尊が、大國主神の爲めに建て給ふ所にして、其制明かに國史に見え、底少石根に宮柱太知り、高天原に千木高知ること、天皇の御所のごとくなしたり、尋で神武天皇の時、皇祖天神を大和の鳥見山に祀り給ひしも、神社を建てず、唯其場を清淨にして植木を植ゑ、磯城を以て、四方を周匝するに過ぎざりき、崇神天皇の時に至り、天照大神を大和の笠縫邑に祀り、其地に神宮を造り、磯城を四面に周し、且神籬を立つ(ヒモロギ)參看)之より先大神は寶鏡を御代として、歴世宮殿の内に祀りしが、天皇、神威を穢さんことを恐れ、新に神宮を造られたるなり、天照大神の宮を建つること茲にはじまる、此時また天國社を定む、神社に資格ある、これをはじめとなす、既にして垂仁天皇の二十六年、天照大神を伊勢國渡會郡に祀れり、爾來祖先、功臣、英雄、義人等の爲めに、神社を建つること次第に多く、遂には一地方には其鎮守の神あり、生産神等あるに至る、申世以後佛説を混するに及び、また神宮寺、社僧等あり(シヅカウツ)參看)而して大寶令の制、天下の官社は神祇官に於て總管し、武家時代には寺社奉行ありて神社のことを掌りたり、また修造に關しては、古は神祇を用ひ、神戶の備丁を役し、或は神職國司の輩をして、費用を辨じ土木の事を董督せしめし事あり、鎌倉幕府の頃には、犯罪の士をして修せしめし事あり、室町時代には其費用の爲めに、關料を收めし事あり、江戸

ヤシロ

時代には、或は神領を以て之に充て、或は大名以下の錢財を募り、或は氏子の協力に依るあり、而して容易に其の創立を許さざるは往時の例に依る、維新の後一時神祇官をおきしも、久しからずして廢し、内務省社寺局にて天下の神社を管したりしが、近時特に神社局をおきたり(按するに神社は、祖先功臣等を紀念する爲に建立せるものなりと雖、中世以後神道を以て宗教視するに至りては、また迷信によりて建立せるものも尠なからず(原注)太古の制、千木(ナギ)參看)醜木(カツナギ)參看)を以て屋蓋を支へ、茅を葺き、柱は堀立柱なり、世に神明造と稱す、今の伊勢神宮の様式即ちこれなり(建築の挿繪參看)また出雲の大社は、皇居を模したるなりといふ、今日の様式もまた大體に於て古式を帯びたり、然るに後世に至りては、その形状も一ならずして、漸く古制と背馳す、その中獨り神明造のみは古樣を守りたれども、その餘皇子造(春日造とも云ふ)石の間造(八棟造とも云ふ)樞現造(堂社造とも云ふ)相殿造(二間造とも云ふ)禿倉造等出來たり、就中樞現堂造りは、組もの影ものを用ひ、彩色を施し質朴の風を失ひ、頗る華美に趨けり、況んや兩部神道の盛んに行はるゝに隨ひ、寺院の殿堂に髣髴たるものあるに至る、凡そ社には、大あり小あり、新あり舊あり、其構造の同じからざる而已ならず、殿舎の數も等しからずして、其名も或は異なるものあり、今其大體に就きていへば、主神を奉安する殿を神殿といふ、即ち正殿なり、又寶殿あり神庫あり、共に神寶を收貯する處にして、上古に齋藏(イミクラ)參看)といひ、後に寶倉、寶藏の名あり、而して寶殿は亦正殿の名と爲る、至小の神舎の名も、寶倉と稱して、大に神庫と混するものあり、幣殿は幣帛を奉

ヤシロ

る殿にして、拜殿は拜禮を行ふ殿なり、其餘、舞殿(舞を奏する所)神樂殿(神樂を奏する所)著到殿(勅使の參着する所)御饗殿(神膳を調ふる所)御供所(ともいふ)御炊殿(御饗を炊ぐ處)祓殿(神官祓を行ふ所)祝詞屋(神官常に神拜し、祝詞など、此所にて行ふ)直會殿(神官會集して、神供神酒等を戴き音むる所)等あり、なほこれに附屬して、瑞籬、玉垣、鳥居、額(各條參看)廻廊等あり(原注)祭神の御靈代を神體といひ、また御形、靈體ともいふ、神體には、鏡、玉、石、兵器、影像等を以てするあり、而して兵器には弓あり、矢あり、劍あり、矛あり、影像には木像あり、畫像あり、佛説の是に混してより以後は、佛菩薩、沙門の像を以てするもありき、なほ鈴、笠を用ひたるもあり、或は神名を記して神體とするがときは、影像に近きものなり、また幣帛を以て神體とするは、特に後世の事なり(原注)神社に格あるは、天國社を以て創見と爲し、崇神天皇の時之を定む(アマツヤシロ)「クニツヤシロ」參看)其後大中小社、大小社等の別あり、大中小社に律に見えて、先輩の説によれば、大社を伊勢太神宮、及び八幡宮となし、中社を賀茂、住吉の類となし、其餘を小社となし、社殿等を犯す者は、罪に等差あり、又一種の大中小社あり、五位以上の社に限れるものにして、正三位以上を大となし、從四位以上を中となし、其餘を小社と爲し、社殿の構造、四至の廣狹、遞に相違あり、また大小の二等を立てたるものは、國史に載する處にして、延喜式の神名帳によりて、殊に明瞭なることを得るなり、原來神社には官社あり、官社ならざるあり、官社とは、神祇官の神名帳に記載せられ、祈年の祭に預るものにて、其大小社は皆官社なり、大小社には、各官幣あり國幣あり(「クニツヤシロ」コクヘイシ)

ヤスリ

ヤ(參看)此外なほ一の宮、二の宮、三の宮、四の宮あり(イナノミヤ)參看)二十二社(「ニツフニシヤ」參看)宮(ミヤ)參看)あり、また攝社末社あり、之は本社に對する稱にして、或は本社に境外にあるものあり、或は境内にあるものあり、別宮もまた本宮に對する稱なり、現在の制、官幣社、國幣社、縣社、郷社等となし、官幣社を大中小、別格の四等に、國幣社を中小の二等に分つ(原注)其社の祭神に奉仕するものを神職といふ、神饗を獻じ、幣帛を供し、社殿に宿直し、社の内外を清潔にし、常に修理を加へて傾覆の憂なからしめ、祭祀祈禱に従事す、其重要なものに、祭主、國造、宮司、神主、禰宜、祝、預、社務、社司、御師、子良、巫(各條參看)等あり、維新後官國幣社には宮司、禰宜、主典(神宮は祭主あること舊の如し)縣郷社には社司社掌をおき、其他は一切停廢せり、神(カミ)神道(シントウ)神領(シノリヤウ)參看(神道名目類聚抄、工藝志料、古事類苑神祇部)

ヤツコ

を下し、山城國をして船を藏せしめ、攝津國をして祭場を備せしむ、祭使以下淀より乘船して難波に至る、宮主あり、御巫あり、琴師あり、神祇官及び内藏寮の官人これに従ひ、一行の人数甚だ多く、殊に典侍は、天皇の御衣を奉じ、祭使たるを以て、車副は爲めに警蹕を稱し、其親近縁者の、相共に下向するもの尠なからず、發途歸京共に、送迎極めて盛んなり(原注)文德天皇の嘉祥三年に行ひしを、はしめと爲す、其後歷朝多くは、大嘗會の翌年に、此祭使をも發遣せられたりしが、鎌倉時代の末葉に至り、遂に廢絶せり(江次第、袖中抄、古事類苑神祇部)

ヤツロヤキ

八代燒 上野燒(アガノヤキ)を見よ、

ヤツク

宿預 「アツク」を見よ、

ヤツダ

宿札 其人の宿泊せる標として、旅宿の前若しくは其宿驛の前等に立て置く札を云

ヤツノ

ヤツノ 奴 江戸時代における日傭仲間奉公人の一種、官中要録に「鎗長柄挾箱などを持てふりまはるを、作法の様に心得て、それに上手下手の段格を付て、世を渡るものなり」と見えたり、男立(チトコダテ)參看、

ヤナギ

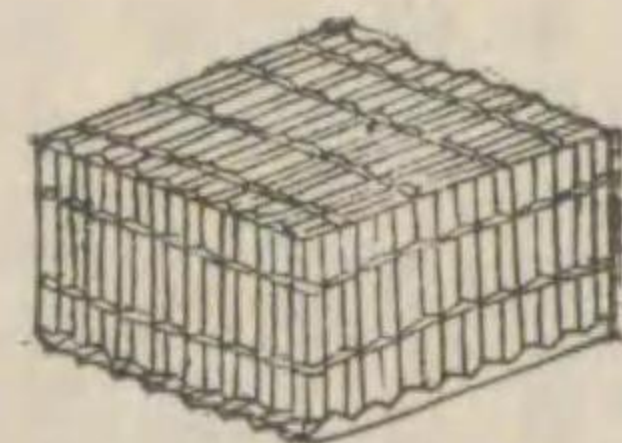
ふ、江戸時代にはまた、藁札とも唱へたり、太平記山徒寄京師條に、大衆かゝるべしとはおもひもよらず、我前に京へ入りて、よからんとする宿をも取り、財寶をも官領せんと志して、宿札共を面々に、二三十づ、捧げて、先づ法勝寺へと集りける」と見えれば、其事の行はれしことも、古くよりのことたるを知るべし、室町時代の制は簡禮集に「寶篋院殿義詮、貞治二年御上洛の時、御本陣不_レ及_レ記之、伊勢下野守宿 御局衆宿 又一年之宿札之事、大形日限相定候故、宿の前後に、如此堅札に可_レ書之、 守山郷中當月廿七日晚 細川陸奥守渡宿同下宿 也

三月十九日 右の札、其郷の前後に相定也、宿前は慮外也、宿の前には、 三月廿七日晚 細川陸奥守宿(紙に書て押すべし) 下宿は 細川陸奥守内 秋崎宗右衛門 細川陸奥守内 弓之宿

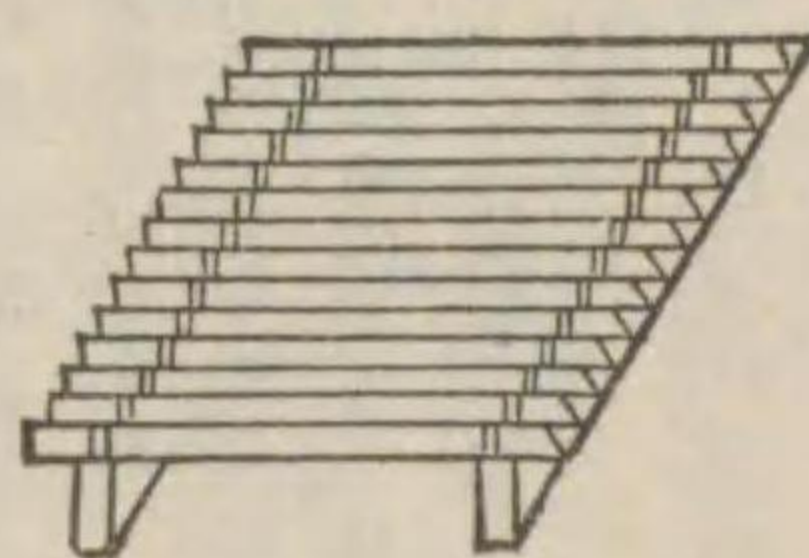
加様に相見え候、御弓衆とは、公方様ならではいかが云々」とあるにて之を何ふべし、また江戸時代にも、諸大名参勤交替の時、各宿驛の町はづれに立つることあり、風俗畫報所載幕府年中行事に「宿札は(中略)其宿驛の本陣にて建つる所なり、本陣とは諸侯の宿泊する家にて、一宿驛に一箇所づゝあり、宿

ヤナイ

札は、長三尺五六寸、幅一尺位にて、凡一丈五六尺もあるべき竹の先に懸くるなり、此札は、其宿驛を通行すべき諸侯の姓名を記したるもの悉く備へありて、平常は高さ柵に載せ、燈明造酒など供ふ、何月何日何之守其本陣へ宿する旨通知あれば、直ちに其宿札を竿頭に上ぐるなり」と見えたり、 ヤナイバコ 柳宮 名義 柳の木にて造りたる一種の篋を云ふ、硯、墨、筆、短冊或は冠、鞆、經卷等を納む 柳の木を幅五分位に三角形に削り、幾本も並べよせて簀子の如くにし、之を生糸にて二箇づ、編みて作る、後世は紙捻にて綴る事となれり、又木も槍を用ふるものもあり、木の数は吉事には



(載所綴雜古微)



(載所記雜丈貞)

奇數、凶事には偶數を用ふと云へり、蓋には棧あり、後世は棧を高くして足とし、机の如くし、冠經卷等を載する蓋としたり、大小長短は、其の納むるものによりて一定せず、但し堅一尺五寸、横一尺五分位の物は、普通用ひられたり云ふ 起原 其始め詳かならず、枕草子に「なまめかしき物、山藍日かげなど、柳箱に入れて、冠したる男もてありく、いとをかしう見ゆ、榮花物語初花巻に「もの、かすかき、文を柳箱に入て云々、長秋記長承三年の條に、繪巻物を玉の柳篋に置き、唐組を以て之を結びたる」と見えたり、平安朝時代中葉以後、盛に用ひたること明らかなり

ヤナギ

(倭訓栞、貞丈雜記、類聚名物考) ヤナギ 柳 葉の色目の名、表白、裏青なるものを云ふ、また表裏ともに薄青ともいへり、カサネノイロメの挿繪を見よ、 ヤナギサハウチ 柳澤氏(大和郡山) 姓は清和源氏、武田信光より出づ、信光五世の孫青木時光十世の孫柳澤信俊の子安忠、元和三年徳川忠長の傳となり、寛永十六年廣敷番頭に補せらる、延寶三年保明、慶長三百七十加賜、貞享二年小納戸に補し、千四百七十加賜、元禄元年側用人となり壹萬石加賜、三年一萬石加賜、上總佐貫に治す、其後歴屢加封ありて、七年武蔵川越に移る、十四年家號松平及び偏諱を賜はり、吉保と改め、嫡子安暉は吉里と改め、叙爵して伊勢守と稱す、寶永元年甲斐府中に移封し、十五萬二千二百石を領す、六年聖田各々一萬石を四男叙爵して刑部少輔と稱す、享保九年越後黒川に移封、十八年里濱本姓柳澤に復す、五男時睦(元禄十四年家號松平を賜はり、寶永四年叙爵、式部少輔と稱す、享保九年越後三日市に移封、寶曆十年信著本姓柳澤に復す)に分封す、享保九年吉里大和郡山に移封す、子孫相繼ぎて明治に至り、華族に列して、宗家は伯爵、分家は子爵を授けらる(藩翰譜、徳川加除封録、華族譜)

○信俊 安忠 吉保 吉里 吉鴻 保光 保泰 保申 保惠 越後黒川(一萬石) ○經隆 里濟 里旭 保卓 信有 光被 光昭 光邦 越後三日市(一萬石)

○時肆 保經 信著 里之 里世 里顯 恭孝 徳忠 ヤナギサハヨシヤス 柳澤吉保 名號 通稱彌八郎、初名保明、後ち徳川綱吉の偏諱を賜うて今の名に改む、初め出羽守、後ち美濃守と稱す、薙髮して保山と號す、法名永慶寺保山元養、世に夜食少將といふ 綱吉の安忠の子 綱吉未だ館林の城主たりし時より之に仕ふ、延寶八年綱吉將軍となるに及び、供奉して小納戸となり、天和元年加秩ありて、八百三十石を領す、二年正月元旦讀書始の時、命によりて大學三綱領を講じ、爾來恒例となる、三年また加秩ありて千三十石を食み、貞享二年十二月從五位下に叙し、出羽守と稱す、三年新知千石を加へ、元禄元年十一月、松平忠周、喜多見重政等と共に、内外の政を行ふことを命ぜられ、萬石の列に入り、三年三月三萬二千三百石となる、十二月從四位下に進む、四年三月綱吉はじめて其邸に臨み、爾來屢々此事あり、七年正月川越の城主となり、十二月侍從に任じ、老臣に准せらる、十一年七月左近衛少將に昇り、座班老中の上にあるべしと命ぜらる、十四年綱吉其邸に臨みし時、特旨を以て松平の號を許され、且つ偏諱を賜ひ吉保と改む、十六年十二月甲府に封ぜられ、前封と併せて十五萬二千八百八十八石餘を領す、實は税額二十萬石に餘れりといへり、寶永三年七月甲府にて金を鑄ることを許さる、吉保が綱吉の寵を専らにせること、此の如くなりしを以て、内外の權亦隨うて其手に歸し、勢力中外を傾けしが、六年綱吉薨じ、家宣立つに及び、其六月致仕剃髮し、正徳四年十一月二日卒す、年五十七、吉保人となり、佞倖の才ありて、巧みに上の意を迎合し、

ヤナギ

また綱吉の生母桂昌院以下、大奥の信用を博するに務めたりしかば、萬く寵任を蒙り、奢侈に耽り、威福を弄びしこと多からず、然れども心を文學に用ひ、萩生徂徠を召して儒臣となし、閑暇ある時は常に書を講せしめ、また諸書を纂輯したること多し、なほその比堂上中の識者と稱せられし正親町公通の妹を招きて妾とし、己が生涯の榮華を記さしめ、松蔭日記といふ、性和歌を好み、古今集の口訣を北村季吟に受け、自ら和歌百首を詠じて東山天皇の勅點を請奉り、尋でまた千首を詠じて靈元上皇に獻りしことありき、なほ其儒生細井知愼の言を納れ、將軍に勤めて、歴代の御陵を修理したりしは、尤も其大功なり 綱吉の憲廟實錄、樂只樂堂年錄、勅賜護法常照錄(徳川實紀 野史、徳川太平記、俚諺集覽) 護國女太平記に、吉保は夫人おさめの方を、密に綱吉に進めしことあり、吉保の子吉里は、即ち將軍の落胤なれば、百萬石の墨附を賜はりしを、綱吉の夫人之を憂ひ、遂に將軍を弑して自刃したりと見ゆ、此こと不穩の説たるは辨するまでもなしと雖も、吉里落胤説につきては異説あり、即ち綱吉未だ藩邸の比に、寵して懷妊せしめたる賤女を、吉保の計ひにて自らの妾とし、生み落したるものやがて吉里なりといへるにて、采非餘錄、著作堂雜記、關根只誠氏の説等に見え、近時關根正直氏も之を論じたることあり、また俄に非定すべからざるに似たり、讀者宜しく早稲田文學第二期第六號を參看すべし、

ヤナギサビノエボシ

柳さびの烏帽子 名義 紙にて、薄く柔かに作れる烏帽子をいふ、これに立烏帽子と折烏帽子との二種あり、前者を、柳さびの立烏帽子、後者を、柳さびの折烏帽子といふ 製作 立烏帽子は、頭を立てたるもの、折烏帽子は頭

ヤナギ

を折り上げ、折りたる處を、裏より竹針をさしてよめおくなり 立烏帽子は、白張、傘持等、下腹のもの、これを用ひ、折烏帽子は、軍陣の時、平士貴の下に著せり(貞丈雜記) ヤナギノマ 柳之間 江戸城居間の名、大廣間の北に在り、襖に狩野洞雲の筆なる雪の柳を畫きあるを以て此名あり(弘化二年普請出來の時、狩野眞笑之を畫く)表大名四品以下、大名次席、表高家等の詰所と爲す、大名(ダイミヤウ)の表參看(殿裏之圖、武家鑿要) ヤナギハラウチ 柳原氏 姓は藤原、日野權大納言俊光の四男實明始めて氏を稱す、柳原殿に居せしを以てなり、實明北朝に仕へ、權大納言正二位に至り、文和二年七月薨す、名家の一、代々文筆を以て立つ、殊に十八世紀光學を好み、中世以降正史遷述の擧なく、百練抄の後通史なきを憂ひ、多年諸家の記録、諸寺の舊記、曆朝の群籍逸篇を集め、刻苦纂修して續史愚抄を作る、後世學者を益する事尤も大なり、子孫相繼ぎて明治に至り、華族に列し伯爵を授けらる(尊卑分脈、續史愚抄、華族譜)

ヤナギ

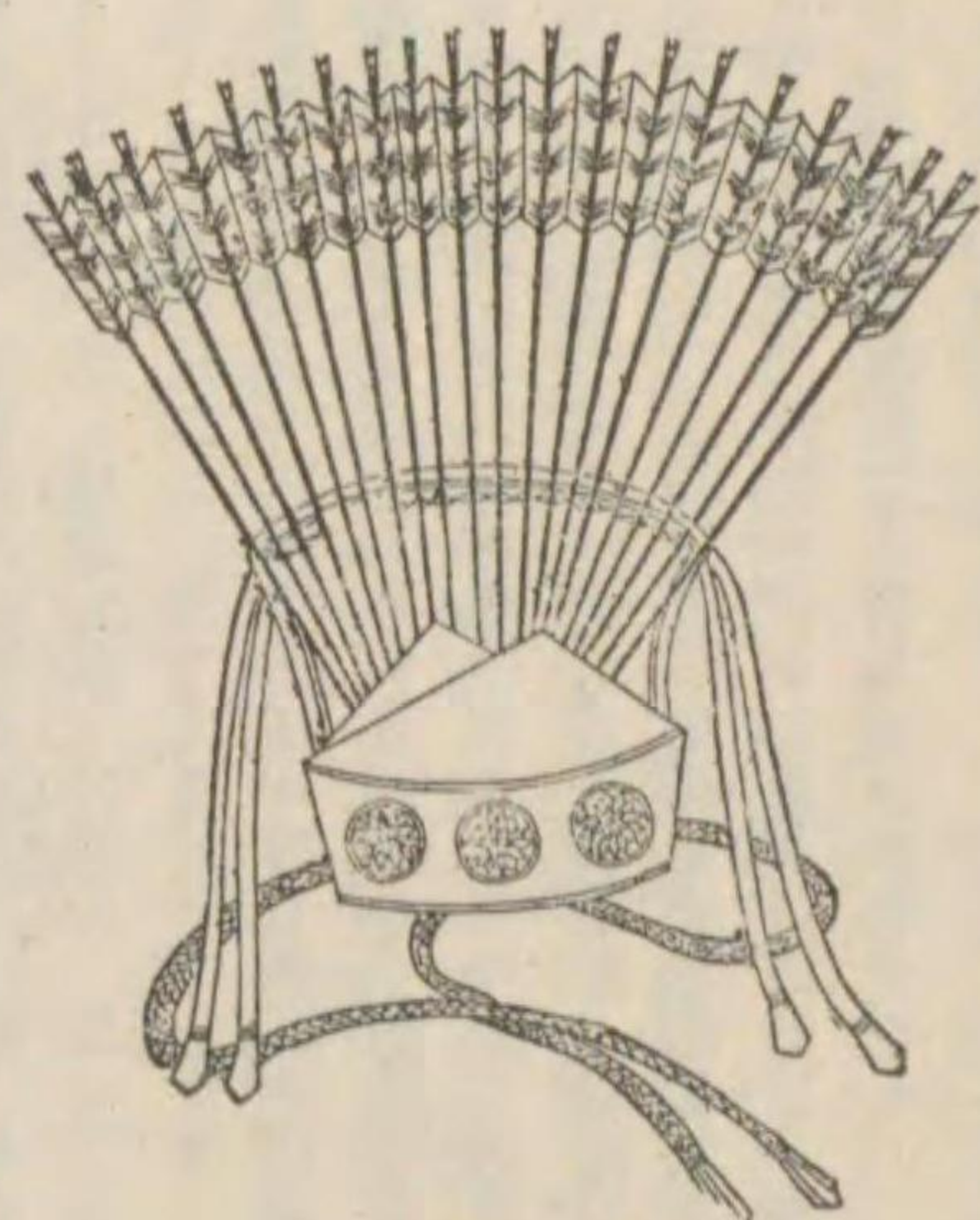
○實明 宗光 忠光 實衡 忠秀 實綱 量光 實定 淳光 實淳 實俊 茂光 實行 實廉 秀光 實基 實榮 光綱 紀光 均光 隆光 光愛 前光 義光 ヤナグヒ 胡籙 名義 矢を盛りに背に帶ぶる器具の一種、矢縫の義なりと云ふ、一説に矢根喰ひの義なりと言へど信じ難し、上古は籙、籙、籙ともヤナグヒと訓じたりしが、中古より一種の矢を盛る器を製して、エビラと稱し、専ら籙の字を用ひ

ヤナギ

ヤナグ

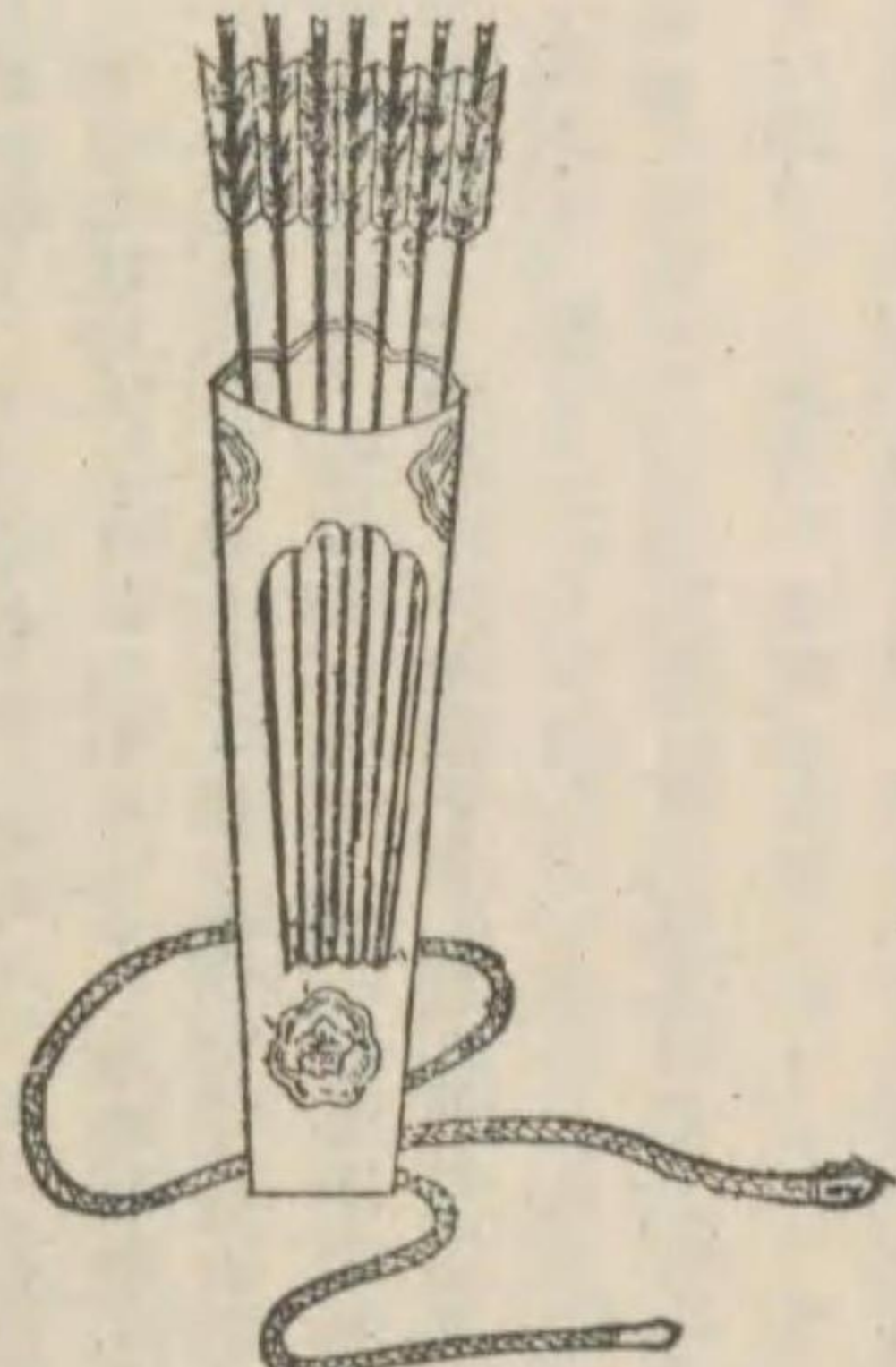
たるより、ヤナグには胡録の字を用ふるに至れり
(一)平胡録(二)壺胡録(三)狩胡録あり(一)は
丈低く平たきものを云ふ、多く儀式にのみ用ひて、
征戦の具にあらず 行幸等の時、警固の近衛の將以
下、隨身番長等皆之を負ふ、公卿は詩繪或は螺鈿、非
參議の次將は木地螺鈿、或は木地詩繪等の胡録を負
ふ、衣帯は組緒にて蘇芳綾、蘇芳青を相交へて、緒の
端に水精瑠璃等の露あり、装束は錦革、藍革、紫革を
用ひ、矢の数は十七又は廿一筋なり、篋は黒漆塗の細
きをよしとす、管は多く水精、羽は多く切生を用ふ、
猶下の圖を見て知るべし、なほ江戸時代一時幕府に
て用ひたるは、其の制異なり、二種を對比して服
制の挿圖に示したり、就て見るべし、而して武家に
ては、全く用ひざりしと見え、文治五年正月十日源
頼家風流會を構へ、大臣饗に擬せし時、平胡録の差
様、丸緒の付様を知らざりし事、吾妻鏡に見えたる
にて知るべし、小右記に「寛弘二年八月廿七日、今日
臨幸建禮門、奉幣伊勢、蓋被告即位由、(中略)諸
卿起坐列立、御輿即還御、其儀如常、下官員詩
繪平胡録、他衛府督、宰相中將負、壺胡録、如此之時、
大將必負平胡録者也」と見えれば、一條天皇御宇
の頃より、既に用ひられたること明かなり(二)は單
に略して壺とも云ふ、高く細長き故に名づく、儀式
征戦共に用ふ、儀式には讓位節會等に警固の時、公
卿近衛將以下之を負ふ、公卿は詩繪或螺鈿、非參議
次將は木地螺鈿の胡録なり、矢の数は七筋にて、
管、羽、篋は、大概平胡録に同じと云ふ、後撰集源
善の歌の詞書に「中將にて内にさぶらひける時に、あ
ひしりける女職人のさうしに、つばやなぐひ、おひ
かけなやどし置ては、べりける云々」と見えたり、善
の中將たりしは、寛平十年の頃なれば、壺胡録の起

ヤナグ



(載所式圖東裝)録胡平

りは、宇多天皇以前なることを知るべし、一説に革
靱の轉せしものにて、延暦年中に出来しものとす、又
は源高明の執政なりし時、出来しものなりと云へど
信し難し(三)は狩獵の時に用ふるものなれど、其
形状詳ならず、一説に、狩獵の時に用ふるならん
といひ、又一説には、竹箴と狩獵にて、即ち狩胡録
ならんと云へど、共に信し難し、明月記治承四年六
月一日の條に「或人云、中將隆房朝臣一人着、獨顯文
抄狩市比屋中、帶三狩胡録云々」、同書文曆二年二月
九日の春日祭の條に「次隨身二人狩胡録(毛香)云
々」と見えたり、世俗淺深秘抄、助無智秘抄等を案す



(載所式圖東裝)録胡壺

でたるものなるべし、されば元文三年二月九日同所
に於て行ひし時よりしては、舊のごとく流鏑馬と稱
し、爾來同八幡の馬場、または東叡山にて行ひしこ
と屢々なりき、維新の後、其他の武藝と共に全く衰
頹に歸したりしが、明治二十年十月徳川公爵家にて、
舊臣の遺老をして之を行はしめ、天覽に供したる事
あり(中右記、平治物語、續世繼、源平盛衰記、吾妻
鏡、明月記、葉黃記、實躬卿記、多聞院日記略、貞
丈雜記、和訓栞、本朝軍器考、徳川實紀、古事類苑武
技部)

ヤナシ

ヤフサ

るに、何れも平胡録と狩胡録とを對して云へるを見
れば、壺胡録を狩胡録と稱せしものにあらざるか、此
外日本紀略には、革胡録見えたり、又源平盛衰記に
は石打の胡録、鶯羽胡録、御禊行幸部類には鶯羽の
平胡録、今昔物語には節黒の胡録あれど、これ等は、
皆胡録に差したる矢によりて稱せしものにして、別
に種類あるにあらず(裝束圖式、本朝軍器考、倭訓栞、
武家名目抄、古今要覽稿、類聚名物考)

- 範季 高貴 範茂 範繼 範藤 範春 範實
範隆 範秀 範綱 範音 範久 範國
此間中絶 範遠 此間中絶 嗣良 嗣孝 嗣章 嗣義
保季 公師 實嗣 季榮 實方 實休
萬曆
ヤフサメ 流鏑馬 俗稱騎射の一種、馬上
にて馳せながら、鏑矢を番ひて的を射るをいふ、ヤ
ハセウマ(矢馳馬)の略なりとも、矢伏射馬の義なり
ともいへど、前説是なるに近し、なほ鏑矢の流るゝ
の意にて、流鏑の字を宛てたるなり(關西)江戸時代

ヤフサ

の例によりて、これを按ずるに、其的は三箇にして方
板を用ひ、的串に挿みて三所に樹て、一人にて各々
三的を射るなり(マト)參看)射手は十六騎、或は十
騎七騎等にして、必ずしも定數なし、其裝束は、水
干綾筒笠等なり、まづ場に進む者は、扇を披きて之
を背後に投げ、而して後に箭を放つ、之を捨鞭の扇
といふ、次に弓に矢を注し、聲を揚げて騎り出し、
一の的を射て二の矢を注し、鞭を擧げ、二の的を射
て、又聲を揚げて鞭を擧ぐ、之を捨鞭といふ、次に三
の的を射て事畢る(原注)起原詳かならず、信濃
國住人諏訪大夫盛澄といふもの、流鏑馬の藝を究め
て、藤原秀郷の秘訣を傳へたること吾妻鏡に見えた
れば、古くよりこれありしなるべし、而して其書に
見えたるは、中右記永長元年四月及び五月の條に、白
河上皇が、鳥羽殿の馬場殿にて御覽し給ひしことあ
るを始めとす、尋で平清盛が、熊野の稻荷宮にて、手
向の爲めに之を行ひしこと平治物語に、藤原師實が
祈願の爲め、百番の流鏑馬を行ひしこと源平盛衰記
に見ゆ、これより次第に行はれ、鎌倉幕府にては鶴
が岡の馬場、由比濱等にて屢々行ひたり、なほ此時
代、京都にては、新日吉の祭禮に行ひ、室町時代に
は春日社の禮祭にも行ひしが、其中葉以後廢絶に歸
したるのみならず、幕府にて舉行すること、鎌倉
時代の末より絶えられたれば、流鏑馬は一時全く行は
れざりしを、江戸時代に至り、將軍徳川吉宗の時、
之を再興するの意あり、成島道筑に命じて古式を調
査せしめしが、享保十三年三月十五日はじめて世子
家重の袍着の、輕からん事を祈り、高田八幡に奉納
の爲め行ひたり、されど古法其まゝに傳はりしにあ
らざれば、騎射扱物と名づけ、流鏑馬とは稱すべか
らざると、吉宗が左右に命じたるは、蓋し謙遜の意に出

ヤボロ

ヤマカ

一種の保呂をいふ(伊勢貞丈の説には、簾にかけし
ことなしとあれど、射御拾遺抄には、簾にもかくる
こと見えたり)裝飾の用に供するものなり、一説に、
矢種つきたるを人に見せざるが爲なりといへど信じ
がたし(製作)長四尺三寸(手ばかりの定なり)三幅
にして、地はすし、練實、絹等を用ふ、縫糸紅に
て、ふせ縫なり(原注)いつ頃よりはじまりしか
詳かならず、小笠原元長の隨兵日記(文明十八年の
著)に其名見え、土佐光信が畫きたる一の谷合戦の
繪卷、または土佐某が畫きたる結城合戦の繪卷等
に、空櫃に矢母衣かけたる體を描きたり、共に紅に
て、白く二つ引をかきたり、蓋し室町時代中葉以後
に生じたるものなるべし(貞丈雜記、軍用記、射御拾
遺抄、武用辨略)

ヤマカ

ヤマカ

策の子兼頼を此の地に置きて出羽を鎮せしむ、子孫
相傳ふる十四世、最上氏と稱す、戦國の時最上義光莊
内を略し、勢威四方に布く、元和八年義隆の時、徳
川氏之を除き、鳥居忠政を封じて治せしむ、寛永十
三年保科正之、これに代り、後幕府の所領となる、其
後正保元年松平直基、慶安元年松平忠弘、寛文八年
奥平亮昌、貞享二年堀田正仲、同三年松平直矩、元
祿五年松平忠弘、同十三年堀田正虎、延享二年松平
乗色、明和四年秋元涼朝相尋で此地に封ぜられて治
す、弘化二年水野忠精五萬石に封ぜられて入部し、
子孫相繼ぎて明治維新に至り、近江國朝日山に移封
す(武鑑、日本地誌提要、明治政覽)

ヤマカ

革し、賦税を軽くし、大に人民の信服を得たり、用人相原郡大夫、これを嫉み、陰に支番を傾けんとす...

の創めたる兵學の流派○高祐は初名を義矩といふ、字は子敬、因山またば素行と號す、陸奥の人なり、九歳にして林羅山の門に入り、儒學を學び、十八歳にして...

戦死したる功により、寛永五年一萬五千石を賜ひ、常陸牛久に治す、十二年弘隆、五千石を弟重恒に分封す...

ヤマサ

して卓華、師道の至嚴なること君臣に異ならず、其書を講ずるや、音吐鐘の如く、面容怒れるに似たり、弟子震慄敢て仰ぎ見るものなかりしといへり...

封録、華族譜)
○宗家 家盛 家治 俊家 治頼
○家 家盛 家治 俊家 治頼
○家 家盛 家治 俊家 治頼

城を抜きて光秀の子光慶を誅し、明智光春を大津に討ちて之を斬り、齋藤利三を捕へて粟田口に磔殺せり(信長公記、豊鑑、野史)
ヤマシタモン 山下門 江戸城外麻門の一、今の帝國ホテルの前より京橋山下町に出づる口に在り...

ヤマト

ヤマトクニノミヤ

大養徳恭仁宮

國の製作に保るを以てなり、カナノ參看、聖武天皇の皇居所置山城國相樂郡、今の宮登大路の邊なり(名跡志は法華寺野を宮城と爲す) 起原 聖武天皇天平十二年十二月、橘諸兄此地を經始して遷都に擬し、同十三年正月、天皇幸して朝賀を受け給ふ、宮垣未だ就らざるを以て、繞らずに帷帳を以てす、使を伊勢大神宮及び七道の諸社に遣はし奉幣遷都の狀を告ぐ、同年八月平城の二市を此所に移す、鹿背山以東を左京とし、以西を右京と爲す、同年十一月勅して、大養徳恭仁大宮と稱せしむ、天平十五年大極殿造營の功績に畢る、初め平城の大極殿并に歩廊を壊ち、移して之を新造す、然して用度の費勝て計るべからず、是に於て更に紫香樂宮を造り、恭仁宮造作を停む、十六年正月群臣を會し、恭仁離波二京の可否を定め、終に離波に都を遷し給ふ、其間僅に四年、猶恭仁宮の遺趾に關しては、歴史地理第一卷三號五號に、喜田真吉木村一郎兩氏の説あり、就て見るべし(續紀、名跡志、平安通志)

ヤマトケラ

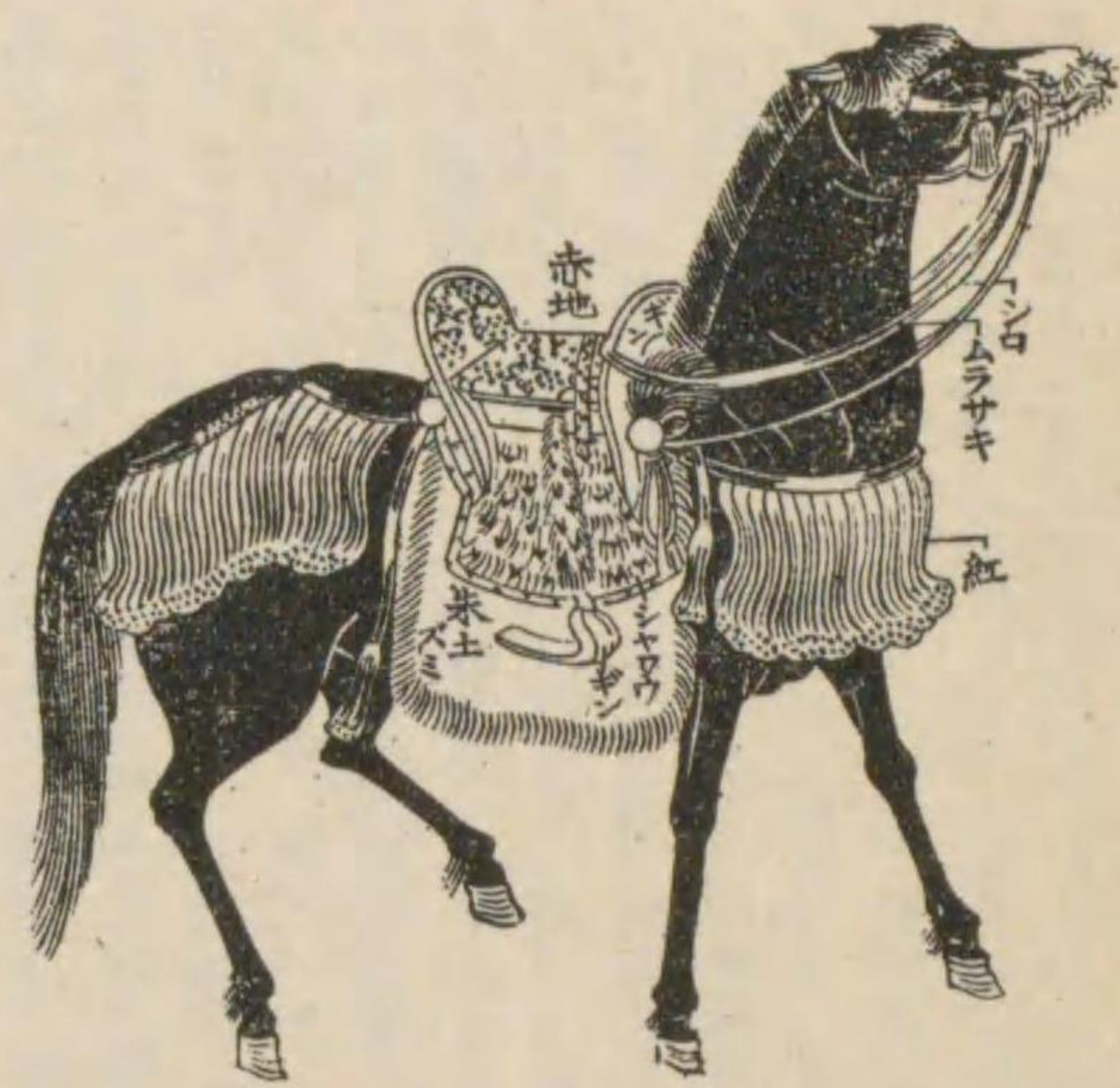
倭鞍

鞍の一種、唐鞍に對しての名、我國制の鞍を云ふ、類聚名物考、和名抄等に其名見えざれば、古くよりの名にあらず、其具に鞍橋(水精地、銀地、鏡地、黒地、黄地、龜甲地、藤繪、鉢鞍、螺鈿、沃掛地等あり)切付(小豹、竹豹、虎等あり)鞍褥(赤地錦、鞍褥、障泥、銜、金、銅、鏡)手綱(蘇芳、棟、棧等)燈、逆鞞、貫鞞、鞞、腹帶、表腹帶、差繩、鞭等あり、今便宜上大段に圖を示す(飾馬考)

ヤマトゲンジ

大和源氏

清和源氏の太和一族を云ふ、大和守頼親より出づ、頼親大和に居る、故に其族大和源氏と號す、頼親賴房を生む、孫頼風武勇を以て著はる、其裔武田岑田の諸氏



(載所考馬飾)

あり、頼風の弟頼治宇野氏と號す、其子親弘攝津の豐島に移り、豐島氏と稱す、其孫有治、其裔に廣瀬、入野屋の諸氏あり、有治の弟義治、其後に土方、森辛川等の氏あり、頼治の弟頼景、其裔孫頼清尾張大野に采す、大野氏と稱し、其子頼重頼時承久中並びに勤王節に死す、頼時の後朝日岩井の二氏あり、頼景の弟仁範、其後に楊梅、太田二氏あり、頼親第三子頼遠福原三郎と稱し、有光を生み、徒りて陸奥の石川に居る、石川氏と稱す、其光を生む、其孫光治成田氏と稱し、承久中北條氏に隨ひ、功を以て美濃市橋莊の地頭職を授けらる、其光の弟光盛光治光助を生む、光治大寺氏と稱し、光助小高氏と稱す、光盛三子光重、光重、光村を生む、光重坂地氏、光原河尻氏、光村矢澤氏と稱す、頼遠の弟頼基の後、二河麻生の諸氏あり、此外別に源滿仲より出づるものあり、滿仲の第四子大藏權大輔頼平、其裔柏

ヤマト

ヤマト

原、太田、檜坂の諸氏あり、頼平の弟源賢、其後丹波、大甘の黨となる(氏族志)

ヤマトゴト

倭琴(大和琴)

一種、神樂及び雅樂に用ふるもの、一名東琴とも稱し、又單にアヅマともいふ、東は、西土に對していひ、倭は唐に對していふ詞にて、吾國固有の琴といふ意なり、構造 體は箏に似て短小、桐を以て製す、大小あり、大なるは長六尺二寸、中は六尺、小は五尺、或は五尺八寸横六寸、體源抄に、長五尺表五德、廣六寸、表六合、絃柱有六、表六律呂ことあり、琴の外面を槽といひ、左右側を轆といひ、頭邊に錦を張るを錦皮といひ、絃を架する處を柱といひ、其柱は楓枝の皮を去らざる物を以て之を造る、高二寸二分、下徑二寸、柱頭の架絃の處を岩越と名づけ、絃を纏ふ絲を藤津緒といひ、撥絃を琴札といふ、水牛角を以て之を作る、上下圓にして長二寸半、六絃或は七絃或は八絃のものあり、琴首に鶏尾形を作る、名所槽、表の方の總名、龍角槽の表に小木を架し絃を乗せる者、通絃孔、絃を通する孔、龍目、通絃孔の周り角座、龍手、本の方の足、轆、左右腋の總名、龍頭、定名にあらず、末頭の形に似たる處、龍背、裏板、音穴、裏板に在る本の方の穴、下極裏板の半に在る長き穴、木度、裏板の内に附る木、林鹿、絃の端に附きたる小竹、一名緒留、和琴の名所、上古より定名と爲る者、槽、錦皮、葦津緒柱、琴札の五に過ぎず、他は後世に准じて名づけしなり、(註名) 六五四三二一(逆に數ふ、前を一と爲す) 葦津緒(龍頭の通絃孔に通じて、緒の末を結び纏ふもの、四色の練綾の絲を絞ひて用ふ) 聖武東琴は、吾國固有の樂器にて、諸樂器中第一に置か

ヤマト

る、河海抄に、伊弉諾伊弉册二尊の時、作らしめ給ふといひ、無名抄に「和琴の起りは、弓六張をひきならして、是を神樂に用ひけるを、煩はして、後の人の、ことにつくりなせると申つたへたる云々」といへり、然れども、六絃にして琴首鶏尾形を作り、鶏尾と稱し、神樂に之を用ふるを見れば、元々集に「天石屋戸の時に、天香弓六張を並べて絃を叩きし時、鸞鳴來りて弓に止る云々」とあるによれば、弓より轉じ來れるものならん、後には七絃八絃となり、古事記顯宗卷に「如調三八絃琴、又東遊歌に、ナナツチノ(七緒の)ヤツチノ(八緒の)コトヲ(琴を)シラベタル(調べたる)と見えれば、當時頃よりありたるなるべし、もと單に琴と稱したるが、後世漢國より此類の樂器多く渡來せしより、吾國の琴を倭琴といひ、彼のなげ唐琴といひて區別したり(書紀、古事傳記、樂器考)

ヤマトタケノミコト

日本武尊

御名は小碓尊、また日本童男とも稱す、(聖德太子)景行天皇の皇子、母は皇后稻目大郎姫、(聖德太子)景行天皇の二十七年八月、熊襲の反するや、十月勅を奉じて、西征し、十二月熊襲の國に至り、形勢地理を察し、遂に女装して魁帥川上梟帥の營に入り之を刺す、梟帥重傷を負ひ、將に暎せんとするに臨み、皇子の武勇を稱し、日本武皇子の號を上る、これより世に日本武尊と稱すといへり、熊襲既に平ぐの後、海に浮び、途すがら吉備(今の三備地方)難波等の賊を征し、明年二月京に歸る、四十年東夷叛し、邊境騷擾せるを以て、更に其十月を以て東征の途に上り、道を枉げて伊勢神宮を拜し、進んで駿河に至り、土賊を平げ、相模より、海を渡りて上總に航し、また海路を取り葦浦(安房の海岸なるべし)と雖詳かならず、よ

ヤマト

ヤマトノケニ

大和國

勢、西は河内、南は紀伊、北は山城に至る、東西凡十里餘、南北凡二十五里、畿内に屬す、(形勢)全國山嶽其の半に居り、南方一帶疊嶂連亘平地を見ず、北山十津の二水其間を流れて紀伊に達す、北方頗る平曠肥腴、吉野大和二水横に之を貫く、歷世遷都の跡あるを以て勝區古蹟州内に遍し、(起原)古へ倭に作る、神武天皇橿原(葛上郡柏原村)奠鼎の時、珍

ヤマト

彦を倭國造と爲す、後ち葛城磯城を併せて倭國と爲し、孝德天皇の初め六縣あり、天武天皇四年始めて大倭國と見ゆ、元明天皇和銅三年平城に遷都後、歴朝部を遷すこと凡そ十數次、八十餘年にして桓武天皇延曆中山城に遷都す、是より先、聖武天皇天平九年大養徳と改め、同十九年大倭に復す、孝謙天皇天平寶字元年大倭を大和と改む、國府を高市郡に置く、延元の後醍醐天皇南狩し、吉野を以て皇居とす、元中の末南北辨和、將軍足利義滿滿山義深を以て守護とす、四傳して持國に至る、其の子政長義就嫡を争ふに及び、筒井越智福住の諸黨内に分據し、高山氏號令行はれず、永祿の初筒井順昭自ら國の守護と稱し、三好氏に屬す(筒井氏初筒井城に居り、後に布施城に居る)既にして松永久秀諸城を徇へ(信貴城に居り後ち多門城に居る)筒井氏と地を争て連戦やまず、元龜三年二氏皆織田信長に降る、天正五年信長久秀を誅し順昭の子順慶をして舊領に復せしむ、十三年豊臣秀吉筒井定次(順慶の嗣)を伊賀に徙し、其弟秀長を本州及び和泉紀伊に封じ、郡山に治す、嗣秀俊天して國除し、増田長盛を郡山二十万石に封ず、關ヶ原役後其封を失ふ、徳川氏に至り封を受くる者、郡山(初め水野勝成、後松平吉里)高取(植村家政)小泉(片桐貞隆)櫛原(永井直圓)芝村(織田長益)柳本(織田尙長)柳生(柳生宗矩)凡て七藩、又奈良奉行を置く、明治維新奈良府を置き、田原本藩を建て(平野長裕)既にして皆廢して縣とし更に奈良縣に併す、(管)古へより管郡の變遷左表の如し、詳しくは各郡の條を參看すべし(日本地誌提要、國郡沿革考、郡名異同一覽)

ヤマノ

豊隆 豊嘗 豊敷 豊雅 豊策 豊興
 豊資 豊熙 豊停 豊信 豊範 豊景
 高知新田(一萬三千石)
 ○一安 之豊 豊清 豊産 豊泰 豊武
 豊賢 豊福 豊誠

ヤマノウチクワンリヤウ

山内管領
 關東管領を世襲せる上杉氏の、鎌倉山ノ内に居るものなをいへる俗稱、「クワントウクワンリヤウ」を見よ。

ヤマノウチトヨシゲ

山内豊信 名譽
 初名輝衛、土佐守と稱し、容堂または、鯨海醉侯と號す。系譜豊著の長男、宗族豊停の家を繼ぐ。順徳土佐高知藩主なり、文政十年十月生る、嘉永元年七月藩主山内豊停卒して手なきを以て、入りて宗族を相續せり、既にして同六年米糧渡來し、天下騒然たるや、時勢に鑑みて、藩廳の改革を斷行し、吉田東洋を擧げて參政となす、東洋識見時流に卓絶し、また略々海外の形勢に通じ、攘夷の行はるべからざるを知り、早く開國の意見を有したり、豊信が開國説を捨するに至れるは、其非凡の才力によるは勿論なりと雖も、然も東洋輔弼の功難なきにあらざりき、而して當時幕府は、内治外交共に困難の地に陥り、朝幕の關係も、常に圓滿を欠くも多かりしかば、豊信これを憂ひ、公武合體して難局に處すべきを主唱し、且つ將軍徳川家定に子なかりしを以て、一橋慶喜を擧げて世子とし、幕政を改革するの必要なるを論じ、松平慶永、伊達宗城等と相往來して之を幕閣に建白し、また三條實萬は、其勇たりしを以て、密使を入洛せしめて、京紳間に入説せしめたり、されど其事遂に成らず、井伊直弼大老に任じ、尋で紀伊慶福(家茂)立ちて將軍となるに及び、直弼は、豊信が京都入説の舉を以て、治安を害せるものとなし、安政六年二月旨を諭して致仕隠居せしめ、尋で十一月更に謹慎を命じたりしが、萬延元年直弼卒するに及び、謹慎を解かれしも、なほ豊信すべきを命ぜられ、文久二年に至りて漸くこれを許されたり、此年藩士中の急激論者たる武市平平等の勤王黨に勢力を占め、當時佐幕開港の意見を有したる參政吉田東洋を暗殺し、土佐の藩論は、勤王説に傾きしと雖、豊信は、關ヶ原以來の歴史に鑑み、必ずしも薩長二藩と同一歩調に出づること欲せざりき、故に同年松平慶永が政事總裁となりて、幕政を改革するや、豊信屢々其謀議に與り、爾來また常に樞機に參し、獻替せること甚だ多し、而して積年の宿志たる公武合體論は、終始一貫して改むる所なく、朝幕の間に周旋するを怠らず、遂に將軍家茂の上落を見るに至りしも、事意の如くならず、加ふるに家茂は長州再征の陣中に薨じ、形勢全く一變するや、豊信夙に幕府の爲す能はざるを知る而も已ならず、薩長二藩が連合して、討幕の密勅を拜受せんとするの秘密を探知せるがゆゑに、慶應三年十月、太政返上の建白を徳川慶喜に呈したるに、慶喜之を納れて太政を返上し、幕府並に亡ぶ、而して豊信の意は、諸侯を會して、萬機を公論に決せんとするにありしかば、薩長二藩が岩倉具視等と謀り、慶喜を激して兵力に訴へんとする政策に反對し、同年十二月所謂小御所會議に於ける大激論を見るに至りしも、形勢挽回の不可を曉り、遂にこれを中止したり、此月議定に任す、是に於て土藩の兵は、薩長其他の諸藩と共に、伏見鳥羽をばじめ、各地に轉戦して、能く維新の大業を爲すを得たりき、明治元

ヤマノ

年六月辭職したりしが、其六月再び議定に任じ、從二位權中納言に任叙す、越えて二年薩長肥の三藩と共に、率先して藩籍を奉還せり、八月職を辭して磐香間祇候に轉じ、九月正二位に陞る、五年六月廿一日薨す、年四十六、東京府荏原郡大井村、山内家の堂域に葬る、詔して正一位を贈らる(墓誌、鯨海醉侯)

ヤマノウヘノヒ

山上碑 上野三碑の一、上野國多胡郡(今多野郡)八幡村大字山名山上の山上に在り、高三尺許、潤一尺一寸許、野石を以て作り、四行五十二字を認む、その文左の如し(好古小録、上野三碑考、上野名跡志)
 辛巳歲集月三日記

ヤマノサス

伏野三家定賜健守命孫黑實乃自此
 新川臣兒斯多爾足尼孫大兒臣聚三
 兒長利僧母爲記定文也 放光寺僧

ヤマノベノコホリ

山邊郡 所在 大和國 國郡制定の際、建て、郡となせり。沿革 崇神景行二帝の山邊陵、延喜の時、既に城上郡に屬す、和名抄に都介、星川、服部、長屋、石成、石上等の郷あり、拾芥抄以後又山邊に從ひ、地誌提要「ヤマノベ」と訓す(郡名異同一覽、國郡沿革考)

ヤマノベノコホリ

山邊郡 所在 上總國 國郡制定の際之を置く。沿革 和名抄に禾生、岡山、菅屋、山口、高文、草野、武射等の郷あり、明治廿九年武射郡と共に廢して山武郡を置く(郡名異同一覽、國郡沿革考、法令全書)

ヤマバトイロ

山鳩色 襲の色目の名、表青、裏黃なるもの、用ふる時季定まらず、カサネノイロメシの挿繪參看、

ヤマフキ

山吹 襲の色目の名、表薄朽葉、裏黃なるものをいふ、春季之を著用す(胡曹抄)
 ヤマフキドノ 山吹殿 小一條殿(コイチ アウドノ)を見よ、
 ヤマフキニホヒ 山吹匂 襲の色目の名、表山吹、裏黃なるものをいふ、春季之を著用す(女官節抄)
 ヤマフシ 山伏(山臥) 修驗道(シユゲン)ダツ)を見よ、
 ヤマメ 山目 秤(ハカリ)を見よ、
 ヤマトウチ 山本氏 姓は藤原、閑院家の一、阿野實直の十三世實顯の末子勝忠を祖とす、參議正三位となり、承應三年九月薨す、子孫相繼ぎて明治に至り、華族に列し、子爵を授けらる(諸家知譜拙記、華族譜)
 ○勝忠 實富 公尹 實觀 公達 實福 公弘 實城 實政 實庸 實庵
 ヤマモノノダイナコン 楊梅大納言 源定を云ふ、
 ヤマモノノミササキ 楊梅陵 平城天皇の御陵、大和國生駒郡跡村大字佐紀に在り、圓形にして、兆域東西二町、南北四町、淳和天皇天長元年陵戸五畑を置く、延喜の制また同じ(延喜式、諸陵考、陵墓一覽)
 ヤマリコサク 家守小作 江戸時代、小作の一、地主所持の田畑多く、世話行届難き爲め、小作の世話人を入れて、世話なましむる小作を云ふ、給料として、小作地の内何段歩かぬ與ふ、年貢等は地主より支辨するものとす(地方凡例録)
 ヤヨヒ 彌生 三月の別名、草のいよび茂る

ヤマフキ

頃なれば、いよびを略して名づけたるなり、神武天皇紀に「二年乙卯三月、萬葉集卷一に、明日香川原宮御宇天皇代、五年三月戊寅朔云々」などある三月、并にヤヨヒと訓じ、また古今集卷一春の歌の詞書に「やよひにうるふ月のありければよめる」とあり、爾來多く散見せり(古今要覽)

ヤマフキ

一種、鋒より變じたるものとす、こき出して、かなたに衝き遣るものなれば、遣るといふ動詞を變じて名詞としたるなり、武家名目抄には、手鋒に對して遺鋒といひしを、略したるなるべしといへり、後世道具とも稱す。構造 各所身と柄との二部より成る身は穂とも稱し、即ち刺突の用を爲すものにして、三稜角に尖りたるものなり、込即ち穂の根を、柄に差し入れて連結す、長さ四五寸より三四尺に及ぶ、柄は多く椗にて作れど、また檜椰子、竹等にて作りたるものなきにあらず、長さ六七尺より、三間半に及ぶものもあり、柄の尾端に附したる鐵を石突といふ、なほ穂を覆ふものを鞘といふ、また投鞘あり、詳しくは左圖に就きて見るべし。起原 治平 太平記三井寺合戦の條に「三方の土矢間より、鎗長刀を差出して、散々に突きけるを云々」とあるを初見とす、これ建武二年正月の事に係る、此外なほ數ヶ所同書に散見せり、蓋し鎌倉時代の末より南北朝時代のはじめ頃に於て、起りしものなるべし、されど當時、其用未だ廣からず、戰國時代に入り、天下争鬪の衝となるに及び、漸く之を重んじ、次第に其利用ある手術を考へ、遂に種々の製作を生ずるに至れり、されば戰場にて先懸するを一番鎗、二番鎗などと稱して、武功を論ずるの標準とし、更に長柄の鎗を數多列れ、隊伍軍卒に執らせて之を長柄と呼び、弓銃

ヤマフキ

年六月辭職したりしが、其六月再び議定に任じ、從二位權中納言に任叙す、越えて二年薩長肥の三藩と共に、率先して藩籍を奉還せり、八月職を辭して磐香間祇候に轉じ、九月正二位に陞る、五年六月廿一日薨す、年四十六、東京府荏原郡大井村、山内家の堂域に葬る、詔して正一位を贈らる(墓誌、鯨海醉侯)

ヤマフキ

山上碑 上野三碑の一、上野國多胡郡(今多野郡)八幡村大字山名山上の山上に在り、高三尺許、潤一尺一寸許、野石を以て作り、四行五十二字を認む、その文左の如し(好古小録、上野三碑考、上野名跡志)

ヤマフキ

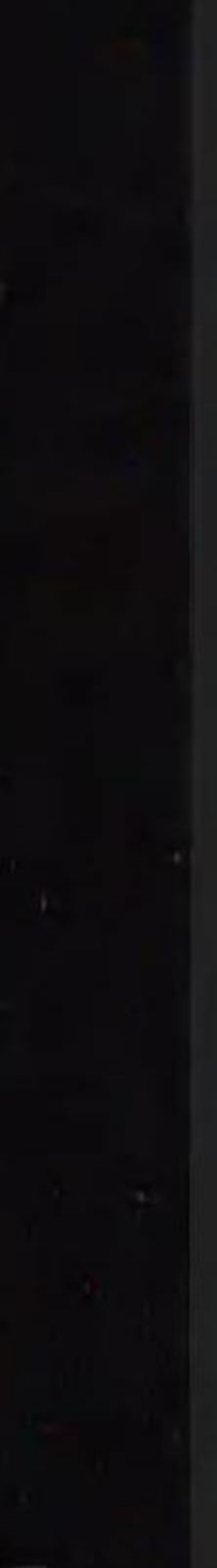
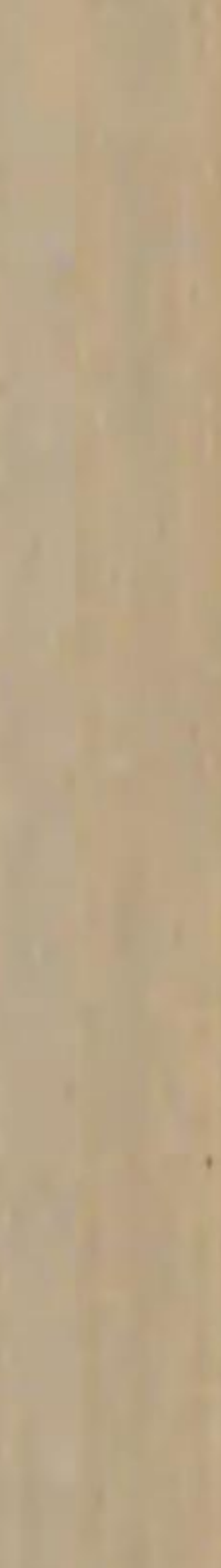
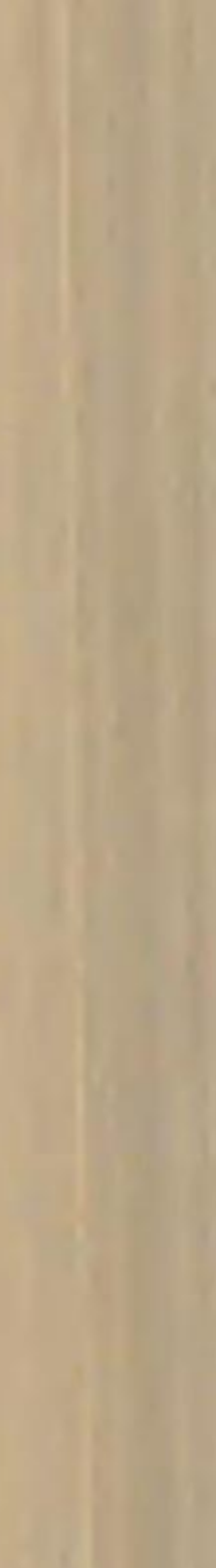
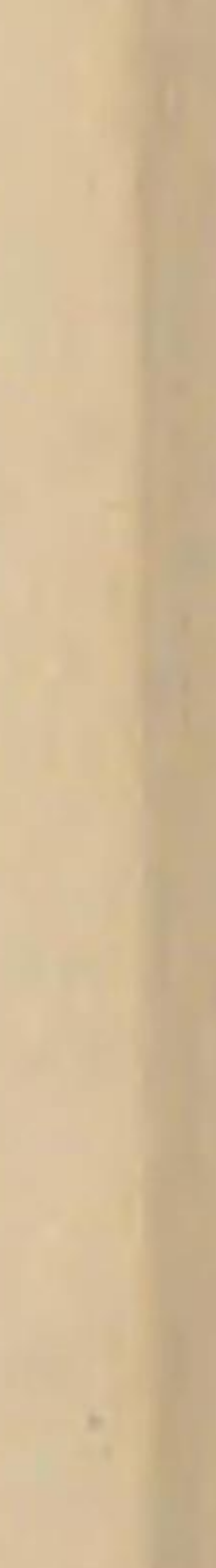
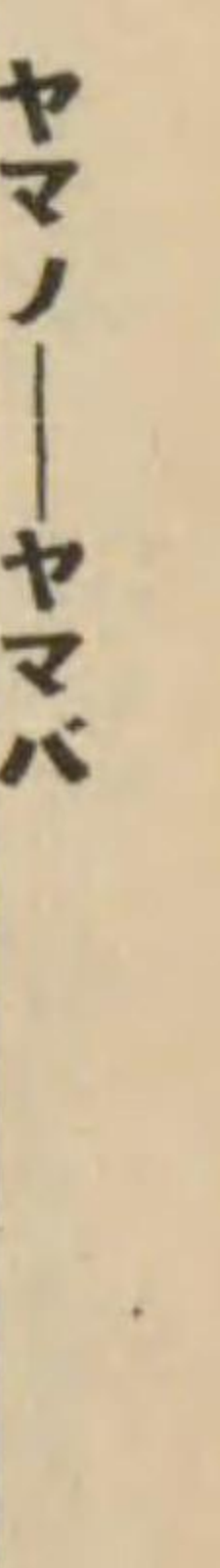
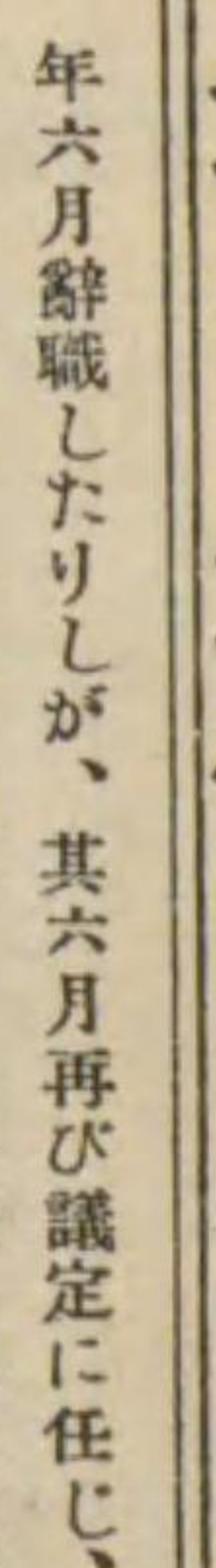
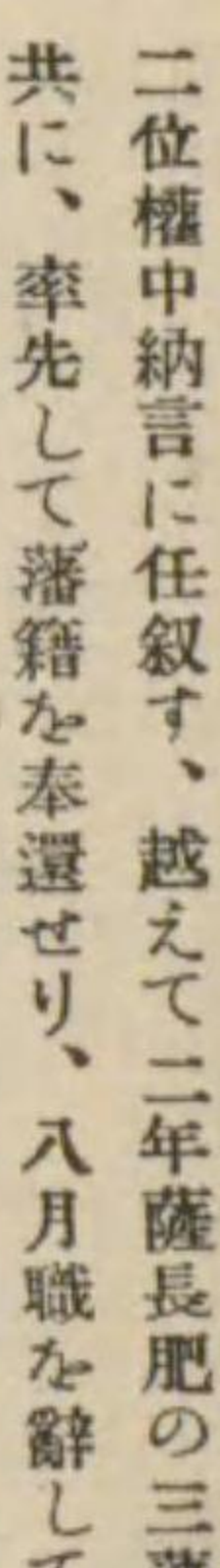
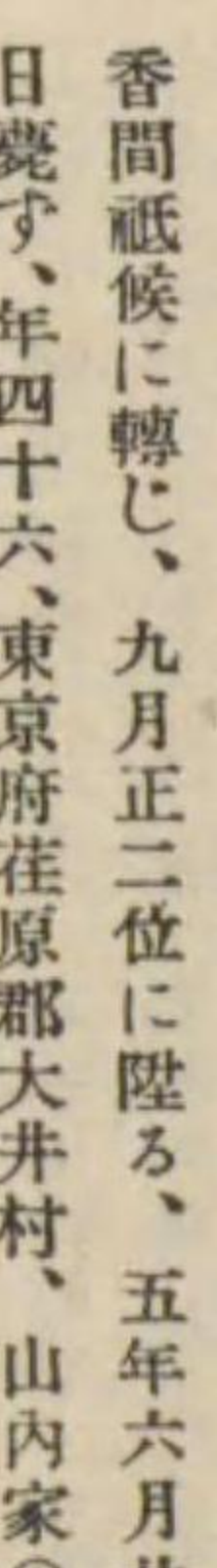
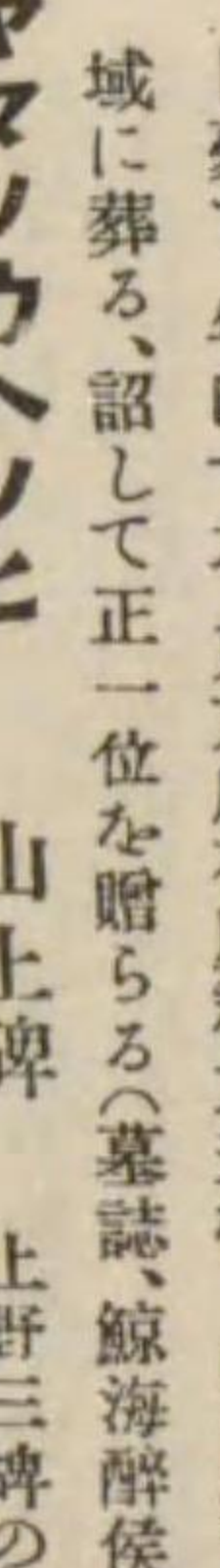
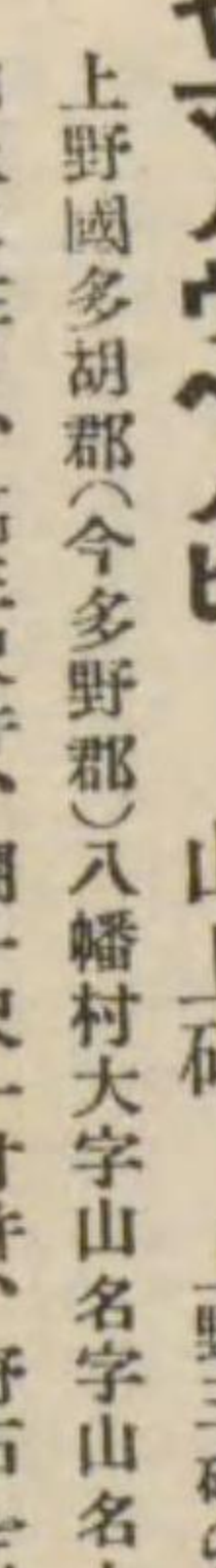
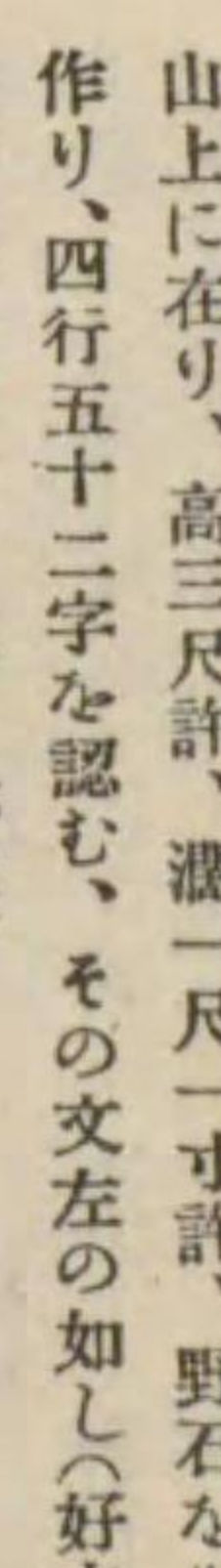
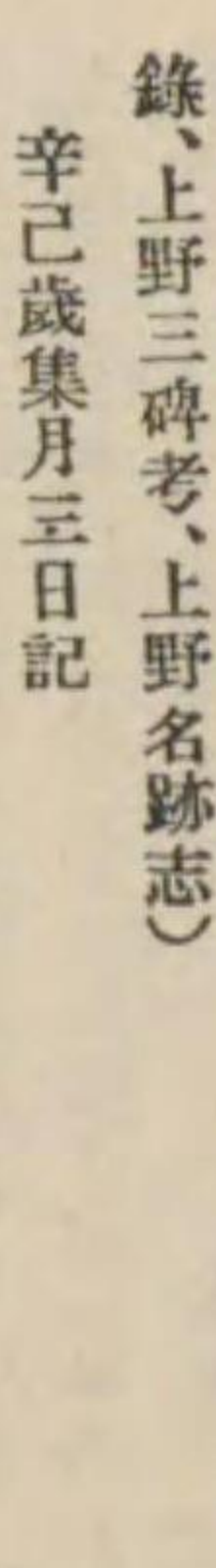
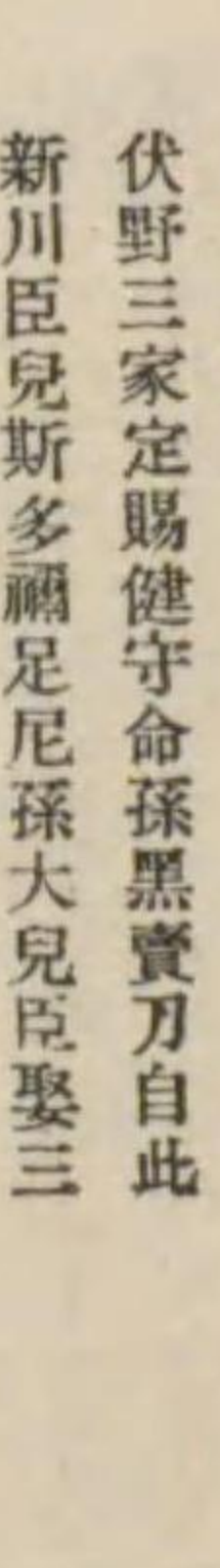
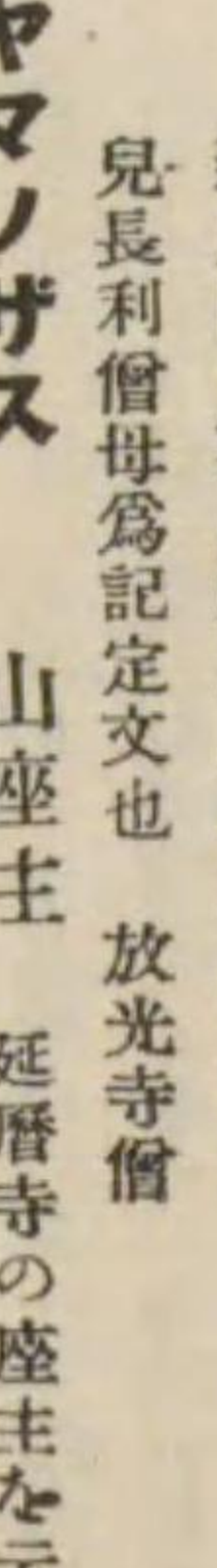
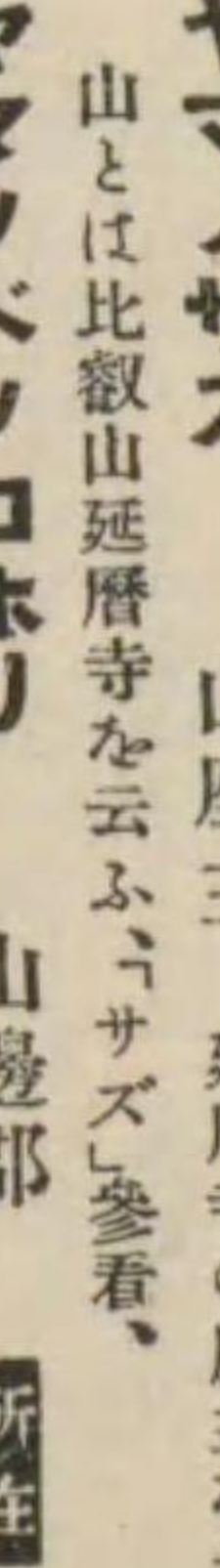
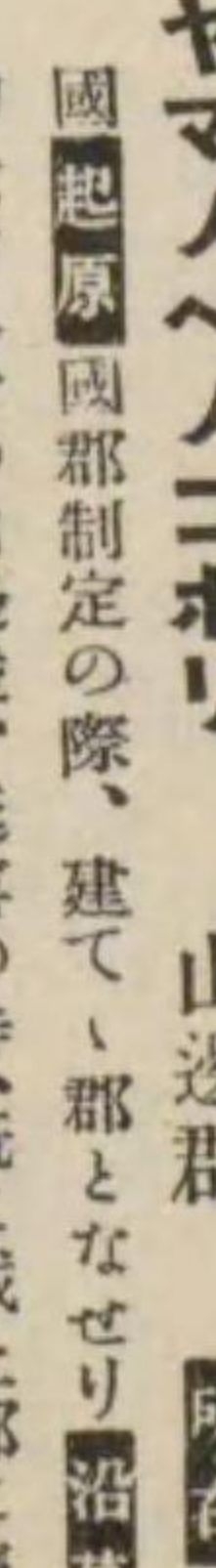
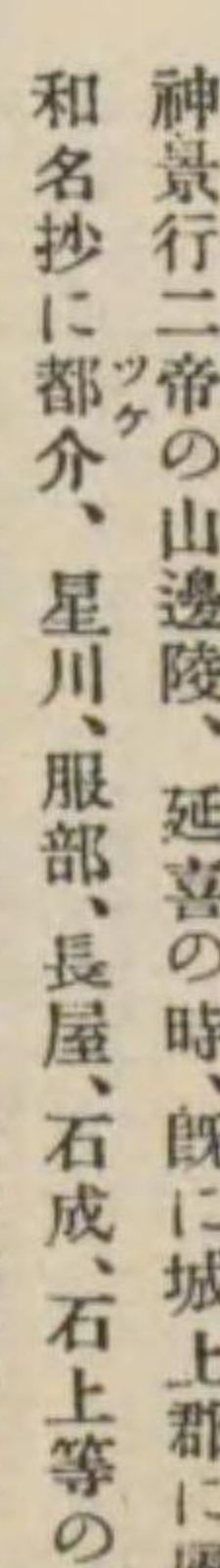
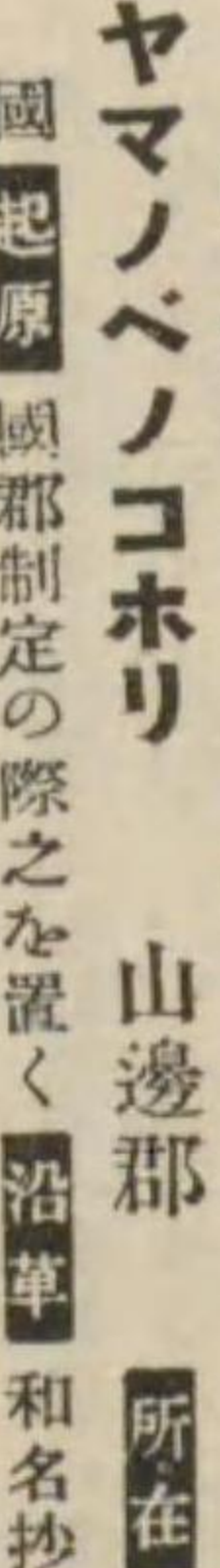
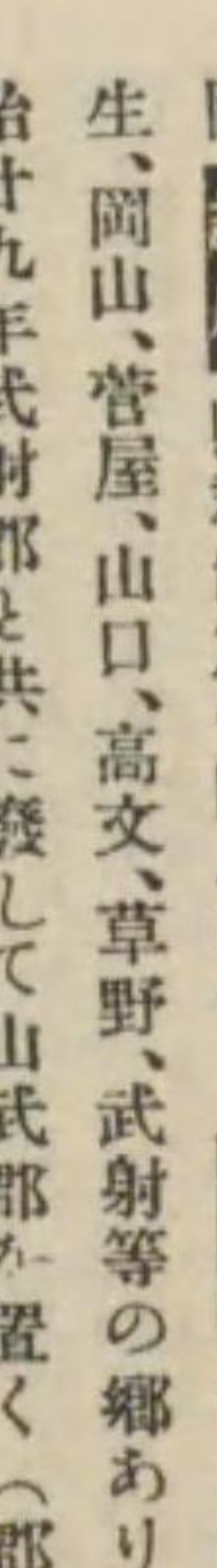
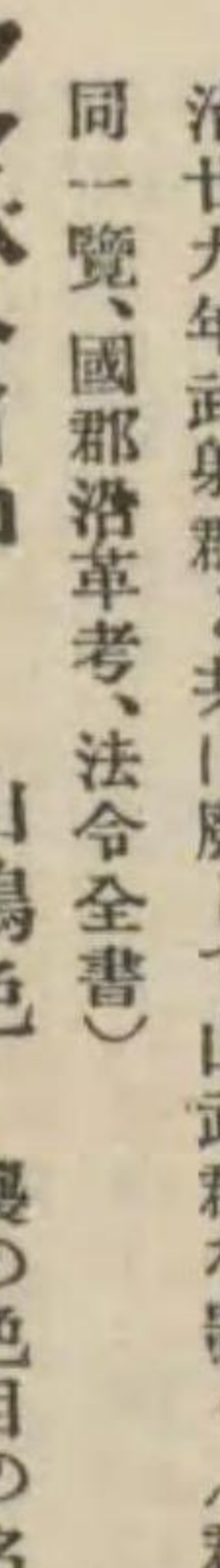
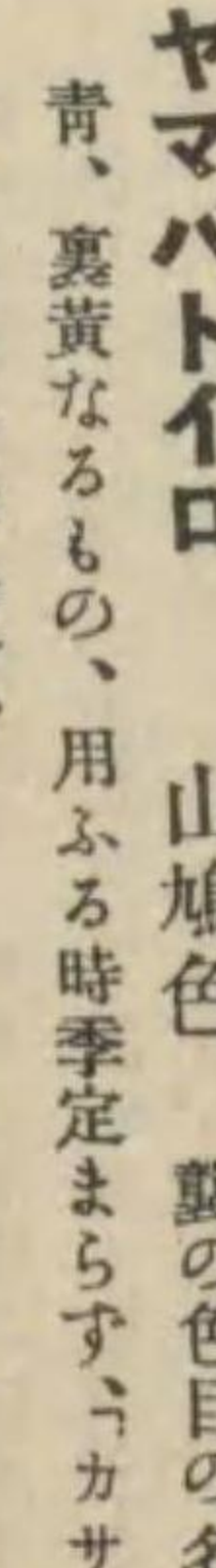
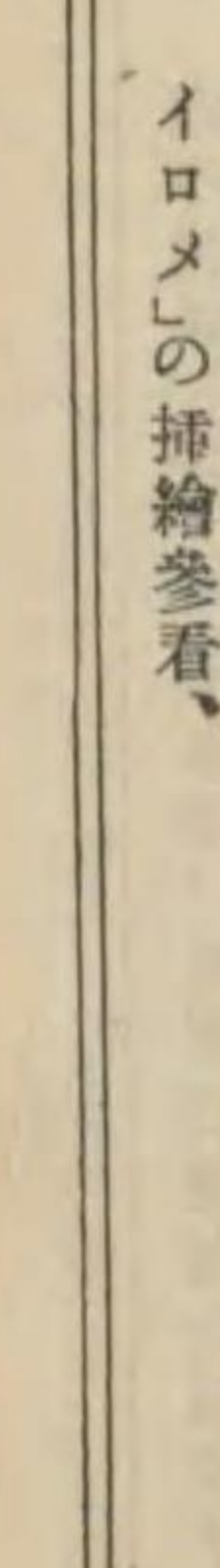
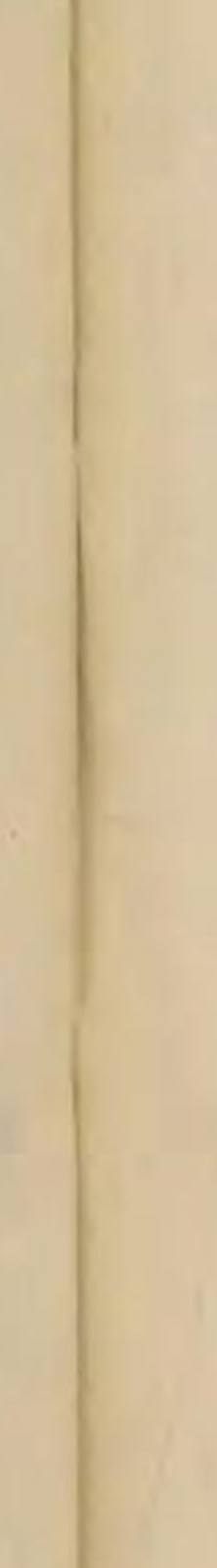
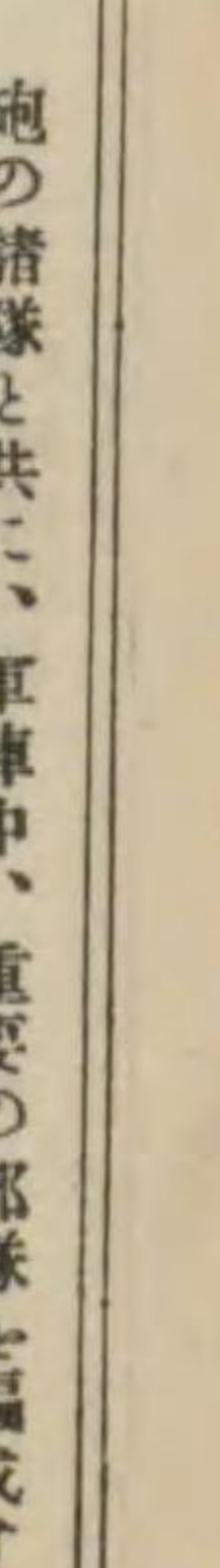
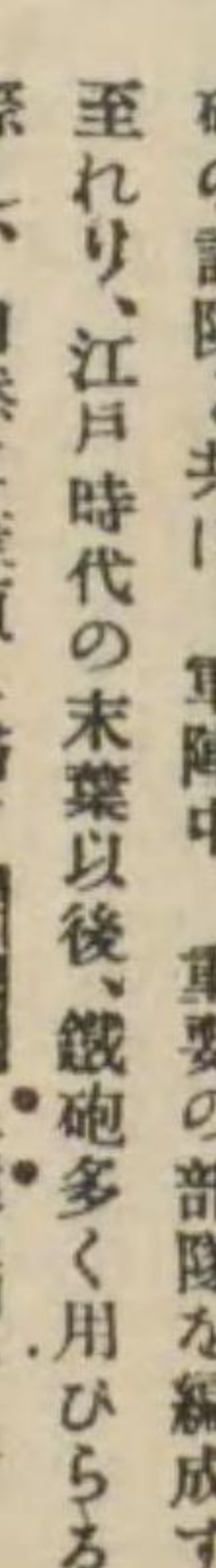
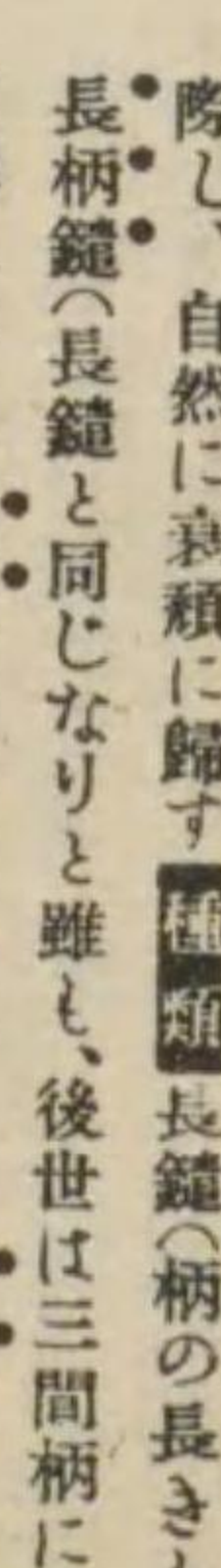
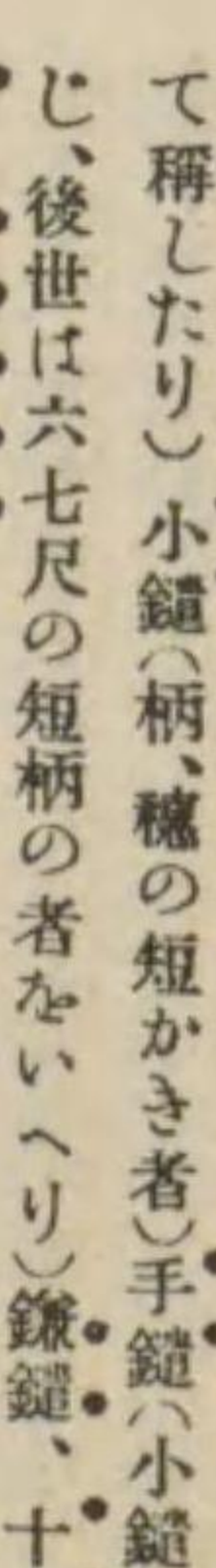
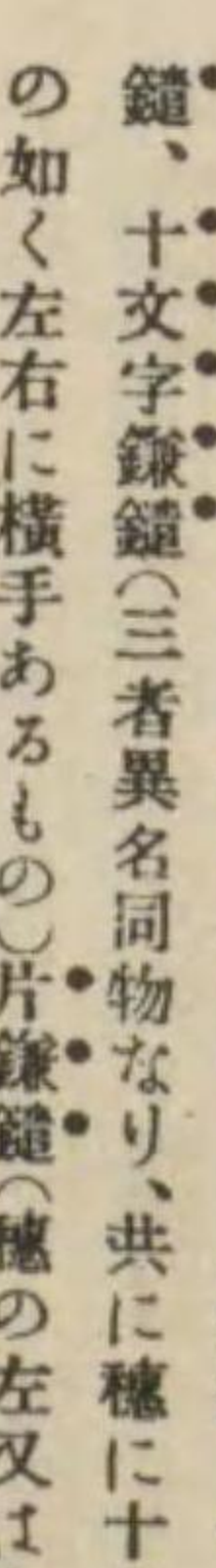
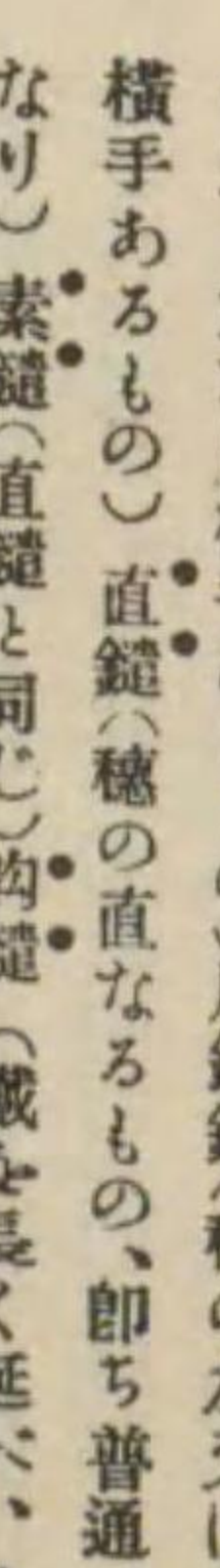
伏野三家定賜健守命孫黑實乃自此
 新川臣兒斯多爾足尼孫大兒臣聚三
 兒長利僧母爲記定文也 放光寺僧

ヤマフキ

山邊郡 所在 大和國 國郡制定の際、建て、郡となせり。沿革 崇神景行二帝の山邊陵、延喜の時、既に城上郡に屬す、和名抄に都介、星川、服部、長屋、石成、石上等の郷あり、拾芥抄以後又山邊に從ひ、地誌提要「ヤマノベ」と訓す(郡名異同一覽、國郡沿革考)

ヤマフキ

山鳩色 襲の色目の名、表青、裏黃なるもの、用ふる時季定まらず、カサネノイロメシの挿繪參看、



鉤鎗 柄に十文字に入れたるもの、等あり、なほ鎗其物の種類にはあらざれども、用によりて名を異にするあり、持鎗(自己の持料の鎗)替鎗(持鎗の豫備に供するもの)數鎗(足輕等に數多持たすもの)汎稱)等これなり○又竹槍、木槍あり、竹槍は竹を槍の長さに切り、頭を斜に殺して穂となしたるものいひ、木槍は、同じく頭を尖らして穂となしたるものにして、并に眞正の槍に代用せるものなり、槍術(サウジユツ)道具(ダツク)參看(武家名目抄、古今要覽稿、比古婆衣、古事類苑兵事部)

ヤマフキヤウ 鎗奉行 關西 江戸幕府の職名、長柄同心及び八王子在住の千人同心を統轄す、老中の支配、二千石高、菊之間縁類語とす、人員は三人もしくは四人あり、また五人の時もありて定員なし、同心十人づゝ各組に隸屬す、また西丸にもあり、定員一人、待遇本丸に同じ○此職は老衰の者多く任ぜられ、先途なし。起原 治平 寛永九年六月、はじめ

年六月辭職したりしが、其六月再び議定に任じ、從二位權中納言に任叙す、越えて二年薩長肥の三藩と共に、率先して藩籍を奉還せり、八月職を辭して磐香間祇候に轉じ、九月正二位に陞る、五年六月廿一日薨す、年四十六、東京府荏原郡大井村、山内家の堂域に葬る、詔して正一位を贈らる(墓誌、鯨海醉侯)

山上碑 上野三碑の一、上野國多胡郡(今多野郡)八幡村大字山名山上の山上に在り、高三尺許、潤一尺一寸許、野石を以て作り、四行五十二字を認む、その文左の如し(好古小録、上野三碑考、上野名跡志)

伏野三家定賜健守命孫黑實乃自此
 新川臣兒斯多爾足尼孫大兒臣聚三
 兒長利僧母爲記定文也 放光寺僧

山邊郡 所在 大和國 國郡制定の際、建て、郡となせり。沿革 崇神景行二帝の山邊陵、延喜の時、既に城上郡に屬す、和名抄に都介、星川、服部、長屋、石成、石上等の郷あり、拾芥抄以後又山邊に從ひ、地誌提要「ヤマノベ」と訓す(郡名異同一覽、國郡沿革考)

山鳩色 襲の色目の名、表青、裏黃なるもの、用ふる時季定まらず、カサネノイロメシの挿繪參看、

て四員を置きたりしが(西丸は慶安三年九月置く)慶應二年十二月之を廢す(吏微別錄、有司勤仕錄、古事類苑官位部)

ゆ

ユイマエ 維摩會 各稱十月十日より十六日迄、奈良興福寺に於て、維摩經を講じて供養する法會を云ふ、藤原鎌足の爲に設けといへり(起原沿革)

ユイマコシ 維摩居士 佛教にて居士の一、維摩は維摩詰の略稱、譯して淨名と云ふ、天竺毘耶離城の長者にして、在家の身を以て菩薩の行業あり、其疾に臥するに方り、釋迦牟尼の諸弟子交々問訊して教を受く、居士自ら疾の所以を示して「一切衆生病是故我病苦一切衆生得不病、則我病滅」と云へり、榮華物語に此意を取り、維摩居士の、衆生の罪を思し憐みけん程も、いつとなく哀におぼさる云々とあり、委しくは維摩詰經に出づ、

ユウツウネン フツシユウ 融通念佛宗

名義佛教の一派、融通大念佛の略なり、融通念佛といふは、我が唱ふる所を廻して衆人に融通し、衆人の稱ふる處、また我に融通するの義にて、彌陀直授の偈に、十界一念融通念佛といひ、華嚴經には得廣大念佛三昧門とせり、即ち所弘の法に就て宗名を立つ、華嚴法華の二經を正依の本經とし、淨土の三部經(無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經)を傍依の經とし、正傍の諸經の義意を解釋するに、華嚴の五教章、天台の三大部、淨土の往生論等を以て指南とせり、而して本宗の意は、正く融通念佛の法門を發揚して、口稱の念佛を正因とし、往生成佛の妙果を證得するを以て所證とす、故に一人の稱名を以て衆人の功とし、衆人の念佛を以て一人の徳とし、念佛の一行を以て萬行に通じ、萬行を以て念佛に通攝す、蓋し眞理本來萬有を具足し、彼此融通して一多相妨げざるが故に、一を擧ぐるに、悉く一切を攝し、一人を擧ぐるに隨うて一人人を攝す、然れば一切の人一人に入り、一人の一切に入る、心を以て言へば、一切法として心にあらざるごとく、色を以て語れば、一切法として色に非ることなし、是を以て行相融し、人人相通じ、自他の願行相互に交融して、多少の功德彼此相入し、同時に發現して前なく後なし、即ち一人の行を以て諸の衆生に通じ、一人往生すれば衆人往生し、一人成佛すれば衆人成佛す、かくの如く、自他の願行交融し、多少の功德相入するを以て、一行即ち一切行とせり、一稱の稱名直にこれ億百萬遍に同じくして、多一融通功德圓滿す、これを名づけて融通念佛他力往生といふ(攝津國東成郡平野郷村大源山大念佛寺を本山と爲す(起原沿革)聖應大師良忍、永久五年五月十五日融通念佛の妙旨を悟りし、天治元年管轄を携へて京都に遊化す、鳥羽上皇をばじめ、公卿百官等融

ユウツウ

ユウツウ

ユウツウ

通念佛會に入るもの甚だ多く、融通念佛の法門大に都鄙に行はる、而して法門擴張の方法は、普れく道俗男女をして此會に入らしめ、勸進帳を持して、日課念佛百遍を唱へしめ、名帳に交結するを規則とせり(融通念佛入會の人名を記したるものを名帳といふ)後攝津國住吉に大念佛寺を創め、融通念佛の道場と爲す、門下に嚴賢、尊永等あり、能く其化導を補佐したりしが、眞忍遷化の後、第六世眞鎮に至り、法流漸く衰へ、傳持稍々微なりしと雖も、第七世法明、祖道を振起してこれを中興し、法燈又明かなり(法明は貞和五年六月七十一歳にして寂す)爾後三百四十餘年を経、第四十五世大通融觀の時に及び、宗規を改良し堂宇を經營し、紫衣を賜ひ、檀林を創め、盛んに章疏を著述し、大に宗風を煥揚せり、これを再興と稱す、此時に際し本宗は、積弊を承け宗規壞亂せるを以て、融觀再興の志あり、蓋し法明中興以來、將に四十世に垂んとし、服制二途に岐れ(盧山衣、天台衣)僻執を生じたり、天和二年融觀江戶に赴き、幕府に稟請して其裁可を得、僧侶の異評を和融し、後ち宗門復興の爲めに江戶に留りしが、元祿元年七月十八日台命によりて本山に席を董し、祖風を恢復し、殿宇を再興し、輪奐舊に倍す、故に良忍、法明、融觀を以て三祖といふ、はじめ良忍大原に隱退するに及び、頼澄に稟する所の、慈覺大師入唐所傳の聲明梵唱を教授し、台家の法門を大原に弘通せり、後に本宗開創の舊地は大原にありと雖も、良忍が出世して融通念佛勸進の道場は、攝津國住吉の大源山大念佛寺なるを以て之を總本山とし、歴世管長所在の地と定めたり、明治七年二月はじめて融通念佛宗と稱す「リヤウニン」(ダイネン)フツシユウ(佛教各宗綱要)

ユウリヤクテン ワウ 雄略天皇

御名は大泊瀨皇子、また大泊瀨勳武天皇とも申す、世に大惡天皇といへり(系統)允恭天皇の第五子、安康天皇の弟、母は忍坂大申姫、第二十一代の天皇(事類)安康天皇の、眉輪王の爲に弑せられ給ふや、大泊瀨皇子直ちに兵を率ゐて、王及び其餘黨たりし葛城圓を誅し、又皇兄八鈞白彦皇子、坂合黒彦皇子を殺し、更に皇位の競望者たりし市邊押磐皇子を斃し、泊瀨朝倉宮に即位す、天皇尤も意を殖産のことに注ぎ、六年三月皇后をして、親桑して蠶事を勤めしめ、侍臣に命じ、國內の蠶兒を集めしめ給ひ、また十二年には身狹(アヲ、ヒコ、カト)青、檜隈、博徳を吳國に遣はして、工女を求めしむ、十四年に至り、青等、漢織吳織綾衣媛弟媛を率ゐて歸れり、十五年諸國に散在せる秦氏百八十部を聚め、是を秦造酒に賜ひ、養蠶織絹に従事せしめらる、幾もなくして絹を貢進する事山の如くなりしかば、天皇賞して萬部萬佐の號を賜ふ、爾來秦氏を大秦とも書し、ウヅマサと呼べり、是より先齋藏、内藏ありて、神物と官物を區別したりしが、同年更に大藏を宮側に建つ、皇室の用度と政府の用度と、全く分れ、國家經濟漸く發達するに至れり、天皇また遊獵を好み、河上舍人部、長谷部舍人、肉人部、鳥養部等を置く、而して資性勇猛にして、小過によりて人を殺すこと多かりしかば、天下恐れて大惡天皇と稱したり、然れども能く諫を納るゝの美德を有し給へり、二十三年八月七日崩す、壽詳かならず、河内國南河内郡高鷲村なる丹比高鷲原陵に葬る(大日本史、大日本通史、陵墓一覽)

ユカケ 殊(鞞、決拾、弓懸) 名義弓を射る時、左右の手に著けて指を包む具を云ふ、手の痛まざる爲めに用ふ、即ち手袋なり(製作)常用革にて作り、右手に著るものは、拇指以下三指に著く

ユカケ

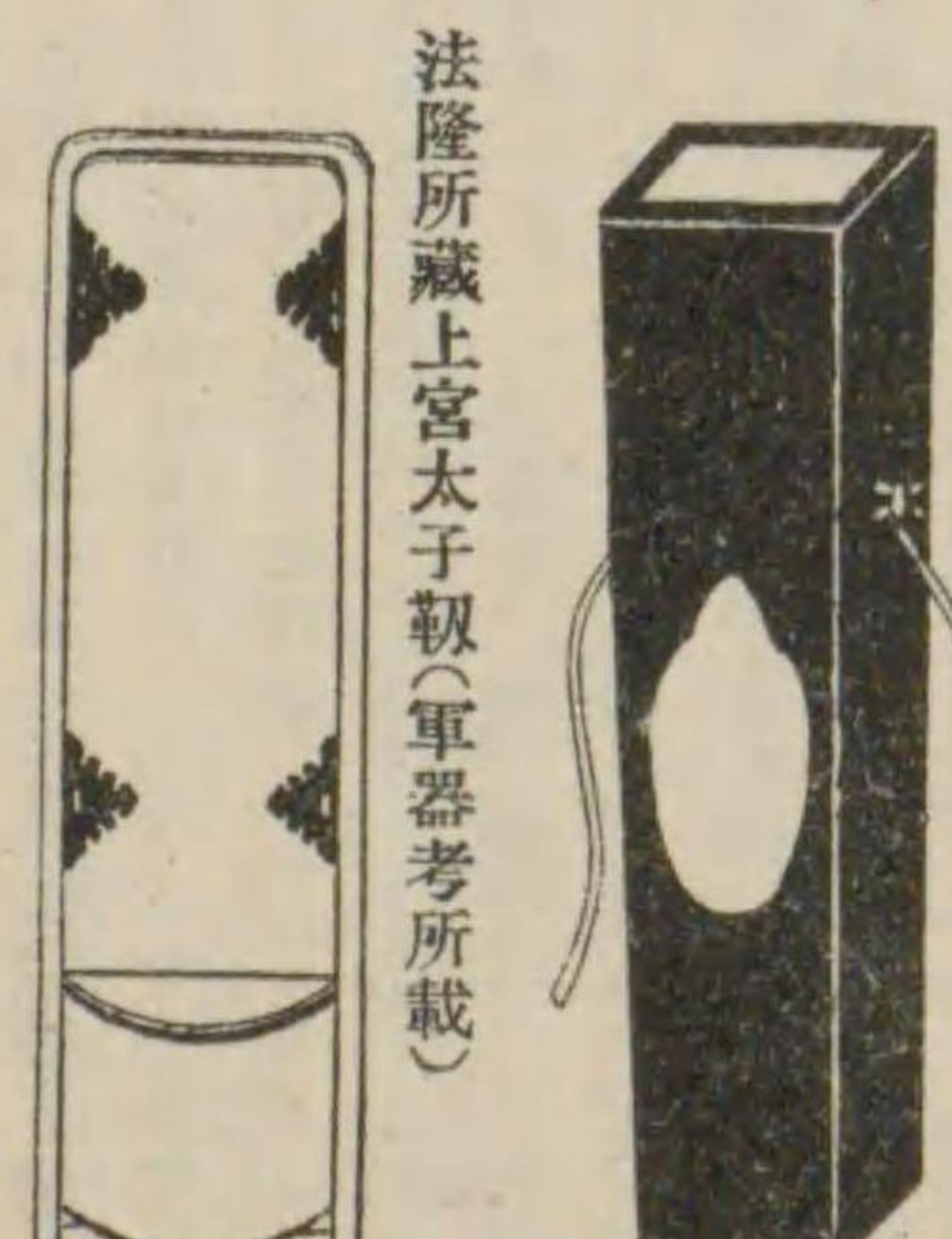
ユギ

ユギ



(載所記用軍) の下、おし

るを四つ掛けと云ひ、二指に著くるを三つ掛けと云ふ、四つ掛けの時、紅指は別色の革にて作り、縫ひ付るを故實とす、左手に著るものは、指のみに著るものと、拇指人指指とに著るものと二種あり、緒の結び様は故實ありて、小笠原流、武田流により相違す、小笠原流は一卷まで、上より引き通して結びて、二巻まで、又上へ引き通して結び、手の甲の方へ廻し、上より通して結びて、餘りを三つに折りて、ひねりておしかふべし、なほ巻きはじめに右の方へ廻し、左は左の方へ廻して巻くなり、引き通す所々にて結び事、手の甲にて留むる事、軍陣の時に限れり、武田流はくるくると三巻纏ひて、緒の餘りを三巻へ、上より下へ通して、結ばすして、緒のあまりを二つに折りて、むかふへひねりたるを、二つに折りて、其折めを三巻



のによりて考ふるに、多くは、金、鐵、銅等にて造りたるがごとし、なほ金靴といふものあり、即ち金にて作りたる歩靴なるべし、此外革靴、白葛靴、烏漆靴、赤漆桐木靴等あり(起原沿革)古事記素戔嗚尊が根の國に赴かんとし、別を叙せんが爲めに、高天原に赴きたる時、天照太神が、其不慮に備へたる條に「曾昆羅遜者眞二千入之靴(中略)附五百入之靴」とあるを初見とす(書紀にも之と同様の記事あり)千入といひ五百入といへるは、古來或は、眞に箭千本又は五百本を入れたる靴と解したる人もあれど、

ユキノ

これは只多数を意味するに過ぎざるなり、なほ同書に、瓊々杵尊が天降の時、天忍日命、天津久米命が、天之石鞆を預ひて先驅したること見えたり、石鞆といふも、石にて作りたるにあらざる、堅固に製したる鞆をいへり、これより實用の具として戦場に用ひしのみならず、衛府の官人等は、常に之を預ひたるより、鞆負府、鞆負尉などいへる稱呼生じたり、されど此物の製は、便利なること胡籥に劣りしより、いつとなく胡籥行はれて鞆は衰へ、鞆負の官人のこときも、胡籥を帯することとなり、遂に神社の調度にのみ存し、其他には全く行はれざるに至れり(古事記、書紀、和名抄、倭訓栞、古今要覽稿、本朝軍器考、古事類苑兵事部)

ユキノシタ

雪下 麩の色目の名、表白、裏は紅梅なるものを云ふ、冬期を著用す、カサネノイロメの挿繪參看(藻鑑草)

ユギヤウハ

遊行派 時宗の一派、一遍上人の弟子二世他阿彌陀佛を派祖とす、本山は京都七條道場金光寺なり「ジシユウ」「コンクワツツ」參看(佛教各宗綱要)

ユゲノダウキヤウ

弓削道鏡 「ダツキヤウ」を見よ、

ユゲヒフ

鞍負府 衛門府の古名、「エモンフ」を見よ、

ユスルツキ

泔器 元服の時、髪かきの水を入るに用ふる器具、又泔坏と書きて、カンハイといふ、古は土器なりしが、後には木にて作り、漆にて塗り、蒔繪したるもあり、又銀にて作り、毛彫を施したるもあり、形は茶碗の如く、蓋蓋とも茶碗に似たり、但し蓋のゆるつきを糸じりを受る所は、穴を明けず底ある様にし、其下に又別に大なる蓋ありて、

ユリデ

泔器を蓋にすたるまゝ置くなり、別の蓋は窠形にて、ふち二分許高く、五足あり、金物ありて、五所にあげまきを結び垂るなり、足の下は輪にて窠なり、調度の條の挿圖を見て知るべし、類聚雜要鈔に、窠五葉角を入る、足高さ七寸五分、内面廣さ六分、土居厚さ三分、象牙腰同弘さ一寸六分、同手前長三寸(自角定む)面敷物、小文の唐錦、同表臥組二丈三尺、上巻五寸垂也、又云泔坏塗(金をやき付るなり)口徑四寸八分、同高さ二寸三分、内尻三分、同蓋口徑五寸八分、同高さ五分、同尻尻弘さ五寸八分、高さ六分、尻高さ五分云々」とあるにて、大々製作を知るべし、

ユリテン

輸租田 租税を官に輸す田をいふ、即ち口分田、位田、賜田、功田、墾田、職田等これなり、詳しくは、各條を及び田制(テンセイ)を見よ、

ユノコホリ

温泉郡 所在伊豫國起原 始めて稱徳天皇紀に見ゆ「起原」風土記湯に作る、和名抄に桑原、植生、立花、井上、味酒等の郷あり、郡名考「ナンセン」「ウナンセン」兩様に、地誌提要「ウナンセン」「ユ」兩様に唱ふ、明治廿九年久米、風早、和氣の諸郡と、下浮穴及び伊豫二郡の一區域とを合併す(郡名異同一覽、國郡沿革考、法令全書)

ユハタガハ

額革 しぼり染にしたる革にして、また括染草とも云ふ、内藏寮式に額革とあり、

ユバハジメ

弓場始 名義武家に於て、歲首射を試みる儀式をいふ、また弓始、的始とも稱す ○鎌倉時代には弓始または的始、室町時代には弓始、的始、弓場始とも稱し、江戸時代には専ら弓場始といひ、なほ朝廷にても此儀あり、射場始と稱す、「イバハツメ」といふ、同條參看(儀式鎌倉幕府にては、正月の中、日を撰びて之を行ふ、射手は十人乃

ユフキ

至十二人を左右に番ひ、各々十回づつ射せしめ、將軍親しく其式に臨みたり、室町時代には、はじめは式日定まらざりしが、後には十七日に行ひ、射手を六人とし、また左右に番ふ、而して射手の棟梁たる人を弓太郎と稱し、御教書を以て之を補したり、皆風折、水干、葛袴を着け、將軍親しく其式に臨み將軍自らも亦射るを例とす、江戸幕府にては、射手十人を五番に番ひ、正月十一日、江戸城内吹上にて之を行ひ、將軍上覽あり(上覽なき時は名代を遣はさる)矢数は各十本にして、裝束等前代に同じ、式畢るの後、射手に祿を賜ふ(起原)文治五年正月二日、鎌倉幕府にて行ひしこと、吾妻鏡にあるを初見とし、以後毎年この事あり、蓋し朝處の射禮(シヤライ)參看)射場始等に倣ひしものなるべし、室町幕府の時も之を踏襲し、鎌倉管領家にては、また行ひしが、應仁亂後漸く衰頹し、其末葉より、江戸時代のはじめに係りては、全く行はれざりき、然るに入代將軍徳川吉宗の時、古禮再興の志ありしがゆゑ、廣く古式を調査し、享保十四年二月五日、吹上の庭園にて行ひ、翌年より十一日を以て式日と定めたり ○なほ鎌倉室町時代には、新造移徙、政所始、代始等の後、臨時に之を行ひしことありき(吾妻鏡、武家事記、徳川實紀、四季草、古事類苑武技部)

ユフキウチ

結城氏 姓は藤原、秀郷五世の孫頼行より出づ、頼行の孫行政、政光を生む、政光下野大掾となり、小山氏と稱す、三子朝光、上野介となり、下總結城を領す、因て氏とす、子朝廣、廣綱祐廣を生み、祐廣陸奥白河に移る、是を白河結城氏となす、是に於て結城氏二派に分る、廣綱の曾孫朝祐、足利尊氏に屬し、子孫世々下總國結城に住し、足利氏に仕ふ、嘉吉元年、氏朝及び其子持朝、足利持氏

ユフキ

の遺子春王安王を奉じて、結城城に據りしも、遂に敗れて自害す、持朝二男長朝五世の孫晴朝、男子なきを以て、徳川家康の子秀康を養子となす、慶長五年、秀康封を越前に移し六十七萬石を領し、北莊に住す、後ち福井と改む、同九年四男直基をして結城氏を繼がしむ、寛永三年松平と改稱す、「マツガヒラウチ」の上野版橋、及び越前福井、美作津山、出雲松江、播磨明石の條參看(吾妻鏡、尊卑分脈、藩翰譜) ○朝光 朝廣 廣綱 時廣 貞廣 朝祐 直光 基光 滿廣 氏朝 持朝 成朝 氏廣 政朝 政勝 晴朝 秀康 ユフキウチトモノラン 結城氏朝亂 起原 永享年間足利持氏兵を擧げて幕府に叛き、十一年二月事成らずして、遂に永安寺に於て自害す、持氏の子春王丸安王丸等遁竄して日光山に隱る、結城氏朝之を迎へ、十二年三月結城城に據りて兵を起し、又衆を分ちて古河城を保つ、關東之が爲めに騷擾す、管領上杉清方諸將を率ゐて之を征す(起原)同月廿九日關東の諸軍十萬餘騎結城城を圍む、抑結城の城たる、天然の要害を占め、頗る形勝の地たり、氏朝此險に據り、弟氏義以下の一族と共に、死を決して籠城す、時方力戦して之を攻めしと雖も、屢々利を失ふ、既にして氏義城を出で、降る、城中の士氣之れが爲に沮喪す、然れども勝敗いまだ決せずして、相持するに半年餘、翌嘉吉元年四月十六日に至り、清方諸軍に令し、四面より鼓噪して城兵と戦ふ、氏朝等城門を開き、一千餘騎を率ゐて時方に當り力戦頗る勉めしも、遂に敗れて城内に退く、時方機に乗じて益々之に迫る、氏朝此に於て、春王、安王を助けて自殺せんとし、二公子を女装せしめ、密かに脱せしめんとす、時

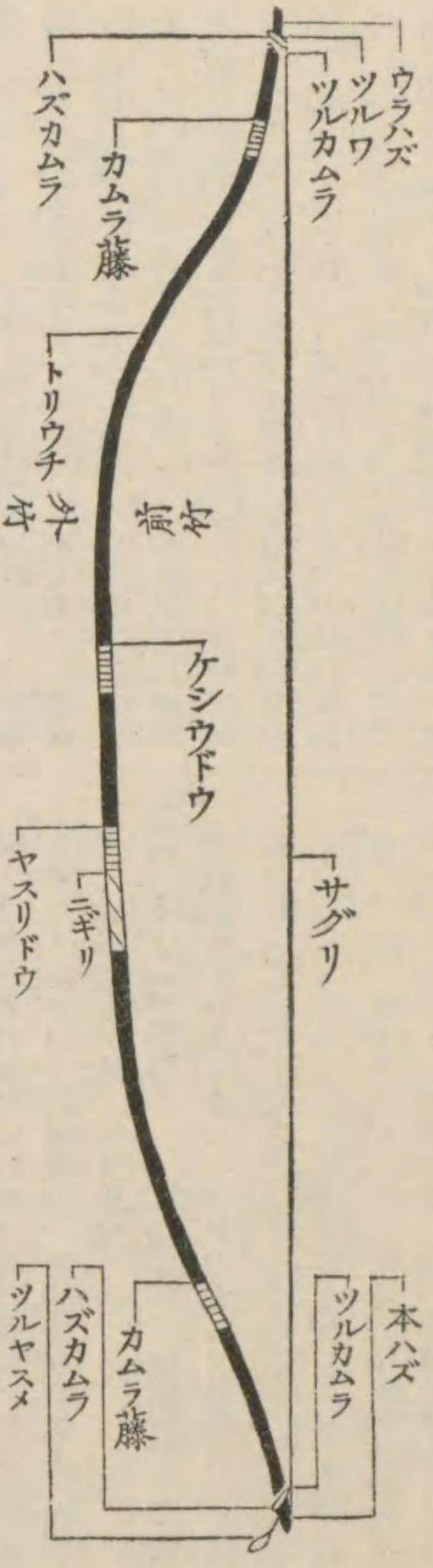
ユフキ

方探知して之を捕ふ、氏朝事の敗れたるを見て憤怒し、七百餘騎を具して出で戦ひ死傷相當る、即ち城内に退きて火を放ち、殘兵五十餘騎と共に、再び出で、奮闘し、力盡きて戦死す、城遂に陥る(結城)時方等古河城を攻めて之を拔き、氏朝以下の首を京都に送る、五月之れを六條河原に梟し、また春王安王兄弟を、美濃國垂井金蓮寺に於て誅す(結城戰場物語、永享記) ユフキジャウ 結城城 所在 下總國結城郡結城(起原)天慶三年藤原秀郷鎮守府將軍に任ぜられ、下野小山に本城を築きて居り、此地に支城を構へ、其族をして守らしむ、是此城の創始なりと云ふ、鎌倉幕府の時源頼朝、小山朝光を此地に封じ、歴世此に居り、遂に結城氏と稱す、永享十二年結城氏朝、足利持氏の遺子春王安王を擁して此地に據り、上杉清方の爲めに滅ぼさる、寶徳元年足利成氏管領となり、氏朝の子成朝も舊邑を復す、天正十八年豊臣秀吉東征の時、結城成朝歎を納れ、徳川家康の庶子秀康を嗣とす、慶長六年結城秀康を越前の福井城に移すに及び、此城破却せらる、元祿十六年水野勝長一萬八千石に封ぜられ城主格を賜ふ、因て再び城を築きて居る、子孫相繼ぎ、明治維新に至る(廢城考、徳川加除封録、明治政覽) ユフキノコホリ 結城郡 所在 下總國起原 續紀神護景雲二年八月の條に、結城郡と常陸新治郡との境界を定むるよし見えたれば、國郡制定の際、之を置きしなり(沿革)和名抄に茂治、高橋、結城、小桶、餘戶等の郷あり、明治二十九年岡田豊田の二郡を合併す(郡名異同 覽、國郡沿革考、法令全書) ユミ 弓 名義矢を發射する武器、東雅に「弓

ユフキ

をユといひしは射の義にして、又ユミともユムともいひしが如きは、猶齋をイといひ、イミといひイムといひしが如くなるべし」といへり、此説當を得たり、なほ古今要覽には「ユミ」とはユムといへる詞なるにや、木の枝のユムムといへるユムも同じ義にて、弓といふものは、木をたゆめて用を爲すものなるが故に、ユムといへるなるべし」といひ、和訓栞には「努力の義ならん」といひ、日本釋名には「ユガミにて、弓の形曲りたるよりの名なるべし」といへり、また賈人の持弓を「ミトラシ」「ミタラシ」とも稱し、御執の文字を宛つ、手に執るもの、中にては、尤弓を重んずるが故なり、また調度ともいふ、武士は弓矢を以て、第一の調度と爲すが故なり(起原)幹と弦とより成る、幹は、上古は純木を以て製り、用材は多くは、梓、椴、楓、榿、柘等を用ひたりしが、中古以來苦竹の堅實なるものをとり、之を割りて二片と爲し、外皮を存して、裏面を削り、更にほの櫛を削り、竹と長短を等し、牛膠を以て兩竹片の間に挟みて心とし、籐、糸、棒等にて之を巻く、後ち其製法益々精妙の域に進み、重藤、村搦、絲、棒、棒、其製作によりて種々の名稱起れり、就中重藤弓は、將帥の用ふる所にして、塗籠藤は、士卒の用ふる所なり、又蒔繪弓は儀仗に用ひ、白木糸巻は軍陣に用ふるなど、製によりて用途を異にせるもあり、また握は古くは薛にて巻きたる後世は革を用ひ、蠟も古は銅、鹿の爪、獸角等を附したるものありしも、後世は實用のものには、別に附することなかりき、弦は麻苧にて製す、其法、苧を暫時水にひたしたる後、短き竿に付け、竿の所を以て疊を打てば、ちりみ出来るを、乾かして、そのほして、弦の太き程づいとりわけ、纏きんとして製するなり、また竿をうみて製す

もあれど弱しといふ、なほ其上を漆にて塗りたるもあり、弓の長さ、通常七尺五寸なれども、其人に

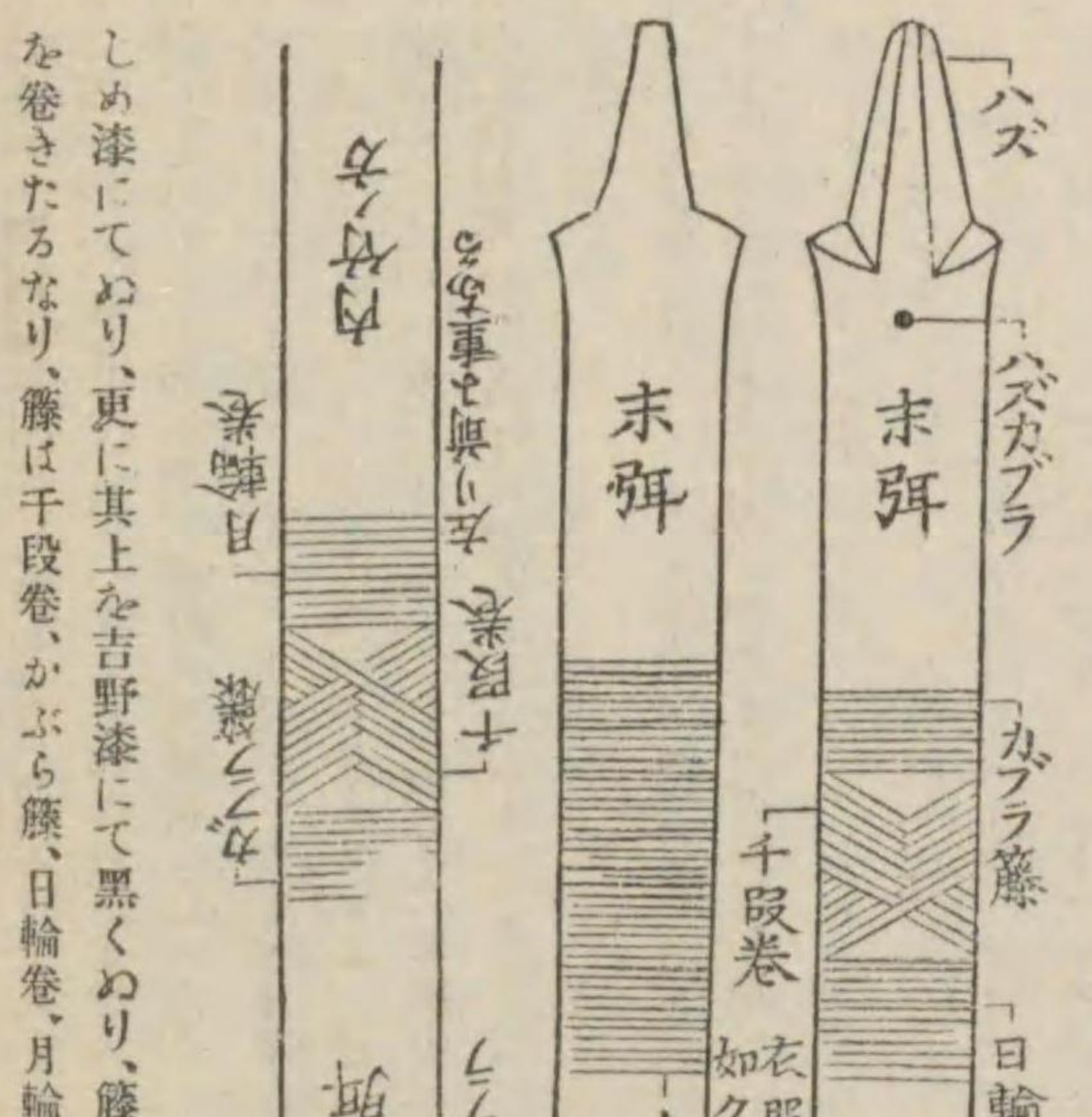


もいふ時、時給を施したるもの、村坊、(塗り)の所々を掃きて白らげるもの、ムラゴキノユミと訓じ、

よりて必ずしも一定せず、源為朝の如きは、九尺の大弓を用ひたりといへり、また何人張などいへるは、弓力を指せるものにして、幹を挽め、弦を施すに、其人数を要するをいふ、名所幹をホコといひ、両端を

また村削とも書す、重藤弓(藤を繋ぎ巻きたるもの、シゲトウノユミと参看)塗籠藤弓(藤を障き間もなく巻き、上下のかぶら藤と、矢すり藤とを除き、其他を漆にて塗りたるもの)糸裏弓(麻のより糸にて、本

矢すり藤、化粧藤等あり、千段巻の外は、場所によりて名を異にせり、千段巻は十字形に巻きたるものなり、詳しくは圖に就きて見るべし、丸木弓(木を丸く削りたるもの)側白木弓(竹を漆にて塗り、木を白くしたるもの)塗り(漆にて塗りたるもの、又塗り



此時には、木の弓の一面に、竹を添へたるものなりしが、尋て後世のごとく、竹を兩片に分ち、中に木を挟

ユミ

ユミ

ユミ

む様になりたれど、其時代また詳かならず、おもふに鎌倉時代ならんか、いま四季草なる弓名所圖、貞丈雜記なる藤の巻き方の圖を前頁に示す、○此外遊戯に用ふるものに、小弓、揚弓、破鏡弓あり、小弓は古今著聞集に、延長五年四月彈正親王が、内裏にて小弓の勝負せると見えたるを始めとす、又庭訓往來にも揚弓、雀小弓とあり、揚弓も古くよりありしことを知るべし、なほ破鏡弓は別に其條あり、就きて見るべし、なほ弓に屬せる器具に、矢、弦巻、柄(トモ)楯(ユカケ)靱(ユギ)調度懸(テウツカケ)弓袋(ユミ)アクロ等あり、各條参看、なほ射術(シヤシュツ)をも併せ見るべし(書紀、古事記、延喜式、雍州府志、平義器談、弓馬故實、弓村削祕傳書、今川大草子、貞丈雜記、四季草、本朝軍器考、東雅、和訓栞、武家名目抄、古事類苑兵事部)

ユミトリ 弓取 武士を云ふ、ユミシを参看、ユミハジメ 弓始 弓場始(ユバハジメ)を見

ユミフキヤウ 弓奉行 戰國時代以後武家の職名、弓組の頭をいふ、故にまた家により、弓頭とも稱したり、安土日記元龜元年六月廿二日の條に、「御馬を被納め、殿に請手之鐵砲并御弓乘被相加、築田左衛門太郎、中條將監、佐々内藏佐兩三人爲、御奉行」被相添候」とあるを初見とす、織田豊臣の兩家にては、縁高きものを此役に命ずる時は、足輕をばつけず、殊に豊臣家にては、通常大縁の者を以てこれに補したれば、輕卒は附する事なかりき、されど其他の諸家にては、必ず足輕を附したるがゆゑに、弓足輕頭など、も唱へたり(武家名目抄)江戸幕府にては持弓頭あり、モチノカシラを参看、ユミフクロ 弓袋 名義張替の弓を入る

ユミト ユミフ

る袋を云ふ、軍用記に、袋の地は布、古は十九と云ふ布を用ふ、後世なき故に、美しき布を用ふ、色は、軍陣には大將は白布無紋、其外は濃淺黄に染め白く紋を付く、一方に五つ、付く、長さは、弓より上下各一尺二寸長くし、上の餘りをウツメと云ふ、弓の裏背の、上のへりに、十二のひだを取りて、其所の折目に化粧革をつく、下の餘をグ、リアマシと云ふ、本管の下通りを、推しよせて、三尺計の赤組の緒にて結ぶ、縫様は弓の長さ程の間はふせぬにす、上下はほころばすと見えたり、然れども其長は一定せざりしと見え、小笠原家にては九尺二寸とし、多賀高忠聞書には九寸とす、五監抄には、弓の長さ七尺五寸、打たれ一尺二寸とし、弓矢細工之書には、打たれ一尺二寸、本管の方六寸とも云へり、源平盛衰記大納言謀叛の條に、藤原成親が、平氏を亡さん爲に、多田行綱に、白布五十端、弓袋料に贈りし事見え、又平氏は赤色の弓袋、源氏は白色の弓袋を用ひし事同書に見えたり、なほ賤のおだ巻に「弓袋など、翁が稽古する比は、紺の木綿を二筋に製いて袋にして、はつし弓にして、口より入て結び置ことなりしが、帯佩する人の、淺黄木綿の巻袋を用ひはじめ、夫より一統淺黄の巻袋になりけり、今は又一變して、菖蒲草染の萌黄の大袋を用ふる様になりたり」とあるにて、江戸時代の有様を知るべし(本朝軍器考、貞丈雜記、軍用記、古今要覽) ユミヤノイヘ 弓箭家 武士(アシ)を見

ユミフ ユミヤ

ユミヤリフヤウ 弓矢鍵奉行 江戸幕府の職名、弓矢鍵を監守し、其の製作を檢査することを掌る、留守居の支配、焼火問詰、十人扶持とす、定員二人、一組毎に、同心組頭二人、同心十九人隸屬せり、寛永十九年十二月始めて三人をおく(或は寛永十四年九月始めて一人をおくといへり)而して從來定員なかりしを、享保九年七月二人役となす、文久二年三月改めて講武所奉行の支配となしたりしが、三年七月廢して具足奉行に併せ、組同心は鐵砲玉藥奉行組へ加入せしめたり(武鑑、吏徴、明長帶録、續徳川實紀、徳川禁令考) ユリ 百合 襲の色目の名、藻鹽草、胡曹抄には、表赤、裏朽葉、色千種には、表紅なりといへり、ユルシノイロ 聴色 禁色(キンシキ)を見

ユミヤ ヨウ

ヨイチノソウ 世一僧 御室をいふ、オサム

ヨウ 庸 名義王朝時代、正丁に課したる夫役の替として、出さしむる布米等を云ふ、即ち代納の義なり、起原沿革、雄略天皇十五年秦氏調庸の絹織を奉獻し、明年庸調を獻せしめたること書紀に見え、たれども、其制又詳かならず、孝德天皇大化二年に至り、戸別に庸を徴し、一月に庸布一丈二尺、庸米

ユミヤ ヨウ

ヨウ

五斗と定めたり、大寶令の制、人毎に之を課す、凡そ正丁、歳役は一年に十日國事に役せらる、若し事故ありて身役に服する能はざるものは、即ち庸を收む、多くは布米なれども、郷土所出の物即ち綿、綿、絲等を納むるを得、例へば布ならば二丈六尺、即ち一日に二尺六寸の割にて、其他も亦之に準ず、若し正役の外都合ありて、留まりて服役せんとする者ありて、卅日に滿つる時は、其年の租調を共に免除す、正役と通計して四十日より上は使ふ事を得ず、次丁は二人にて正丁一人に準ず、即ち次丁一人、歳役五日の割合となるなり、中男と京畿内には庸を取らず、庸を納むるに、毎年八月中旬より輸送し始めて、近國は十月卅日まで、中國は十一月卅日まで、遠國は十二月卅日までにて京に輸して、大藏省に納む、其運送脚夫は、庸を出す家にて、人毎に其の脚直を出して功食を支拂はしむ、國郡司の内にて、之を宰領して送るなり、慶雲三年二月勅ありて半減し、太宰府所部は庸を免じたり、和銅五年十二月諸國の庸を、錢を以て換ふることを許し、錢五文を以て布一丈に準ぜしむ、七年四月諸國の庸は、丁毎に五兩とし、安藝國の絲は、丁毎に二兩、遠江國は絲三兩并に二丁を以て屯絢となし、尋で庸布の長は二丈八尺を以て一端と定む、養老二年六月太宰府所部の庸を復して諸國に同じからしむ、天平勝寶四年二月陸奥多賀以北の諸國は、黃金を輸せしむ、其法正丁四人一兩とす、後其郷土によりて納むる庸を變ぜし事、屢々見えたるも、疑はしきを以て略す、後世に至りては、諸國庸を輸することなきを以て、屢々命令する處ありしも行はれざりき、庸は時によりて増減ありて一定せずと雖ども、延喜式、政事要略等には、具に定率を立てたり、諸國皆規定あれども、今一斑を擧げて參考に備へん、東海

ヨウヘー ヨウメ

道伊賀國は、白木の檜九合、自餘は米を輸す、山陽道長門國は綿米を輸す、西海道諸國の庸は、太宰府の府儲雜用を除きたる外を、京庫に納むるを例とす、而して庸の總數は知るべき様なきも、此時代より後、一條天皇の時謀丁の數八十八萬三千三百二十九人なりし由、宋史に記したるより、いま之を悉く正すと見て、庸は一丈三尺の割合と假定し、布にて計算すれば、其の數二十三萬八千三百三十二端餘となり、其の概數を知るべし、延喜以後中央政府の權力衰ふると同時に、庸を收むるものなく、源平時代以後に至りては殆ど絶えたるが如し(書紀、令義解、續紀、類聚三代格、延喜式、租稅沿革論、大日本租稅志、大日本財政史)

ヨウベヤ 用部屋

江戸幕府にて、老中若年寄の殿中における候所をいふ、即ち政令の出づる所なり、抑々幕府の初世は、將軍御座の間より二間を距りたる次の間に、老中等候候して政事を議し、之を將軍に稟議したりしを、五代將軍徳川綱吉の時、眞享元年八月若年寄稻葉正休、大老堀田正俊を此所に刺殺したる事ありしより、昔より御膳立の間なりし所を、御用部屋と名け、そこに候候する事となり、將軍の居間より遠く距りたり、而して御用部屋に、上の間下の間あり、上の間は老中の、下の間は若年寄の詰所なりき(紳書、皇典講究所譯漢、徳川氏官制)

ヨウメイテンワウ 用明天皇

初め大兄皇子といひ、後橘豐日天皇と申す(系譜)欽明天皇第四皇子、母は堅鹽媛、蘇我稻目の女、第卅二代の天皇(神代卷)敏達天皇の崩後、皇弟を以て位に即き、磐余之池邊雙槻宮(大和十市郡)に都す、二年四月病あり、群臣に詔して曰く、朕三寶に歸せんと思ふ、卿等これを議せよ、大連物部守屋其不可を奏し

ヨトリ

たりしも、大臣蘇我馬子は詔旨を裝成し、僧を引いて宮に入る、僧侶の禁中に入る事、實にこれを以て嚙矢となす、越えて九日崩す、壽詳かならず、磐余池山陵に葬り、推古天皇元年改めて、河内國南河内郡磯長村大字春日の河内磯長原陵に葬る(大日本史、陵墓一覽)

ヨトリ 節折

名義 宮中にて毎年六月十二月の晦日に大祓の後、天皇及び中宮東宮の御爲めに、特に行ふ祓をいふ、荒世和世の竹枝を折りて、御長けの寸法を量るによりて名く、節は竹の節なり(儀式)當日の晩景清涼殿の二間に屏風を立て、御座を敷く、御座の座の如し、時刻に天皇出御あれば、縫殿官人、豆々志余呂比御服(即ち荒世和世の御服なるべし)を昇いて女官に付す、女官中臣女に授く、中臣女之を供す、天皇御氣息を懸けて返し給ふ、次に中臣御座を進らす、中臣女之を供す、天皇自ら取り、御體を摩して返し給ふ、次に東西女人一々御座を進らす、天皇御氣息を懸けて返し給ふ、次に中臣宮主者、神祇官及び荒世の卜部等、進みて竹節を庭中の席上に置く、中臣官人卜部等之を解き、中臣女に授く、女取りて之を供す、天皇起ちて、女と共に御體を量り給ふ(五度まづ御身長を量り、次に兩肩より御足に至り、次に左右御手、胸中より指末に至る、次に左右御腰を量り、御足に至る、次に左右御腰より御足爪に至る)竹は九枝なり、中臣女毎度取りて神官に示す、次に卜部靈を捧げ、中臣官人に授く、官人中臣女に付して之を供す、天皇御口氣を靈に放ち給ふこと三度、中臣女神官に傳ふ、宮主祝ひ畢る、次に和世參入、荒世の儀の如し、事畢りて相率るて退出す、中宮東宮の儀之に準じて知るべし(延喜式、江家次第、第引く所の清涼抄(村上天皇勅撰)に始めて見え、爾

ヨコサ ヨサノ

來引つゝきて行はれたり、而して中宮節折は、左經記長元年六月晦日の條に、東宮節折は、東宮年中行事に見えたるをばじめとす(西宮記、江家次第、公事根源、古事類苑神祇部)

ヨコサビエボシ 横さび烏帽子

名義 素襖を着したる時、用ふる烏帽子をいふ、又侍烏帽子とも稱す(製作)立烏帽子に作るも本體なれども、後ち頭を折り曲げて用ひたり、之を横さびの折烏帽子といふ(エボシ)の圖參看(貞丈雜記)「古へはやはらかなる立烏帽子にして、之を折て三角のまねきを作りたるなり(中略)今は、こはくわりのため、まねきをば切りはなして、とりおきにこしらへたる故、あらぬもの様になりたり」と見ゆ、まねきとは、即ち折り曲げたる部分にて三角形の處なり、又ヒレともいふ、以て其變遷を知るべし(常用)古へは土農工商とも、平常着用せしが、後世は専ら素襖を着したる時に、用ふることなれり(貞丈雜記)

ヨコミノコホリ 横見郡

所在 武藏國 起原 延喜式に見えたり(沿革)和名抄に高生、御坂、餘戸等の郷あり、後世或は吉見と稱す、正保圖以後横見に作り、以後之に仍る、明治二十九年比企郡に入りて郡名失す(郡名異同一覽、國郡沿革考、法令全書)

ヨサノコホリ 與謝郡

所在 丹後國 起原 初めて雄略紀廿二年秋七月の條に見えたり(沿革)日本紀餘社又は余社に作る、和名抄に宮津、日置、拜師、物部、山田、謁敷、神戶等の郷あり、正保圖與佐に作り、寛文中舊に復す、寛知集之に仍る、元祿帖又與佐に改め、郡名考、天保郷帖之に仍り、明治沿革機與謝に復す、地誌提要與佐に作り、郡區編制の際又與謝となす、今之に従ふ(郡名異同一覽、國

ヨサフリン 郡沿革考

郡沿革考) 與謝蕪村 名義 本姓は谷口、丹後に遊びて與謝の風光を愛し、姓を改めたりといへり、初名長庚、後ち寅と改む、字は春星、夜半亭(二世)蕪村、三果、紫狐庵、浮風庵、東成、四明等の諸號あり、或は單に蕪村とも稱せり(事蹟)攝津國東成郡毛烏村人、嘗て江戸に入り、儒學を修むるの傍ら、始め内田沾山に、後ち早野巴人等に就て俳諧を學び、巴人の歿後各地を遊歴し、寶曆元年京都に居住し、爾來畫室を構へ、専ら元明諸名家の風を慕ひて畫三昧に入り、妻子といへども妾りに室内に入るを許さざりしといふ、故に其筆する所風格高雅、忽ちにして名聲世に聞えしが、特に俳畫狂畫に於て非凡の作多し、是より先芭蕉受してより以來、俳句界は不統一なる混亂時代に入り、形式にのみ拘泥し、字句の末に腐心せるに當り、蕪村進みて、これが革新に任じ、生來の堪能を以て研鑽の功を積みしが故に、秀吟頗る多く、優に京都俳壇の牛耳を執りたりき、天明三年十二月二十五日(或云二十九日又十日)歿す、享年六十八(或云六十三、六十七、七十) (備考)夜半帖、玉藻集、芭蕉翁付合集、十番左右句合、花櫻帖(俳諧年表、俳家人名錄、畫乘要略、古今墨蹟、鑑定便覽、增補近世逸人畫史、本朝古今書畫便覽)

ヨシ井ウチ 吉井氏

松平氏(上野吉井)を 見。 吉岡流 吉岡憲法の創めたる銀術の流派、また憲法流ともいふ、憲法は戰國時代の人のにして、京都に生る、尤も銀術に達し、室町將軍家の師範と爲る、或は云、祇園藤次といふ者に從ひ、其妙旨を得たりとも、また鬼一法眼流にして、京入流の末なりともいひ詳かならず、憲法、嘗て宮本

ヨサフー ヨシヲ

武藏と勝負を試み、其甲乙を分たざりしといふ、末流諸州にあり、其子又三郎其藝を傳へ大に美名あり(武藝小傳、武術流祖錄) ヨシダウチ 吉田氏 卜部氏(ウラハウヂ)を見よ、 ヨシダケンコウ 吉田兼好 名義 俗名と法名と同字にして、俗名はカネヨシと訓じ、法名は音を用ひたり、世に手枕の兼好とも稱す(系譜)卜部兼願の第四子、吉田の地に居りしを以て、吉田といへり(備考)幼にして聰悟、早く後宇多天皇に仕へ左兵衛尉に任じ、稍々親昵せられしが、正中元年天皇崩するに及び、哀悼の餘備となり、修學院に入る、後ち木曾に遊び、其山水を愛し、廬を結びて居る、一日國守、衆を帥ひて其地に獵す、兼好其喧擾なるを厭ひ「こゝもまたうき世なりけりよそながら思ひしまゝの山里もがな」と詠じ、即ち京都に歸り、歌詠して自ら娛みたり、當時の公卿大夫皆其人となり愛して、高師直の爲に鹽谷高貞の妻に與ふる麗書を代作したりしも、高貞の妻應ぜざりしかば、師直怒りて兼好と絶てりといふ、學者或は之を以て太平記の架空談とし、且園太厝の年立により、兼好當時都に居らざりしなりと論じ、また兼好を庇護するものは、其志常に、南朝に存したりしが故、麗書のことあるを幸とし、足利氏諸將間の軋轢を生ぜしめんと圖りたるなりとせり、後説の如きは採るに足らずと雖、前説また俄に信す可からざるなり、嘗て葬地を雙岡に卜し櫻花を植ふ、且つ詠じて曰く「契りおく花とならびの岡のべにあはれ幾世の春を過ぐさん」晩年伊賀國見山(今の三國峠なるべし)の麓に住し、正平五年二月(北朝觀應元年)歿す、其地に葬る(高野山西光

ヨシダ

ヨシノ

院の位牌には、四月八日とあり、今園太厩に從ふ兼好常に好みて老莊の書を讀み、また文才あり、其著徒然草を見て、詞藻の一端を知るべし、加ふるに和歌を善くし、頓阿、淨辨、慶運と名を等しくして、四天王と稱せられ、「手枕の野邊の草葉のしもがれに身はならはしの風の寒けき」の詠により、手枕の兼好と呼ばれたり、著書徒然草、歌集、「ツレツレカサ」參看（圖太厩、大日本史、兼好法師傳記考證、春淡浪話）

ヨシタシヤウ

美都豐橋の現今豐橋と稱す、沿革 永正二年今川氏の臣牧野左衛門此に城き今橋城と稱す、同三年北條長氏之を攻めしも拔くこと能はず、同十二年吉田と改む、永祿五年松平清康之を奪ふ、その後今川氏に屬せしが、永祿七年徳川家康之を陥れてその有に歸し、酒井忠次之を守る、天正元年武田氏の兵攻めしも拔く能はず、同十八年秀吉之を池田輝政に與へ修築せしむ、慶長五年松平家清、同十七年松平忠利、寛永九年水野忠清、同十九年水野忠善、正保二年小笠原忠知、元祿十年久世重之、寶永三年牧野成春、正徳二年松平信祝、享保四年松平資訓等、相交代之に封ぜられ、寛延二年松平信復封後、子孫世襲して明治維新に至る（武鑑、徳川加除封録、明治政覽、尾室寶鑑）

ヨシノホウヘイ

由奉幣 大嘗祭（タイジ ャウサイ）を見よ、

ヨセバ

寄場 人足寄場（ニンソクヨセバ）を見よ、

ヨセバギヤウ

寄場奉行 江戸幕府の職名、石川島の人足寄場を管す、町奉行の支配、二百俵高、二十人扶持なり、元締役、手業掛、見張、鍵番役、春場掛、蠟灰製所掛、畑掛、油絞方、門詰等これに屬す、ニンソクヨセバ參看（明良帶録、官制沿革略史）

ヨツツジウチ

四辻氏 姓は藤原、院院家の一、西園寺公經の四男實藤を祖となす、實藤權大納言正二位に至り、永仁六年十月薨す、初め殿内と號す、後世に至り四辻と號す、羽林家の一、將官辨官を経て大納言を極官とす、大納言季經、土御門天皇に和琴等を授け奉りしより、世々和琴等を以て家業とす、明治に至り華族に列し、伯爵を授けられ、室町と改む（尊卑分脈、系譜、華族諸家傳）

ヨツメノモン

四目紋 紋所の名、蛇目を、方にかきたるものを、四つ合せたるもの、石州津和野の龜井、美濃今尾の竹腰、丹波福知山の朽木氏等家紋となす、〇平四ツ目、四ツ目を四角に置きたる形に畫きたるものは、讃岐丸龜の京極、下總佐賀の森川氏等用ひ〇丸に四ツ目、丸の内にゑがきたるものは、

ヨシノ

形勢を大觀すべきを教へたるより、松隆専ら心を海外の事に用ふるに至れり、嘉永三年九州に遊び、四年更に藩主に從うて江戸に到り、相房形勢の地を按じ、また始めて佐久間象山の名聲を慕うて其門に入る、尋て東北地方を視察せんと欲したりしが、藩の許可を得る能はざりしを以て、遂に脱藩して其行を遂げ、頗る得る所ありしも、之が爲めに罪を得て、郷里に幽せらる、六年に至り赦宥せられ、十年間遊學の許可を蒙りたれば、中國四國等を経て江戸に來り、再び象山と相往來して教を受けたり、この時に當り、米艦浦賀に入津して開國を迫るの事あり、天下騒然たる際なりしが、松隆は急務條議、攘夷私議等を著し、盛んに攘夷論を主唱せり、會々象山は、松隆に説くに、海外に航して形勢を審みすべきを以てせしかば、同年魯艦の長崎に入るや、意を決して西行したりしも、魯艦既に在らざりしが故に、空しく江戸に歸れり、既にして安政元年米艦再び下田に來るに及び、三月廿七日夜、從僕金子重助と共に、私に流舟に乗じ、旗艦ボウハン號に赴き、米國に伴ひ行かん事を懇願したれども、ペリーは日本の國禁を侵し難しと稱してこれを許さず、即ち一舸を裝して岸上に送れり、事幕府に聞え、松隆重助共に傳馬町の獄に繋がれしが、尋て十月藩地に護送せられ、長門野山の獄に投ぜらる、二年十二月出獄の許可を得て家に塾居す、三年七月、はじめて松下村塾に子弟を聚めて教授し、俊才を養成せると共に、屢々書を公卿及び藩主に呈して、尊王攘夷の事を論じたりしが、五年井伊直弼大老となり、三家親藩の主を幽し、また問部詮勝に上洛を命ずるなど、朝幕の關係漸く圓滿を欠くのみならず、水滸の志士等が密に直弼を討たんとするの風聞あるを聞き、同志を糾合

ヨシノガミ

吉野紙 大和國吉野郡丹生郷より産する紙を云ふ、一に淡流と云ふ、極めて薄く漉きたるものなり、江戸時代御殿女中は、一にやばら紙又やばら野紙とも云ひて、鐵漿をつけたる後、口をふくに用ひたりと云ふ（古事類苑文學部）

ヨシノコホリ

吉野郡 所屬 大和國 起原 神武紀に見えたり、沿革 舊事記續紀芳野に作る、齊明天皇の時、此地に離宮を作り、和銅四年四月、始めて多少領及び主政を置く、元正天皇の朝、芳野監を置き、天平の末、又之を廢す、和名抄に賀美、那珂、資母、吉野等の郷あり、以後變更なし（郡名異同一覽、國郡沿革考）

ヨシノカヒ

四度使 名義 王朝時代、地方廳より政務を中央政府に上申する四種の使、即ち大計帳使、正稅使、調使、朝集使を云ふ、中央政府に之によりて地方政治を檢査す（一）大計帳使、大計帳を上る使をいふ、大帳又は計帳とも稱す、戶籍に關する帳簿なり、其の式は委しく主計式に見えたり、毎年六月卅日以前に、他方官等家口年報を注具し、八月三十日以前に太政官に送らしむ、延喜年中には陸奥出羽太宰府は九月三十日以前に申送すことと定まる、後世志摩佐渡太宰府は、翌年五月まで延引することを許す、大計帳に附して上るべき者は、隱首括出帳、雜戶帳、陸戸帳、出舉帳、華人計帳、貢帳使名帳、郷戶課帳、青苗簿等なり、（イイチャウ）

ヨシノコホリ

吉野郡 所屬 大和國 起原 神武紀に見えたり、沿革 舊事記續紀芳野に作る、齊明天皇の時、此地に離宮を作り、和銅四年四月、始めて多少領及び主政を置く、元正天皇の朝、芳野監を置き、天平の末、又之を廢す、和名抄に賀美、那珂、資母、吉野等の郷あり、以後變更なし（郡名異同一覽、國郡沿革考）

ヨシノコホリ

吉野郡 所屬 大和國 起原 神武紀に見えたり、沿革 舊事記續紀芳野に作る、齊明天皇の時、此地に離宮を作り、和銅四年四月、始めて多少領及び主政を置く、元正天皇の朝、芳野監を置き、天平の末、又之を廢す、和名抄に賀美、那珂、資母、吉野等の郷あり、以後變更なし（郡名異同一覽、國郡沿革考）

ヨシノ

ヨシノ

ヨシノ

對馬の宗氏〇つなぎ四ツ目、丹後峯山の京極氏家紋に用ひ〇菱四ツ目、四ツ目を菱形にゑがきたるものは、肥前小島の鍋島、讃岐多度津の京極、但馬豐岡の京極氏等家紋と爲し、又見聞諸家紋によれば、宇多源氏、佐々木氏の一族之家紋に用ひ（武鑑、諸家紋鑑）

ヨツヤモン

四ツ谷門 江戸城廓門の一、麴町より四谷へ出づる口に在るを以て名づく、正保御國繪圖には四谷口とあり、門衛には、万石以下三千石以上の者、勤番三箇年、番士三人、羽織袴著、武器に、鐵砲五挺、弓三張、長柄五筋、持筒二挺持弓一組を備へ置く（殿居書、御府内備考）

ヨドクミ

淀君 名義 姓は淺井、名は茶々、淀君または淀殿など稱す、系統 淺井長政の長女、母は小谷の方、織田信長の妹、豐臣秀吉の戦死するや、小谷の方子女を携へて、信長に據りしが、後ち柴田勝家に再嫁するに及び、淀君等亦之に從ふ、既にして勝家また豊臣秀吉の攻むる處となり、北庄城に自害するに際し、小谷の方また殉死せるを以て、淀君等は叔父織田長益に據りたり、秀吉其醜麗なるを喜び、納れて側室と爲す、寵後房を傾け、遠征の途なほ之を携ふるに至る、天正十九年龜松を生みたれども夭したりしが、文祿二年八月秀頼を生むに及び漸く勢力あり、三年豊臣秀次事を以て自殺するや、秀頼は、秀吉の繼嗣となり、淀君亦其生母たるの故を以て、諸大名の中、往々にして心を屬するも

ヨドクミ

淀君 名義 姓は淺井、名は茶々、淀君または淀殿など稱す、系統 淺井長政の長女、母は小谷の方、織田信長の妹、豐臣秀吉の戦死するや、小谷の方子女を携へて、信長に據りしが、後ち柴田勝家に再嫁するに及び、淀君等亦之に從ふ、既にして勝家また豊臣秀吉の攻むる處となり、北庄城に自害するに際し、小谷の方また殉死せるを以て、淀君等は叔父織田長益に據りたり、秀吉其醜麗なるを喜び、納れて側室と爲す、寵後房を傾け、遠征の途なほ之を携ふるに至る、天正十九年龜松を生みたれども夭したりしが、文祿二年八月秀頼を生むに及び漸く勢力あり、三年豊臣秀次事を以て自殺するや、秀頼は、秀吉の繼嗣となり、淀君亦其生母たるの故を以て、諸大名の中、往々にして心を屬するも

ヨドクミ

淀君 名義 姓は淺井、名は茶々、淀君または淀殿など稱す、系統 淺井長政の長女、母は小谷の方、織田信長の妹、豐臣秀吉の戦死するや、小谷の方子女を携へて、信長に據りしが、後ち柴田勝家に再嫁するに及び、淀君等亦之に從ふ、既にして勝家また豊臣秀吉の攻むる處となり、北庄城に自害するに際し、小谷の方また殉死せるを以て、淀君等は叔父織田長益に據りたり、秀吉其醜麗なるを喜び、納れて側室と爲す、寵後房を傾け、遠征の途なほ之を携ふるに至る、天正十九年龜松を生みたれども夭したりしが、文祿二年八月秀頼を生むに及び漸く勢力あり、三年豊臣秀次事を以て自殺するや、秀頼は、秀吉の繼嗣となり、淀君亦其生母たるの故を以て、諸大名の中、往々にして心を屬するも

ヨドクミ

淀君 名義 姓は淺井、名は茶々、淀君または淀殿など稱す、系統 淺井長政の長女、母は小谷の方、織田信長の妹、豐臣秀吉の戦死するや、小谷の方子女を携へて、信長に據りしが、後ち柴田勝家に再嫁するに及び、淀君等亦之に從ふ、既にして勝家また豊臣秀吉の攻むる處となり、北庄城に自害するに際し、小谷の方また殉死せるを以て、淀君等は叔父織田長益に據りたり、秀吉其醜麗なるを喜び、納れて側室と爲す、寵後房を傾け、遠征の途なほ之を携ふるに至る、天正十九年龜松を生みたれども夭したりしが、文祿二年八月秀頼を生むに及び漸く勢力あり、三年豊臣秀次事を以て自殺するや、秀頼は、秀吉の繼嗣となり、淀君亦其生母たるの故を以て、諸大名の中、往々にして心を屬するも

ヨドクミ

淀君 名義 姓は淺井、名は茶々、淀君または淀殿など稱す、系統 淺井長政の長女、母は小谷の方、織田信長の妹、豐臣秀吉の戦死するや、小谷の方子女を携へて、信長に據りしが、後ち柴田勝家に再嫁するに及び、淀君等亦之に從ふ、既にして勝家また豊臣秀吉の攻むる處となり、北庄城に自害するに際し、小谷の方また殉死せるを以て、淀君等は叔父織田長益に據りたり、秀吉其醜麗なるを喜び、納れて側室と爲す、寵後房を傾け、遠征の途なほ之を携ふるに至る、天正十九年龜松を生みたれども夭したりしが、文祿二年八月秀頼を生むに及び漸く勢力あり、三年豊臣秀次事を以て自殺するや、秀頼は、秀吉の繼嗣となり、淀君亦其生母たるの故を以て、諸大名の中、往々にして心を屬するも

ヨドクミ

淀君 名義 姓は淺井、名は茶々、淀君または淀殿など稱す、系統 淺井長政の長女、母は小谷の方、織田信長の妹、豐臣秀吉の戦死するや、小谷の方子女を携へて、信長に據りしが、後ち柴田勝家に再嫁するに及び、淀君等亦之に從ふ、既にして勝家また豊臣秀吉の攻むる處となり、北庄城に自害するに際し、小谷の方また殉死せるを以て、淀君等は叔父織田長益に據りたり、秀吉其醜麗なるを喜び、納れて側室と爲す、寵後房を傾け、遠征の途なほ之を携ふるに至る、天正十九年龜松を生みたれども夭したりしが、文祿二年八月秀頼を生むに及び漸く勢力あり、三年豊臣秀次事を以て自殺するや、秀頼は、秀吉の繼嗣となり、淀君亦其生母たるの故を以て、諸大名の中、往々にして心を屬するも

ヨドクミ

淀君 名義 姓は淺井、名は茶々、淀君または淀殿など稱す、系統 淺井長政の長女、母は小谷の方、織田信長の妹、豐臣秀吉の戦死するや、小谷の方子女を携へて、信長に據りしが、後ち柴田勝家に再嫁するに及び、淀君等亦之に從ふ、既にして勝家また豊臣秀吉の攻むる處となり、北庄城に自害するに際し、小谷の方また殉死せるを以て、淀君等は叔父織田長益に據りたり、秀吉其醜麗なるを喜び、納れて側室と爲す、寵後房を傾け、遠征の途なほ之を携ふるに至る、天正十九年龜松を生みたれども夭したりしが、文祿二年八月秀頼を生むに及び漸く勢力あり、三年豊臣秀次事を以て自殺するや、秀頼は、秀吉の繼嗣となり、淀君亦其生母たるの故を以て、諸大名の中、往々にして心を屬するも

ヨドクミ

淀君 名義 姓は淺井、名は茶々、淀君または淀殿など稱す、系統 淺井長政の長女、母は小谷の方、織田信長の妹、豐臣秀吉の戦死するや、小谷の方子女を携へて、信長に據りしが、後ち柴田勝家に再嫁するに及び、淀君等亦之に從ふ、既にして勝家また豊臣秀吉の攻むる處となり、北庄城に自害するに際し、小谷の方また殉死せるを以て、淀君等は叔父織田長益に據りたり、秀吉其醜麗なるを喜び、納れて側室と爲す、寵後房を傾け、遠征の途なほ之を携ふるに至る、天正十九年龜松を生みたれども夭したりしが、文祿二年八月秀頼を生むに及び漸く勢力あり、三年豊臣秀次事を以て自殺するや、秀頼は、秀吉の繼嗣となり、淀君亦其生母たるの故を以て、諸大名の中、往々にして心を屬するも

ヨド

参看(一)正税使、正税帳を上る使をいふ、正税帳は正税の穀類雑用を記するものにして、式は委しく主計式に見えたり、諸國は毎年二月三十日以前に太政官に申送し、西海道は二月三十日以前に太宰府に送る、後世飛騨、信濃上野、陸奥、越前、能登、越中、越後、四月申送す、之に附して奉るべきものは神祇帳、國分寺及定額寺公文、義倉及官田地子等帳、當田取納帳、品位田帳、諸寺燈油帳等なり、セイチャウ(参看(三))調使、調帳を上る使、又貢調使とも云ふ、調帳は調庸物を記せるものなり、調庸は毎年八月月中旬輪を起し、近國は十月三十日、中國は十一月三十日、遠國は十二月三十日以前に上納す、調帳は七月三十日以前に輪し訖る、延喜の制、越後、佐渡、隱岐は明年七月、長門は四月、伊豫土佐は二月を限りて納め、陸奥、出羽、兩國は當國に納め、西海道は太宰府に納めしむ、之に附して奉るべきものは租帳なり、テウチャウ(参看(四))朝集使、朝集帳を奉る使をいふ、地方廳一年間の政を中央政府に申送する、尤も重要な使節なり、朝集帳は地方廳の政を記せるものなり、朝集とは國司等期に應じて京都に會合する意なり、史に見えしは雄略紀二十二年八月の條に、臣連伴造每日朝參、郡司國司隨時朝集、とあるを始めてとせど、これは後世より推定せるものなるべし、尋で孝德紀大化元年二月の條に朝集使の、と見えたりども、これまた先に拜せる國司の功過を奏上するものにて、後世の朝集使とは少しく異なり、毎年十一月一日を以て朝集す、中央政府にて朝集を掌るものは式部兵部の二省なり、之に附するものは、會帳、郡司名簿、雜色人死亡帳、軍國歴名簿、防人在防所々收苗子帳、健兒歴名簿、器仗帳、馳騾帳、官

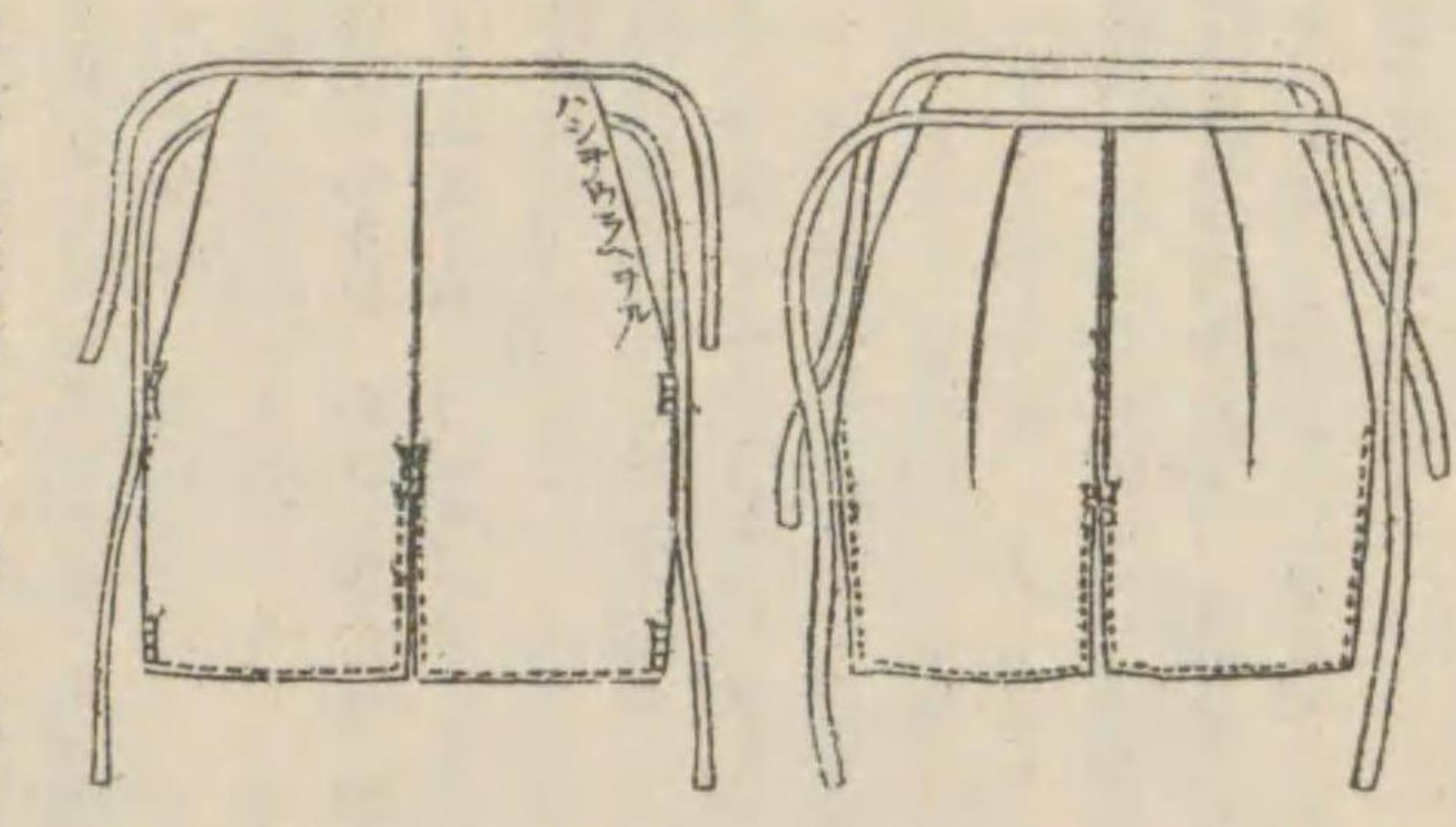
ヨネク

船舶帳、官取帳、官私馬牛帳、勸種大小麥專當人名簿、諸神祝部氏人帳、國分寺公文等なり、テウチャウ(参看(四))原船四度使は大寶元年制定して、右の如く期を定めて上京し、中央政府と地方廳との連絡を保ちしが、後政府にては便宜上合併を許せり、弘仁六年十一月郵驛送迎を略せんが爲めに、正税計帳兩使を、朝集使に附せしめたり、然るにかくては使五月より八月迄在京せざる可らざる不便あるを以て、同九年六月更に令して、計帳使のみは、別に上京することとなす、承和十一年四月又計帳公文を朝集使に附す、嘉祥二年閏十二月出羽は陸奥の例に準じて、大帳を朝集使に附する事を許したり、而して中央政府にて合併を許せると同時に、國司等專横私曲を營み、四度使を怠るに至る、延暦八年五月諸使返抄なくして歸國するものを罰し、弘仁元年十一月諸國の使人等其の惡事を行ひし跡の顯はれんことを恐れ、省に來らざる者あるを以て、上日三分の二に足らざる者は、公解を奪ひ、考に預らざらしむ、然れども大帳等を上らざるもの出でしを以て、齊衡二年九月には、故なく大帳使を上らざるものは、公解を奪ひて解官せしめたり、寛平年中に至りては、税帳を上らざるもの、遠きは二十年、近きも五年に及べり、爾來屢々令して戒飾する所ありしも行はれず、長保年中には主計主計二寮の官人、賄賂を貪り、公文を抑留するものあるに至り、漸次地方廳と中央政府の連絡は衰へ、堀河鳥羽天皇の頃よりは、此等の使廢絶するに至り、(合義解、續紀、後紀、延喜式、類聚三代格、史學雜誌、四度使考、王朝諸使考) **ヨネクラウチ** 米倉氏(武藏金澤) 姓は清和源氏、新羅三郎義光の三男義清の孫義行より出づ、義行孫の信繼、甲斐國八代郡米倉郷に住し、因て氏

ヨネツ

とす、十世の孫重繼、武田信支に仕へ、其子忠繼も亦武田氏に仕ふ、後徳川家康に従ひ、大阪の役使番となる、寛永五年昌純、二百石を賜はり、後ち加封ありて六百石を領す、元禄三年昌尹、五百石を武藏國幡羅、榛澤に加賜、敘置して丹後守と稱す、其後屢々加封ありて遂に二萬五千石を領し、武藏金澤に治す、十二年三千石を弟昌仲に分封す、子孫相繼ぎて明治に至り、華族に列して子爵を授けらる(華族諸家傳、徳川加除封録、華族譜) **昌明** 昌照 忠仰(和歌山) 里矩 昌晴 昌賢 昌由 昌後 昌壽 昌言 **ヨネツウチ** 米津氏(出羽長瀨) 天彦國押人命五世の孫難波根子建振熊命の男和爾日觸臣十世の孫、駿河國富士郡大領和爾部宿願麻呂の後裔なり、子孫郡務を世襲し、富士大宮司を兼ね、國能の男信政、三河國碧海郡米津村に移住し、因て氏となす、一説に、關白藤原道隆の後裔、信濃守親康、其子親勝米津大夫と稱す、是れ米津氏の祖なり、七世の孫信勝始めて三河高橋庄を領すと、勝政、松平清康父子三代に仕へて家を興し、五千石を領す、慶長六年田政、五千石加賜、寛文六年田盛一萬石加賜、前封と合せて二萬石、貞享元年政武、四千石を弟田賢に分封す、二年千石を三弟政容に分封す、寛政十年政通、封を出羽長瀨に移さる、子孫相繼ぎて明治に至り、華族に列し子爵を授けらる、明治十年源姓に改む(藩翰譜、徳川加除封録、華族諸家傳、華族譜) **ヨネツ** 政信 田政 田盛 政武 政矩 政容 政崇 通政 政懿 政易 政明

ヨノバカマ



政教 政賢 四幅袴 名義袴の一種、中間小者等着用す、前二幅、後二幅なるよりしかいふ、又假袴とも稱す、製作長き膝頭に及び、裾を少し狭くす、革にて二所づゝ菊綴を附し、後腰はなし、革は菖蒲革又は黒革を用ひ、色は不定なれども、普通柿色なり、常用多く中間小者等着用すれども、古へは侍も著けたるよし、雄川記に見え、又軍陣の時鑑の下に用ひしと太平記に見ゆ、著様は、まづ後腰を當て、前にて結び、次に前腰を當て、紐を後へ廻し、更に前に廻して結び、前腰の紐は後腰の外へかけて廻すなり、江戸時代の末年に至りて廢絶せり、服制(フクセイ)の條挿繪參看(貞丈雜記) **ヨボロ** 丁 壯年の男をいふ、年齢によりて正丁次丁の別あり、主計式に、凡左右京五畿内國、調一丁輪隨隨増減等と見ゆ、 **ヨミホン** 讀本 小説(セウセツ)を見よ、 **ヨモギ** 蓬 襲の色目の名、表白、裏青なるを **ヨノバ** **ヨモギ**

ヨモツクニ

いふ、また裏崩黄ともいへり、夏季之を着用す「カサネノイロメ」の挿繪參看、 **ヨモツクニ** 黄泉國 伊弉册尊が崩御ありし時、此地に葬りたること、古事記書紀に見ゆ、されど其所在詳かならず、栗田博士は、本居宣長の説を祖述して、古事記に「黄泉比良坂者、今謂出雲國伊賦夜坂也」と見えたるによりて、出雲伯耆の中なりと定め、更に出雲風土記に見えたる夜見島を以てこれに宛て、今の伯耆國四伯郡濱附近の地なりと論じたり、古來より死したる人の赴く所なりと一般に信ぜられたりき(古事記傳、日本歴史評林) **ヨラククン** 豫樂院 近衛家(コノエ)ヒロを見よ、 **ヨリアヒ** 寄合 名義 江戸時代、三千石以上の旗本にして非役のものないふ、また寄合組、寄合衆、組合小普請ともいへり(三千石以下にして非役のもの小普請といふ「コブシシヤク」參看) 高百石に付、小判二兩の役金を幕府に納むること小普請に同じ、但し留守居、三番頭の子息、代々寄合助の者は、三千石以下にても寄合に入り、又金森萬助、本多三津助は、名家たるの故を以て、三千石以下なれども、代々寄合に列したり、なほ布衣以上の役人に編す、されど世俗寄合と稱し、普通の寄合と區別せり、寄合は皆若年寄の支配、柳之間詰にして、年始、八朔、五節句、月次に登城し、また江戸城十二箇所門番、駿府加番、法事勤番、日光門主差添等のことを勤仕せり、後世寄合肝煎ありて之を幹理す、肝煎は若年寄の支配、持高にして、勤役中役金を免除せらるる○凡兵數、軍を爲すに足らざるものは、數人の衆を合して一軍と爲す、故に寄合と稱したるものにし

ヨリアヒシユウ

て、戰國時代には、また寄合組、寄組などともいへり、江戸幕府の制、此爲稱を套襲したるなり(起原) 幕府のはじめより之ありしものなるべし、東武實錄寛永三年五月二十七日の條に、寄合衆とあるを初見とす、當時留守居の支配に屬し、且つ四五千石にて小普請のものあり、小身に寄合のものあり、寄合小普請の別明かならざりしが、享保四年六月、三千石以上のものを若年寄の支配となすに及び、寄合小普請の區別はじめて明らかとなれり、寛政二年寄合肝煎五人をおく○延寶三年の江戸鑑を按ずるに、御寄合、御寄合並、平御寄合とあり、未だ其區別を詳にせず(東武實錄、仕官格義辨、明良帶錄、吏徵附録、徳川禁令考、徳川盛世錄) **ヨリアヒシユウ** 寄合衆 幕府臨時の職名、執權、評定衆等と共に、國勢を議する事を職とす、北條氏の一族中、其任に適せる人補任せらる、所なれど、常置にあらざれば、此職に居りし人亦多からず、引付頭、六波羅探題より此職に補し、また此職より直ちに連署に轉じたるものあるにて、重職たりしを知るべし、なほ此職は、例式の評定の席には臨まずして、寄合の席に列なり、内議論定せるならんといへり(起原) 北條記に、正應二年五月、北條時村が寄合衆となりしことあるを初見とし、尋で北村宗宣、同久時、同照時も補任せる事同書に見ゆ、蓋し此職名北條記の外に散見する所なしと雖、恐らくは北條貞時執權の頃に置きしものなるべし(武家名目抄)

ヨリキ

ヨリキ 輿力 力を併せて加勢する意の詞より、轉じて加勢する人を指し、更に室町時代の中葉以後は、諸大名等に隷屬せる士の稱となりて、被管と同義に用ひらるゝに至れり、而して安土桃山時代に

ヨモツ

ヨモツ **ヨリア**

ヨリア

ヨリア **ヨリキ**

は、附庸の大名をも凡て與力と呼びたり、なほ此時よりして侍大将、足輕大将等に附屬せる騎士の稱となりしが、江戸時代にも之と同じく、幕府にては重なる職員には必ず之を謀屬し、上官を輔けて庶務を行はしめたり、人数役祿等は、組によりて同じからず、并に其班同心の上にもあり、其謀屬せる職名等は、掌中大概順に見えれば參看すべし(武家名目抄)

ヨルノオトド

夜御殿

名義 天皇の御寢所なり、ヨルノオトドともよめり、又夜御所、塗籠、塗藏、夜大臣、夜大殿とも云へり、所在 大内裏清凉殿の北の間に、朝餉間の東、二間の西に在り、構造 母屋六七間、四方に妻戸あり、南大妻戸一間あり、御帳、御凡帳、御衣架等あり、縹緋の疊三枚を敷きて御座と爲し、壁代をかけ、四隅に燈檠あり、御帳の枕の方に厨子二つ、あとの方に鏡掛あり、又御帳の南西北に疊を敷き女房座と爲す、寶鏡は両面を覆ひ東南に奉安す、燈火は絶えず消えぬ様に注意し、藏人非藏人常に、さし油を爲す、其時異角より始め丑寅にて終る、これ御帳の東御帳をば通らぬためなりと云ふ、猶「セイリヤウテン」參看(江次第、禁秘抄、日中行事、禁秘抄、大内裏圖考證)

ヨルノクワンバク

夜關白

藤原顯隆をいふ、顯隆、白河法皇に親任せられ、夜毎に入りて近侍せるを以て名づく、

ヨロギノコホリ

餘綾郡

所在 相模國 起原 萬葉集に見えたり、沿革 和名抄に伊蘇、餘綾、霜見、磯長、中村、幡多、金目等の郷あり、鎌倉時代以後、多く莊名を稱して、郡名を用ひず、天正中郡名復舊の時、終に波多野庄、金目庄は大住郡に入り、中村郷は足柄上下郡に入りて、僅に今の地を存す、且つ餘綾を洵綾に改めしも、亦其時にあるか、正保圖洵綾に從ひ、寛文中改めて餘綾に復す、元禄帖洵綾に作り、以後之に從ふ、郡名考「ユルギ」と訓じ、地誌提要之に仍る、明治二十九年大住郡と合併して中郡を置く(郡名異同一覽、國郡沿革考、法令全書)

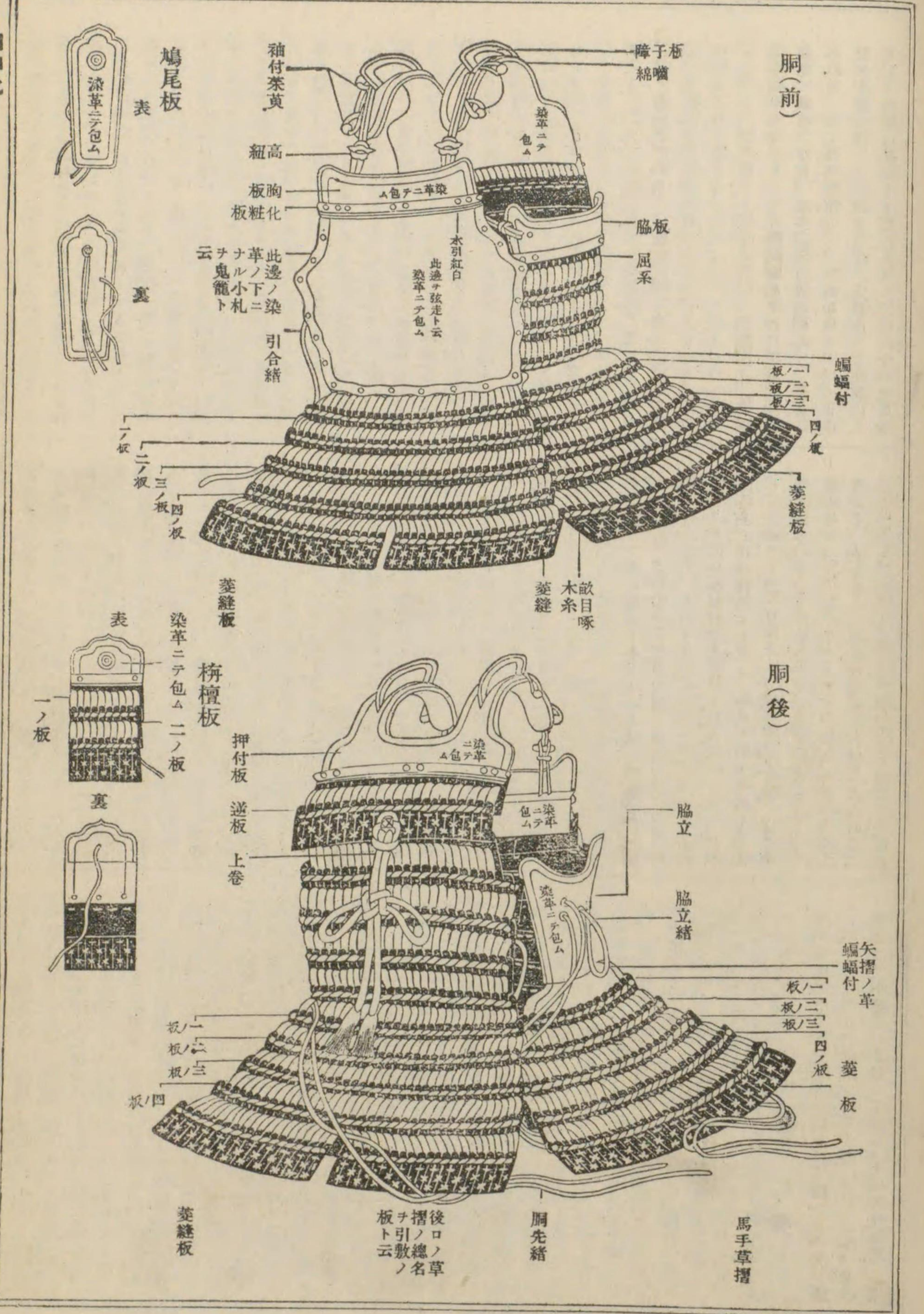
ヨロビ

鎧(甲)

名義 戦時敵の刺撃を防ぐん爲めに、着用する武衣を云ふ、即ち鎧、胴丸、腹巻、具足等の總稱なり、足り具ふの義なり、和名抄に「唐韻云、鎧蓋反、和名與路比、甲也、和釋云、甲似、物之有鱗甲也」とあり、故に又具足(後世に至りては、別に一種のもの出来せり、「アソク」參看)又三ツ物(胴、胃、袖をそろへたるより名づく)と云ふ、物具(物部の武具の意なりと云ふ)とも云ふ、上古はカワラと云へり、源平盛衰記等の物語に、甲をカワラト云へり、源平盛衰記等の物語に、甲をカワラト、胃をヨロビともみしは誤なり、又胴丸、腹巻に對して、脇立、弦走、鳩尾、梅檀等のあるを鎧といひ、之を着長(「キセナガ」參看)とも云ふ、今三種の區別を云はん、に、胴丸、腹巻は、共に脇立、弦走、鳩尾、梅檀等なく、腹巻は腹をまとひて、背にて引合せ、背板にて引合の隙を覆ふ、胴丸は竹の筒の如く、胴を圍みて右の脇にて合すものを云ふ、(所製)作

す、且つ餘綾を洵綾に改めしも、亦其時にあるか、正保圖洵綾に從ひ、寛文中改めて餘綾に復す、元禄帖洵綾に作り、以後之に從ふ、郡名考「ユルギ」と訓じ、地誌提要之に仍る、明治二十九年大住郡と合併して中郡を置く(郡名異同一覽、國郡沿革考、法令全書)

な、上は假粧の板の下より、下は掃の糸の下に至り、射向の半は、馬手のはづれまてにかゝる様に、て、鎧の前を掩ひたるなり、其染革の上と左右との廻りを射向袖 一板板 二板板 三板板 四板板 五板板 六板板 水吞緒 冠板 水引紅白 四ツノ緒 表 裏 四ツノ緒



胸(前)

胸(後)

搦の糸を引き出しけるなり云々」と見ゆ、引合、弦走の右脇にて、胴の後ろとの合せ目の所をいふ、中古以来高組のこともいへり、引合緒、引合の端に付し、鏡の合せ目を結ぶ用に供したる組緒をいふ、革緒にて平たくけるなり、化粧の板、弦走の上部に横へたる板をいふ、廣さ五六分の板の紋ある染革にて包み、間の金物といふ物を打ち、其の板の下の際に、白赤二色の綾を、細く玉縁の如く、二筋並べて付くる、是を水引又はりうもんといふ、胸板、化粧板の上にある板をいふ、色々の紋ある染革にて包む、草摺、胴の下に垂れたる裾をいふ、裔の草を摺る意をも、縫綴りの意とも云ふ、軍用記に「草摺の事、中高く左右はひらく、少しそらすなり、板の数は、菱縫の板共に五枚なり、菱縫の(前後の菱縫の板なり、左右をば二つに割らず)板をば中より割りて、二に分くるなり、草摺の数は四下りなり、鏡は馬手の方合はずしてある故、脇板を以て馬手の方を塞ぐ也、依て胴に付けたる草摺は、前後左右合せて三下り也、脇板に付けたる草摺を合せて四下りなり、すその板をば、菱縫板と云ふ、下に菱縫二通あり、菱縫の上は、啄木の糸にて、うなめ縫をして、第五の板に綴り付るなり(中略)射向の草摺は、ゆるぎの糸の所に、糸を用ひずして、染革一枚を付くる、兩方の端に、織物又は別の革にてへりを付くる也、此染革の所を、太刀掛と云ふなり、糸にては太刀の金具にからみて、降る事ある故、ゆるぎの糸のかけりに、染革を用ふるなり、此脇板にも此革あり、草摺の一の板に金物を打ちて、太刀掛の革を取り付くるなり」とあり、革にて草摺を付くるを編幅付と云ひ、草摺の、上方は白く、下二段は紫にて染めたるを紫綾と云ふ、其他何色にても同じと云へり、また前の草摺

の總名を前板又はユルギ板、後の草摺の總名を引合、左草摺の總名を、弓手草摺、射向草摺又は、太刀掛草摺と云ふ、又草摺の胴に付たる札を一の板、其次、を二の板、次を三の板、次を四の板と云ふ、押付板、背の最上部にある板をいふ、これより綿かみに連なるなり、染革にて包む、後世この板に金物三所打つ、此下に化粧板あること、胸板の下にあるものと同様なり、綿上(ワタカミ)と訓し綿嚙とも書す、押付の板より連りて、胴に釣る爲に、左右の兩肩に當る所を云ふ、肩上の義、軍用記に肩はカタとよまずマタとよむ例なりといへり、障子板、左右綿嚙の上の前に、半月形にて側立つものを云ふ、薄鐵にて製し、染革にて包む、近世は半月形に穴を穿ちたるもあり、此具は、頭の骨を射られざる爲の防ぎにて、恰も家の内外を障子にて隔てしが如き故に名づく、高組、綿上にありて、胴を釣る紐を云ふ、又相引緒とも云ふ、押付板より付出して、障子板の外を引き渡し、前の方へ出す、紐の先をわなにして、こぼせを付るなり、風繼グツケイと訓す、風系とも書す、鏡の左の脇を云ふ、古訓の鏡は、左脇に蝶つがひなく、前より左脇背の方まで札連り綴ぎ、脇筋の形に隨ひて札屈りて前後へ連り綴ぎたれば云ふなるべし、脇板、胴の右脇即ち引合の所をあきを塞ぐ具をいふ、總體を染革にて包む、上の中通りに穴を一つ、又は二つ若しくは三つをあけ、座金物とし留を打つ、此穴を壺と云ふ、故に壺板とも云ふ、此穴は啄木の組を通して、縁越して體へ結付くる、故緒縁板とも云ふ、腰通兩方にも、革のくけ緒をつくる(又無きもあり)下には草摺を付つく、捺糸を用ひず、兩方へりを取たる染革一枚を付く、此染革の所を矢摺革とも云ふ、瓶より矢を抜き出す時、糸は矢尻にかり降る故に

革を用ふ、草摺の一の板に、金物三所打ちて、矢摺革に取り付くるなり、逆板、胴の背の二の板の下に付け、三の板の上に覆ひかゝる板を云ふ、札は凡て上に重なる物なるに、此板のみは、上も下も重なる様に付たる故に名づく、板上は札頭に、下は一文字、上方には啄木の組にて、うなめ縫をして、押付の板に綴り付く、下方は菱縫二通りにす、此板の真中に座金物あり、之を總角付金物と云ふ、環を打ちて總角を付く、故に總角板とも總角附板とも云ふ、總角(揚卷または上巻とも書す)胴の背に、裝飾として付したる組緒をいふ、逆板にある大座の環に結び付くるなり、多くは紅の唐打を用ふ、長さ五尺許、房の長さ五六寸許なり、袖、左右の肩を被ふものを云ふ、左を射向袖、右を馬手袖と云ふ、又壺袖あり、軍用記に「大袖あり小袖あり、大袖を本式とするなり、かむりの袖、前方は後方より少し廣くするなり、かむりの板も染革にて包む事、胸板に同じ其下に化粧板あり、袖の板数は七枚なり、菱縫の板金物等、草摺に同じかむりの板の兩方の裏に、環を打ちて緒を付る、これ袖付のくだに結び付る緒也、又其真中に、一ツ環を打ちて緒を付くる、これはシツカの札に、結び付くる緒也、是をシツカの緒と云ふ、第三の板の裏、後の端に座金物を打ちて、其の環に緒一寸ち付く、是を水呑緒と云ふ、總角の横手のわなに付くる緒也、これは袖の前へ出でざる様に、とめ置く爲也、總角のわなに、二重にかけ、かまくらしに結びて、緒の先を打ち、かけはさみ置くなり、とあり、水呑緒、蜻蛉結(總角の一名、蜻蛉は後へ引かぬ故に、武士喜び用ふ)にゆひ付くる緒なる故に名づく、蜻蛉は水の上に遊びて、尾にて水を呑む故なり、樽板、胸板の左右に付する板を云ふ、高

紐を切られざる爲に覆ふものと云ふ、一説に鏡は、胴の長さ胴丸より短く、大袖の鼻を距る遠き故に、前肩より左右腋に間隙を生ずる故に、之を覆ふ爲の具なりといへり、昔は二つとも樽板と稱せしが、後世左右を分ち、紛れるざる爲に、左を鳩尾板、右を樽板と稱す、形も袖の小なるが如し、小板の數三枚、長七寸許、裏に緒あり、馬手の高組を覆ひて結ぶ、鳩尾板、樽板の左のもの、後世稱すること、上にいへるがごとし、其形鳩尾に似たるより名づく、又小出羽(小手輪)とも云ふ、木出葉の義にて、二葉より香しと云ふより、名付しならんと云へり、薄金にて作り、上は廣く下は狭く、長七寸許染革にて金覆輪をかく、裏に緒あり、射向の高組を覆ひて結び付く、而して樽板と鳩尾と、其形を異にせるは、敵に向ひて白刃を取り働く時は、右の手先、左の肩先へ行く事多し、其時左につけたる板柔軟にして、屈伸ある樽板にては妨となり、又右に強直の鳩尾板にては、右の手先の働の妨となる、故に右に樽板左に鳩尾を用ふるは、實用上利便あるが爲なりと云ふ、菱縫板、袖、草摺、樽板等の威と同じ糸にて、横に×形に縫ひ合せてたる板をいふ、縫糸と縫糸との間、自ら菱形を成すによりて名づく、此菱縫の板に三所金物を打つ、之を器金物と云ふ、札(サネと訓す)鏡又は革にて造れる小さき、札を糸にて織して鏡を造るなり、貞丈雜記に「鏡の札は、割小札なり、割小札はいため革にて札を一つ作りて、編み連ぬるなり、或は薄ききたひかねを札に作りて、革の札と一枚まぜにする、是れを子鏡と云ふ、古書に、がねまぜたる鏡といひ、又一枚まぜの鏡と云ふは、此の事なり、古代の鏡皆割鏡小なり、また割小札は、割小札にせず、一枚にして堅にうね筋を付けて、割小

札を重ね、あみたる體に見せてこしらへたるなり、實は一枚なり、小札を一枚づゝわらぬ故、割小札と云ふ、略儀なり、近代の鏡皆是れなり」と見ゆ、舊は黒塗の割小札なりしが後世は金札、銀札、朱札等多く出来たり、猶委しき事は甲冑製作を見よ、座金物、胸板、逆板、押付板、左右袖の冠板、菱縫板、化粧板等に座金物を打つ、黄金銀或は焼付、眞鍮等にて、草木の花葉、唐草、鳥、蝶、獅子、龍の丸等を彫物透等にして、二所又は三所打つ、胸板は胸金物、器は器金物と云ふ、備用まづ肌の小袖、大口の袴を著し、烏帽子、鉢巻して、弓懸をさし、鏡直垂袴を穿つ、次に腰巾着、袴の裾を括る、次に脇當あて、頬貫をばく、次に脇板、次に右の籠手をさし、左は直垂の袖をまくり、肩の際にて袖括りして、其上に籠手をさす、次に鏡とつて投げかけ、高組、引合の緒を結び、上帯しめて袖巻をさし、太刀佩くを順序とす(原原)天照大神が、素戔嗚尊の高天原に來れるを遊へ給ひし時、其異心あるを疑ひ、武裝し給へること、書紀、古事記等に見えたるは、甲を著し給へるや否やは詳かならず、されど常陸風土記に、經津主神が、國士の經營を奉へて天上に赴く時、甲戈楯等を、常陸に留めおきたることを載せたり、思ふに神代より、これありしなるべし、而して崇神紀十年九月の條に武埴安彦が、大彦命と戦ひし、ことを得て免頭曰「我君、故時人號其脫、甲處、曰「加和羅」とあるを正史に見えたるはじめと爲す、爾來甲のこと紀記に見ゆること多く、古事記應神天皇の條には、また鏡の字を用ひたり、其製詳かならずされども、埴輪の發見によりて形状の一斑を推知するを得べし(ハニヤ)の埴輪參看、續紀、續後紀、三代實錄

等に至り、はじめ綿甲冑、革甲、鐵甲、羊革甲、牛革甲、馬革甲等の名見ゆ、而して續紀寶龜十一年八月の條に「勅、今聞、諸國甲冑、稍經三年序、悉皆澁多不足用、三年一度、立例修理、隨修隨破、極費功役、今革之爲、甲、牢固經久、損、身輕便、申、筋難、貫、計其功程、殊亦易、成、自今以後、諸國所造年報甲冑、皆宜用革、即依前例、每年進、但前造鐵甲、不可徒綱、每經三年、依舊修之」とあれば、其項には、専ら革甲を用ひしめたるを知るべし、なほ今日諸國の古墳より、鐵甲の發見せらるるもの夥なからざるを見れば、鐵甲の用、また廣かりしを何ふに足る、王朝時代の末年、世漸く亂れて武門興起し、戦闘日に行はる、及び、甲の製も著しく進歩し、胸丸、腹巻等を生じ、其名も物具具足などとも稱するに至れり、下りて室町時代の末年、所謂戰國時代に際しては、鏡、腹巻、胸丸等漸く稀にして、胸丸の變形なる具足(脇板、弦走、障子板、樽板、鳩尾板、逆板等なきもの)小具足(鏡を著せず、腰當、籠手等を著けたるもの、雜兵の著用する處)等行はる、江戸時代の末年には、銃砲の製大に進歩したれば、鏡、胸丸等を陣中に著するもの甚だ少く、長州征伐以下、戊辰の諸戰亂のごとき、多くは輕裝のみなりしは、其要なかりしを以てなり、明治以後遂に廢絶せり(續)製作によりて名付くるものに、鏡、腹巻、胸丸、具足、小具足等あり(二)用材によりて名付くるものに、綿甲、革甲(羊、牛、馬、鹿等を用ふ)金鏡、鐵鏡(三)大小によりて名付くるものに、大鏡、小鏡あり(四)織によりて名付くるものに、紅織鏡、緋織鏡、赤織鏡、赤革織鏡等(其他なほ多し)等あり「ハラマキ」「ドウマル」「グソク」「コガソク」「オドシ」參看(書紀、古事記、續紀、續後紀、三代實錄、常陸風土記、延喜

ヨロビライク

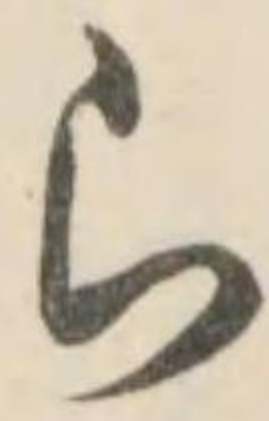
式、本朝軍器考、武家名目抄、軍用記、貞丈雜記、古今要略稿、類聚名物考、國華「本朝武器沿革考」ヨロビシタノコソデ 鏡下小袖 常の小袖と異なる事なし、後世袖細と名づけて袖を筒の如く細くしたるを云ふ、筒手をさすに宜き故なり(中古の袖細は、狩の時に著せし素襖を云ふ手づなも常の如し、後世さがりの兩端に、緒の兩方を縫付けて、其緒のわなを首にかくる様に作りたるもあり、さがりのほづれざらんが爲なり(軍用記))

ヨロビドホシ

鏡通 刀を云ふ、室町時代中葉以後は、専ら九寸五分の短刀を云ひ、又略して九寸五分と云ふ「カタナ」参看(武家名目抄)

ヨロビヒタタレ

鏡直垂 「ヒタタレ」を見よ、



ライカウ

來迎 佛教の淨土門徒が、死するに臨み、極樂淨土より聖衆の來り迎ふるをいふ、善心僧部の往生要集に、極樂淨土に往生する人の十樂を擧ぐる中に、第一に聖衆來迎樂あり、なほ同集に「念佛功積、運心年深之者、臨命終時、大喜自生所以、然者、彌陀如來以本願故一與諸菩薩百千比丘衆、放大光明、皓然在目前一時大觀世音、申百福莊嚴手、擊寶蓮華、至行者前、大勢菩薩、與無量聖衆、同時讚嘆、授手引接云々」と見えたり、

ライクワン

禮冠 朝臣が、禮服(ライフク)に着用する時用ふる冠をいふ、衣服令に禮服冠と

ライク

ありて、五位以上、每位及階、各有別制ことあれども、令中詳しく規定せる處なし、延喜式部式の制は下のごとし「親王」四品以上、并に漆地金裝、水精三顆、琥珀二顆、青玉五顆を以て、冠の頂に交居し、白玉八顆を以て、櫛形の上に立て、紺玉廿顆を以て、前後の押鬘の上に立つ、其徽は、額上に立つ、一品、青龍、尾は上り頭は下り、右に出で左に順たり、二品、朱雀、右に出で左に順たり、三品、白虎、尾は上り末は卷き、頭は下り右に向ふ、四品、玄武、蛇の爲に纏はる、并びに右に出で左に順たり(諸王)二位、漆地金裝、赤玉五顆、綠玉六顆を以て、冠頂に交居し、黒玉八顆を以て、櫛形の上に立て、紺玉廿顆を以て、前後の押鬘の上に立つ、二位、白玉一顆、綠玉五顆を以て、冠頂に交居し、赤玉八顆を以て、櫛形の上に立つ、自餘并に二位に准す、四位、漆地絹結形、櫛形、押鬘、玉の座皆金裝、自餘は銀裝なり、赤玉五顆、綠玉六顆を以て、冠頂に交居し、白玉十顆を以て、前の押鬘の上に立て、青玉十顆を以て、後の押鬘の上に立て、櫛形の上に立て、正五位、漆地銀裝、黒玉十顆を以て、前の押鬘の上に立て、青玉十顆を以て、後の押鬘の上に立つ、自餘四位に准す、其徽は鳳、三位已上は、正位は正立して頭を仰ぎ、從位は正立して頭を低す、正四位上階は、左に出で右に向ひ、下階は右に出で左に向ふ、從四位上階は、左に出で右に順たり、下階は右に出で左に順たり、五位は四位に准す(諸臣)一位、紺玉八顆を以て、櫛形の上に立つ、自餘皆玉一位に准す、玉色交居する事、王臣各異なり、二位、綠玉五顆、白玉三顆、赤黒玉三顆を以て、冠頂に交居し、赤玉八顆を以て、櫛形の上に立つ、自餘一位に准す、三位、黄玉八顆を以

ライサ

て、櫛形の上に立つ、自餘二位に准す、四位、赤玉六顆、綠玉五顆を以て、冠頂に交居す、自餘王四位に准す、五位、綠玉五顆、白玉三顆、赤黒玉三顆を以て、冠頂に交居す、自餘王五位に准す、其徽は麟、正從出で向ふ事、皆諸王に准す、なほ續紀天平十三年十月の條に「勅、五位已上禮冠者、元來官儀賜之、自今以後令私作備ことあれば、最初は朝廷より下賜せられしも、後には私辨せしめたるを知るべし、」(カンムリ)参看(延喜式、歷代服飾考)

ライサンヤウ

賴山陽 賴山陽 名は義、字は子成、通稱は久太郎、山陽、三十六峯外史、梅垞等の號あり(諸王)春水の子、母は飯岡義齋の女静子(梅聰と號す)賴山陽安永元年大阪に生る、天明元年春水が藩主淺野侯の招に應じて藩學の教授となるや、山陽また之に従うて廣島に赴き、天明八年九歳にして藩學に入り、また樂山椿益に就きて長刀を學び、傍ら家學を受く、十二歳の時始めて立志編を作る、是時に當り春水祓役して江戸の藩邸に在り、山陽詩を賦して之に寄す、柴野栗山之を見て大に歎賞して曰く、春水子あり、之をして詞宗たらしめんとせば、宜しく史を讀ましむべし、而して史は通鑑鑑目より始めよと、山陽爲めに感奮し、日々綱目を讀みたりと、只治亂の大體を記すのみならず、栗山聞いて益々これを奇とす、寛政九年江戸に赴き、尾藤二州の塾に入り、また昌平校に遊び、十年廣島に歸る、既にして意に平かならざる事あり、十二年家を脱して京都に走れり、春水大に怒り、人を派して、これを召し歸し、幽室に屏居せしめ、更に廢嫡して、賴春風(春水の弟の子熊吉)を嗣子となす、享和元年幽室に在りて日本外史の稿を起す、三年五月幽居を許さる、會々文化六年菅茶山の請ひに應じて備後神邊に赴き、其

家塾を督したりしが、八年閏二月塾を辭して京都に上り、遂に家塾を立て、業を授く、門に入る者漸く多し、十二年其子餘一、春水の嗣子となる、此年小石元瑠の養女里惠を娶りて後妻と爲す、里惠貞淑にして才學あり、梨影女史と稱し、内助の功多しと稱せらる、文政九年日本外史の副修成り、明年これを松平樂翁に獻す、越えて十二年樂翁爲めに悪言を賜



(集菟掛纂編料史)

ふ、天保元年日本政記の稿を起し、未だ脱せずして疾に罹り、三年九月廿三日歿す、年五十三、京都東山長樂寺の後山に葬る、明治二十四年十二月正四位を贈らる(諸書)日本外史、日本政記、通議、春秋講義、先友錄、山陽文集、山陽詩鈔、山陽遺稿、日本樂府、謝選拾遺(人)後藤松陰、森田節齋、鹽谷岩陰、中島米華、兒玉旗山(山陽行實、近世先哲叢談、家庭の賴山陽)

ライシ

禮紙 名義書狀を人に遺はす場合に、其上を卷きたる紙をいふ、別に一種の紙あるにあらす、即ち書狀を認め、其上を禮紙にて卷くな

ライシ

ライシ

Table with 2 columns: 表 (Tablet), 卷 (Roll). Row 1: 文を著 (Written text), 禮紙 (Ceremonial paper). Row 2: 文を著 (Written text), 禮紙 (Ceremonial paper).

Table with 2 columns: 表 (Tablet), 禮紙 (Ceremonial paper). Row 1: 文を著 (Written text), 禮紙 (Ceremonial paper). Row 2: 表 (Tablet), 卷 (Roll).

り、而して其上を更に別の紙にて包み(表卷といふ)宛名を記すこと、古への書狀の作法なりき、捺り文、腰文、立文等の時に用ふ、また點紙とも稱す(諸書)玉葉文治元年十二月廿七日の條に、源賴朝が藤原兼實に送りし書狀に、禮紙狀と見えたるを始めとす、又拾玉集の詞書にも「禮紙に紅梅の檀紙をしたれば、かくいひつかはす」とあり、爾來引きつゞきて江戸時代まで行はれたり(諸書)七禮紙、五禮紙、三禮紙あり、七禮紙は紙三枚重ねて狀を書き、禮紙二枚、表卷二枚を用ふるをいふ、全體にて七枚の紙なるが故なり、桃華業葉に「晴禮以二枚(裏紙如常)書之、以三枚爲禮紙、其文又加三禮紙一枚以三枚爲立紙初度などは、如此殿重可然云々」とあり、五禮紙は狀一重に書き(二枚紙)禮紙一卷に卷きて表卷一重(二枚)總て五枚を用ひたるをいふ、三禮紙は、狀一枚に書き、禮紙一枚に卷き、表卷一枚を横に折り卷きたるをいふ、七枚禮紙は尤も正式にして、五枚禮紙はや、略に、三枚禮紙は尤も略式なり、なほ小文の禮紙あり、鳥の子または禮紙を三つに切りて調ふるものにして、切り様は左のごとし(書札雜々聞書、貞丈雜記)

ライフク

禮服 朝臣が、即位式、大嘗會、元日節會等の大儀に著用する正裝をいふ、即ち今日の大禮服なり、衣服令に於てはじめてこれを定む、いま歷代服飾考所載の表を修正して左に掲ぐ、

【親王諸王諸臣禮服】

Table of court attire for various ranks. Columns: 冠 (Crown), 衣 (Clothing), 帶 (Belt), 襪 (Socks), 袴 (Breeches), 履 (Shoes), 佩 (Ornament). Rows: 親王 (Prince), 諸王 (Prince), 諸臣 (Official), etc.

【武官禮服】

Table of court attire for military officials. Columns: 冠 (Crown), 衣 (Clothing), 帶 (Belt), 襪 (Socks), 袴 (Breeches), 履 (Shoes), 佩 (Ornament). Rows: 位階 (Rank), 職名 (Title), etc.

ラウヤ

れを世襲し(三百俵を給ふ)小傳馬町獄舎のことを總管し、同心五十八人、下男三十人これに屬す、同心の内鑑役、數役、打役、小頭、世話役、平當番等の諸職あり、牢内には、只に町奉行擔當の罪人のみならず、寺社奉行、勘定奉行の擔當に於ける囚人をも亦收容し、問訊の際各廳へ出したり(備前鎌倉室町の兩時代に、土牢、座敷牢等の名見えたれども、元より制度上のものにあらず、江戸時代には左の數種あり)(一)揚座敷(アガリザシキ(參看)五百石以下、御目見以上の旗本を禁す(五百石以上は預に處したり)(二)揚座敷(アガリヤ(參看)御目見以下の御家人、及び大名旗本の家臣、僧侶等を禁す(三)大牢(四)二間牢(また無宿牢といふ)(五)百姓牢、共に庶民を禁すれども、大牢は戸籍を有する者、二間牢は無宿のもの、百姓牢は農民を入るゝ等の差あり(六)女牢、婦人を禁す、又別に(七)溜(タメ(參看)(八)郡代牢あり、溜は病人、幼者等をおく處、郡代牢は馬喰町代官所支配内の農民をおく處なり、なほ牢にはあらざれど、刑の終りたる後、再犯の恐れある者、又は引受人なきものなどを抑留して役使する爲に、人足寄場(ニンソクヨセバ(參看)の設あり(參看)王朝時代には、左獄は京都近衛の南、西洞院の西にあり、東獄といひ、右獄は中御門の北、堀河の西にあり、西獄といひ、江戸時代には、江戸及び幕府の各直轄地、并に諸藩毎にあり、江戸にては、小傳馬町にありて、惣坪數三百八十六坪餘、外廻り、總練屏なり、種類の條に述べたる(一)より(六)に至る諸牢は皆、の内に入り、溜は淺草、品川の兩所に、郡代牢は本所に、人足寄場は佃島にあり(制)王朝時代の制は、囚人を禁するに、死罪は枷(カビカシ(參看)粗(アサカシ(參看)を加へ、流罪以下は粗を去り、杖罪は

ラウヤ

散禁す、散禁は刑具を加へずして禁するをいふ(サキヤン(參看)應議請減者(「オウ」ギ「セイ」ゲン)參看)及び初位以上の外は皆巾を脱す、又長禁あり、終身禁獄するをいふ、後世には禁獄を以て一の刑名となしたり、凡そ五位以上囚獄の罪を犯せる時は、在京の者はまづ奏して後これを禁じ、もし死罪を犯せるか、又は京外にある者は、まづ禁じて後にこれを奏す、共に六位以下の者と、其居る所を異にす、婦人にして五位以上を帶する者亦同じ、而して婦人は男子と別處せしめ、産月に臨める者は、保を責めて出づることを許し、産後またこれを禁す、囚人には孰れも官より、席薦衣食を給し、疾病ある者は醫藥を給し、殊に重きは枷粗等を脱し、且その家族一人禁内に入りて、看待することを許したり、また囚人を巡檢して、安置等の不法を糾すことあり、在京は彈正月別に獄舎を巡行し、安置役使の、法のごとくならざるあらば、事に隨つて糺彈し、囚獄司當直の官人は、恒に物部井に物部丁を將ゐて毎夜巡檢し、京外は當處の長次官、十五日に一度檢行す、其囚久しく禁せられて、推問せられざるがこときとあらば、即ちこれを斷決す、鎌倉室町兩時代等は、皆制度として語るべきなし、江戸時代傳馬町の牢屋の制によれば、まづ入牢者ある時は、改番所にて鍵役罪人を審問し、姓名、年齢、肩書等、入牢證文と相違なきかを確めたる上、更に衣服を脱せしめて、懐中を檢し、金銀、刀物、書籍、火道具等、制禁の品を持參せるや否やを改め、然る後入牢せしむ、多くは夕刻に於てし、白晝は稀なりといふ、囚人には疊を與へて、これを敷かして、衣類は毎年五月九月の兩度に給與し、食物は朝夕の二度にして、汁と菜とを添へたり、行水は一箇月に數度行はしめ、月代は毎年七月十二月

ラウヤ

の兩度に行ふ制なれども、牢名主等は一箇月に一回行ふを許されたり、もし疾病に罹れる者ある時は、醫師をして診察せしめて藥を與へ、或は溜にて加養せしめ、或は親族等の請により、私宅にて療養せしむる等必ずしも一ならず、かくて死亡せば、罪の輕重を以て、或は鹽詰にし、或は取捨、或は非人をして取片付しむ、囚禁の具には手鎖、ホタ等あり、手鎖は手を禁し、ホタは足を禁す、もし牢舎火事に逢へば、囚人を放釋し、避難の後三日を期して更に預定の所に集らしむ、歸り來れる者は其刑を減じ、歸らざる者は刑を重くする定めなりき、牢舎は牢番ありて、一日一夜の交代にて、これを勤め、夜間は夜廻りをおきて警戒せしめ、又毎日一度づゝ晝夜の別なく、時刻を定めずして、御徒目付見廻りのことあり、罪囚のうちにて、上申、自白等せんとするあらば、此際見廻りの目付に告げしめ、目付は受理すべきものは、受理して其處分を請じたり、牢内改は、また牢改とも稱し、月に四五回、囚獄石出帶刀、見廻り同心、牢屋同心、鎗役、平當番等を從へて牢内を巡視し、罪囚一同を外稍に移し、平當番、張番をして牢内に入り、禁制の品若しくは破損所等の有無を檢せしむるをいへり、又刑の種類には、過急牢、永牢、揚座敷入、揚屋入等あり、過急牢は、本刑に代用して牢舎せしむるをいふ、假令は婦人又は幼少の者にして、敵の刑(もしくは附加刑)に相當せる博奕、盜賊等の罪を犯したる時、これに代へて入牢せしむるなり、永牢は終身牢舎に禁するをいひ、揚座敷入は揚座敷へ、揚屋入は揚屋へ入牢せしむるをいふ、○牢内は、夜中一點の燈火もなく眞の暗黒にして、入牢するを暗き處に入れらるゝといふもこれに由るなるべし、牢内にて囚人病に罹り、他囚の邪覽となりし者、又は

ラウヤ

ラウヤ

ラウヤ

ラウヤ

囚人仲間にも悪まれし者は、夜陰これを暗殺することも行はれたり、其法は、當人を落ち間に押伏せ、口に手拭又は衣服等を突込みて、呼吸の出來ざる様にし、一人其上に跨がり、胸落の處へ尻餅をつくなり、或は蒲團にて包み、倒に立ておきて殺すこともありき、囚人の中に、名主、添役、角役、二番役、三番役、四番役、五番役、本役、本役助、詰之番、同助番等あり、これを牢役人といふ、名主は囚人の中より撰拔(重罪の者を除く)して任命し、他は名主の指名に委ねたり、なほ役人の外、隅の隠居(もと入牢して名主を勤め、牢法等心得ある者より命ず)ツメの隠居、穴の隠居、客分(又客座ともいふ、名主もしくは牢役人に兼ねて知己あるか、又は多くの金錢等を持ち來れる者にして、聊か寛かなる様、普通の囚人と別處に置きたり)等の名あり、いづれも牢内の私稱とす、凡囚人新たに入牢する時は、ツルと稱し、金銀を土産として持參す、衣服などに縫ひ込むもあれど、露見の恐れあれば、多くは腹中に呑み込み、入牢の後便を流せば、三日目位にて出づるよしなり、名主及び牢役人等の所得とす、またキメ板と稱する板、或は雪隠の蓋(詰蓋といふ)にて、新入の囚人を打つことあり、其他種々の弊風盛んに行はれたりき、なほ刃物類は制禁なれど、名主は小刀、銃、毛拔等を所持し、酒煙草をも密かに飲用せり、これらはいづれも、牢番同心の下男、及び非人等に依頼して購求したり(書紀、令義解、拾芥抄、大内裡圖考證、牢獄秘録、公裁秘録、明良帶錄、南撰要集、牢屋秘事録、御仕置類例集、徳川禁令考後聚、徳川幕府刑事圖譜、古事類苑法律部)

散禁す、散禁は刑具を加へずして禁するをいふ(サキヤン(參看)應議請減者(「オウ」ギ「セイ」ゲン)參看)及び初位以上の外は皆巾を脱す、又長禁あり、終身禁獄するをいふ、後世には禁獄を以て一の刑名となしたり、凡そ五位以上囚獄の罪を犯せる時は、在京の者はまづ奏して後これを禁じ、もし死罪を犯せるか、又は京外にある者は、まづ禁じて後にこれを奏す、共に六位以下の者と、其居る所を異にす、婦人にして五位以上を帶する者亦同じ、而して婦人は男子と別處せしめ、産月に臨める者は、保を責めて出づることを許し、産後またこれを禁す、囚人には孰れも官より、席薦衣食を給し、疾病ある者は醫藥を給し、殊に重きは枷粗等を脱し、且その家族一人禁内に入りて、看待することを許したり、また囚人を巡檢して、安置等の不法を糾すことあり、在京は彈正月別に獄舎を巡行し、安置役使の、法のごとくならざるあらば、事に隨つて糺彈し、囚獄司當直の官人は、恒に物部井に物部丁を將ゐて毎夜巡檢し、京外は當處の長次官、十五日に一度檢行す、其囚久しく禁せられて、推問せられざるがこときとあらば、即ちこれを斷決す、鎌倉室町兩時代等は、皆制度として語るべきなし、江戸時代傳馬町の牢屋の制によれば、まづ入牢者ある時は、改番所にて鍵役罪人を審問し、姓名、年齢、肩書等、入牢證文と相違なきかを確めたる上、更に衣服を脱せしめて、懐中を檢し、金銀、刀物、書籍、火道具等、制禁の品を持參せるや否やを改め、然る後入牢せしむ、多くは夕刻に於てし、白晝は稀なりといふ、囚人には疊を與へて、これを敷かして、衣類は毎年五月九月の兩度に給與し、食物は朝夕の二度にして、汁と菜とを添へたり、行水は一箇月に數度行はしめ、月代は毎年七月十二月

の兩度に行ふ制なれども、牢名主等は一箇月に一回行ふを許されたり、もし疾病に罹れる者ある時は、醫師をして診察せしめて藥を與へ、或は溜にて加養せしめ、或は親族等の請により、私宅にて療養せしむる等必ずしも一ならず、かくて死亡せば、罪の輕重を以て、或は鹽詰にし、或は取捨、或は非人をして取片付しむ、囚禁の具には手鎖、ホタ等あり、手鎖は手を禁し、ホタは足を禁す、もし牢舎火事に逢へば、囚人を放釋し、避難の後三日を期して更に預定の所に集らしむ、歸り來れる者は其刑を減じ、歸らざる者は刑を重くする定めなりき、牢舎は牢番ありて、一日一夜の交代にて、これを勤め、夜間は夜廻りをおきて警戒せしめ、又毎日一度づゝ晝夜の別なく、時刻を定めずして、御徒目付見廻りのことあり、罪囚のうちにて、上申、自白等せんとするあらば、此際見廻りの目付に告げしめ、目付は受理すべきものは、受理して其處分を請じたり、牢内改は、また牢改とも稱し、月に四五回、囚獄石出帶刀、見廻り同心、牢屋同心、鎗役、平當番等を從へて牢内を巡視し、罪囚一同を外稍に移し、平當番、張番をして牢内に入り、禁制の品若しくは破損所等の有無を檢せしむるをいへり、又刑の種類には、過急牢、永牢、揚座敷入、揚屋入等あり、過急牢は、本刑に代用して牢舎せしむるをいふ、假令は婦人又は幼少の者にして、敵の刑(もしくは附加刑)に相當せる博奕、盜賊等の罪を犯したる時、これに代へて入牢せしむるなり、永牢は終身牢舎に禁するをいひ、揚座敷入は揚座敷へ、揚屋入は揚屋へ入牢せしむるをいふ、○牢内は、夜中一點の燈火もなく眞の暗黒にして、入牢するを暗き處に入れらるゝといふもこれに由るなるべし、牢内にて囚人病に罹り、他囚の邪覽となりし者、又は

ランガ

を出し、其柄に螺鈿を施して誇るに至れり、其後藤原頼通は、宇治鳳凰堂の格天井、また須彌壇などに、螺鈿を嵌入し、陸奥の押領使藤原清衡は、中尊寺の室内(金色堂)を平座にして、螺鈿を嵌入したりき、かくの如く衣服家屋等の裝飾にまで、螺鈿を賞翫せしかば、蒔繪師と共に、貝摺とてこれを專業とする者あるに至る。正和四年朝廷近江國日吉社を造營せる時、螺鈿の貝摺工は、安弘、景長にして、井に當時における妙手なりき、下りて慶長年間及び、印籠の流行するや、また漆塗りにして、螺鈿嵌したりしが、元和年間、長崎に生島藤七某といふものあり、螺鈿を嵌装するの巧手として名聲高く、弟子野澤左衛門某も亦巧なりき、なほ同所の長兵衛某といへるもの此技に長し、殊に青貝(蛸貝)を以て、漆器に嵌装する事をよくせり、是より先螺鈿は、みな鸚鵡螺、及び薩摩の夜久島に産する青螺を嵌入せしを、並に至り長兵衛巧を支那人に受け、青貝を用ふ、世に青貝長兵衛といへり、爾來世俗此器を青貝細工、青貝摺など、稱す、元禄年間京師に、伊兵衛、四郎兵衛、彌兵衛、半三郎等の工人ありて、いづれもこれをよくしたり、これより後京都、江戸、大阪、長崎等の工人業を傳へて今に至る(工藝志料、日本工業史)。

ランガク

蘭語を著し、品詞語格の事を論述す、これを西洋文法書の始とす、これより後、文政九年青地林宗、氣海觀瀾を譯して、理學を開き、天保十年宇田川榕庵、舍密開宗を著し、化學を唱へ、其他高野長英、平賀鳩溪等出で、盛んに、これを講習し、醫學、曆學、兵學、本草學、其他の諸科學大に開くるに至りしが、幕府にては、なほ之を喜ばざるの傾向あり、天保十一年天文方に令し、翻譯したる曆書醫書天文書を、世上に傳播せざらしめたり、既にして安政元年日米和親條約を締結せるより後、外國との關係日に親密を加へしかば、必要上外籍を講ずるの急務ありしがゆゑ、蘭書を研究するもの次第に多かりしが、當時また既に英學を講ずるものあり、幕府亡びて明治新政府成るや、主として智識を英米に仰きたるより、蘭學遂に衰へ、今日に至りては、殆んど、これを讀むものなきの有様となれり(徳川實紀、蘭學楷梯、蘭學事始、日本教育史、史學雜誌、和蘭字典文字の譯述起原)。

ランケイ

蘭奢待 名義名香の名、木質は伽羅(沈香の最上なるもの)にして、所謂十種の名香の一なり、古來より御物として、東大寺正倉院に藏す、本名を黄熟香といひ、また東大寺といふ、東大寺といへるは、東大寺に傳來せるよりの名なり、而して蘭奢待の名は、東大寺の隱語なりといへり(蘭の字に東あり、奢の字に大あり、待の字に寺あり)或は然らん、要するに東大寺、蘭奢待、共に後世香道家の附したる名なりとす(蘭の朽木形にして末細く、本太く、胴部の方は空堀なり、長さ五尺一寸、木口周三尺九寸、中周二尺七寸三分、末口周四寸、重量三貫五百目)蘭香道今按には、聖武皇帝、漢朝より献す、帝崩御之後、一切之勅遺物、依

ランシャタイ

蘭奢待 名義名香の名、木質は伽羅(沈香の最上なるもの)にして、所謂十種の名香の一なり、古來より御物として、東大寺正倉院に藏す、本名を黄熟香といひ、また東大寺といふ、東大寺といへるは、東大寺に傳來せるよりの名なり、而して蘭奢待の名は、東大寺の隱語なりといへり(蘭の字に東あり、奢の字に大あり、待の字に寺あり)或は然らん、要するに東大寺、蘭奢待、共に後世香道家の附したる名なりとす(蘭の朽木形にして末細く、本太く、胴部の方は空堀なり、長さ五尺一寸、木口周三尺九寸、中周二尺七寸三分、末口周四寸、重量三貫五百目)蘭香道今按には、聖武皇帝、漢朝より献す、帝崩御之後、一切之勅遺物、依

ランケ

ランジ

ランガ

れば、必要上、通詞の職をおきたり、されど通詞の職にあるものと雖も、典籍に就きて文字を學ぶにあらず、只假名の書留までにて、口づから記憶するに過ぎざるものなりき、會々長崎の人西川如見あり、元禄年中華夷通商考を著して海外の形勢を述べ、正徳年中には新井白石蘭人に就き、幕府藏する所の奥地圖に據り、各國の形勢を論じ、萬國の地理を述べて、采覽異言を著す等のことありしと雖、蘭籍講究の學未だ開くるに至らざりしが、八代將軍徳川吉宗、天文曆學を好み、和漢の書を披讀し、且つ中根玄圭に命じ、曆算全書を翻譯せしむ、其説く所大に理を盡したりと雖、もと蘭書の譯本なるを聞き、はじめて西洋學理の精緻なるに感ぜり、玄圭また早くよりこれに注意したるが故に、蘭書閉讀の禁を解かん事を吉宗に上申せり、吉宗以て然りとし、而して未だ其意を果さず、會々在長崎の和蘭通詞西善三郎、吉雄幸作、水木庄左衛門等封事を上り、通詞の職にあるもの、只詞を暗誦して僅かに用を辨するのみ、勢ひ精なること能はず、希はくは、通詞に限りて外書閱讀の禁を免ぜられたしと請ふに及び、遂に意を決し、宗教に關する書を除くの外は、洋學解禁の令を發す、時に享保五年なりき、既にして吉宗船載の外籍を見、其圖の精緻なるに驚き、もし此文をも讀み得ば、世を益する事尠なからざるべしとて、青木昆陽に命じ、毎年江戸に參觀する和蘭の甲比丹に就いて之を學ばしめ、延享元年更に長崎に遣はし、通詞及び蘭人に就きて講習せしめたり、これを蘭學の起原と爲す、是に於て昆陽、單語四百餘言を習ひ得、文字の體制、言語の呼法、語路の意味等を略々了解し、和蘭語譯、和蘭文字略考等の著あり、また西善三郎は、佛人ヒートル、マールンの蘭佛對譯辭書により、

ランシャタイ

蘭奢待 名義名香の名、木質は伽羅(沈香の最上なるもの)にして、所謂十種の名香の一なり、古來より御物として、東大寺正倉院に藏す、本名を黄熟香といひ、また東大寺といふ、東大寺といへるは、東大寺に傳來せるよりの名なり、而して蘭奢待の名は、東大寺の隱語なりといへり(蘭の字に東あり、奢の字に大あり、待の字に寺あり)或は然らん、要するに東大寺、蘭奢待、共に後世香道家の附したる名なりとす(蘭の朽木形にして末細く、本太く、胴部の方は空堀なり、長さ五尺一寸、木口周三尺九寸、中周二尺七寸三分、末口周四寸、重量三貫五百目)蘭香道今按には、聖武皇帝、漢朝より献す、帝崩御之後、一切之勅遺物、依

ランバ

ランバ

ランガ

蘭和辭書を編せんとし、稿を起したりしも、之を果さざりき、尋で中津藩の醫前野良澤あり、業を昆陽に受け、明和五六年の間に長崎に遊學し、和蘭譯文略、蘭譯箋、助語參考等を著す、同時に小濱藩の醫杉田玄白、幕府の醫桂川甫周あり、良澤と同じく此書を研究し、相共に蘭人著はす所の人身内景圖説を譯し、名づけて解體新書と名づく、安永三年に出版せり、これ蘭書翻譯の始なり、世に白石、昆陽、良澤、玄白を以て蘭學の四大家と爲す、尋で仙臺藩の醫大槻玄澤、玄白及び良澤に學び、天明八年和蘭の綴字讀法語法等を記し、蘭學階梯と題して出版せり、これ蘭字を開版せる始と爲す、世人これを見て、外籍の讀まば讀まるべきを知り、志を起すもの多し、寛永八年に至り稻村三伯(後ち海上隨鸞といふ)佛人ソランソイツ、ハルマの蘭佛對譯辭書を譯し(對譯の佛語を除き、蘭語に和語を附したるものなれば、ハルマ氏とは全く縁故を有せざるに至りしも、當時ハルマの語は、人名の原意を失せて、辭書といふ意に用ひられしがごとし)東西韻會と名けしが、通例ハルマ和訳と呼ばれたり、これを蘭和對譯辭書の起原と爲す、尋で文化七年其門人藤林泰輔、ハルマ和訳を抜粹して譯註と題し、活版にて百部限り刊行せり、即ち辭書出版の嚆矢なり、翌八年幕府新に翻譯局を江戸淺草天文臺中におき、大槻玄澤等をしてこれを掌らしむ、幕府が洋學の爲に局を開く事、これをはじめて爲す、十三年に至り、和蘭甲比丹ヘンテレキ、ドーフ、通詞吉雄權之輔、中山將十郎等數人と謀り、ハルマの對譯辭書を取捨増減して、新に蘭和辭書を造る、ゾーフ、ハルマと名づく(ゾーフまたゾーフとも發音するが故なり)因て世にハルマ和訳を江戸ハルマ、ゾーフハルマを長崎ハルマと稱したり、此年玄澤、蘭

ランバ

蘭奢待 名義名香の名、木質は伽羅(沈香の最上なるもの)にして、所謂十種の名香の一なり、古來より御物として、東大寺正倉院に藏す、本名を黄熟香といひ、また東大寺といふ、東大寺といへるは、東大寺に傳來せるよりの名なり、而して蘭奢待の名は、東大寺の隱語なりといへり(蘭の字に東あり、奢の字に大あり、待の字に寺あり)或は然らん、要するに東大寺、蘭奢待、共に後世香道家の附したる名なりとす(蘭の朽木形にして末細く、本太く、胴部の方は空堀なり、長さ五尺一寸、木口周三尺九寸、中周二尺七寸三分、末口周四寸、重量三貫五百目)蘭香道今按には、聖武皇帝、漢朝より献す、帝崩御之後、一切之勅遺物、依

ランバ

ランバ



ランバ

ランバ

は、五十戸の外なほ別に十戸以上あらば、一里を立
て、里長をおき、十月に満たざる時は、疎して大
村に入る、大化の時其規定あらざりしも、恐らくは、
また此の定めなりしならん、なほ郡の編成は、廿里
以下十六里以上を大郡、十二里以上を上郡、八里以
上を中郡、四里以上を下郡、二里以上を小郡となし
たり(「コホリ」參看)後ち里の稱を改めて郷と稱す
(「カウ」參看)これより郷の下に、更に里をおきたる
處あり、後世の村と同じものなり(二)條(テウ)の條
に述べたれば就きて見るべし(三)令の制五尺を歩と
なし、三百歩を里となすとあり、尋で和銅六年十二
月の格には、地を度るには六尺を以て歩となすとあれ
ど、令の五尺は高麗尺を以て度り、格の六尺は大尺を
以て度るものなれば、實際に於ては異なる所なきな
り、而して令の文中、及び風土記、延喜式、本朝文粹
等に載する所の里程は、皆これに據りたるものにし
て、後世六町を以て一里となしたるものなり、なほ拾
芥抄にも六町を一里と爲すと記したれば、室町時代
の初期は、此制たりしを知るべし、而して里程を算す
るに町を以てすることも、古きよりのことにして、扶
桑略記、天延四年正月晦日の條には五六町、治安三年
十月十七日の條には五十町、康平五年九月五日の條
には卅餘町など見え、また後冷泉院高野詣記には六
十町、古事談には三十六町、吾妻鏡安貞二年十二月十
二日の條には二十餘町とあり、蓋し平安朝時代の末
葉よりは、近距離を算ふるに、多く町を以てしたる
ものならん、而して所謂町といふは、田制より出で
たるものにして、即ち長さ六十歩なるべし、かくの
ごとく或は里を以て記し、或は町を以て記したるし
も、未だ町を重ねて里となすの制は行はれざりし
が、長門本平家物語兵庫島の條に、はじめて「畑よ

リウキ

リウキ 一里卅六町築き出したり云々と見えたり、武
家時代に入るに及び、六町一里の古制と共に、三十
六町、四十町、四十八町、五十町、六十町等を一里
となすと並び行はる、蓋し三十六町を一里と爲すと
は、田制に準據したるものなるを先輩既に其説あり、
其制何時に始まりしか詳かならざれど、行基式目
に之を載せたり、されど同書は偽書なるがゆゑに用
ひ難し、尋で太平記に「千劍破城の山圍り一里に餘れ
る大山なれば」とあるは、三十六町の一里なるべく、
また東大寺造供養記にも、三十六町を以て一里と爲
したり、以て鎌倉時代には既に之を用ひたりしを知
るべし(高野山にある勝示の石は、文中中設けしもの
にして、登山には町を以て數へ、下山には里を以て
數へたるが、里は皆三十六町の積りなり)また五十町
を以て一里とするも、起原詳かならざれど、室町
時代には、其制ありしといへり、江戸時代に至り、慶
長九年諸國に令して一里塚(イチリヅカ)參看)を築
くや、皆三十六町を以て一里と爲さしめたり、但し此
時築きたるは、東海東山北陸の三道に留りたれば、
其他に至りては、此制に従はざりしもあり、現に左
渡の如き、後世まで五十町一里の制なりき(或は關
東奥羽にて三十六町を一里とするは、豊臣秀吉の時
に始まるもといへり)また伊勢路は四十八町を、山
陽道は七十二町を一里としたりといふ、明治九年三
十六町を一里と爲すことを規定し、全國始めて統一
に歸す(令義解、佐州年表、新編常陸國誌、合類節用
集、和漢三才圖會、參考太平記、縣志、皇典講究所
講演「里程の事」、大日本史料)

リウキ

柳營 將軍の居所を云ふ、漢文帝
の時匈奴大に邊境に寇すことありしに、周亞父將軍
として細柳に陣營す、文帝これを巡視して、軍令の

リウキ

よく整ひたるを感惑ありし故事によりて名づく、柳
は細柳の柳、營は陣屋を云ふなり、又營中とも云ふ、
柳營中の略なり、吾妻鏡建久六年十一月十九日相模
國大日堂に佛聖燈油料を充てたる條に「誠任三禮那
誓約、令三專三柳營護持、給敷之由、有御沙汰云々」と
見たり、

琉球 薩摩の南洋中に在る
群島の總稱にして、北緯二十四度より二十八度四十
分に至り、東經百二十二度五分より、百卅二度十
分に至り、西は清國の福建泉州に對し、西南は台灣
島に接し、東西は太平洋に連る、本島を沖繩島と稱
し、首府を首里といふ、國王の居りし所なり、伊平屋
島等の十七小島ありて之に屬す(名義)琉球、流鬼、留
仇、流虬、龍虬、瓊求とも書す、名の義に關して諸説あ
り、雖も詳かならず、なほ沖繩は本來オケナラと稱
したりしが、伊知地貞馨が、沖繩志を編する及び、始
めて沖繩の文字を宛てしより、遂に一般に用ひらる
に至れり、また龍宮の傳説を以て、沖繩を指すも
のとし、説を立つるものあれども、確かならず(出典)
開國の初め、一男一女あり、志仁禮久、阿摩彌姑と
いふ、また一人あり天帝子と稱す、三男二女を生む、
長男を天孫氏と爲す、國君の始にして、次男は按司
の始、三男は百姓の始、長女は君々の始、次女は祝
の始となり、倫道是に始まれり、按司は彼
地の諸侯にして、王の一門系族より成り、君は貴族
の婦女の神職を掌るものにして、近代は開得大君
(王の母公)より任ぜし所なりといひ、祝は村々の神
事を掌る婦女にして、方言に「ロコモイ」と稱す、天孫
氏統治の間、國を島尻(山南)中頭(中山)國頭(山北
に分ち、都城を中頭の首里に建て、毎郡の按司を定
む、而して日支兩國に於ける關係亦早くより史籍に

見ゆ、即ち隋の大業三年(推古天皇十五年)朱寬に命
じ、海に入りて異俗を訪はしめし時、始めて沖繩に至
り一人を掠めて歸り、明年煬帝再び朱寬を遣はして、
琉球を招諭せしと雖従はざりしかば、寬即ち其布甲
を取りて歸れり、同六年(推古天皇十八年)に至り隋
將陳陵、張鎮等郡府に迫り、宮室を燒き男女數千人を
虜にして凱旋す、而して其日本に通じたるは何年な
りしか詳かならざれども、我國にて古へ按改又は多
福といへるは、單に按改多福の二島を指すのみなら
ず、又南島諸國の概稱に用ひたりしこと、先賢既に
其説あり、蓋し海路由る所の島名を以て、諸島に蒙
らしめしものにして、沖繩の如き、また其中に含ま
れたりしなり、推古天皇廿四年按改人歸化し、白鳳六
年多福島の入等を、飛鳥寺の西樓の下に饗したりし
より以來、按改多福の人にして歸化また漂着し、我國
人にして、朝命を奉じて彼地に使し、または漂着せる
等の事實多し、而して文武天皇二年には、多福、按改、
奄美、度麻等の諸島入貢す、南島入貢のこと始めて茲
に見ゆ、また天平勝寶五年に遣唐大使藤原清河、副
使大伴古鷹等歸國の途に阿兒奈波島に漂着せり、阿
兒奈波は即ち沖繩にして、實に國名の初見なり、なほ
琉球の文字は今昔物語に、留求の文字は性靈集に見
えられたれば、我國にて琉球と稱したることも、古き
あるを知るべし、これより先源爲朝伊豆大島に流さ
れしが、密に遁れて南島を経略し、沖繩島を征服し
大里按司の妹を娶り、尊教を生む、後爲朝は大島
に歸りしが、尊教は琉球に留まり、衆に推されて浦添
按司と爲る(爲朝が琉球侵略のことは、保元物語に
鬼が島征服のことあるを初見とし、中山傳信録、中
山世譜、琉球神道記に見え、また琉球の古語オモ
にもこれを傳ふ、いまだ之を斷じ難しと雖も、新井

リウキ

白石、伴信友、飯田忠彦等の先哲及び幣原博士、平出
櫻二郎氏等は、皆以て事實と認めたり、當時の事情并
に琉球の傳説等を參酌するに、蓋し眞なるべし、此
時に當り天孫氏は二十五世に當り、漸く衰運に向ひ
しが、文治三年(我國の年號なり、以下同じ)權臣利勇
の爲めに弑せらる、や、尊教義を唱へて之を誅し、遂
に王位に昇る、舜天王、これなり、此歳島津忠久、薩
隅日三州守護職及び南海十二島の地頭に補せられ子
孫世襲せり、然れども島津氏の勢力未だ沖繩に達せ
ず、何等の事蹟をも傳へざるなり、舜天の孫義本の
時に至り、位を英祖に讓る、英祖王は天孫氏の裔な
り、正應五年(元の至元二十九年)元主忽必烈、楊祥、
吳志斗等に命じ、琉球に赴きて招諭せしめし、英祖
王之に應ぜず、後重れて招諭したれども、遂に従は
ざりき、既に四世玉城王の時、國內漸く亂れ、大
里按司承察度、今歸仁按司伯尼芝等各々自立し、承
察度は島尾地方に據りて山南王と僭稱し、伯尼芝は
國頭地方に據りて山北王と僭稱せるがゆゑに、玉城
王は中頭地方のみを保ち、稱して中山王といふ、玉
城王の子西威卒するや、國勢益々衰へしを以て、諸
按司相謀り、浦添按司察度を立て、中山王と爲す、
實に延元二年なり、然れども察度王は、山南北北の
二王國と對峙するの困難なるを思ひ、文中元年(明
の洪武五年)明主朱元璋の招諭あるに及び、明年使
を明に遣り、表を奉りて臣と稱し、方物を獻す、琉
球の支那に通ずる事茲に始まり、爾來朝貢の事絶え
ざりき、弘和三年に至り、山南北北の兩王、また明に
通じて臣と稱す、應永十一年(明の永樂二年)明主
察度の子武寧を封じて中山王と爲し、封冊使を遣り
て冊文を授く、封冊使にはじまり、爾來例となり、
天使館を那覇の東村に建つ、應永十二年(明の永樂

リウキ

三年)に及び佐敷按司巴志兵を擧げて、中山王武寧
を亡し、恩紹を推して中山王と爲し、自ら實權を
握る、二十三年(永樂十四年)山北王榮安知を斃し、
二十九年(永樂二十年)父に嗣で立ち、永享元年(明
の宣德四年)山南王佐魯魯を滅し琉球を統一す、明
年明主宣宗、尙姓を授く、是より尙氏を稱す、之よ
り先應永二十二年、巴志使を我國に贈りしことあ
り、尋で永享四年、明の宣宗は、巴志を介して我國
の通聘を促したれば、巴志また使を發して京都に至
り方物を貢し、明主の論文を將軍足利義教に致す、
これより琉球は時々我國に入貢し、且つ兵庫に來り
て貿易を試みたりき、嘉吉元年將軍足利義教、島津
忠國に琉球國を賜ふ、蓋し鎌倉の先蹤に従ふなり、文
明元年中山王尙德卒し、嗣子なほ幼なり、國人これ
に服せず、明年尙圓を推戴して中山王となす、尙圓
は義本(舜天の孫)の後胤なり、(或はいふ天孫氏の
裔)是に於て巴志の統絶ゆ、二年泉州界の船琉球に通
航するを以て、將軍足利義政、書を島津立久に賜ひ、
他國船の琉球に往來するを禁じ、且諭して來聘せし
む、四年正月立久使を琉球に遣りて其來聘を促した
れば、二月尙圓始めて薩摩に聘問せり、十二年幕府
命を島津忠昌に傳へ、中山王に諭し、先例に照して
速に貢船を發し、使の回るに後ること勿れと達し
たり、後ち度々薩摩には來聘し、或は安否を問ひ或
は襲封を賀したりき、既にして豊臣秀吉の明朝鮮を
討たんとするや、島津義久に命じ、兵賦を琉球に徴
せしむ、琉球怨望し、これより益々明に親しみ、漸
く我國に疎なり、徳川家康の天下を統一するに際し、
義久屢々琉球に諭し、江戸に朝せんことを以てせり
と雖、これに應ぜざる而已ならず、其使者を辱むる
に至りしかば、慶長十三年、島津家久は、幕府に請う

リウキ

琉球を征し、國王尙寧を擒す、是に於て十五年島津義久は、沖繩及び諸島を檢地して、貢物の納額を定め、且つ在番奉行を沖繩におきて、諸事を監理檢察せしめ、また琉球の屬島たりし大島、徳之島、喜界島、沖永良部島、與論島を薩摩の直轄とし、且つ二按司を質として薩摩におく、鹿兒島在番これなり、尋で元和三年尙寧子なくして嗣定まらざるに當り、家久、尙豊を立て、王と爲したるより、繼嗣毎に島津氏の准許を得る事となり、また將軍家に對しても恩謝地を遣り、なほ將軍の代替り、其他の慶賀には、慶賀使を派遣するも流例となり、全く薩摩の附庸たるに至りしと雖、然も中山王が、明の封冊を受けて彼地に入貢することは、舊によりて異ならず、島津氏もまた之を默許し、却て琉球を介して明と貿易を試むるの便に供したり、而して琉球より貢物を載せて支那に赴く船を運官船、支那より冊封使を載せて琉球に来る船を冠船と稱し、冠船の琉球に渡來するの際に、薩摩より出張する吏員は、國頭即ち山原に退隱して之を避けたりといふ、清の代に至りては、關係は同じかりき、故に琉球は形式上日支兩國の委たりしのみならず、我國人は多く之を外國視せり、大日本史、野史のとき、之を外國傳に載せたるを以ても、推知するを得べし、かくて嘉永六年に至り、米國水師提督ペリーは、那覇に寄港し、強て和親條約を締結したりしが、安政元年には、佛蘭西、同五年には和蘭とも之を締結し、恰も半獨立國のごとくなりき、明治四年薩藩の所轄を離れて鹿兒島縣に屬したりしが、五年琉球を以て藩とし、尙泰を藩王となし、華族に列し、且つ嘗て米佛蘭と締結せる條約は、政府の條約となし、外務省より管理すべきの命あり、八年清國に入貢し、慶賀使を派し、冊封を受くる等の

リウター

事を禁じ、明治の年號を奉ぜしめ、十二年藩を廢して沖繩縣となし、尙泰に上京を命じ、縣知事をして之を統治せしむ、尙氏(シヤウウヤ)參看(南島志、五事略、野史、沖繩誌、南島沿革史論)

リウビ

にて、板石條石を以て築成し、中央二十丈の間朱欄を設け、其東西石階各八丈、階を踏くる三級、二樓に當り又朱欄を設くる各々四丈、東西步廊に接し、又石階あり、各四丈なり○唐の含元殿の制に倣ひしものにて、淵鑑類函居處部に、「泊宅編、唐含元殿前龍尾道、凡詰曲七轉、由丹鳳門北望、龍尾下垂於地、こゝとあるに據る、然れど其形狀異なり(大内裏圖考證、平安通志)

リウタン

龍膽 襲の色目の名、表蘇芳、裏蒨木なるものを云ふ、藻鹽草には、表渡花田、裏紫なりともいへり、夏季之を著用す、カサネノイロメシの挿繪參看、

リウツゲキスノフネ

龍頭鶴首船 船首に龍の頭または鶴(鳥の名)首を彫みて附したるものを云ふ、龍頭船、鶴首船の二つを併稱したるものなり、一説に龍の紋を飾りとし、鶴首を軸先に著けたる船を言ふともいへり、龍はよく水を渡り、鶴はよく飛びて風に耐ふるものなる故にこれを附くと云ふ、各屋形ありて、天皇の御座船なり、准南子に「龍舟、各屋形ありて、此通於水也」とありて、註に「龍舟大舟也、刻爲龍文、以爲飾也、鶴大鳥也、畫其象、著船頭、故曰鶴首、舟中吹簫與琴以爲樂、文選西都賦に「於是命舟牧、爲水嬉、浮鶴首、擊雲芝」とありて、註に「薛綜曰、船頭象鶴首、厭水神、故天子乘之、など見えたり我邦にて之を用ひし始め詳かならず、平安朝時代には盛んに之を用ひし、源氏物語にてふ巻に「龍頭鶴首を、からのよそひに、こゝろくしうしつらひて云々」と見え、其他榮花物語、増鏡などにも見たり、

リウビン

龍鬚 龍草にて織りたる簾を云ふ、蘭の一名を龍鬚草と云ふより名づくとも云ふ、長さ七尺五寸、廣さ縁ともに三尺六寸なり、雅亮裝束抄に「りうびんは、色々まだらなる簾に、青地の錦の縁の弘さ三寸許なること、四方にさしまはして、濃きうちうらな付たり、弘さ長さ疊に同じ」と見えたり、伊勢貞丈は、色々まだらなる簾とは、蘭を色々に染めて織りたる簾にて、俗に花ござと云ふものなりと云へるは從ふべし、江戸時代縁を黄にして、赤く輪ちがへに染めたるを稱し、又紅の絹にて、黄を以て青海波を書きたるをも、備後表の疊に、龍の鬚繪を縫にしたるをも稱したりと云へど、共に本義を失へり、支那にては龍鬚と稱し、我國にては古き日記等には、龍鬚と書けるものありしが、何時しか龍鬚と誤り、遂に通稱となりしものなるべし(玉葉、貞丈雜記、類聚名物考、蓬齋錄)

リウテイタネヒコ

柳亭種彦 高屋種彦(タカヤタネヒコ)を見よ、

リウテキ

龍笛 横笛(ワウテキ)を見よ、

リウビタウ

龍尾道 大内裏大極殿前の道なをいふ、龍尾壇とも稱す、大極殿の基を南に去る十丈、蒼龍池の基を去る二丈、南北に横互したる道

リウヘイエイハウ

隆平永寶 名義平安朝時代に行はれたる錢貨の一種、鑄銅にて作る、徑八分強、重九分九厘、徑八分強、重七分五厘の二種あり、肥後藩恒武天皇延暦十五年十一月、鑄造して之を行はしめ、一を以て舊錢の十に當つ、弘仁八年に至て停む、(仁)及び其挿繪參看(大日本貨幣史)

リウヘイエイハウ

隆平永寶 名義平安朝時代に行はれたる錢貨の一種、鑄銅にて作る、徑八分強、重九分九厘、徑八分強、重七分五厘の二種あり、肥後藩恒武天皇延暦十五年十一月、鑄造して之を行はしめ、一を以て舊錢の十に當つ、弘仁八年に至て停む、(仁)及び其挿繪參看(大日本貨幣史)

リキシヤ

力者 剃髮して力業を勤むる故名づく、又書法師、力者法師とも稱す、青色の裝束を着くる故に云ふ、院の御所、門跡、諸公卿及び武家等の家に置きたり、服制(フクセイ)の挿繪參看、

リクグン

陸軍 兵制(ヘイセイ)徴兵(チウウヘイ)を見よ、

リクグンシヤウ

陸軍省 明治政府の官衙、陸軍政の事を掌る、(肥後藩)明治五年二月、兵部省を廢して、始めて之を置き、もと兵部省中、陸軍武官及び兵學、軍醫の二寮、糾問、造兵、武庫の三司を管す、其後職制、局課の廢合あり、現今は、官房、人事、軍務、經理、醫務の五局あり、其他砲兵工廠、兵器廠、憲兵司令部、軍馬補充部、築城部、運輸部、會計監督部、經理學校、千住製絨所、繻絲廠、被服廠等の所管あり(法令全書)

リクグンソウサイ

陸軍總裁 (肥後藩)江戶幕府の職名、陸軍に關する事務を總裁す、(肥後藩)文久二年十二月、これをおき阿波徳島藩主蜂須賀實祐を任補す、蓋し幕府、洋式を採用し、陸軍の發達著しきを以てなり、三年正月辭す、尋で元治元年七月老中格松前廣陸海軍總裁奉行となり、慶應元年九月海陸兩軍總裁を命ぜらる、崇廣罷むるの後、同二年十二月老中格松平乘讓これに代る、其重任たりしと知るべきなり、而して慶應四年正月勝安芳が、海軍奉行並より此職に補したるときは、幕府瓦解の際の事に係り、常規として見るべからず(續徳川實紀、嘉永明治年間録)

リクグンフキヤウ

陸軍奉行 (肥後藩)江戶幕府の職名、歩兵、騎兵、砲兵の三隊を總官す、老中の支配、五千石高、芙蓉間詰とす、(肥後藩)文久二年十二月はじめて之をおき、大關増裕を任補せり、

リクケン

陸軍奉行 (肥後藩)江戶幕府の職名、歩兵、騎兵、砲兵の三隊を總官す、老中の支配、五千石高、芙蓉間詰とす、(肥後藩)文久二年十二月はじめて之をおき、大關増裕を任補せり、

リクケン

陸軍奉行 (肥後藩)江戶幕府の職名、歩兵、騎兵、砲兵の三隊を總官す、老中の支配、五千石高、芙蓉間詰とす、(肥後藩)文久二年十二月はじめて之をおき、大關増裕を任補せり、

リクケン

陸軍奉行 (肥後藩)江戶幕府の職名、歩兵、騎兵、砲兵の三隊を總官す、老中の支配、五千石高、芙蓉間詰とす、(肥後藩)文久二年十二月はじめて之をおき、大關増裕を任補せり、

リクケン

陸軍奉行 (肥後藩)江戶幕府の職名、歩兵、騎兵、砲兵の三隊を總官す、老中の支配、五千石高、芙蓉間詰とす、(肥後藩)文久二年十二月はじめて之をおき、大關増裕を任補せり、

はじめ一人なりしが、慶應年間には數人ありき○陸軍奉行並は、文久三年七月はじめて之をおき、小栗忠順を任補せり、老中の支配、三千石高、芙蓉間詰にして、はじめ一人なりしが、慶應年間には數人ありしこと陸軍奉行に同じ(文久紀事、續徳川實紀、泰平年表、海軍歴史、武鑑)

リクサウ

六賊 王朝時代の罪名、強盜、竊盜、枉法、不枉法、受所監臨、坐贓の六職をいふ、強盜とは、強盜して財を得たるをいひ、竊盜とは、竊盜して財を得たるをいひ、枉法とは、人より財を受け、法を曲げて處断せるをいひ、不枉法とは、人より財を受け、法を曲げずして處断せるをいひ、受所監臨とは、監臨の官、公事に因らずして監臨内の財物を受けたるをいひ、坐贓とは、監臨主司にあらずして、事に因りて財を受くるをいふ(古事類苑法律部)

リクセンノクニ

陸前國 (肥後藩)東は海、西は羽前羽後、南は磐城、北は陸中に至る、東西凡二拾五里、狹處二里、南北凡四拾里、狹處拾九里、東山道に屬す、(肥後藩)山脈西北に亘りて陸中羽前を割し、尙は南して岩代に連る、北方二郡狹長海に沿ひ、牡鹿一郡東方に曲出して港灣を抱き、松島群嶼其西南に基布して絶陸の地たり、中央土壤平衍、阿武隈川其南を限り、北上山北方より來り、運輸の便あり、(肥後藩)もと陸奥國に屬し明治元年始めて分置す、ムツノクニを見よ、

リクセンノクニ

陸前國 (肥後藩)東は海、西は羽前羽後、南は磐城、北は陸中に至る、東西凡二拾五里、狹處二里、南北凡四拾里、狹處拾九里、東山道に屬す、(肥後藩)山脈西北に亘りて陸中羽前を割し、尙は南して岩代に連る、北方二郡狹長海に沿ひ、牡鹿一郡東方に曲出して港灣を抱き、松島群嶼其西南に基布して絶陸の地たり、中央土壤平衍、阿武隈川其南を限り、北上山北方より來り、運輸の便あり、(肥後藩)もと陸奥國に屬し明治元年始めて分置す、ムツノクニを見よ、

リクセンノクニ

陸前國 (肥後藩)東は海、西は羽前羽後、南は磐城、北は陸中に至る、東西凡二拾五里、狹處二里、南北凡四拾里、狹處拾九里、東山道に屬す、(肥後藩)山脈西北に亘りて陸中羽前を割し、尙は南して岩代に連る、北方二郡狹長海に沿ひ、牡鹿一郡東方に曲出して港灣を抱き、松島群嶼其西南に基布して絶陸の地たり、中央土壤平衍、阿武隈川其南を限り、北上山北方より來り、運輸の便あり、(肥後藩)もと陸奥國に屬し明治元年始めて分置す、ムツノクニを見よ、

リクセンノクニ

陸前國 (肥後藩)東は海、西は羽前羽後、南は磐城、北は陸中に至る、東西凡二拾五里、狹處二里、南北凡四拾里、狹處拾九里、東山道に屬す、(肥後藩)山脈西北に亘りて陸中羽前を割し、尙は南して岩代に連る、北方二郡狹長海に沿ひ、牡鹿一郡東方に曲出して港灣を抱き、松島群嶼其西南に基布して絶陸の地たり、中央土壤平衍、阿武隈川其南を限り、北上山北方より來り、運輸の便あり、(肥後藩)もと陸奥國に屬し明治元年始めて分置す、ムツノクニを見よ、

リクセンノクニ

陸前國 (肥後藩)東は海、西は羽前羽後、南は磐城、北は陸中に至る、東西凡二拾五里、狹處二里、南北凡四拾里、狹處拾九里、東山道に屬す、(肥後藩)山脈西北に亘りて陸中羽前を割し、尙は南して岩代に連る、北方二郡狹長海に沿ひ、牡鹿一郡東方に曲出して港灣を抱き、松島群嶼其西南に基布して絶陸の地たり、中央土壤平衍、阿武隈川其南を限り、北上山北方より來り、運輸の便あり、(肥後藩)もと陸奥國に屬し明治元年始めて分置す、ムツノクニを見よ、

リクセンノクニ

陸前國 (肥後藩)東は海、西は羽前羽後、南は磐城、北は陸中に至る、東西凡二拾五里、狹處二里、南北凡四拾里、狹處拾九里、東山道に屬す、(肥後藩)山脈西北に亘りて陸中羽前を割し、尙は南して岩代に連る、北方二郡狹長海に沿ひ、牡鹿一郡東方に曲出して港灣を抱き、松島群嶼其西南に基布して絶陸の地たり、中央土壤平衍、阿武隈川其南を限り、北上山北方より來り、運輸の便あり、(肥後藩)もと陸奥國に屬し明治元年始めて分置す、ムツノクニを見よ、

リクセンノクニ

陸前國 (肥後藩)東は海、西は羽前羽後、南は磐城、北は陸中に至る、東西凡二拾五里、狹處二里、南北凡四拾里、狹處拾九里、東山道に屬す、(肥後藩)山脈西北に亘りて陸中羽前を割し、尙は南して岩代に連る、北方二郡狹長海に沿ひ、牡鹿一郡東方に曲出して港灣を抱き、松島群嶼其西南に基布して絶陸の地たり、中央土壤平衍、阿武隈川其南を限り、北上山北方より來り、運輸の便あり、(肥後藩)もと陸奥國に屬し明治元年始めて分置す、ムツノクニを見よ、

北上川中間に南流す、全地原隔噴遠にして礫多、盛岡以南は稍々沃壤たり、閉伊九月二郡東海に瀕し魚鹽の利あり、(肥後藩)もと陸奥國に屬す、明治元年始めて分置す、詳しくは「ムツノクニ」を見よ、

リチユウテンワウ

履中天皇 (肥後藩)御名は去來種別尊、(肥後藩)仁德天皇の皇長子、御母は皇后磐之媛、第十七代の天皇、(肥後藩)仁德天皇三十二年立ちて皇太子となる、八十七年正月仁德天皇崩す、太子難波宮に居り、また位に即かざるに當り、住吉仲皇子皇位を争ひ、兵を擧げて宮を圍み、事急なり、太子平群木菟等と河内埴生阪に遁れ、更に難波を経て、倭の石上振神宮に駐り、皇弟瑞齒皇子を遣はして住吉仲皇子を誅せしめ、明年二月即位す、二年十月倭磐余稚櫻宮に遷り給へり、四年はじめて史を諸國におき、言事を記さしめ、六年また齋藏の傍に内藏を建て、官物を分収し、阿知使主と王仁とをして、其出納を記さしめ、因て藏部の職を定む、此年三月崩す、壽詳かならず、和泉國泉北郡石村大字上石津の百告鳥耳原南陵に葬る(古事記、大日本史、陸奥一覽)

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツ

律 (肥後藩)律令(リツリヤウ)を見よ、

リツシ

月元興寺僧義榮を權律師に任ず、權律師茲に始まる、延喜六年十一月山陰中納言の子如無を權律師に任ず、これ公卿の子の、僧綱に任ずる始めなり、天平二年七月、圓興を中律師に任じ、天平神護二年十月、圓興の弟子基真を大律師に任じ、其後一二補任ありしも、延暦十三年大律師を止むの大寶の令制、律師一人なりしが、弘仁十年十月四人と定め、天元四年十二人に増し、應徳三年十一月更に十四人とたり、鎌倉時代には、百五六十人の多きに至り、リツシヤを參看(書紀、續紀、愚管抄、初例抄、釋家官班記、皇典講究所講演「僧官考」釋門事考)

リツシヤ

堅者(立者) 僧職、勅令の論議の時、堅義する事を掌る僧をいふ、故に堅義とも云ふ、南北二京の僧隨時之を勤む、宣旨を以て之を補す、又綱位者も補せらる、又釋家官班記に、廿萬を経たる者、又は叡山東塔の三十講、西塔の廿八講を塗業したる者を云ふと見えたり、延暦廿一年十一月、最澄、止觀院に於て法會を修せし時、第五日目に堅義あり、義眞堅者となりしを始めとす、後には圓城寺平等院等にも堅者ありし事、源平盛衰記に見えたり(釋家官班記、寺官抄)一説に舊はシユシヤと訓みしを、或る時勅使誤てリツシヤと訓みしより、後ち訓みならはして、リツシヤと云ひしと云ふ、

リツシユウ

律を以て所依とするが故に名づく起原語也本邦の戒律は、善信尼の百濟に入りて、受け來りしを始めて、推古天皇の時、律師の渡來ありしも、皆未だいふに足らず、凡そ本邦南山律(律宗に南山宗、相部宗、東塔宗の三派あり、南山宗は唐僧道宣、相部宗は唐僧法苑、東塔宗は唐僧法苑を祖とす、我國に傳はれるは、南山宗なり)の渡來に前後三傳あり、天武天皇の

リツシ

時、道光律師の入唐傳律を第一傳とし、天平七年道瑠律師の來朝を第二傳とし、天平勝寶五年鑿真和尚の渡來を第三傳とし、道瑠鑿真の二僧は、本邦入唐求律の僧榮答、普照の請に應じて來りし者にして、普照の二僧は、共に勅を受けて、天平五年彼の地に赴きしものなり、而して道瑠は大安寺に於て講義したる等のことあれども、なほいまだ振はざりしが、鑿真に至りては、朝野の崇重を受くるも甚だしく、天平勝寶六年入京するに及び、勅して東大寺に置き、四月大佛の前に戒壇を築き、聖武天皇及び皇后皇太子以下、登壇受戒する者四百餘人なりき、次で大佛殿の西に戒壇院を創し、又下野藥師寺、筑紫觀世音寺にも戒壇を築き、東西の受戒者に備ふ、之を天下の三戒壇と稱す(「カイダン」參看)既に鑿真唐招提寺を建立し又戒壇を築く、蓋し鑿真渡來以前にありては、未だ制戒の三師七證を得ざるが爲め、白四羯磨の別授戒を執行するに能はざりしが、いま鑿真率ふる所の律僧により、始めて如法に別授戒の儀を行ふを得たり、故に鑿真を以て本邦律宗の始祖と爲す(「カンシン」參看)然るに鑿真の寂後、年を経るに従ひ宗風漸く衰へ、戒壇永く振ふこと能はず、殊に傳教大師が叡山に戒壇を開くに際し、鑿真創立の四戒壇益々衰へ、戒律の受授殆んど絶えたりしが、鳥羽天皇の頃、中川の實範上人、深く律宗の頹廢を悲しみ、招提寺の殘僧によりて、四分律の戒本を傳授し、更に自ら大小の律を究め、大に有志の徒を翕合せり、範より戒後、覺憲を経て貞慶に至り、慶の下に戒如、覺心、乘心あり、戒如門弟尤多く、就中大悲(覺盛)與正(覺尊)の二菩薩、及び有嚴、圓晴を四傑と稱し、四人相給びて東大寺に自誓自受し、翠で白四羯磨の別受法を興す、是に於て鑿真の律風一時世に振ひ、大

リツフ

悲は招提寺を興し、與正は西大寺を以て傳戒弘律の道場と爲し、東大寺の戒壇院は大悲の徒圓照によりて興り、下野藥師寺も亦大悲の法孫密嚴によりて再興せられたり(「カクセイ」「エイソン」參看)之と同時に正法國師(俊徳)淨業律師の二人亦入宋して南山宗を傳へ、正法國師は泉涌寺を、淨業は戒光寺を京都に開き、四分律を興隆せり、而して大悲與正等は、奈真即ち南京に於て、正法淨業等は、京都即ち北京に於て律宗を唱へたるがゆゑに、世に前者を南京律、後者を北京律と稱す、蓋し南京律は、鑿真の所傳を再興したるものにして、北京律は鑿真以後四分律宗の再傳なり(「シユンタイ」「シヤウキヤウ」參看)かくのごとくにして、鎌倉時代には律宗の盛大を見たれども、室町時代以後又衰へ今日に至りては唐招提寺によりて僅に其命脈を保ち獨立の一宗派を爲さずと雖、眞言宗に於て戒律を講究するも、別に江戸時代に至りて起り、慶長年間明忍、慧尊、友尊等之を再興し、其後快圓は大鳥の僧坊を開き、慈忍は野中寺の律園を立てて戒律を紹隆したりしが、享和年中に、慈雲尊者出でて正法律を唱へしより、眞言律漸く盛んなりしが、明治廿八年、眞言律宗と稱し、獨立の宗派たるに至り、本山は西大寺なり(日本佛教史綱、通俗佛教各宗綱要)

リツフンシヨ

率分所 名義大藏省に收納する官物年料の内、十二分の一を別けて納る、倉を云ふ、官物料の高により、率法を以て分け充てて、納むる故に名づく正藏率分堂とも云ふ、大藏省正藏院内にある故なり、單に率分堂とも率分藏とも云ふ(附註)大内裏大藏省の東西隅にして、總藏寮の北、長殿の東、大舍人寮の西、方四十丈の地を占む、四方築垣を圍らし、四方に門あり(職員)勾當あり、主

リツリヤウ

律令 名義律は罪人を所罰する法を規定せるもの、令は細大の制度を規定せるものをいふ、并に朝廷の編纂に係る、而して二書各々其性質を異にせりと雖も、今便宜を以て此に合叙す(起原語)推古天皇の十二年に、厩戸皇子、親ら憲法十七條を作れり(ケンポフ)參看)これは、我國制法の始めなれども、細に其書を觀るに、多く教訓

リツリ

リツリ

計頭、大藏大輔、大監物等を以て之に兼ね任ず、後には左中辨重に之に任じ、尋で又上臈辨官之を奉行する、ことなりしが、堀河天皇の代上下臈を論ぜず、諸國の爲めに嫌はれざる人を以て率分所勾當となさしめたり(起原語)始め詳ならず、古今著聞集に「村上御時、南殿出御ありけるに、諸司の下部の年たけたるが南階の邊に候じけるを召して、當時の政道なば、世にはいかし申すと御尋ありければ、目出度候と、そ申候え、但し主殿寮に松明の多くまかりいり候、率分堂に草候と奏したりければ、御門大にはちおぼしめしてけり、さるる公事の月にもあらざりけるに、松明のいと申は、公事の夜に入るよして侍り、率分堂に草のしげるとは、諸國のみつぎの參らぬ由なるべし、いみじくも申たりけるの事也」とあれば、村上天皇以前よりありしものなるべし、權記長保二年四月二十日の條に「此日召三民部錄船陸範、給正藏率分所土佐國精拾陸匹下文、并仰彼國目泰連光傳料等、觸國守可令記下之由、左經記萬壽五年四月十一日の條に「參結政所、有政、事雖未了、稱、内召起座、渡率分藏因幡見上調布二千端、令納歸參大内、など見え、其他中右記、北山抄、夕拜備急至要抄、辨官補任等によれば、鎌倉時代の末年にもありて、勾當等を任じたるが如し(拾芥抄、中右記、辨官補任、大内裏圖考證)

リツリ

の言を交へて、竟に律令の比にはあらざるなり、天智天皇の御宇に至り、藤原鎌足に命じ、始めて律令を撰ばしむ、此令を後に近江令と稱す、二十二卷あり、今傳はらず、また律の成否は詳かならず、天武天皇の十年に、律令を定め、法式を改めんが爲めに、人を分ちて行はしめたるは、近江令を刊修せしものにして、持統天皇三年に、諸司に令一部二十二卷を班し給ひしは、此刊修の令を班したるなり、其後文武天皇四年に刑部親王、藤原不比等等に勅して、律令を撰定せしめ、大寶元年に至りて成る、律六卷、令十一卷あり、これを大寶律及び大寶令と稱す、養老二年に至り、更に不比等の諸人に勅して刊修せしめ、律十卷十二編、令十卷三十編と爲す、これを養老律令といひ、或は大寶令を古令、前令といふに對し、これを新令、今令ともいふ、いま世に行はるるもの即ちこれなり、此後にも、吉備眞備、大和長岡等、律令の中に二十四條を刪定せしむ、延暦十年に至りて行ひ用ひ、神玉等の奏する所の刪定令格四十五條を、同十六年に至りて、有司に下して遵行せしめたり、なほ弘仁三年にも令條を刊改せることあり、然れども養老以下の刪定は、極めて小部分に留り、大體に於て大寶の律令と異らざる事、先哲の既に説かれたる所なり、而して律は名例、衛禁、職制、戶婚、廢庫、擅興、賊盜、闘訟、詐譎、雜、捕亡、斷獄等の諸律ありしと雖も、早く散亡し、今日存せる者は、名例、衛禁、職制、賊盜の四律に留り、然も名例律は後半を、衛禁律は前半を失し、賊盜律も尙一條を逸したり、近時石原正明、其他の逸文を詳釋より集録し、律疏八卷を編す、續々群書類從法部部に收められたれば就きて見るべし(令の編名は令義解の條に述べたり)注)淳和天皇の天長三年額田今足の請によりて、令律問答私記

リツリ

を撰定せしめしとあり、なほ律には律附釋十卷(今傳はらず)律集解三十卷(惟宗直本、いま傳はらず、僅かに断片を存するのみ)律疏三十卷等あり、令には令義解十卷(「リヤウ」ギヤ)參看)令釋七卷、令古記(二書共に散亡して傳はらず、僅かに令集解の中に、間々引用せるのみ、而して義解よりは、古きものなりといふ)令抄二卷(一條兼良)令問書(一條冬良)令私考八卷(並井義智、官位令、職員令のみなり)讀式翼一卷(日野資愛、選叙令のみなり)關市考令一卷(神村正隣)講令備考十卷(稻葉通邦等)標注令義解校本六卷(近藤芳樹、戶令まであり)軍防令講義八卷(栗原信充)令三辨一卷(荷田在滿)令圖解、令義解講義(小中村清矩、神祇、職員、官位、獄の四令のみなり其他は多し、格(キヤク)并に補遺に收めたる式(シキ)參看(古事類苑法律部、國學院雜誌)律令考)

リツリ

林邑樂 雅樂の一、天竺樂にて、左舞に屬す、迦陵頻、案摩、倍盧破陣樂、菴合香等の舞あり、天平八年天竺僧仙那、林邑僧佛智歸化す、佛智能く天竺樂を熟知したるを以て、聖武天皇、毘盧遮那佛建立あるべき時機とて、大に喜び給ひ、樂生をして其樂を受けしむ、是に於て始めて印度樂を傳ふ、是より從來の支那樂に合せて、佛寺齋會には、必ず之を奏せしむ、職員令集解に、大同四年の官符を引いて、林邑樂師二人とあり(續紀、教訓抄、舞樂圖說)

リツリ

廩院 民部省附屬の倉庫を云ふ、諸國の庸租黒米を納めて公用に充つ、民部省の東、神祇官の西、宮内省の南に在り、省官之を掌る、天元三年四月主計權少屬川瀨保平を以て、廩院長勾當に補し、諸國進する所の雜物を檢納せしめたり、延喜

リンカ—リンザ

の制、諸司諸家に借る所の粟米一百石以上は、官符にあらざれば奉行することを禁じたりき(延喜式、西宮記、類聚符宣抄、大内裏圖考證)

リンカ

林歌(臨河) 名義樂舞の一、高麗樂、平調、新樂にて小曲、四人舞、番舞、甘州、大槻如電氏は「林鐘調にて、備馬樂ったふべく作りたれば、林歌の名起りしならん」といへり(起原論、傳來作者等詳かならず、體源抄に兵庫元玉手公願作となせど明かならず、舞樂(アガク)の挿繪參看(舞樂圖說))

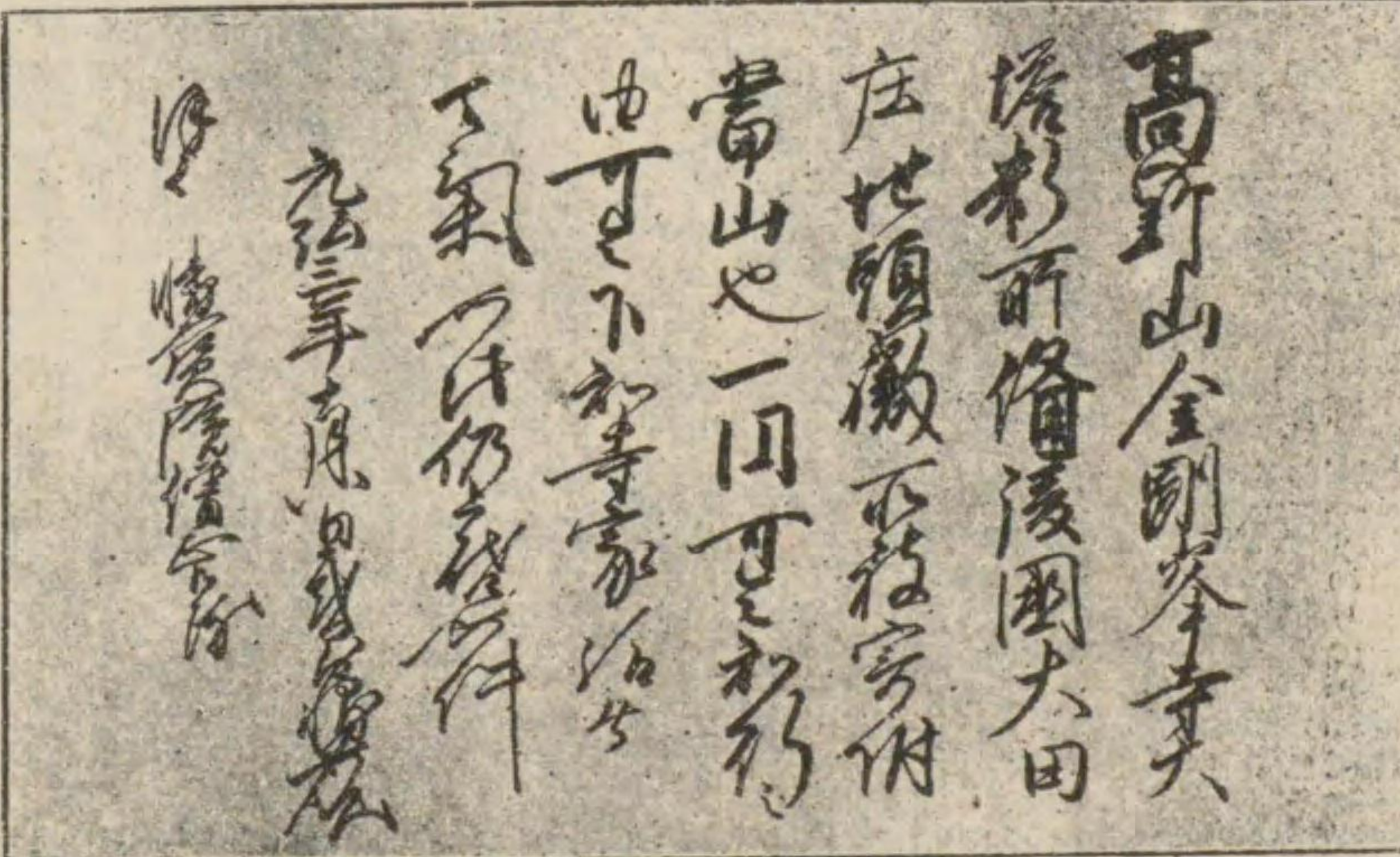
リンサイシユウ

臨濟宗 禪宗の一派、臨濟禪師を開祖とするが故に名づく(起原論、臨濟は唐の懿宗の時の人にして、はじめ黄檗に參し、後ち大愚に謁し、遂に一派を開く、而して其本邦に於ては承安年中叡山の覺阿宋地に航して、佛海禪師に參し、在宗四年にして歸朝す、これは臨濟禪あるのはじめと爲す、然れども其法傳らざりしに、後ち榮西(エイサイ)參看あり、始め顯密の教義を採り、中頃再び宋域に入りて、教外別傳の旨を究め、歸朝するに及び、盛んに臨濟下の正宗を唱ふ、時に建久二年なり、次で建仁三年將軍源頼家建仁寺を創し、師を請じて開山とす、我國に禪利あると茲にはじまる、これより漸次に瀾滄して鎌倉室町兩時代を通じて隆盛を極む、即ち建長元年北條時頼、建長寺を起し、宋の蘭溪道隆(ダウリキウ)參看を延いて開山とし、仁治年間九條道家東福寺を建て、辨圓圓爾(ベンエン)參看を以て始祖たらしめ、文永十年北條時宗圓覺寺を建て、宋の無學祖元(ソクワン)參看を推して開山とし、永仁中龜山法皇南禪寺を創め、無關普門(フモン)參看をして之に居らしめ、建武元年花園法皇妙心寺を創め、關山慧玄(クワン)參看を開山とし、北朝曆應二年(南朝延元四年)光明天皇、足利尊

リンザ

氏に勅して天龍寺を創めしめ、夢窓疎石(ソセキ)參看)を始祖とし、北朝延文五年(南朝正平十五年)佐々木氏頼永源寺を建て、寂室元光(ゲンクワウ)參看)を開山とし、北朝永徳三年(南朝弘和三年)足利義滿相國寺を開き、春屋妙葩(メウハ)參看)を住持とす、而して本宗の所謂五山十刹の列を定めたるは實に北朝至徳元年(南朝元中元年)の事に係り(ゴサン)「ツフセツ」參看)僧録司の職あるは、康暦元年十月に始まる(ソウロクシ)參看)是より五山十刹、僧録司を世襲領帶せる鹿苑院并に隆涼軒を中心として室町幕府の保護により、尤盛大なりき、されば足利氏の威信漸く地に墜つるや、宗風また從うて衰へ、應仁以後の亂世を経て、江戸時代に及びては廢類共しく、加ふるに僧録司の職は金地院に移りたれば、宗門の勢力は、全く金地院に吸収せられたり(コンチキ)「スウチン」參看)蓋し元和年中、五山十刹の法度發布せられ、東班、西班、轉位、官資等、寺法の如く定り、乘拂、出世、入院、開堂、また先規によりて行はれ、外觀頗る美なりしと雖、内部の勢力は甚だ微弱なりき、此時に當り一宗中大勢力を有したるは、妙心大徳の二寺にして、寛永年中、澤庵によりて出世を復せられ、互に相獨立し、他の五山一派と對立したるに似たり、されば江戸時代臨濟の宗風は唯僅かに、嶺南(レイナン)參看)澤庵(タクワン)參看)愚堂(イツドウ)參看)等によりて其前半を維持せられ、白隱(ハクイン)參看)後半に起り始めて宗風再び世に振ふに至れり、明治九年はじめて宗名を立て、臨濟宗と稱し、各分派また獨立して、各々管長をおくこととなり

ウ)參看)佛教各宗綱要、日本佛教史綱) リンシ 繪旨 名義藏人が勅旨承けて出す文書を云ふ、唐薛延珪の制に「爾能奉繪旨こと見え、名目抄注に「吏學指南曰、繪者繪言也、旨者立意於内、發言於外、曰旨也」と見えたりとも、支那にては



(載所書文山野高)

し、鎌倉時代には一層甚しく、龜山天皇弘長三年宣旨を下して制裁を加へしも、行はれざるに至れり(史學雜誌、年給考) リンシノキヤク 臨時客 名義 毎年正月二日、攝政關白家にて、大臣以下の上達部を招請して行ふ饗宴をいふ(儀式)大饗の儀式と同じ、管絃の遊あり、籠馬など諸ひて興す(起原論)起原詳かならず、蓋し藤原氏の勢を得たる後、中宮東宮の大饗に倣ひて行ひしものなるべし、但し足利時代には、既に絶えたること公事根源に見えたり(公事根源) リンシノシヤ 臨時教 教(シヤ)を見よ、 輪臺 名義 舞臺の一、西域の樂、般涉調二十二曲の中の一なり、新樂にて中曲、二人舞、答舞數手(起原論)作者詳かならず、或は、唐玄宗の時酒醉之作るとも、又唐の開元天寶中の作なりともいへり、蓋し唐の邊地、北庭都護府に輪臺縣あれば、其土俗の歌舞を寫したる者なるべし、舞曲口傳に、其國の人青海波の衣を着して舞へるが故、國名を付す云々、又青海波は龍宮樂にて、其裝束の色、青白浪に千鳥の文を縫ひ紋にし、羅路門開之傳(舞曲「云々」と見えたり、我國仁明天皇の朝、和邇部大田麻呂勅を奉じて樂を作り、良岑安世舞を作り、改めて平調を般涉調となしたりと云ふ、「アガク」の挿繪參看(禮樂志、歌舞音樂略史) リンツケ 厘付 江戸時代、高の取米の内を、何分何厘として上納するものをいふ、即ち高にて取米を割き、高に幾割何分何厘と定めて、厘まで用ふる故に名く、此事は石高の初になりしが、粗納み止みて、米に摺り取りしより、年の豊凶にて、粗摺の増減出來し故、終に厘付となりて、取箇善惡の見合に適法となれり(田園類說、皇典講究所講演、徳川氏官

制) リンドリ 厘取 (トリカ)を見よ、 リンワウジ 輪王寺 所屬 下野國上都賀郡日光町(宗廟)天台宗の本尊阿彌陀、千手觀音、馬頭觀音(起原論)桓武天皇の朝、勝道二荒山を踏開して神宮寺を建立し(今の中禪寺の地)後ち空海、圓仁等登攀せり、而して圓仁以後天台宗となりて漸く興隆し、四本龍寺、滿願寺を建立す、草創建立修行記には、勝道四本龍寺を建立すとあれども信憑しがたし、蓋し後世の僧徒か、勝道の遺跡に建立したるものなり、滿願寺も亦然り、滿願寺一に「乘實相寺」と號す、後ち益々興隆し、一山三十六坊あり、仁治三年光明院辨覺始めて座主職となり、爾來光明院座主職となりしが、應永二十七年座主職大僧正慈玄、寺務を退きて、光明院の座主職断絶し、坐禪院昌隆權別當に任せられて寺務を觀る、爾來九十餘年間、坐禪院世々權別當職となりたりといふ、慶長十八年坐禪院昌隆、一山異議ありて職を退くに方りて、天海幕府の命によりて滿願寺に入り、坐禪院に住し、元和三年東照宮遷座の事に心力を盡し、同七年滿願寺の本坊を光明院趾に再建して、光明院の號を再興し、寛永十八年今の地(東照宮の前大路)に移して建立せり、慶安九年守澄法親王入りて住したまひ、明暦元年十一月後水尾上皇の院宣により、改めて輪王寺と號し、天台宗の門跡たり、貞享元年火災に罹り、翌二年再建し、客殿書院等は、東叡山の隱殿を移し、結構壯麗を極む、世々法親王入りて之に住し、滋賀院を兼帯し、寺領一萬三千石を有す、徳川家康、同家光の墳墓亦此地にあり、支院は修學院(正保二年建立、當山の學頭)大樂院(東照宮別當)安養院(滿願大權現別當)龍光院(大猷院殿靈屋別當)無量院(慈眼堂

リンシ

申沙汰給、仍執達如件」とて、其中受取人の身分尊き者は、執達如件とし、宛名の上に謹上の二字を置き、親王攝關の如きは、その別當家司に宛つる例なり、紙は紙屋紙(カミヤカミ)參看)を用ひたり、然るに南朝にては、兵馬控席の際、此紙を得難かりし爲め、普通の白紙に書きしもあり、又戦時、敵の耳目に觸れんとを恐れ、鳥子の小紙片に繪を細書し、使者の鬚の中に隠して、持ち行かしめし事もあり、是等繪旨と云ふ、五條文書に、後醍醐天皇御遺勅を奉じて出せる者一通あるは、其の一例なり(起原論)始め詳かならず、三寶院文書に、天承元年の繪旨を収めたり、これ物に見えたる尤も古きものなるべし、其の後高倉天皇が出世し繪旨山槐記に見えたり、繪旨は天皇親政の時のみならず、院政の時にも、亦儀式の内事に、これを出されしことなきにあらず、(ミ)を見よ、 リンシノカミ 繪旨紙 紙屋紙(カミヤカミ)を見よ、 リンシノキフ 臨時給 名義 年給の定數以外に、臨時に諸國の權守介掾目、及び内官助允丞屬等を給せらるゝを云ふ、但し參議には臨時給なし、申文に皆職事の袖書あり、給數は内外官共に制限なし、内給は、内官助允丞、瀧口、雜色、内舍人、外國權守介掾目、院宮給は、内官允、内舍人、外國權守介掾目等、女御給は内官允、大小進、正助丞、外國介權介掾目等、尙侍典侍は内官權屬權介、外國權介目、公卿給は内官屬、内舍人、外國權介掾目等を任す、猶年給(ネンキフ)參看)起原論)始は詳かならず、尤も古く見えたるは、寛平十年妃内親王給時給として、藤原朝臣眞侍を陸奥權少掾に任じたるを始めとす、白河天皇承保以後に至りては、成功官により、臨時内給益々増加し、私物を納めて再任を請ひ、弊害甚

リンシ

し、鎌倉時代には一層甚しく、龜山天皇弘長三年宣旨を下して制裁を加へしも、行はれざるに至れり(史學雜誌、年給考) リンシノキヤク 臨時客 名義 毎年正月二日、攝政關白家にて、大臣以下の上達部を招請して行ふ饗宴をいふ(儀式)大饗の儀式と同じ、管絃の遊あり、籠馬など諸ひて興す(起原論)起原詳かならず、蓋し藤原氏の勢を得たる後、中宮東宮の大饗に倣ひて行ひしものなるべし、但し足利時代には、既に絶えたること公事根源に見えたり(公事根源) リンシノシヤ 臨時教 教(シヤ)を見よ、 輪臺 名義 舞臺の一、西域の樂、般涉調二十二曲の中の一なり、新樂にて中曲、二人舞、答舞數手(起原論)作者詳かならず、或は、唐玄宗の時酒醉之作るとも、又唐の開元天寶中の作なりともいへり、蓋し唐の邊地、北庭都護府に輪臺縣あれば、其土俗の歌舞を寫したる者なるべし、舞曲口傳に、其國の人青海波の衣を着して舞へるが故、國名を付す云々、又青海波は龍宮樂にて、其裝束の色、青白浪に千鳥の文を縫ひ紋にし、羅路門開之傳(舞曲「云々」と見えたり、我國仁明天皇の朝、和邇部大田麻呂勅を奉じて樂を作り、良岑安世舞を作り、改めて平調を般涉調となしたりと云ふ、「アガク」の挿繪參看(禮樂志、歌舞音樂略史) リンツケ 厘付 江戸時代、高の取米の内を、何分何厘として上納するものをいふ、即ち高にて取米を割き、高に幾割何分何厘と定めて、厘まで用ふる故に名く、此事は石高の初になりしが、粗納み止みて、米に摺り取りしより、年の豊凶にて、粗摺の増減出來し故、終に厘付となりて、取箇善惡の見合に適法となれり(田園類說、皇典講究所講演、徳川氏官

リンシ

ウ)參看)佛教各宗綱要、日本佛教史綱) リンシ 繪旨 名義藏人が勅旨承けて出す文書を云ふ、唐薛延珪の制に「爾能奉繪旨こと見え、名目抄注に「吏學指南曰、繪者繪言也、旨者立意於内、發言於外、曰旨也」と見えたりとも、支那にては

リヤウ

別當)等一百餘字ありしが、明治元年一山の坊舎を廢合し、輪王寺の號を停め、滿願寺の舊號を復用す、四年五月火災に罹り、七年再建せるも亦舊觀をとりめず、十六年に至り滿願寺の號を停め、輪王寺の號を再稱することになりしが、今存する所の支院は、僅に護光、安養、華嚴、南照、禪智、淨土、醫皇、櫻木、光樹、唯心の十二院、教光、道福、金藏の三坊のみなり(下野國志、日光山志)

リヤウ 律令(リツリヤウ)を見よ、
リヤウアン 諒闇(亮闇、諒陰) 名義

天皇が御父母の喪に服し給ふ期間をいふ、信默の意にして、謹慎の意なり、塵添塚舊抄に「國主の崩に限りて、諒闇共、諒陰共云也、諒陰をば、まことにたすく諒也、諒陰とは、天子は日々萬民の訴を斷給ふべきを、一向に黙して不問食之故也」とあるにて其義を知るべし、尙書註疏に「王宅、憂、亮陰三祀、傳陰默也、居憂信默、三年不言」と見ゆ(行部一井)三月の間、喪服し給ふべきなれど、萬機の暇なきに由り、日を以て月に代へ、錫紵を服し給ふ事十三日に留り、其間別室に御し給ふ、これを倚廬(イロ)と參看)といふ、板敷を地上に下し、布帽類の簾を垂れ、其御調度の如きも、概して華飾を撤し、質素に従へり、而して其餘の月日は、心喪に服し、一井の後に大祓を行ふ、これを諒闇の終闇と爲す(起原) 諸國級諸紀に「以諒闇之際、威福自由云々」とあるは、神武天皇の喪に服し給へるをいへるものにして初見とす、尋で天平勝寶七年正月の條に「辛酉朔廢朝、以諒闇故也」とあり、これは孝謙天皇が御祖母藤原宮子(文武皇后)の爲に服し給へるなり、爾來皇考の爲めにたまひしあり、桓武天皇の光仁天皇における、朱雀天皇の醍醐天皇におけるがごとき

リヤウ

れなり、皇妣の爲めにし給ひしあり、村上天皇の母后藤原藤子における、後奈良天皇の御生母藤原藤子におけるがごときこれなり、皇祖父の爲めにし給ひしとあり、後鳥羽天皇の後白河天皇における、後陽成天皇の正親町天皇におけるがごときこれなり、御養父の爲めにし給ひしあり、仁明天皇の淳和天皇における、後花園天皇の後小松天皇におけるがごときこれなり、御准母の爲めにし給ひしあり、靈元天皇の後水尾皇后徳川和子におけるがごときこれなり、皇弟の爲にし給ひしあり、後醍醐天皇の桃園天皇の後を承け給ひしを以て、父帝に擬し給へるがごときこれなり、而して花園天皇の皇兄後伏見天皇の猶子となり、爲めに諒闇を行ひ給ひしを以て、皇考伏見天皇の爲めに、これを行ひ給はざりしは異例なり、諒闇の例古來かくのごとく數種ありと雖、要するに皆父母における禮を行ひ給へるものなり、「モ」モフク「アツキ」參看(古事類苑禮式部)

リヤウカ 良家 三位以上の家を云ふ、本朝文料に「今謂良家、偏據符文、似謂三位已上云々、北院御室記に「良家分三階位云々」と見たり、

リヤウカイマンダラ 兩界曼荼羅 眞言宗の曼荼羅をいふ、兩部曼荼羅とも云ふ、兩界は金剛界胎藏界なり、金剛界曼荼羅は、大日如來の智を顯はしたるものにして、その智の猛利にして、煩惱を摧破すること、金剛の諸物を摧破するが如しといふを以て斯く名く、金剛頂經の所説なり、胎藏界曼荼羅は、大日如來の理を顯はしたるものにして、その理の諸法を包含すること、母胎に子を藏するが如しと云ふを以てかく名く、大日經の所説なり、詳しくは曼荼羅抄に出でたり、「マ」マダラ參看、
リヤウケ 領家 領主(リヤウシユ)を見よ、

リヤウ

リヤウゲサク 兩毛作 江戸時代、稻作の外に、夢を作り取るをいふ、上方及び西國筋にては、田に夢の外菜種を重に作る、是亦兩毛作といふ、兩毛作の田地には、上中下の區別あれども、上田にあらざれば作ることはざるなり、關東にては甚少し、畿内中國筋にては、田に木綿を作る所あれども、稻と同時に節故に、之を兩毛作と稱せず(地方凡例錄)

リヤウゲン 良源 名義寛和三年二月慈慧大師と勅諭す(系譜)俗姓は木津氏(事)近江國淺井郡の人なり、延喜十二年九月生る、幼にして梵釋寺の覺慧に隨ひ、延長元年五月叡山に登り、理仙大徳に歸す、六年理仙寂し、相應和尚によりて登壇受戒し、後ち相應、覺慧、喜慶、雲晴の間に周旋し學業大に顯はれ、殊に承平七年の維摩會には、年未だ二十六にして、南京の俊才義昭を拆き、應和三年の法華會には、法相の書智法藏をして口を拵せしめしり、名聲大に振ふ、康保元年座主延昌の寂するや、勅して其後を嗣がしめんとす、辭して就かず、同年座主鎮朝亦久しからずして示寂せるを以て、重ねて命を受けたりとも謙退して遂に受けざりき、此年内供奉の列に入り、二年權律師となり、三年法性寺座主に補し、尋で八月天台座主に任じ、天延三年また少僧都となり、天祿二年法務となり、天延三年また少僧都となり、貞元元年大僧都に陞り、二年僧正に轉ず、天元四年八月圓融天皇不豫の事あり、良源勅によりて修驗し、驗ありしを以て大僧正となり、警車を聽さる、聖武天皇の時、行基大僧正の任を受けてより以來、二百三十餘年にして、はじめて此命あり、一世に崇仰せられし事知るべきなり、慈慧また横川に定心院寂光院を開きてこれに居り、又飯室谷に妙香院を創し、未だ半ばにして、寛和元年正月三日寂す、年

リヤウ

七十四(元亨釋書、佛教各宗綱要、日本佛教史綱)
リヤウコウケン 兩後見 執權連署を云ふ、「シツケン」レンシヨを見よ、
リヤウゴバン 兩御番 江戸幕府の職名なる、書院番と小性組番との併稱なり、各條參看、
リヤウザンハ 靈山派 遊行七世の弟子國阿を派祖とす、本山は京都靈山正法寺なり、いま時宗に還歸して派名を立てず、「シシユウ」シヤウボフシ參看(佛教各宗綱要、日本佛教史綱)
リヤウシ 令旨 皇太子三后より出づる公文書の一、後には親王、法親王、女院より出づるものをも云ふ、又攝關家にて、家司を任補する時の文書を、亦令旨といへり、令制によれば、先づ令を承けたる人は、其趣を春宮坊に宣送し、春宮坊より命令を書きて覆啓し、皇太子晝日して下す、而して勅書式に准じて、晝日ある分を留めて案とし、春宮坊の印を捺し、別に一通を寫して一般に下すなり、其書式左の如し、

年 月 日
奉 令 旨 如 右 令 到 奉 行、
大 夫 位 姓 名
亮 位 姓 名

とあり、然れども此の實物の存するものなし、蓋し令制行はれたる時代には、皇太子として長く御坐せし方なきの故なるべし、平安朝時代に入りて、宣旨に準據したる様式となりしが、後世に至りては、名目には存したれども、様式は全く變化して、院宣又は給旨と同じく奉書の式となり、春宮の坊官又は女院の院司等、上旨を奉じて出すこととなり、高野山文書に

リヤウ

リヤウシツケン 兩執權 執權連署の併

被美福門院令旨云、以三紀伊國荒河庄、永令寄進金泥一切經藏、毎年諸商忌辰修一切經會、毎月初二晝夜、不斷誦尊勝陀羅尼、奉資鳥羽仙院之菩提、可期三會之曉月之故也、以彼所當充其用途、執行後覺、一山衆徒殊任、膜狀相共奉行、至僧數者、云法會、云念誦、無過差、無省略、只隨二庄家所出、相議可計申、也、抑功德者在經王書寫之功、金字紺帶之一切經已爲殊勝、靈地者在大師入定之地、老少尊卑之一踏者、必可出離、仍卜此地、安此經堂、有比類、哉者、
令旨如此、悉之謹狀、
平治元年
七月十日 (藤原朝)

リヤウシツジ 兩執事 執權連署を云ふ、「シツケン」レンシヨを見よ、

リヤウシユ 領主 庄園の所有者と云ふ(三位以上の所有者を領家と云ふ)又本主とも本所とも云ふ、後には領主職と云へり、開墾して所有する人を、開發領主とも根本領主とも云ふ、其の領主を相承したる人を、開發領主の末流と云へり、本家、ホンク(本所)ホンツヨ參看(沙汰未練書、式目抄、庄園考)領主につきては、國家學會雜誌なる中田薫氏の「王朝時代の庄園に関する研究」に就て見るべし、江戶時代諸大名の中、無城の者を、専ら領主と稱し、他の國主、城主と區別したり、「ダイミヤウ」參看、

リヤウジユセン 靈鷲山 印度の山名、梵語にて、希闍彌多(伊沙彌、揭梨跋羅鳩城、娑栗陀羅矩吒ともいふ)譯して鷲頭山とも、鷲峯とも、鷲臺とも云ふ、天竺摩竭陀國に在り、釋迦牟尼此山に在りて、法華經等大乘の諸理を説きたりといふ、されば佛教の靈地とするを以て、殊に靈鷲山と云ふ、略して靈山と云ふは、原語の義にあらず(西域記、栴檀易土集)

リヤウシヨ 兩所 執權、連署を云ふ、「シツケン」レンシヨを見よ、
リヤウタンサイハイ 再段再拜 「ハイ」を見よ、
リヤウタンダイ 兩探題 執權連署を云ふ「レンシヨ」を見よ、

リヤウチユウ 良忠 名義名は良忠、然阿と號す、永仁元年七月記主禪師と勅諭す(系譜)圓實の(系譜)淨土宗の第三祖なり、正治元年七月生る、幼にして圓城寺の龍淵坊に居り、十六歳にして剃髮

リヤウ

受戒す、少より往生浄土の義を慕ひ、後天台真言の諸教を學び、又法相三論、華嚴、律等の玄旨を究め、兼て佛心宗を傳ふ、貞永二年石見の多陀寺にありて不斷念佛を修す、會々生佛といへるものあり、鎮西に赴き、浄土の法門を聖光上人の下に受けんと欲し、來りて上人を誘ふ、上人乃ち生佛と共に相携へて聖光に謁す、時に年三十八、其室に待する、二年、渴瓶餘す事なし、聖光即ち自ら脈譜を書し、證するに手印を以てす、聖光の寂後本郷に歸り、居ること數年、延應元年京都に入り、直ちに去りて上野、下野、武藏、相模、上總、下總、常陸の諸州を化し、仁治元年始めて鎌倉に入る、北條經時之を聞き、蓮華寺を佐介谷に建立して真忠を請じ、後ち改めて光明寺といふ、寛元元年再び洛に入り、大に他力の義を演説す、歸する者甚だ多し、後嵯峨天皇詔して浄土の説を聞き、浄土宗本有眞實一乘佛戒を受け給ひ、賜ふに香衣を以てす、建長元年鎌倉に還り、建治二年三たび洛陽に赴く、後宇多天皇召して開法受戒し、紫衣を賜ふ、道俗歸する者多く、建立の寺院三處に及ぶ、弘安九年光明寺に還り、十年七月六日寂す、年八十九、臘七十四、觀經疏記、選擇決疑抄註、往生論私記、安樂集私記、淨土宗要集、書論註記、行儀分記、授手印領解鈔、同決答鈔、三心私記(佛敎各宗綱要、日本佛敎史綱)

リヤウトウテツリツ

兩統迭立 名義

鎌倉時代以後、後嵯峨天皇の皇子後深草天皇の子孫、即ち持明院流(サミヤウケンリウ)と參看し、同母弟龜山天皇の子孫、即ち大覺寺流(ダイカクジリウ)と參看し、互に皇位に登りし事件を云ふ(起原) 結末 寛元四年正月、後嵯峨天皇位を太子後深草天皇に讓りて、院政を行ひ給ふ、後深草天皇は大宮院の出て、幼より虚弱、即位後未だ皇子なし、後嵯峨上皇深く天皇の同母弟恒仁親王を愛し、天皇に諭して皇太弟となさしむ、正元元年九月天皇不豫、并に天變等ありしを以て之を動機とし、十一月位を讓らしむ、皇太弟即位す、是を龜山天皇と云ふ、後嵯峨上皇尙ほ院政を聽く、文永五年八月、後深草上皇の皇子熙仁を措きて、龜山天皇の皇子世仁を皇太子と爲す、是れ實に兩統紛争の基因となす、文永九年後嵯峨法皇崩す、大宮院は遺詔を奉じて、圓滿院宮圓助法親王と共に後事を沙汰し、前左大臣洞院實雄に請りて奉行せしめ、播磨國衛、神崎庄、尾張熱田社領及び諸家記録等は後深草上皇に、冷泉殿及び御文庫、讀岐國、美濃國、及び和歌、鞠の文書等は龜山天皇に、六勝寺及び其所領、鳥羽殿等は治世の君に屬せしめ、更に幕府に對しては、別に賞賜を賜うて、幕府の擁立に任ぜたり、然れど幕府は、輒く計らひ難きことを奏して、法皇の御意を大宮院に何ふ、女院はもとより其の愛する龜山天皇に意あることを示せり、因て幕府は龜山天皇を治世の君と定め、天皇親政を行ふこと、なれり、世に此時、長講堂領以下を後深草院領とし、皇位繼承の代りとし、龜山院の子孫をして累代皇位に登らしめ、關東を滅さしめんの敷成なりしと云へるは、甚しき誤りなり、蓋し白河上皇院政を始め以來、天皇攝關等は只た空名となり、實權は院に移り、院政を以て萬機を左右し得たるを以て、皇位に登りたる者は、必ず院政を望み給へり、然るに後深草上皇は、院政を行ふこと能はずして、天皇の親政となれるを見て大に望を失ひ、大宮院を怨み給へり、殊に上皇の近臣は、これが爲めに背雲の望を絶ち、威權を振ふこと能はざるを以て、怨恨の情弊甚しく、遂に天皇方と院方との二派を生じ、互に軋轢反目して兩統

リヤウ

るに、兩統迭立は、種々なる原因ありと雖も、根本問題に財產争ひにして、之に婦女子の勢力の纏はりしによるなり、世に北條氏が、兩統迭立を定めたりと云へるは誤にて、寧ろ兩統の依頼によりて、皇位に關涉せしに過ぎざりき、今龜山法皇の御處分によりて見んか、八條院領内の應分、智惠光院、蓮華心院、萬里小路等は後宇多院に傳はり、其他の大半は恒明親王に傳はれり、これ龜山法皇が鍾愛の餘り、天皇の皇太子と爲さんことを、後宇多上皇に諭し給へるに由るなり、然るに龜山法皇崩御後、徳治元年、後二條天皇の皇子邦良親王生れ給ひ、加之、上皇は尊治親王に望を屬し給ひしを以て、法皇の遺勅を行ふこと能はず、因て恒明親王は母昭訓門院と共に、伏見上皇と結ぶに至り、大覺寺統又二派に分れたり、三年後二條天皇崩じ、花園天皇即位し、尊治親王を皇太子と爲す、是より先、後宇多上皇は、後二條天皇の皇子邦良親王儲貳の議ありしも、末だ三歳の幼少なれば、尊治親王を皇太子とし、他日邦良に皇位を傳へ、併せて御領をも傳へしめ、尊治の子孫は皇位を傳へ、後二條の子孫を輔佐すべきを命じ、雍刺して嵯峨大覺寺に屏居し給ふ、正和元年、伏見上皇は、長講堂、播磨國等の御領及び文書記録を後伏見上皇に傳へ、將來花園天皇に傳へしめ、翌年十月出家して、伏見殿に屏居し給へり、花園天皇在位十年に及ぶ、こゝに於て、大覺寺統は幕府に向て讓位を促し、持明院統は採消に努め、使者往來繼るが如し、幕府頗る其處置に苦めり、文保元年四月幕府奏して、皇太子の踐祚及び立太子は、兩流の御和談に依りて處決せられんことを望みしかば、後宇多伏見兩上皇御熱議を遂げ、皇太子踐祚の後、後二條の皇子邦良親王皇太子となり、後伏見上皇の皇子量仁親王を未來の皇太子

リヤウ

分争の勢漸く成り、文永十一年天皇位を後宇多天皇に讓りて、院政を行ひ、勢盛んなり、後深草上皇快々として樂まず、建治元年尊號を辭して出家せんとす、幕府これを留め、且つ後深草上皇は正嫡にして過失なきに、永く皇位を絶たんことを悲み、上皇の皇子熙仁、龜山上皇の猶子として立坊あらんことを奏請し、同年十一月皇太子となす、二條師忠傳、權大納言西園寺實兼大夫となる、實兼、其女今出川院の、龜山上皇に寵なきを含み、加ふるに才氣絶倫、霸氣満々たる京極爲兼ありて、熙仁の師となり、實兼と共に謀を廻らし、受禪の速ならんことを企つ、遂に弘安十年十月、幕府の奏により、天皇讓位ありて熙仁立つ、是を伏見天皇とす、然るに後深草上皇及び近臣等は、持明院統の永く皇位にあらんことを望み、遂に幕府に對し、御治世に就て後嵯峨の御業意は、幕府の推舉に委し給ふ外他意なくして、龜山院に在りしと云へるは、故圓滿院宮の假説に過ぎず、且つ大覺寺統は幕府に對して別志あるも、持明院統は、厚く幕府に信頼すと諭し給へり、是に於て幕府は、正應二年奏して、伏見天皇の長子胤仁親王を皇太子となす、龜山上皇失意の餘り出家し給ふ、正應三年三月、淺原爲頼父子宮中を犯して、其意を果さず自殺す、龜山法皇此事に關係ありと傳へらる、天皇逆襲甚しかりしかば、法皇告文を幕府に賜ひて事漸く收まると雖ども、之れが爲め法皇は益々失意の地に陥れり、かくて持明院統は其の勢の盛なるに當りて内訌を生じたり、京極爲兼は歌を以て伏見天皇に仕へ、殊遇を受け、爾來連りに登用せられ、後伏見花園兩天皇の乳父たり、往々寵を待みて權貴を凌ぎ、他を排するの風あるを以て、政敵の忌む所となり、加ふるに歌風に於て、主家たる冷泉氏と合はず、讓せられて佐渡に流さるゝに至

リヤウ

れり、後宇多天皇及び近臣は此機に乗じ、表面後嵯峨天皇の遺詔に違ふを責め、又裏面より運動する所あり、遂に永仁六年七月伏見天皇の讓位となり、後伏見天皇立つに及び、後宇多上皇の皇子邦治親王を皇太子となす、後伏見天皇在位四年にして位を讓る、是を後二條天皇となす、伏見上皇の第二皇子富仁親王皇太子となる、是に於て持明院統又二派に分れたり、嘉元二年後深草法皇崩じて、御領長講堂以下を伏見上皇に處分し給へり、翌年龜山法皇崩じて、御領を、後宇多、伏見兩上皇、昭慶門院、昭訓門院、恒明親王、西殿准后(御醍醐の御母)等に分配し賜へり、此時に當り、尤も注目すべきは御領處分にして、是より先後三條天皇藤氏の權を抑へて、皇權を振張すると同時に、皇室御領を増進したり、爾來累代治世の上皇には、御領多くして、崩御前に、天皇及び寵愛ある親王女院等に分配し給へり、然のみならず、女院は上皇と同じく年給を給與せられしを以て、公卿以下皆女院に親近して、其身の出世富有を計れり、故に苟も朝廷に勢力を振はんとする者は、女院に注目したりき、鎌倉時代の初、近衛基通及び源通親は宣陽門院に、九條兼實、同長經等は、八條院によりて黨を爲し、互に政權を争奪したりき、而して宣陽門院の長講堂領は鷹司院に傳領し、八條院領は、春花門院、後鳥羽院等に轉々して、安嘉門院に傳はれり、後深草、龜山の漸く確執を生ずるや、後深草は鷹司院に結び、龜山は安嘉門院の猶子となり、各々其御領を傳領して相對抗し給へり、諸家も亦財産の事に因りて互に分立し、攝家は五家に、西園寺は西園寺洞院の二家に、小槻家は壬生大宮の二家に、御子左氏は冷泉京極の二家に分れ、相共に所領に就て紛争し、各々其黨を以て、持明院大覺寺の兩統に分屬したり、之を要す

リヤウ

るに、兩統迭立は、種々なる原因ありと雖も、根本問題に財產争ひにして、之に婦女子の勢力の纏はりしによるなり、世に北條氏が、兩統迭立を定めたりと云へるは誤にて、寧ろ兩統の依頼によりて、皇位に關涉せしに過ぎざりき、今龜山法皇の御處分によりて見んか、八條院領内の應分、智惠光院、蓮華心院、萬里小路等は後宇多院に傳はり、其他の大半は恒明親王に傳はれり、これ龜山法皇が鍾愛の餘り、天皇の皇太子と爲さんことを、後宇多上皇に諭し給へるに由るなり、然るに龜山法皇崩御後、徳治元年、後二條天皇の皇子邦良親王生れ給ひ、加之、上皇は尊治親王に望を屬し給ひしを以て、法皇の遺勅を行ふこと能はず、因て恒明親王は母昭訓門院と共に、伏見上皇と結ぶに至り、大覺寺統又二派に分れたり、三年後二條天皇崩じ、花園天皇即位し、尊治親王を皇太子と爲す、是より先、後宇多上皇は、後二條天皇の皇子邦良親王儲貳の議ありしも、末だ三歳の幼少なれば、尊治親王を皇太子とし、他日邦良に皇位を傳へ、併せて御領をも傳へしめ、尊治の子孫は皇位を傳へ、後二條の子孫を輔佐すべきを命じ、雍刺して嵯峨大覺寺に屏居し給ふ、正和元年、伏見上皇は、長講堂、播磨國等の御領及び文書記録を後伏見上皇に傳へ、將來花園天皇に傳へしめ、翌年十月出家して、伏見殿に屏居し給へり、花園天皇在位十年に及ぶ、こゝに於て、大覺寺統は幕府に向て讓位を促し、持明院統は採消に努め、使者往來繼るが如し、幕府頗る其處置に苦めり、文保元年四月幕府奏して、皇太子の踐祚及び立太子は、兩流の御和談に依りて處決せられんことを望みしかば、後宇多伏見兩上皇御熱議を遂げ、皇太子踐祚の後、後二條の皇子邦良親王皇太子となり、後伏見上皇の皇子量仁親王を未來の皇太子

リヤウ

とし、十年替り立つの約を定めたり、かく持明院統が一代讓歩したるは、在位年限の一定したりしと、邦良親王は後深草の第一女遊義門院の孫なると、後宇多法皇特別の契約ありたるに依るもの、如し、然るに正中元年、後宇多法皇崩御の後、天皇と皇太子と確執を生じたりしが、持明院統また皇太子の早く踐祚し、量仁親王の早く皇太子とならんことを希ひ、關東に使者を遣はして、邦良親王を助成し給へり、然るに嘉暦元年三月邦良親王薨じたるを以て、持明院統は直ちに量仁立坊の事を後醍醐天皇に迫り給へり、同年七月、量仁親王皇太子と爲る、嘉暦三年後醍醐天皇が在位十一年に及び、讓國の期至れるを以て、持明院統より迫ると雖も、天皇は之に應じ給はざりしを以て、持明院統は大に怒り、和談を破る上は、關東より謀ひ申す外に道なしとなし、關東に使者を送りて、後醍醐天皇の御不義を責め給へり、然るに後醍醐天皇は英邁武勇に渡らせられ、常に幕府が皇位に關涉するを憤り給ひ、幕府の衰頹に乗じて北條氏を謀り、正中に一度び騒動あり、尋で皇太子量仁親王皇太子となるに及び益々之を憤り、遂に元弘の御決行ありしも、不幸敗れて隱岐に遷幸し、皇太子量仁親王を皇太子と爲す、蓋し文保和談の約を履みしなり、後醍醐天皇隱岐より遷幸するに及びて、光嚴天皇及び太子を廢し、長講堂領以下は後伏見上皇に安堵し給ふ、延元元年足利尊氏叛し、光嚴上皇の院宣を奉じて皇子豐仁親王を立つ、之を光明天皇とす、後ち尊氏謀を以て、後醍醐天皇の遷幸を勧め、天皇を幽して第七皇子成良親王を光明天皇の皇太子となす、猶ほ

リヤウ

兩統迭立の舊例を循用するなり、天皇逃れて吉野に
 趣き給ふに及び、皇太子を廢し、光嚴の皇子興仁親
 王を立て、皇太子となす、是に於て海内兩天皇あり、
 將士等また分れて、之に分屬し、吉野を南朝(宮方
 と云ふ)京都を北朝(將軍方とも云ふ)と稱し、日
 夜干戈を執りて相互伐し、海内亂ること、五十餘
 年の久しきに及び、南朝は後醍醐、後村上、長慶、
 後龜山の四代にして、長慶後龜山兩天皇は兄弟を以
 て相争ひしが、後龜山の勝利に歸したり、北朝は貞
 和四年興仁親王踐祚す、之を崇光天皇とす、花園の
 皇子直仁親王を皇太弟とす、正平六年南朝の軍盛に
 して、尊氏より和を請ふや、天皇及び皇太弟は廢せ
 られて、後院領等を南朝に渡し奉り、明年光嚴光明二
 上皇と共に、大和の賀名生に遷り給ふ、尊氏乃ち崇光
 の御弟後光嚴天皇を立つ、是より先き、光嚴上皇は長
 講堂等の御領を崇光院に傳へ給ひ、其皇子榮仁親王
 踐祚あらば、直に御領を傳領せしめ若し然らずば、
 後光嚴院に管領せしめ、末代兩方御治天あらば、正
 統につきて伏見殿(榮仁親王)の子御管領あるべしと
 命じたまへり、崇光院より榮仁親王を立て、後光嚴
 天皇の後を承けしめんと思召けるに、後光嚴天皇は
 皇子緒仁親王に傳位の思召あり、公家武家各業して
 相争ひしが、室町幕府遂に天皇に同意し、建徳二年
 讓位ありて、緒仁位に即く、後醍醐天皇之なり、是に
 於て長講堂領以下の御領兩派に分れたり、後小
 松、稱光、父子相繼ぎて位に登りしが、稱光天皇崩御
 の後、御繼嗣御座さしりしを以て、榮仁親王の孫、貞
 成親王の長子彦仁位を嗣ぐ、是を後花園天皇となす、
 是に於て北朝の皇統は、再び嫡流正統に傳はり、從來
 の争一掃し、長講堂法金剛院等の奉邑悉く帝室の御
 領となり、貞成親王の次子貞常親王は熱田社領等を

リヤウ

分ち賜へり、是より先き後小松天皇の明德三年、南
 朝の後龜山天皇と號和し、父子の禮を以て、後龜山
 讓位せられて南北合一に歸したり、此の時の條件明
 ならざれども、持明院大覺寺兩統迭立は重なるもの
 なりしなるべし、故を以て、天皇の讓位ある毎に、南
 朝の遣臣等動搖して兵を擧げ、毎に亂を爲し皇位繼
 承を争ひたりき、嘉吉二年南朝の餘黨尊秀を擁して
 兵を大和に擧げ、潜に禁園に入り神器を奪ふ、尊秀
 殺さるゝに及びて、上野宮を奉じて紀伊北山に據り
 しが、宮の害に逢ふや、一宮二宮を擁す、長祿二年赤
 松氏の遣臣、一宮二宮を害して、神器を收還す、是より
 後南朝王子の事見る處なく、大覺寺統の皇胤斷
 絶し、長く皇統は正統たる持明院統に歸したり、長講
 堂皇室御領、八條院御領參看(史學雜誌「兩統迭立」、
 日本時代史、皇室御領史)

リヤウ

す、傳にいふ、良忍二十餘年間常座不臥にして、經
 行月日を送り、漸く正助の功徳を積み、永久五年五
 月十五日三昧中に親しく阿彌陀佛に面し、融通念佛
 の示誨を受く、これ實に融通念佛宗の起原にして、之
 を彌陀直授の法門と稱す、これより天治元年管薄を
 携へて京都に遊化す、鳥羽上皇をばじめ、公卿百官
 にして、融通念佛會に入るもの甚だ多し、尋でまた諸
 國に布教し、攝津國住吉に大念佛寺を開き、盛んに遠
 近を導く、天承二年二月一日大原の來迎院に寂す、年
 六十一、來迎院の後山律溪に葬る、ユウヅケネンア
 ツシユウ、ダイネンアツツシユウ(元亨釋書、佛教各
 宗綱要、日本佛教史綱)

リヤウ

まれり、稿本は慶安本の外に、右の三令を加へて、三
 十篇十冊として刊行せり、然れども倉庫令の中に、一
 條なるを誤りて二條とし、註文なるを本文とし、令
 文にあらぬものを加へたるあり、また弘長令は、比
 較的誤少きも、猶訂正の及ばざる所あり、又佐藤博
 士の考に、神祇、備尼、儀制、廢牧の四令も、慶安の
 板本には、集解の文等雜れると見ゆれば、早く亡び
 した、何時の頃か、集解を取りて補ひしものなるべ
 しと云へり、律令(リツリヤウ)參看(清原夏野、
 南淵弘真、藤原清公、藤原雄敏、藤原衡、
 興原敏久、善道真良、小野篁、讀岐永直、川枯勝成、
 漢部松長(令義解、國學院雜誌、律令考))

リヤウ

版したり、寫本には、集解の文字の左右上層等に古き
 書入(延喜以前のもの)あるを、版本には却て削りし
 り惜むべし、(國學院雜誌、律令考、三浦周行氏説)
 讀岐國香河郡の人なり、彈正少忠となり、後ち本居
 を京都に移す、元慶七年十二月姓を惟宗と賜ふ、時
 に右衛門志たり、深く律令に通じ、明法博士となる、
 嘗て里亭に律令を講ずべき宣言を蒙り、古來明法
 家七人中の一と稱せらる、別に律令集三十卷の著あり
 りと云へど、今傳はらず、律令「リツリヤウ」參看(令
 義解、徳川實紀、國學院雜誌、律令考、三浦周行氏説)

リヤウ

て彌陀院を賜ふ、即ち名を改めて金鐘寺と號す、時
 に天平五年なり、後ち密祥其講筵を、此の不容彌陀
 の前に開き、爾來金鐘寺を以て華嚴弘通の道場とな
 す、尋で天皇東大寺を此地に造營し給へり、實に良辨
 の勳化によるなり、而して良辨はじめて東大寺別當
 に補して、寺務を司り、法務を兼ね、官僧都より進
 みて僧正に至る、實龜四年閏十一月十六日寂す、年
 八十五、クオンシユウ、參看(元亨釋書、佛教各宗綱
 要、日本佛教史綱)

リヤウノシフゲ

令義解 卷三十卷、活
 字本三十六冊とせり、内書令義解を始め、古來令
 を註釋したる古記類を集めたるものなり、収むる
 所、古記、令釋、古私記、新令私記、朱書、跡弘讀
 記、伴記、物記、穴記以下、當時の法曹家の註釋書類二
 十餘種(是等古記の編者につきては、稻葉通邦の神祇
 令和解及び佐藤博士の律令考に説あり)概ね弘仁頃
 までのものなるも、右の諸書は今日に傳はらぬもの
 のみなれば、令を研究せんとするものは、義解と共に
 欠くべからざる其書なり、現存するもの、官位、職員、
 後宮職員、東宮職員、家令職員、神祇、備尼、戸、刑、
 賦役、學、選叙、考課、祿、宮衛、儀制、衣服、營繕、
 公式、廢牧、假寧、喪葬等二十二篇あり、尤も古き
 は、金澤文庫本にして二本あり、一は紅葉山文庫本
 にして、官位令より戸令まであり、一は山田清安の影
 寫本にして三十卷あり、其他寫本に傳はれもの多し、
 享保中徳川吉宗其の臣見美在、同浩及び林信如に
 命じて、訓點を施さしめたり、蓋し土木の意ありし
 ならん、明治五年に至り、石川介氏活字に附して出

リヤウ

良辨 系統俗姓は百濟氏(或
 は云淺部氏)事關 近江國志賀郡の人(或云相模の
 人)にして華嚴宗の開祖なり、傳へいふ、二歳の時母
 之を携へ桑林に入る、忽ち大驚あり、良辨を捉へ去
 り、之を大和春日の祠前に放つ、義淵僧正拾ひて之
 を養育す、五歳にして學に就き、や、長するに及び、
 義淵諱ふるに法相の宗義を以てす、後ちまた慈訓に
 隨うて華嚴の奥旨を受く、而して慈訓は審祥と共に、
 親しく業を賢首に稟けたれば、良辨は賢首の的孫たり
 (良辨は華嚴唯識を兼學せるが故に、兩宗の人、共
 に推して祖となせども、其意は華嚴を以て本と爲す)
 既にして東山に退隱し一小堂を構へて自刻の執金剛
 神の像を安置し、日夜練心修行せり、時人相傳へて
 金鐘行者といふ、聖武天皇其德風を聞き、特に勅し

リヤウ

リヤクオウ 曆應 名後北朝光明天皇御宇
 (將軍足利尊氏、南朝後醍醐天皇(後村上)の年
 號、南朝の延元三年八月二十八日、代始に因て改元
 す、五年(南朝興國三年)を経て康永と改む、南朝
 王代紀に「覺朝有草、夾階而生、王者以是占曆、應
 和而生」とあるに據る、從三位菅原公時之を勘申す
 (國朝年號譜)

リヤクハカセ

曆仁 名後四條天皇御宇(鎌
 倉執權北條泰時)の年號、嘉祿四年十一月二十三日、
 災惑の變に因りて改元す、二年を経て延應と改む
 出典 續書に「皇明取曆、仁深、海縣」とあるに據る、
 文章博士經範之を勘申す(國朝年號譜)

リヤクハカセ

曆仁 名後四條天皇御宇(鎌
 倉執權北條泰時)の年號、嘉祿四年十一月二十三日、
 災惑の變に因りて改元す、二年を経て延應と改む
 出典 續書に「皇明取曆、仁深、海縣」とあるに據る、
 文章博士經範之を勘申す(國朝年號譜)

リユウ

道は賀茂氏の世職となれり(令義解、扶桑略記、帝王編年記、職原鈔)

リユウキ 隆琦 隱元(インゲン)を見よ、

リユウツツシ 隆達節 端唄の一種、堺の僧隆達が語り始めしより名づく。隆達は文禄より慶長元和の頃に保けての人にして、はじめ和泉國堺なる顯本寺(日蓮宗)に住し自庵と號す、後ち還俗して高三氏を冒し藝種を商ひたりしが、姓端唄を能くし、遂に一流を始め、慶長元和の頃尤も流行し、三都にも傳播せり、而して足薪翁記引く所の雜記に「大内へ召して小歌を仰せつけられ候節、御殿の中にも小歌の聲しければ、隆達がよみける、おろせ松風箏をあげよ今の小歌の顔見たやとつたひし」と見え、柳享種彦の詩に右を評して「この雜記は寛保年間にて、近きものなれど、ゆゑなき事、はかなき事は、かき載せざる筆記なれば、此小歌を其刻作りしといふは、附會の説にもせよ、大内へ召されしことありしなるべし」といへり、此節元祿の頃までは其名残を留めたりしが、其後遂に絶えたり、なほ寛文延寶の頃、江戸に行はれたる菅笠節といへるは、即ち隆達節の事なりともいふ、ハウタヲ參看(近世奇跡考、足薪翁記、柳享種彦、聲曲類纂)

リヨウコ

陵戸 陵(ミササキ)を見よ、

ル井シウコクシ

類聚國史

卷二

別目録二卷、帝王系圖三卷あり、いま散佚し

る

ル井シ

て六十一卷を存す(内書六國史所載の記事を、神祇、帝王、後宮、人、歳事、音楽、賞宴、奉獻、政理、刑法、職官、文、田地、祥瑞、災異、佛道、風俗、殊俗(以上現存)伊勢大神、賽、即位、禪位、荷前、皇后、誕皇子、年號、京都、地名、口税、賜田地、要劇田、勸學田、置(誤あらん)免官、時服、國郡、國司、郡司、諸國四使、征討、諸道學業、白鹿、兩、佛法、修善、撰災、任那(以上本書の註に散見す、其他は詳かならず)の諸部に分ち、類聚編纂したるものに係り、捜索調査に便利なるを共に、六國史と對照して裨益する所多し○本書の散逸したるは早くよりの事にて、藤原信西の書籍目録に載する所も、百廿四卷に過ぎず、其後殘闕益々多かりしを、慶長十九年に徳川家康、院御所より廿二冊を得、爾來遂次に發見せられしものあり、享保七年に至り、將軍徳川吉宗更に捜索して六十一卷を得たり、尋で瑞保已、これを訂正上木せんとし、幕府に請うて比較に従ひしが、未だ畢ざるに史料纂輯の命ありしより、寄合仙石政和其後を承け、更に諸本を校讐し、文化十三年考異三卷を附して上梓せり、世に流布せるもの即ちこれなり(内書菅原道真、宇多天皇の勅を蒙りて撰述す、菅家御傳記に、寛平四年五月十日奏上とあり、而して六國史の中、文德實錄は陽成天皇の朝に成り、其序は、道真が父の爲めに撰びしものなれば、書紀以下五史は道真の撰なるべきも、三代實錄は醍醐天皇の延喜元年八月、藤原時平が奏進せるものにして、其年の正月には道真左遷したれば、三代實錄は後人の補入なるべし、然れどもこれを補入せる事は、道真の時代を去ること遠からざるの證左あり、佐藤博士の説に「類聚國史に三代實錄の文を補ひしは、菅公の時を去る事、いと近き事にて、あるは舊説のごとく、菅公の自撰にてもあらんか、そは三代

ル井シ

實録は、菅公の左遷の頃には既に成功せしを、左遷の騒ぎなどにより遷延したるものにて、まして公の修撰の功を奪はんとて、ことさらに其年の八月まで延べて、奏上せしにてもあるべし、公は其折より、類聚國史の續輯に着手して、太宰府にても、續きて營まればどに、終の公の一手にて成りしものか、こは體裁目録などの定まれるものを、補ひゆくまでにて、あまり難きわざにもあらざれば、數多の歲月を経ずとも、成功すべく思はるればなり、これは一説に備ふべし」とあり○栗田博士の説に、偽書の類聚國史ありと云へり、今見る所なきを以て詳かならず、菅家文章、菅家御傳記、比古邊衣、史學雜誌「佚書考」同上「類聚國史考」)

ル井シウサツエウシフ

類聚雜要集

卷四、二冊とす、群書類從四百七十卷にも收む(内書)中古以來朝廷の恒例臨時の公事に於ける供御、室禮指圖、調度、裝束、饗宴等以下、其他雜事を記して圖説したるものなり、儀式、調度を研め、物語類を讀むものは、必讀の書なり、丹鶴叢書に收めて、丹鶴圖譜と名づけ、彩色を加へて、天保中印行せるものあり、寛文十三年獻納散人の奥書に「此抄四卷、以新院御本(第一親長卿筆、第二道遠院内府、第三廣光卿、第四宣胤卿)書寫校合了云々」とあれば、本書が室町時代既にありしことを知るべし(類聚雜要抄)

ル井シウサンタイキヤク

類聚三代格

卷三十、今散佚して十五卷を存す、國史大系十二卷に収む(内書)弘仁、貞觀、延喜三代の格(「キヤク」參看)を類聚したるものを云ふ、三代の格は皆官に隨ひて類を分ち、神祇、中務、式部、治部等の順序に叙したりしが、更に此三格を合せ、事を以て分類

ルケイ

流刑 名義罪人を邊地に放逐する

ルケイ

留守居 名義(一)江戸幕府の職名、また奥年寄、留守居年寄ともいふ(二)同時代諸大名が、江戸の藩邸におきたる職名との二種あり、(一)江戶城大奥の總務を掌り、兼れて土庶婦女の關所手形を出し、また武庫の出納を監し、大奥の女中及び其詰吏、諸門衛を管し、將軍出行の時には、留りて城中を守衛する等の事を掌る、幕掛、具足掛、武器掛、鐵砲單掛、弓矢鑓掛等の分課あり、なほ二百石以下の小普請を支配す、大奥の口に役所あり、老中の支配、五千石高(慶應三年役高を廢して役金を定め、二千五百兩とす、但し五千石以上の者は半減、なほ切米高三千俵以上の者は下賜せず、千五百俵以上の者は半減とす)芙蓉問詰、諸大夫なり、人員は四人乃至七人にて時に増減あり、人別に與力十騎、同心五十人隷屬し、江戸城内上梅林坂の番所を警衛す、また留守居組頭(二百石高、焼火問詰、小普請の面々下支配觸流しを掌る、享保十九年六月おき、寶

ルサイ

流刑(ルケイ)を見よ

流刑(ルケイ)を見よ

流刑(ルケイ)を見よ

ルケイ

し(始めに三代の格の序文を載せたり)神社、佛事以下、數十次に分ちて序したり、弘化年中尾張の人植松茂岳等、殘本九卷、十一冊を得て校刻したりしが、明治に至り、川田博士前田侯爵所藏本を閱覽し、十五卷を得たり、其の四卷の跋に、享祿元年重ねて治承古本を寫すとありて、弘化本と分つ爲め、享祿本とし、更に弘化本と對照して、六卷を上梓し、其の不足を補へり、國史大系本は弘化刻本、享祿本を基とし、卷次はすべて前田本に從ひて、二十卷(内九、十一、十三卷闕く)とし、弘化本は宮内省本、内藤廣前本、前田夏隆本、黒川春村本等を以て、増補訂正を加へ、前田本は故栗田博士の校本により、更に大澤清臣氏所藏の影寫本等を以て校正し、且つ細目、編年目録を編纂して卷末に附し、捜索に便にしたり(弘化刻本三代格、享祿本三代格、國史大系本、國史學の乘)

ルケイ

司に告げ、妻妾は必ず之に従はしめ、父、祖、子、孫は隨はんと欲すれば、その意に任せ、家人は從ふことを聽さず、刑部及び國司は、太政官符に依りて、隨ふべき家口と、發遣の日月とを具に錄して配所に下し、遞次に防援を差し、左右兵衛を部領とし、途中は程糧を給して配所に達せしめ、既に配所に到る時は、即ち良賤、男女、大小を論ぜず、人ごとに日に米一升、鹽一匁を給し、又田を給し、來年の春に至り、種子を給し、秋に至れば糧食種子共に停む、流人は凡て鉄、若くは盤枷を著し、一人ごとに兩人防援して、配所に役せらるること一年にして、其間は課役を免じ、官糧を給す、滿役に及び、若しくは赦に會ひて役を免ぜらるるときは、配所の籍に編入し、課役は百姓と同じくし、配所にて未だ六年に至らずして死去するときは、家口は既に其處に附籍すとも、還らんと願ふときは放ち還す、又官人流罪を犯す時は、除名して配所に赴かしめ、五年の後再び仕ふることを聽し、若し本罪流に至らずして、特に配流する時は、三年以後に仕ふるを聽す、僞侶はまづ還俗せしめて後に配流するの制なり、右三流の外、別に加役流、反逆縁坐流、子孫犯過失流、不孝流、會教猶流等あり、五流と稱す、加役流とは、遠流に處せられて、なほ三年役せらるるをいふ(三流は共は一年間役せらる)反逆縁坐流とは、謀反及び謀大逆の者の祖孫兄弟、皆遠流に配せらるるがときは是なり、子孫犯過失流とは、過失にて祖父母、父母を殺すがときは是なり、不孝流とは、祖父母、父母の事を訴ふるあれば、首は絞し、從は流とする是なり、會教猶流とは、毒毒を造毒する者は、赦に會ふと雖も、同居家口、及び教令せし人まで亦遠流し、四等の尊屬、從父兄姉、異父兄姉を殺し、及び反逆せし者は、赦

ルサイ

に會ふと雖、猶近流するがときをいひ、皆重罪の人の處刑とす、鎌倉時代には、朝旨を奉じて行ふの制なれども、其間には朝廷に關せず、自由之を用ひ、公卿をも流し、ことあり、室町時代にも、太政官符を以て處置せしが、其季世には、天下四分五裂、群雄所在に割據したれば、遠、中、近の三流も、名ありて地なく、大名にても此刑名を立つるに至る、而して流人を其地の守護等に托して、監守せしむる、ともありき、江戸時代に流刑の名なくして、別に遠島あり、流刑に相當す(「エントウ」參看(書紀、續編、拾芥抄、清藤眼抄、延喜式、古事類聚法律部))

ルサイ

流刑(ルケイ)を見よ

ルス井

曆二年六月勝す、あけてまた之に屬す。又二の丸留守居(二の丸の守衛を掌る、若年寄の支配、七百石高、焼火問詰、寛永十一年はじめて三員をおき、後次第に増加して十餘人に至る、同心三十九人、小人二十七人づゝ之に屬す)四丸留守居等あり。支配鐵砲玉藥奉行、鐵砲軍奉行、幕奉行、弓矢鎗奉行、具足奉行(以上を留守居支配五奉行といふ、後講武所奉行の支配に移る)裏門切手番之頭、天守番之頭、富士見寶藏番之頭、御用明屋敷御番、伊賀衆組頭、奥火之番、掃除頭、進物奉行、奥方進物取次番之頭、添番衆、錢藏御番之頭(諸家系譜には、寛永元年牧野信成、松平重勝の二人はじめて任ずるとし、東武實録、諸御役代々記には、寛永七年松平重則を任じたるをばじめとし、東武實録、御役代々記には、寛永十年二月(代々記三月に作る)日下部正親、酒井忠告、牧野信成、松平重則の四名を任じたるをばじめとし、未だ孰れか是なるを詳にせず、其後時により人員の増減あり、慶應四年幕府瓦解の際には七員ありき、なほはじめは、大名旗本相雜りてこれに任ぜしが、元禄中より、萬石以下の者而已任ずる事となりたり(東武實録、明良帶録、東職記、御營秘鑑、諸役代々記、御役代々記、諸御役代々記、東武實録、吹塵録、官制沿革略史)。

ルス井

ふ、また公用の寄合果ては、料理屋にて宴會を開き、交際を厚くしたりしが、其席上にも所謂先生は上座に席し、以下順に並び、皆羽織袴なれど、新参のものは末席に座し上下を着したり(諸家系譜、武營政績録には、慶長十八年、二代將軍徳川秀忠の時、藤堂高虎の創置に係り、前田毛利の二氏またこれに倣ひておきたるに起るとし、落穂集追加には、同將軍の時代、島津侯が其在封中、領地の遠隔にして急速の公用承り難きが故、在國中は家老一名を留めおき、萬一の際名代として、勤仕すべきを請ひ、許されしに始まるとし、起原詳かならざれども、内藤燦聚氏は、前説が實を得たるものならんといへり、これより各藩にても次第に之をおき、公用を掌らしむる事となりしが、年月を経るに従ひ、留守居等は言を事務の打合に托して豪遊を催し、花街を横行して驕奢に耽れる而已ならず、公務取扱の傳受、差圖、相談よりして、新古の區別を爲すこと甚しく、古参者が新参者を壓すること、言語に絶えたる舉動ありしを以て、幕府は寛政元年六月之を戒諭し、九月組合の解散を命じたれども行はれず、同二年三月、同七年三月にも、更に令ずる處ありしも遂に行はれざりき、既にして水野忠邦の天保の改革を行ふや、同九年十一月職務に忠實なる留守居二十六人を賞し、また不行跡のもの三十九人の職を奪ひ、本國に追逐す、これが爲一時弊風を救ふを得たるも、幾もなくしてまた舊態に復し、以て維新に及べり(落穂集追加、續徳川實紀、江戸舊事考、舊幕府、留守居交際)。

ルス井

職名、大奥の警備を掌る、江戸城内廣敷口に役所あり、晝は大奥の支關を衛り、夜は宿衛す、又御臺所及び姫君の外出に従ひ、又諸大名に嫁したる姫君の館近火の時、立退に従ふ、なほ奥向の事を管すること、留守居に似たり、老中の支配、千石高、中之問詰とす、人員五人もしくは六人あり、人別に與力六騎、同心二十五人隸屬し、鹽見坂番所を守衛し、又女中の出行を監す、また四丸にもあり(諸家系譜、大猷院殿御實記、寛永二年正月七日の條に「留守居番大河内善左衛門正澄死しければ云々」とあれば、寛永以前におきたるものなるべしと雖、詳かならず、後には五人あり、慶應二年八月之を廢す(明良帶録、勤役録、徳川實紀、官制沿革略史)。

ルス井

留守所 名義 王朝時代中葉以後、國司の下司を云ふ、即ち目代、惣大判官代、總檢校、稅所、大帳所、田所、朝集所、健兒所、國學所等はなり、國守に代て留守する意なり、吾妻鏡寛喜三年四月二日の條に「河越三郎重員者、武藏國總檢校職也、付當職、四ヶ條有掌事、近來悉廢罷、仍任例可執行之由、悉申武州」之間、爲岩原源八經直奉行、今日被尋下留守所、廿日の條に「在應永位日奉實直、同弘持、物部宗光等、去十四日勘狀、留守代歸寂、同十五日副狀等到來、仍無相違、可致沙汰」之由云々とあるに、在應、總檢校職等が、留守所の中なることを知るべし、然して留守職と云ふ場合には、或る一人を指して、在職と區別したるが如し、建久元年二月源頼朝陸奥國新留守、本留守大河兼任が、謀叛に組みしたるを以て、新留守を斬り、本留守は年七十歳以上なるを以て、斬罪を停め、左近將監伊澤宗景を陸奥國留守職たらしめしこと、吾妻鏡に見え、又十月陸奥諸郡新地頭等、目代下向せざる間

ルス

は、留守井在廳の下知に隨て、限りある國事を勤むべきことを令したるが如き其例なり(諸家系譜、起原詳かならず、扶桑略記天慶二年十二月の條に「將門武藏、相模等巡檢、皆領印益、可勤公務之由、召仰留守國守等已畢云々」とありて、留守國守の事見えたれば、この頃より始まるものか、按ずるに寶龜六年八月詔して、京官藤澤國司厚基を以て、公解四分一を京官に給ひ、次で延暦以後年給起りて地方官を賜はることとなり、貞觀年中には天皇上皇より公卿に至るまで、年官年爵を給ひ、國守以下皆給主の左右する處となりて、多く子孫又は家司を任補せしを以て、地方に赴くもの少く、多くは遙授の官となれり、加之當時の人心、遠國の地方に赴任するを嫌ひしこと、清和天皇貞觀十二年十二月詔して、國司以下京に留るものは、事力公解田を停め、光孝天皇仁和二年初して、國司の年を経て任國に赴かざる者の一階を降し、告身を奪ひ、醍醐天皇延喜廿二年國司任國に赴かざることを多きを以て、勅して檢數を加へ、京に留るものは解却したりしを以て、その一斑を知るべし、かく地方に赴かざるを以て、國司の代官即ち目代を、其の國に遣はして留守せしめ、國務を執行せしむることとなり、平安朝時代の末年院政時代に至りては、年給にて地方官を任ずるもの多く、即ち知行國は天下の大半に過ぎしを以て、留守所も隨うて多かりしと、諸國の文書によりて明かなり、建久元年三月源頼朝伊澤家景を陸奥國留守職とせしを以て、世或は留守所も、武家より任じたるが如く説く者あれど誤なり、此の時頼朝は勅許にて奥羽二國を知行したるを以て、留守職は頼朝國守として任命したるものなり、貞永元年十二月河越重資を武藏留守所總檢校職に任ぜしも、これ又北條泰時武藏守たりしを以

ルス

てなり、鎌倉時代末年より、南北朝時代に至りては、諸國の國司は皆武家の爲めに權力を奪はれて、其の實力なきを以て、留守所も自然に減じて、存するものは一二に過ぎざりき(國守が京都又其他の地にありて、其の國の留守所に命令するに、廳宣を以て守の政所より下す例なり、其の署判は知行國にありては大介某とし、其の他は守某としたり、而して留守所更に其の命を奉じて、其の部内の郡郷に下す例なり、然れども廳宣を以て、直に其の郡郷に下す場合もあり(新編常陸國誌、史學雜誌「留守所考」、同年給考)今左に廳宣留守所下文の一例を示す、廳宣 留守所 可任院廳御下文、御使國使相共、堺四至、打勝示、立券言上、太田庄事、右件庄、任院廳御下文之旨、御使國使相共、堺四至打勝示、可立券言上之狀、所宜如件、留守所宜承知、依件行之、以宣、 永萬二年正月 日 左衛門佐兼大介藤原朝臣(花押) 留守所下 世良東條 可早任院廳下文并御廳宣旨、堺四至勝立券言上、太田御庄事、 御使國使 右去正月日御廳宣今日到來、狀云、件御庄、任院廳御下文之旨、御使國使相共、堺四至打勝示、可立券言上之者、任御廳宣旨、御使國使相共、可立券言上之狀如件、宜承知、依件行之、以下、 永萬二年二月二十七日 敦信平朝臣(花押) 品治宿禰

ルス

源朝臣 清原真人(花押) 源朝臣 清原真人 惣大判官代清原真人(花押) 清原真人 目代皇太后宮權大夫藤原朝臣(花押) 呂宋 亞米利加合衆國の屬島、菲律賓群島中の最大なる島嶼、菲律賓群島中の最北端に位し、臺灣島に隣り、面積四萬零九百六十九哩(陸地)上代詳ならず、明の永樂三年(即ち後小松天皇の御宇應永十二年)國王が、其臣隔察老といへる者をして支那に朝貢せしめたること、和漢三才圖會に見えたるを初見とす、而して菲律賓諸島が歐洲人に知られしは、千五百二十一年、マカリアエンス、西班牙國王の許を得て、ラドロナ島に至り、更にミンダナ島の北に沿ひて同航し、アツアン河に入り、上陸したるに始まる、其後二十年を経て、フィリッポ王二世名譽の爲め、セント・ラザルス島の名を菲律賓と改む、紀元千五百七十年(正親町天皇の元龜元年)の頃、西班牙の水師提督レカスピエ、呂宋を征服せり、西班牙の領土と也、太守を置きて之を支配せり、千八百九十六年八月(明治二十九年)呂宋の南部カアイト州に於て革命軍起り、翌年遂に共和政府を建つ、一千八百九十八年に至り、米西戦争の結果、米國の領有に歸して以來、菲律賓總督を置きて、これを統轄し、其下に政務官として四名の米人三名の菲律賓人を任命し、以て上下兩院を組織し、一千九百零七年十月十六日初めて代議院を開くに至れり(突進)室町時代の末葉次第、我國民が海外渡航の、と著しく發展したるがゆゑに、呂宋地方に赴きたるもの、元より多かりしなるべし、而して泉州堺の商人榮屋助右衛門呂宋へ赴

ルリジ

き、文祿三年七月歸朝したることあれば、これより先既早く貿易を営みたるものありしこと明らかなり、されど未だ國際上の關係なかりしが、慶長六年十月呂宋太守はじめて書を通じ物を贈りしかば、徳川家康これに復書し、隣交を修するの意を傳へしより、爾來同太守と、家康及び秀忠との間に國書を交換したることあり、我國の商船にして彼の地に赴くもの、亦次第に多きを加へたり、蓋し江戸幕府にて發したる呂宋渡海の朱印は、慶長九年七月、平野孫左衛門に與へたるを以て、而して同十八年には、伊達政宗幕府に請ひ、其臣支倉常長を羅馬及び葡萄牙に遣はすや、途呂宋を過り、陰に其政教風俗を窺はしめ、元和二年常長歸朝の際にも、呂宋に立寄りたりき、猶島津侯も早くより呂宋と貿易を營みしと見え、之より先慶長九年七月呂宋の使來朝せる時、書を島津氏に致したることあり、南浦文集にも、同侯が呂宋に贈れる書簡の代作を載せ、文中貿易を求めしこと、また呂宋の商船が薩摩に來れることなど見えたり、然るに呂宋よりの國使は、十九年以來渡來せる事なきも、我國よりは、依然として渡航したりしが、寛永十三年國民の海外渡航を禁するに及びて遂に絶えたり、維新の後彼我の交通再び開けたるは、普れく人の知れる處なるを以て、今省略に従ふ(太閤記、外蕃通書、南浦文集、異國御朱印帳、徳川實紀、外交志稿)

ルリジヤク

瑠璃尺 物指(モノサシ)を見

レイカ

れ

レイカンジ

靈鑑寺 所在 山城國京都上京區鹿ヶ谷町○山城園城山宗廟臨濟宗、南禪寺の所轄に轉す、尼寺なり○本尊不動明王起原治草後水尾天皇承應二年に勅して建立せしめ、寺領百二十石を賜ふ、開基は靈鑑院尼なり、尼は後水尾天皇の皇女にして多利宮と稱す、はじめ如意山麓に如意寺あり、既に荒廢して、如意輪觀音及び靈鏡を存したりしが、之を本寺に遷し靈鑑寺と云ふ、其後皇族の女を以て天皇猶子とし、住職せしめらるゝを例とす、因て靈鑑寺尼宮と稱す(平安通志、京華要誌)

レイキ

靈龜 元正天皇御宇の年號、和銅八年九月二日、即位、時に左京人大初位下高田首久比麻呂、靈龜を獻じたるを以て名づく、二年を経て養老と改元す(續紀)

レイキル井テン

禮儀類典 卷數 五百十卷、附圖三卷、序、凡例、編次書目一卷あり(内省六國史以後、即ち李部王記を始め、室町時代文安記録に至るまで、二百五十六部の諸家記録中より、朝廷の禮法儀式に關する事を抄出し、之を類聚せるものなり、年中恒例の儀式は、正月の四方拜より、十二月追儺に至るまで十二部とし、臨時は踐祚より國忌奠葬追討等に至るまで、十二支を以て分類して十二部とす、分類の大體は類聚國史に據り、恒例を先にし、臨時を後にしたるは、西宮記、江次第に倣ひしなり、然れども本書は恒例臨時公事等の標目の下に、家記の

レイク

原文を抄出して集めたるを以て、古今儀式の沿革を知るには便利にして、朝儀を研究せんとする者には、欠くべからざる良書なれども、一も考案解説を施したる所なきを以て、初學者には解し難し、附圖は高御座を始め、御即位の調度、牛車等を、極彩色を施して集められたれば、參考となすに足る(諸君徳川光圀が大日本史編輯の傍、前右衛門尉爲實を總裁とし、眞享三年秋より彰考館にて編纂を始め、二十年を費して功成る、依て右大臣今出川公規によりて靈元上皇に奏覽し、公卿の批評を請ふ、上皇親感淺からず、辱なくも禮儀類典の題號を賜ひ、且つ秘記珍書を借下されたり、依りて光圀の孫綱條之によりて増補し、寶永七年八月に至りて成る(禮儀類典、群書一覽、國史學の葉)

レイクワン

禮冠 「ライクワン」を見よ、

レイケイデン

麗景殿 名義 大内裡の一殿、後宮にして、皇后、中宮、女御等の在所とす(所在) 承香殿の東北、宣耀殿の南に在り、西弘徽殿と相對す(標) 庭廣さ七間四面、南北の廂を合せば九間、四方に廂あり、西は廂の外に孫廂あり、北一間を闕く、其南端には階あり、承香殿の北廂の東に接す、また簀子あり、南北各三間の所に階ありて西庭に出づ、西庭は常寧殿の南庭と、立部を以て境と爲す、又南端一間の所に階あり、常寧殿片廂の東方に通ず、北は、廂と簀子とありて、北宣耀殿へ切馬道を以て接す、東は細殿にて中央に渡廊あり、東昭陽舎の北孫廂に續けり(大内裡圖考證)

レイゲン

例減 減(ゲン)を見よ、

レイゲンテンワウ

靈元天皇 名義 御名は識仁(榮)後水尾天皇の第十皇子なり、御母は新廣義門院藤原基子、第百十二代の天皇事蹟(寶)御年十歳にして後西院天皇の禪を受けて即位し給ふ、位

レイジ

にあること二十四年、改元すること四度、眞享四年三月位を皇太子東山天皇に讓り、正治三年八月薨襲、享保十七年八月六日崩す、御年七十九、京都市下京區今熊野町の月輪院に葬る(諸所記、野史、陵墓一覽)レイジン 伶人 雅樂を爲す人といふ、只に地下の召人のみならず、公卿の所作人をもまた爾かといふ、支那黃帝の時、伶人に命じ音樂を作らしめたるより、伶人伶官と稱するなりと云ふ、體源抄に、弘長元年六月十日十種供養記を載せて、伶人地下の伶人と分別せり、上の伶人は即ち公卿なり(書言字考、歌舞品目)レイシヨ 鈴杵 金剛杵(コンガウシヨ)を見よ、レイゼイ井ン 冷泉院(冷然院) 所在 山城國京都市大炊御門の南、堀河の西、方四町あり、舊址は、今の竹屋町より南、堀河より西、二條離宮の東北に當れりといふ(起原治草)弘仁年間、嵯峨天皇之を創設して冷然院と號し、後院(コホシ)と爲し、屢々行幸ありしが、讓位後(コホシ)に遷御し給へり、また弘仁亭ともいふ、尋で承和元年、仁明天皇もこの院を後院となし、九年内裏修造の故を以て遷幸せられ、明年また幸し、其後も屢々行幸あり、後ち文德陽成の二天皇も、後院に定め給ひ、陽成天皇のごときは、御讓位後六十三年間、仙洞となし給へり、之より先貞觀七年正月崩上したりしが、天曆三年十一月再び燒失し、天德四年竣工す、この時、冷然院の舊號を冷泉院と改め、中納言藤原師尹を別當に補したり、蓋し然の字、燃と通ずるが故に、火災の崇ありとの説あるを以てなり、既にして冷泉天皇の時、また後院となし、御讓位後久しく住せられたりが、天曆元年正月燒失せるがゆゑに、寛弘五年更に

レイゼ

遷營あり、八年冷泉上皇は茲に崩じ給へり、爾來數代の間後院とならざりしを以て、大に荒廢せしを、後冷泉天皇に至り、修造を加へて後院となし、天喜元年里内裏とせらる、其後の存廢詳かならず、なほ冷泉院は、累代天皇の上皇の渡領にして、累代の御物圖書并に所領等甚多かりき(平安通志、史學雜誌、後院考)レイゼイウチ 冷泉氏 姓は藤原氏、權中納言御子左爲家の四子爲相、始めて冷泉又藤谷と號す、其子爲尹權大納言正二位に昇る、二子爲之持爲あり、是より二流となる、嫡流を俗に上冷泉と稱し、持爲の流を下冷泉と云ふ、子孫共に家業を相繼ぎ、和歌の宗家たり、又蹴鞠の家なりしが、後は絶えたり、明治に至り華族に列し、上冷泉は伯爵を、下冷泉は子爵を授けらる(尊卑分脈、有職中抄、華族譜)(上冷泉)○爲相 爲秀 爲尹 爲之 爲富 爲廣 爲和 爲益 爲滿 爲賴 爲清 爲綱 爲久 爲村 爲泰 爲章 爲則 爲全 爲理 爲紀 爲系 (下冷泉)○持爲 爲政 爲孝 爲豐 爲純 爲勝 爲將 爲景 爲元 爲經 爲俊 爲宗 爲榮 爲訓 爲起 爲行 爲柔 爲勇レイゼイテンワウ 冷泉天皇 名義 御名は靈平(榮)藤原村上天皇の第二皇子、御母は中宮藤原安子(華)天曆四年七月村上天皇の皇太子となり、康和四年五月父天皇の崩後踐祚し、十月紫宸殿に即位す、紫宸殿にて即位すること茲にはじまる、

レイゼ

(これより先は大極殿を用ふ)安和二年播磨延等、不軌を圖るに座して土佐に流され、左大臣源高明また連坐して大宰權帥に左遷す(アノノヘン)參看)天皇東宮たりし時より多病にして、即位の後も時々發狂の氣あり、故に在位僅にして、位を關融天皇に讓り、冷泉院に遷り給へり、即ち尊號を上りて太上天皇といふ、寛弘八年十月二十四日崩す、壽六十二、京都市上京區鹿ヶ谷町の櫻木院に葬る(大日本史、陵墓一覽)レイゼイトミノコウチドノ 冷泉富小路殿 二條富小路内裏(ニテウトミノコウチノダイリ)を見よ、レイゼイマデノコウチノダイリ 冷泉萬里小路内裏 所在 山城國京都、冷泉の北、萬里小路の西、今は夷川の北、高倉の東に當れり(起原治草)もと藤原隆衡の第にして、後ち里内裏となれり、土御門天皇承元三年七月十三日隆衡の冷泉萬里小路第に幸し給ひし事百練抄に見えたり、古今著聞集に「仁治三年正月二十日の夜御元服、やがて内裏へいらせ給ふ、四條大納言隆親卿の家、冷泉萬里小路の里内裏なり云々」とあり、これは後嵯峨天皇のこととをいへるなれば、此時里内裏なりしこと明らかなり、尋で後嵯峨、後深草の兩院もこれを仙洞となし給ひ、後ち後宇多天皇弘安六年二月假皇居とし給へることあり、此の後ち代々大覺寺統に傳はれり(山城名勝志、平安通志、皇室御領史)レイゼイモン 禮成門 大内裏豐樂院十七門の一、院南面の門にて、豐樂門の東七間を隔て、位す、拾芥抄に「禮成門東方左廂門」と見えたり、レイゼイモン井ン 禮成門院 名義 孝子内親王(榮)後光明天皇第一皇女、母は庭田重秀

レイセー—レイフ

の女秀子 事蹟慶安三年十月十五日降誕、天和三年十二月内親王となり、寶永五年正月一品に叙せらる、享保十年六月二十六日三宮に准じ、院號を賜ふ、同日崩御、年七十六、京都市上京區般舟院前町盧山寺に葬る(門院傳、陵墓一覽)

レイセイモン井

禮成門院 名義藤原敏子

原敏子 事蹟西園寺太政大臣實兼の三女、御母は從二位藤原孝子 事蹟後醍醐天皇の中宮、天皇の未だ太子たりし時、入りて權子内親王を生む、文保二年四月從三位を授けられ、七月女御に進み、元應元年八月中宮となる、二年五月門院號を受く、元弘二年八月剃髮して尼となり、同三年六月院號を停めて中宮に復し、七月皇太后と爲り、十月十二日崩す、諡して後京極院と稱す(大日本史)

レイセ

禮錢 制札錢を云ふ、「セイサツ」の條を見よ、

レイフク

禮服 朝廷にては、大儀の時に着用する正裝を禮服といひ、ライフクと訓ず、即ち大禮服なり、又通常禮服として朝服(テウフク)制服(セイフク)あり、并に各條に掲げられたり就きて見るべし、武家の制は、鎌倉室町の兩時代とも、皆直垂を以て正裝をせり、江戸時代に至り、待從以上は直垂、四品は狩衣、諸大夫は大紋、重き役人は布衣、無位無官の士人は、素襖を以て禮服に規定し、なほ將軍宣下、轉任の拜禮、上洛参内、日光社参、大法會等、非常の大禮の時には、將軍以下諸大夫以上、皆衣冠束帶を着し、此他はいかなる盛儀にても、皆前に述べたる直垂以下を用ひたり、猶細目に至りては、各條下につきて見るべし(令義解、裝束集成、制度通、四季草、青標紙)

レイフシヤウ

禮部省 治部省(チアシヤウ)を見よ、

レイヤ—レウシ

ウ)を見よ、

レイヤウ井

靈陽院 足利義昭(アシカガヨシアキ)を見よ、

レウキケン

綾綺殿 名義大内裡の一殿、内宴妓女の舞等を行ふ所、また時々御在所となりしことあり、所在仁壽殿の東、宜陽殿の北に在り、温明殿と庭を隔て、接す、廣さ九間四面(長保年中以後、七間四面と爲す)北方四面を身舎に、南方五間二面を納殿として、恒例の御物を納む、東西の両面及北は廂にて、西廂の中央に三級の木階あり、且つまた孫廂あり、東は廂の外に簀子ありて、北端に格子を設く、其中央に土の渡殿ありて温明殿に接し、又南端に渡殿を以て續けり、南は土庇にて、壁を隔て、官人座及び床子座あり、北は身舎の北面のみ廂にて、他は土庇となす(大内裡圖考證)

レウケン

寮元 禪宗の僧役、寮寮に關する雜務、即ち寮の經文、什物、茶湯、柴炭、洒掃等を掌る、其下に寮長、寮主あり(又知寮とも云ふ)皆寮元を輔佐す、侍者の類なり、又別に副寮、望寮なり(較修清規、禪林象器箋)

レウシ

寮試 眞擧(コウジ)を見よ、

レウシバコ

料紙箱 料紙を納る、箱を云ふ、古くは草子箱と同物なりしが、後世料紙のみ納るゝ爲に作りたるもの出来しより、全く別物となる、室町殿日記に「御入用御注文之事、一料紙箱、桐もくいかにも、見事によき所を撰びて赤ために塗り、一寸四方の丸づくし金粉にて書かせらるべく候、いくつなりとも模様よきやうにして云々」とあり、調度(テウド)の挿繪參看(眞丈雜記、類聚名物考)

レウシユ

寮主 「レウケン」を見よ、

レウソク

料足 錢の別名、眞丈雜記に「錢を

レウワ—レンガ

料足とも要脚とも云、女の詞におあしと云事、料は物の代物の心也、要はかなめとよみて、此の物なくしてはならぬ心也、足も脚もあしとよむ字、錢の世上なめぐりありく事、足あるがごとし、依之料足要脚など、云也といへり、

レウワウ

陵王 名義舞樂の一、北齊蘭陵王入陣の曲にして、沙陀調十五曲中の一、一名羅陵王、又蘭陵王と稱す、古樂にて中曲なり、賭弓、競馬、相撲等の節會に奏するを例とす(〇亂序舞に從ひて吹く、破拍子十六、舞者一人、答舞納蘇利起原)

レウケン

列見 名義朝廷にて、六位以下の器量容儀を列見する儀式をいふ、儀式 毎年二月十一日、太政官にて行ふ、此日式部兵部の二省より、六位以下の藝能あるものを率ゐて太政官に参じ、上辨、外記等其器量容儀を試みるなり、定考(カウヂヤウ)參看(公事根源、江次第)

レンガ

連歌 名義一首の短歌を上下の二句に分ち、兩人にて合作したるをいふ、他の一句に連れて歌と爲すの意なり、えびす歌とも筑波の道ともいひ、またツラネウタとも訓ず、筑波の道といへるは、日本武尊の筑波の詠を起原とするが故なり、また多數の連歌を互に連續して詠じたるを、其數によりて、五十韻連歌、百韻連歌と稱し、なほ短歌の上句若しくは下句と、五言の詩句とを聯合せるもの

レンガ

(句法) 句を連句と稱し、和句前にして、漢句後なれば和漢連句、漢句前にして、和句後なれば、漢和連句といふ(起原沿革) 上古の連歌は、片歌を以て問ひ、片歌を以て答へ、其問答を合せて、一の旋頭歌(セダウカ)參看)を爲したるものにして、神武天皇が「あめつ、ちとりましと、などさけるとめ」といへるに、大久米命が「なとめに、たににあはんと、わがさけるとめ」と答歌せるを初見とす、されど古來概ね日本武尊が甲斐國酒折宮にて「にひびり筑波を過ぎて幾夜かねつる」といへるに、御火焼の老人が「か、なへて、夜には九夜日には十日を」と答へしを以て連歌の起原となしたり、これ旋頭歌は廣く流行せしめて止み、後世専ら三十一文字の詩形行はれたるが爲めなるべし、要するに此種の連歌は、連歌と稱するよりは、三句を以て一體を爲す歌の贈答と見る方適當なるに似たり、而して三十一文字の歌を、二人して連れたるは、某尼が「佐保川の水を塞ぎあけて植ふし田を」といへるに、大伴家持が「霜るはつひはひはひとりなるべし」と續けたるを初見とす、尋で「人心うしみつ今はたのまじよ」と女のいひおこしたるに、眞峯宗貞が「夢にみゆやとれのみぞなく」續けたる、齊宮が「かち人のわたれどぬれぬえにしあれば」といへるに、在原業平が「またあふ坂のせきや、えなん」と續けたる、ことなどあり、連歌は遂に短歌の上句を唱へて下句を續ぎ、或は下句を擧げて上句を加ふるを以て、其體となすに至りしが、其はじめは一の遊戯に過ぎざりしも、中世以後之を既ぶもの漸く多く、後撰拾遺等の勅撰歌集中にも、稀には、これを載せ、金葉集には、特に連歌の名稱をさへ設けて收録せり、其後又之を接續連鎖する事起り、少きも數十句、多きは千句、萬句に及び、衆人にて合作するに至る、蓋

(句法)

し詩の聯句に徴へるなり、而してその事の書に見えたるは、續世續花の巻に、くさり連歌とあるをばはじめとし、尋で後鳥羽天皇の時、源家長が、源氏國名の百韻連歌をなし、また建保五年四月後鳥羽上皇、庚申百韻連歌を催され、藤原家隆等勤仕し、なほ寛喜二年正月禁中にて百韻連歌あり、藤原定家等勤仕したる事あり、其後の道益々盛んにして、歌に亞げる一種の文藝となり、朝野共に、屢々連歌會を催し、賭物をおきて、句數の多少を争ふことなれり、尋で藤原爲世、同爲相等は、連歌の法式を定めたりと傳へられ、其後應安五年には一條良基、救濟、周阿等と謀りて新式を作り、享徳二年には、一條兼良、宗相、更に今案を加へ、連歌の法式大成せり、而して其法式は、百句を程度として定めたるものにして、懷紙を堅に二折として、表裏と爲し、更に横に四折とし、表裏に各十四句づゝを書し、最終の表と最終の裏とは、各々八句づゝと爲す、なほ句を作るに法あり、之を連接するに差合去嫌等の式あり、また和漢連句には、漢句のみに韻を踏み、漢和連句には、和漢共に韻を踏み、而して室町時代には此の道に巧みなるもの、救濟、周阿をばじめ、梵燈、宗相、心敬、兼載、宗祇、宗長、紹巴等相尋で起る、いづれも斯道の宗匠にして、世に連歌師といひ、宗匠の最たるものを花の本(ハナノモト)參看)と稱す、なほ公卿にありては、上にいへる二條良基、一條兼良の外、一條冬良、三條西實隆等皆此道に深く、良基は萬葉集を撰び、冬良、實隆は宗祇等と共に新撰萬葉集を撰び、共に勅撰に准ぜらる、されど江戸時代に入りては、連歌より出でたる俳諧(ハイカイ)參看)俳諧より出でたる發句(ホツク)參看)流行し、遂に

(歌法の歌連)

其爲めに壓せられ、僅かに里村紹巴の末裔が、連歌師として幕府に奉仕し、其命脈を維持するに過ぎざりき(古事記、萬葉集、明月記、連歌辨義、筑波問答、萬葉集、石上私淑言、古事類苑文學部)

レンガハジメ

連歌始 名義室町江戸兩幕府年中行事の一、例年歳首に、はじめて催す連歌の會をいふ、行事 室町幕府にては、正月十九日に行ふ、年中定例記に「攝家門跡、公家、大名、御供衆、番方、同朋、地下衆の内、堪能の人祇候、殿上人御祇候、御酌御配膳武家、地下衆は五十韻過てまかり立て、かげにて御湯濱賜はられ候」と見ゆ、江戸時代には、正月十一日(はじめ二十日)に江戸城連歌の間に於て之を行ふ、百韻の連歌にして、發句は連歌師里村氏、脇句は必ず將軍の吟に係る、連歌師、連衆等皆登城して席に列し、執筆之を披講す、將軍は黒書院より竹の廊下を傳ひ、白書院の後に暫らく立御ありて、句毎に吟するを聽聞す、畢りて連歌師連衆には銀時服を賜ふことあり(起原沿革) 室町幕府にては、いつ頃より行ひしものか詳かならず、江戸幕府にては、家忠日記天正四年正月二十日の條に「連歌の御會あり(去年天正三年より今日の連歌の會を始め催さる、是より例として毎年此式あり)」とあれば、天正三年以後恒例となり、毎年正月二十日に行ひしものなるべし(天文十一年二月松平廣忠夢想の句を得、これを基として百韻の連歌を行ひしに濫觴すとの一説あれど確ならず、廣忠が同年に連歌を行ひしことは、或は之ありしならんも、其後引つゞきて行はれしにあらず) 然るに三代將軍徳川家光正月二十日に薨じ、忌日に當れるを以て、承應元年より改めて十一日と爲したり(〇江戸幕府にて連歌の事を掌るものを連歌師といひ、連歌始の事も、此職のもの勤仕す、連歌

レンガ

レンガ

レンギ

師は里村氏(昭巴の後裔)坂氏世襲せり、里村氏は京都に住し(連歌始の時のみ出府す)本家は百石二十人扶持を給せられ、坂氏は江戸根岸に住し無給とす、大抵兩氏の人員五六名あり、稀に連衆の故參にして、連歌師となれるものなきにあらず、なほ別に連歌始の時登城して、連歌の列に加はるるものを連衆と稱す、多くは神官僧侶を以てこれに補す、人員十人内外あり、并に無給とす、また連歌師連衆は共に寺社奉行の支配なり(年中定例記、家忠日記、慶長見聞案紙、武徳編年集成、平日閑話、徳川實紀、幕朝年中行事、武鑑)

廉義公 藤原頼忠をいふ、二人以上にて、各々一句を案じ、合して一首の漢詩を爲すものなほ、所謂寄り合作りの詩なり(起原)

廉義公 藤原頼忠をいふ、二人以上にて、各々一句を案じ、合して一首の漢詩を爲すものなほ、所謂寄り合作りの詩なり(起原)

連華光院 所在山城國葛野郡安井○安井門跡と稱す(真言宗、大覺寺派)後白河天皇の皇女亮子内親王(殷富門院)創建する所、土御門天皇の皇子道圓法親王入嗣後、歴代法親王門跡たり、元祿年中觀勝寺に併せ、大徳寺の管する所となる、明治初年全く廢絶す(山城名勝志)

レンゲ

韻、餘可追舊例之由、豫以仰宗隆、仍連句有二三十韻ことあれば、古くは五韻に留まりしものなるべし、なほ其法は、詩體に「今言ふ聯句に、和製にして漢法にあらず、連歌より出でたるにや、韻法限りあり、多く隔句對にて起す、隔句對ならざるを獨句と云、平側詩の通り、先唱ふものを唱句と云、繼者を對句と云、其法頗る詩と異り、皆此方の造爲なり、故に風城聯句の序にも、本朝之準式、有異于殊域、也と書けり」と見えり、(作詩志、詩體、聯句、靈峯文集、嬉遊笑覽)

蓮華光院 所在山城國葛野郡安井○安井門跡と稱す(真言宗、大覺寺派)後白河天皇の皇女亮子内親王(殷富門院)創建する所、土御門天皇の皇子道圓法親王入嗣後、歴代法親王門跡たり、元祿年中觀勝寺に併せ、大徳寺の管する所となる、明治初年全く廢絶す(山城名勝志)

蓮華峰寺 後宇多天皇、及び龜山天皇皇后藤原信子(御陵、土人八角堂)稱す、山城國葛野郡嵯峨村大字上嵯峨に在り、初め後宇多天皇、八角堂を蓮華峰寺に造り、五輪塔を設け、遺詔して御骨を塔の中心に安せしむ、又龜山、後二條の二天皇及び京極院、遊義門院の遺骨を、其四隅に置かしむ、兆域面積六百九十五坪餘(山陵志、禮樂志、陵墓一覽、平安通志)

レンサ

此地はもと法住寺殿の西北部に在り、元暦二年七月地震の爲め破損し、其後建長元年三月炎上し、同三年再建して、八月十日上棟式を行はる、文永三年四月龜山天皇、後醍醐、後深草兩上皇臨幸、供養式を行はる、今の堂宇は建長三年の營築にして、東西行六十五間二尺三寸、梁行九間一尺八寸五分、柱百五十八本あり、堂内を分ち、西を佛壇とし、中央を本尊脇尊の座とし、南北を千體佛の座となす、東は拭板敷にして、中央の東に前拜あり、行行十三間三尺四寸、梁行二間三尺八寸餘、四方に廻廊あり、本堂の裏にて古昔射式を行ひたり、南門西門亦數百年前の古建築なり、西門は大門の崩門と移したりしが、京都帝室博物館設立の際、之を東寺に稱したれば、今は存せず○三十三間堂の通矢は「サンジフサンゲン」の條に述べたり、參看すべし(山城名勝志、平安通志、京華要誌)

連座 名義 犯罪者に連帶して、其罪の責任を預つるを云ふ(油草)王朝時代の制、同司官人の中に、公犯を犯す時は、四等連座の法に據るものにして、所由を以て首とし、餘を從とす、假令ば主典所由ならば主典を首とし、判官を第二從、次官を第三從、長官を第四從とし、其等差に従ひて罪を科せり、鎌倉室町兩時代には、定まれる規制なかりしがごとし、江戸時代には、犯罪地の家主、五人組、及び名主、組頭、其罪に座したり、但し罪の輕きは連及することなかりき、また重罪のものは、其妻子眷族皆之に連座する定なりしも、八代將軍徳川吉宗の時、庶人に限りて、これを停めたりき(徳川實紀、古事類苑法律部)

輦車 名義 人の手して輓く乗用車を云ふ、手車、腰車、小車とも云ふ 後世輿を風

レンギ

輦、忍花輦と云へるは本義を誤れるなり、勅許を蒙りたる者、之に乗じて宮城の中重門を出入するが故に、中重の輦とも云ふ(制度)天皇行幸の時に用ふ、なほ東宮、親王、攝關、大臣、妃、夫人、内親王、命婦、三位の輦、女御等も乗用すことを得、備にては、大僧正又は護持僧等老の輩、宣旨を以て乗用を聽さる、其宣旨を手車の宣旨と云ふ(製作)唐車に似て底稍々異れり、屋形は長五六尺に作り、障子六枚輓を以て造り、輓と輪とは輓を用ひ、柱と勾欄とは輓と輓にて造る定なり、輪は少く、そばは廣く、前狭くして、脇より乗る様に造れり(起原)起原詳かならず、承和六年六月仁明天皇の女御藤原澤子病篤きにより、小車にて禁中を出で、同九年八月廢太子恒貞を淳和院に送りし時に、小車に駕せしめて禁中を出だし、神泉苑の良の角にて、牛車に乗替へしめたることなどあれば、此頃より行はれしものなるべし、なほ源氏物語更衣巻に「輦の宣旨などの給はせても云々」と見えたり、また中右記元永三年三月十九日の條に、中宮出御の時、手車に手を掛けしことあれば、牛にて引くことありしものなるべし、後ち攝關大臣等の乗用せしこと長秋記、台記、玉葉等に見えたり(輿車圖考、類案名物考、考古學會雜誌、乘物考)

レンギ

連署 名義 鎌倉幕府の職名、執權を補助して政務を聽斷し、是非を裁決することを掌る、執權と共に政事を決斷し、署判を公文(政所の下文、又訴訟裁決の時下す公文、又領邑を宛行ふ時の公文等)に加ふるが故に此名あり(署とは官姓名を記すをいひ、判とは花押を記して證とするをいふ)また連判、加判、合判ともいひ、執權と併せて、兩執權、兩執事、兩後見、兩探題ともいふ(起原)起原元仁元年北條泰時が執權たりし時、叔父北條時房を連署に補

レンゲ

したるをばはじめとし、元弘三年五月北條時時が、一門と共に滅亡せしを最終と爲す、其間時に數年の間空職の事なきにあらずと雖、それは異例にして、北條一家の輩、交々これに補し、或は執權に進む者ありき、なほ清和源氏系圖に「賴行男宗頼、兵庫頭、將軍家司、政所御下文連署人數」また「賴兼男賴茂、右馬頭、昇殿、政所家司、連署人數」などあれば、これらはた源氏の近臣たるを以て、鎌倉にありし時政所に列し、公文に連署したるものにして、所謂連署の職とは異なり、建久年間源邦業、藤原親能が下文に連署したることあると、同じ類なるべし(吾妻鏡、將軍執權次第、武家名目抄)

レンゲ

連錢葦毛 馬の毛色の名、葦毛に淡濃灰色の圓き斑あるをいふ、斑文連りて錢の如くなる故に名づく、又トラゲともいふ、和名抄に「連錢驄、漢語抄云、連錢驄虎馬也、一日、駿馬又曰、瀟漢馬今按、俗連錢葦毛是也、また字彙亥集に「驪、唐何切、音駝、音黒有斑、如魚鱗所謂連錢驄俗、呼、圈子青、平家物語宮の御さいこの條に「あしかがが其日の裝束には(中略)重藤の弓もて、れんせんあしげなる馬に云々」などあり、また吾妻鏡文治二十年十月秀衡貢馬京進の條にも、連錢葦毛の名見えたり、此外源平盛衰記等にも散見せり、馬(ウマ)并に其挿繪參看、

レンサ

連着鞆 鞆の一種、總を連れ列べて着けたるものを云ふ、貞丈雜記に「れんぢやくしりがい」と云ふは、大ぶさ小ぶさの總名なり、延喜式(彈正式)に云く、凡六位以下、鞍鞆總不得連着、但聽著、鞆衛及後末一云々、此の心は延喜年中の法に、六位以下は鞆の總を並べつられて付けたるをば、用ふる事をゆるさず、但鞆の辻の所と、鞆の端とに

レンギ

連着鞆 鞆の一種、總を連れ列べて着けたるものを云ふ、貞丈雜記に「れんぢやくしりがい」と云ふは、大ぶさ小ぶさの總名なり、延喜式(彈正式)に云く、凡六位以下、鞍鞆總不得連着、但聽著、鞆衛及後末一云々、此の心は延喜年中の法に、六位以下は鞆の總を並べつられて付けたるをば、用ふる事をゆるさず、但鞆の辻の所と、鞆の端とに

レンゲ

連着鞆 鞆の一種、總を連れ列べて着けたるものを云ふ、貞丈雜記に「れんぢやくしりがい」と云ふは、大ぶさ小ぶさの總名なり、延喜式(彈正式)に云く、凡六位以下、鞍鞆總不得連着、但聽著、鞆衛及後末一云々、此の心は延喜年中の法に、六位以下は鞆の總を並べつられて付けたるをば、用ふる事をゆるさず、但鞆の辻の所と、鞆の端とに

レンサ

連着鞆 鞆の一種、總を連れ列べて着けたるものを云ふ、貞丈雜記に「れんぢやくしりがい」と云ふは、大ぶさ小ぶさの總名なり、延喜式(彈正式)に云く、凡六位以下、鞍鞆總不得連着、但聽著、鞆衛及後末一云々、此の心は延喜年中の法に、六位以下は鞆の總を並べつられて付けたるをば、用ふる事をゆるさず、但鞆の辻の所と、鞆の端とに

レンバ―レンモ

頼る、蓋し三井は叡山と疎あるを以てなり、此間また常に堅田金森に往來して盛んに教を演べ、後東國及び攝河の地に巡遊す、應仁二年再び近江に歸り、明年寺を南別所に創む、近松顯證寺これなり、文明三年四月感ずる所あり、飄然去りて北陸に赴き、越前吉崎に一字を建つ、遠近其風を傳へ、遙に奥羽に至るまで、男女老若聚り來るもの多し、蓮如此地にあること五年、力を盡して祕事法門の邪義を推き、努めて諸宗誹謗、諸神輕蔑の弊を矯む、時に加賀國司富樫政親、專修念佛の徒相黨して武人に抗するを惡み、事によりて之を平げんとするの意あり、文明六年政親人をして密に火を吉崎坊に放ちて燒かしめ、且蓮如を害せんとす、蓮如即ち文明八年八月密に若狹に遁れ、轉じて攝津に赴き、更に河内紀伊の諸國に行化し、出口の光善寺、富田の教行寺、堺の信證院等皆此間に成る、十年また江州に入り、明年山城宇治山科に佛殿を營みて本寺となし、十四年に至りて成る、松林山本願寺と號す、延徳元年寺務を光兼(實如)に委して南殿に居り、明應五年九月攝津石山に別院を創立して隱退の處となす、八年二月廿五日山科に寂す、年八十五、蓮如の人を導くや、其言を簡易にして法要を説き、無智の民をして、皆能く教義の真意に透徹するを得せしめたり、世に本願寺の中興と稱す、其孫國如が、蓮如の遺簡八十通を撰び、編して五帖となす、御文と稱するもの、これなり、其他帖外御文七十四通あり、また夏御文、改悔文、白骨の御文等の如き、只一片の書牘の如しと雖、また本宗重要な憑據たり(佛教各宗綱要、日本佛教史綱)

レンモンケフ 連判 連署(レンシヨ)を見よ、連門教 神道(シントウ)を見よ、

ロウキ―ロウコ

ろ

ロウキヨ 籠居 武家時代に於ける刑名、自宅に籠りて謹慎するをいふ、後鳥羽天皇の文治元年に、高階泰經が勅定により籠居したるを以て初見とす、江戸時代には、公卿并に士人に科したり、但その以前にありても、庶人を處したること書籍に見當らざれば、同じく公卿武人に限りたるもの、ことし(吾妻鏡、古事類苑法律部)

ロウゲシヤク

鏤牙尺 物指の一種、唐の尺にて、大和國法隆寺に藏する象牙尺は、是なりといふ、遣唐使歸化人などの持ち來りしもの、寺家に入りしが、傳はれるならん、象牙尺(ザウゲシヤク)「モノサシ」參看、

ロウコク

漏刻 時を計る器具、水時計ともいふ、(詳註)詳かならず、澁川景祐の記す所によると、水を入るゝの箱四つあり、第一箱を夜天地、第二箱を日天地、第三箱を平壺、第四箱を萬水壺と稱す、高さ遞下して相連び、水漏の管ありて箱と箱とを連續せり、まづ水を第一の夜天地に注ぎ、其水漏れて日天地に入り、次で平壺に入り、終りに萬水壺に入る、萬水壺の海水には箭を立てたり、故に壺中水なきの間は、箭羽の本まで壺中に没すれども、水の入るに從ひ、矢浮び出づるなり、箭には時刻を刻みれば、それによりて刻数を量る、時刻の分ちかた又詳かならざれども、天智天皇の時に造られしもの、唐製を模したるものなれば、百刻なりしなるべし(原注)

ロウコクハカセ

漏刻博士 名(名)トキモリノハカセとも又トキモリツカサとも云ふ、唐名司辰、又司辰、司刻とも云ふ、(原注)守辰丁を率ゐて漏刻の節を伺ひ、守辰丁に鐘鼓を打たしむ、從七位下の官二人を以て定員となす、陰陽寮の被管(原注)文武天皇の大寶元年制定す、後世權博士を置く、陰陽寮五位六位の輩を以て之に任ず(令義解、職原鈔)

ロウケフ

六衛府 左左兵衛府、左右衛士府、衛門府、中衛府を云ふ、衛府(エフ)及び各條參看、

ロウラン井

鹿苑院 足利義滿(アシカガヨシムツ)を見よ、

ロウランジ

鹿苑寺 所在 山城國葛野郡衣笠村(原注)臨濟宗、相國寺派の本尊正觀音(原注)舊と西園寺氏の別荘なりしが、應永四年足利義滿の地に別業を營み、義滿葬するに及び、遺命して禪刹となし、相國寺に附す、殊石を追尊して、開山となす、爾來本寺を北山門跡と唱へしが、應仁永

祿兩度の兵火に罹り、金閣、不動堂を除くの外、總て燒失し、甚だ荒廢せり、風林住持の時、後水尾法皇の勅命を蒙り、寛文元年九月二十九日行幸あり、此時新に夕佳亭を建て、此にて御遊ありと云ふ、延寶六年同帝の寄附により、本堂、書院等を再興し、今日に及べり、金閣(キンカク)參看(山城名勝志、平安通志)ロクカウウチ 六郷氏(出羽本庄) 姓は藤原、爲憲七世の孫二階堂行政の子行忠より出づ、九世の孫忠行、寶徳元年政所執事となり、評定衆に加へらる、其二男定行、出羽仙北郡六郷の地頭となる、男道泰、六郷阿波守と稱し、居城を六郷に築く、二男道行、天文十九年最上出羽守に仕ふ、其子政策、慶長五年上杉景勝の叛するや、徳川家康に通じて軍功あり、七年五千九百石加賜せられて、常陸府中に治す、元和九年一萬石加賜、出羽本庄に移る、前封と合せて二萬四百石、寛永九年政勝、四百石を弟政秀の子政慶に分封す、子孫相繼ぎて明治に至り、華族に列して子爵を授けらる(藩翰譜、徳川加除封録、華族諸家傳、華族譜)

政乗 政勝 政信 政晴 政長 政林

政純 政恒 政殷 政鑑

ロクキ 六議 王朝時代に於て議の特典に與るを得べき議親、議故、議賢、議能、議功、議貴の六種をいふ、(キ)の條を見よ、

ロクグワツエ 六月會 延暦寺の勅修法會を云ふ、六月四日は傳教大師最澄の入滅したる忌日なれば、毎年當日より五日間、延暦寺に於て、法華十講を行ひ論議あり、六月に行ふを以て、六月會と稱す、建保二年五月六日勅して御齋會に准ぜられ、同廿七日勅使登山し、爾來勅修の汁會となり、毎年嚴

ロクコ―ロクケ

修せらる(拾芥抄、皇朝天台史略)ロクサイニチ 六齋日 佛徒が毎月謹慎すべき六種の日、即ち八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、晦日といふ、齋は物忌の義なり、この日人々殺生を停め、精進を行ふ、蓋し佛説に、右の六箇日は、惡鬼人を逐ひて命を奪はんとし、疾病凶衰等不吉の事多しといへり、故に持齋して善を修し、福を作らんとするの意より、かゝる風を生じたるなり阿含經に「若當ニ六齋日、奉持入戒、一日一夜、福不可勝」と見ゆ、持統天皇五年二月公卿等に詔し、六齋を行はしめしを以て、我國における六齋の起原となす、これ實に聖徳太子の奏請に係る、水鏡、太子傳等に於れば、天下に令して殺生を禁じたりとあり、尋で大寶の令制、また六齋日は公私とも殺生禁斷の事を規定せり(書紀、水鏡、律語集覽、日中行事注解)

ロクサウ

縁衫 襲の色目の名、雜事抄には、表袖裏蘇芳、助無智秘抄には裏紫といへり、

ロクジカリンホフ

六字河臨法 名(名)千手觀音を本尊とし、六字の眞言を唱へて修する法を云ふ、六字は即ち六觀音にて、利六趣ある故に六の名あり、河に臨む時船を以て道場となし、七福の祓あり、此法に弓箭刀鏡結線不斷等あり、經に「若有人誦持此六字神咒王經、假令咒枯樹、可得還生枝葉、何況人身使某甲得受三百歲、得見百秋、諸佛所說阿難所持」とあり(原注)慈覺大師唐より之を受傳へ、後中絶し、阿彌陀房眞靜之を再興す、天喜元年三月聖朝の爲め仁退律師之を修す、康平七年三月六日原原忠實の第に於て、長安僧都之を修す、承暦四年閏八月二十二日繪旨により、但馬守藤原俊綱臥見の別業に於て、金剛壽院座主覺尊之を修す、嘉

ロクシヤク

六尺(陸尺) 江戸時代駕籠昇の人足、または下男の類をいふ、乗物の棒は一丈二尺なり、是を二人して昇ぐ故に、二つにわれば六尺なるより名づくとも(私かた語)田舎は一間を六尺にとれど、都は間尺を六尺三寸と取る故、亭主をば都六尺三寸の間にとり、使はるゝ男を田舎六尺にとりたるなりとも(醒睡笑)駕籠昇は大漢を好しとする故六尺といふとも(遊遊笑)力者の轉訛なりとも(梅園日記)稱し、其名義詳かならず、江戸幕府にて使用せる六尺は、駕籠昇、御膳所の水汲、或は駈使等の事を役とし、紅葉山高盛六尺廿八人、賄六尺三百八十八人(頭四人)西丸賄六尺百十三人(頭三人)奥六尺五十人、西丸奥六尺五十人、表六尺四十九人、西丸表六尺四十四

ロクサ―ロクジ

ロクジ

永元年限宣によりて、鳥羽殿に修す、建保中鎌倉に於て、忠快法師之を修す(諸法要略抄)ロクジシヤ 六侍者 禪宗にて和尙に近侍する六種の僧役の總稱、一に巾瓶、二に應客、三に書録、四に衣鉢、五に茶飯、六に幹辦なり、是等は常に和尙の室中に近侍して各分擔して和尙の用を辨するなり(禪林象器箋)

ロクジフロクフ

六十六部 廻國巡禮の一種、法華經一部づつを全國の靈場に納むる事を、本願として廻國せる行脚僧をいふ、總計六十六部の經文を納むるが故に名く、此事桂川地藏記に見えたり、室町時代より起りしものなるべし、江戸時代には僧俗ともに之を勤め、中には妻子を率ゐたるものあり、經文は、國分寺もしくは一の宮に納めたりといふ、されど其多くは納經等のことなく、只廻國して乞食するに過ぎず、其風俗も、天蓋を頂き、白衣を著し、笈を負ひ、錫杖を携へたり、「ジユンレイ」參看(倭訓栞、俚言集覽)

ロクシヤク

六尺(陸尺) 江戸時代駕籠昇の人足、または下男の類をいふ、乗物の棒は一丈二尺なり、是を二人して昇ぐ故に、二つにわれば六尺なるより名づくとも(私かた語)田舎は一間を六尺にとれど、都は間尺を六尺三寸と取る故、亭主をば都六尺三寸の間にとり、使はるゝ男を田舎六尺にとりたるなりとも(醒睡笑)駕籠昇は大漢を好しとする故六尺といふとも(遊遊笑)力者の轉訛なりとも(梅園日記)稱し、其名義詳かならず、江戸幕府にて使用せる六尺は、駕籠昇、御膳所の水汲、或は駈使等の事を役とし、紅葉山高盛六尺廿八人、賄六尺三百八十八人(頭四人)西丸賄六尺百十三人(頭三人)奥六尺五十人、西丸奥六尺五十人、表六尺四十九人、西丸表六尺四十四

ロクシ

人、御用部屋六尺八人、西丸御用部屋六尺六人、御膳所六尺四十人、西丸御膳所六尺廿八人、奥御膳所六尺廿八人、御膳中御膳所六尺九人、御風呂屋六尺十二人、西丸御風呂屋六尺八人、梳方六尺五十八人、西丸梳方六尺等あり、役切米、役扶持、役金等を給せられたり、また六尺給米といふものあり、六尺に給する爲に幕領に課したる米にして、所謂三役の一なり、サンヤク(参看(吏徴))

ロクシヨウジ

六勝寺 法勝、尊勝、圓勝、辰勝、成勝、延勝の六寺を云ふ、この六寺は皆勝の字を用ふるを以て世に於ては稱す、各條参看(拾芥抄)

ロクシヨノミヤ

六所宮 古(國府)もしくは國府の附近に、其國內の神社六所を集め祀りたる社所をいふ、國によりて總社(ソクシヤ)と稱す、境内に其社を建て、或は總社の相殿別殿などに祀りたるもありき、而して其神の明神たる時は六所大明神、または六所明神、權現なる時は六所權現、大神なる時は六所大神などと稱す、出雲國意宇郡大草村の六所大明神は同郡なる熊野神社、佐久佐神社、揖夜神社、神魂神社、伊井諸神社、八重垣神社を合祀し、武藏國府中なる六所宮は總社の相殿に、小野神社、小河大明神、水川神社、秩父神社、金佐奈神社、杉山神社を合祀せり、此事何時に始まりしか詳ならず、とも、源平盛衰記、平家物語、吾妻鏡等に六所宮六所大神など見えなれば、平安朝時代の末年に於て、此風既に生じたりしことを知るべし、後世、これを總社と混合し、或は總社六所と稱し、或は六所宮を總社となしたるもの尠ならず(總社或問)

ロクシライサン

六時禮讚 卷一 內容晝夜六時に、阿彌陀佛を禮讚する文を集め、其作法を記したるものなり、表題に往生禮讚偈とあり、

ロクツウ

内題に「勸一切衆生、願生西方、極樂世界、阿彌陀佛國、六時禮讚偈」とあり、法然上人源空淨土教を主唱し、殊に善導を推尊し、其言を弘通したれば、諸弟子是等の書を讀誦し、殊に悲哀なる音聲を放ちて、此六時禮讚を唱へたりといふ、舊唐の僧善導(往生禮讚、法然上人傳畫傳、徒然草)

ロクツウ

六通 佛教所説の佛界六種の作用をいふ、六神通の略、惠遠の無量壽經疏に「所爲神異故名曰神、無壅曰通」とあり、神變不可思議の作用自由自在にして、壁塞することなき義なり凡佛陀には、六種の神通あり(一)天眼通、能く六道の衆生の苦樂昇沈、及び一切世間の種々の彩色を見して障礙なきこと(二)天耳通、能く六道の衆生の苦樂悲喜の言語、及び一切世間の種々の音聲を聞いて障礙なきこと(三)知他心通、能く六道の衆生の心中に思念する事を知了すること(四)宿命通、能く自身及び六道の衆生の一世二世乃至百千萬世の宿命を知ること(五)身如意通(一)に神通通と云ふ身能く山海に飛行して障礙することなきこと(六)漏盡通、漏とは煩惱のことにして煩惱を斷盡して三界の生死を解脱すること、これなり(法界次第)

ロクテウウチ

六條氏 姓は村上源氏、久我通光の五男通有の男有房、始めて六條と號す、其第六條に在るを以てなり、元應元年六月内大臣となり、位從一位に至る、同年七月薨す、子孫世々相つき大納言を極官とす、明治に至り、華族に列し子爵を授けらる(尊卑分脈、系圖、華族譜)

有繼

有繼 有廣 有純 有和 有綱 有忠 有隆 有起 有榮 有庸 有家 有言

ロクテ

有容 有義 有照

ロクテウテンワウ

六條天皇 名は順仁、二條天皇の第二皇子、母は伊岐氏、致遠の女、中宮藤原育子、子なきによりてこれを育ふ、第七十九代の天皇、長寛二年十一月十四日生る、永萬二年二條天皇不豫により、六月二十五日皇太子となり、即夜高倉殿に受禪し、七月二十七日即位す、後白河上皇院中において政を聽く事舊のごとし、仁安三年二月後白河上皇の命により、位を高倉天皇に譲り、太上天皇の尊號を受く、いまだ元服を加へずして太上天皇と稱する、天皇を以てははじめと爲す、在位三年、改元するもの一、安元二年七月十七日崩す、壽十三、京都市下京區清閑寺町の清閑寺陵に葬る(大日本史、陵墓一覽)

ロクテウドノ

六條殿 藤原基實及び藤原頼實を云ふ、

ロクテウドノ

六條殿 所在 山城國京都六條の北、西洞院の西(起原)とも曰大膳大夫平業忠の第宅なりしが、壽永二年十二月後白河法皇、の第を以て仙洞とし、修造を加へ移御し給へり、時に持佛堂長講堂を造りて、法華經を講修す、文治四年四月火災にかかりて長講堂と共に全部烏有に歸す、源頼朝及び諸臣に命じて之を造營す、十二月に至りて落成して移御し給ふ、もとは四分の一の宅たりしが、此の時方一町に擴げ、寢殿、裏御所、御湯殿、臺盤所、丹後局の部屋、弘御所、殿上東西南北の對屋、進物所、車宿長講堂、同御所、御廳、牛屋等善美を盡したり、建久三年三月崩御以前六條殿及び長講堂同所領を寵妃丹後局の腹に生れたる宣陽門院に讓與し給へり、承久二年燒失し、尋で造營し、同四年成り三

ロクトウシユ

六頭首 禪宗にて六種の僧役の總稱なり、臨濟にては首座、書狀、藏主、知客、庫頭(知事)浴頭、曹洞にては首座、書記、知藏、知客、知浴、知殿を云ふ、是等は常に和尚の室中に近侍して各々分擔して用務を辨するなり(釋林象器箋)

ロクハラツツリフギヤウ

六波羅越訴 鎌倉幕府の職名、京都六波羅にあつて、越訴

ロクテ

ロクハ

ロクテウノタイリ

六條内裏 所在 六條坊門と六條との間に在り、西は東洞院に至り、東は高倉に至る、六條院とも云ふ(起原) 承保二年藤原顯季をして新造せしめ、十二月成りて遷幸し給ふ、後に轉じて白河天皇に傳はる、皇女郁芳門院に譲り門院の御所とし、嘉保三年八月崩御の後仙洞となせり、保安四年十一月燒失す、後ち又造營し郁芳門院持佛堂を六條御堂と稱し、長く佛事を修せらる、弘長元年聖一國師の弟子湛照六條御堂を改めて萬壽禪寺と號す、マンジュシ(百練抄、山城名勝志)

ロクテウハ

六條派 時宗の一派、二世他阿彌陀佛の弟子聖戒を派祖とす、京都六條歡喜光寺を本山とす、今は時宗に還歸して派名を存せず、ジシユウ(クワンキクワウジ)参看(佛教各宗綱要)

ロクテウハウグワン

六條判官 源爲義を云ふ、

ロクテウシユ

六頭首 禪宗にて六種の僧

ロクハラタンダイ

六波羅探題 鎌倉幕府の職名、京都及び畿内近關西諸國の政務を行はしめ、兼れて兵馬の事を掌る(又伊勢、志摩、尾張、三河、美濃、加賀等を管領せし事、北條九代記に見ゆ、又内裡警衛を口實として竊に向來の變に備ふ、而して大事に於ては關東の節度を受く、二人あり、南

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同書に、右筆の事を右筆奉行人と重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラサムラヒトコロ

六波羅侍所 鎌倉幕府の役所、京都六波羅に置き、非違を檢察し、不虞を警戒し、罪人を決罰する等の事を掌る、事鎌倉の侍所と同じ、庭訓往來に流刑死刑をも沙汰すと見えたり(起原) 庭訓往來に、管領、執筆奉行人など見ゆ、管領は長官にて、鎌倉侍所の所司に當り、執筆奉行人は、糾問の事を奉行するものにして、鎌倉侍所の寄人に當れり(起原) 承久三年以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハラケンタン

六波羅檢斷 鎌倉幕府の職名、六波羅所司の佐職にして、兩六波羅に置き、巡察警備、拷訊、決罰等の事を掌り、事ある時は、在京の兵士を率ゐて、其役に從ひ、軍陣に臨みては、軍奉行となりて、士卒の着到を注す、○庭訓往來に檢斷所司代と記したるを思へば、稀には所司代とも唱へしなるべし、これ元より檢斷と所司代との兩職にあらぬを、かく重ねて記したるは、同心なり(起原) 承久以後之を置き、元弘三年に減ぶ(吾妻鏡、太平記、武家名目抄)

ロクハ

にして、其係清盛に至りて大に修築し世に著はる、長門本平家物語に「六波羅とてのいじりし所は、故刑部卿忠盛の代に出し吉所なり、南は六はらが末賀茂河一町を隔て、元は方一町なりしを、此相國の時造作あり、家數百七十餘宇に及び、是のみならず、この鞍馬路より始て、東の大道を隔て、辰巳角小松殿迄廿餘町に及迄造作したり、眷屬の住所こまかに是を敷れば五千二百餘宇云々」と見えたり、又泉殿ともいふ、平頼盛の家は池殿と號す、治承四年後白河法皇は泉殿に、高倉上皇は池殿に御座せし事山槐記に見えたり、源頼朝天下の權を握るに及びて京都に第宅を置かんとして、奏請してその地を請へり、建久元年に至り、池殿の地を賜ふ、是に於て頼朝新亭を築き、十一月上洛してこれに宿す、建仁三年十月焼失し、後また之を造營す、承久後後、南北六波羅をここに置いて、京都及び關西の諸政を總べしむ、元弘三年に至りて滅亡す、太平記六波羅軍の條に「五條の橋爪より、七條河原迄、六波羅を圍と云々、仲時六波羅を落て關東に下るに、苦集滅道にかゝり落られたり云々」と見ゆ(山城名勝志)

ロクハラノニフタウサキノタイシヤウタイジン 六波羅入道前太政大臣 平清盛 (マヒラノキヨモリ)を見よ、

ロクハラヒキツケガシラ 六波羅引付頭 鎌倉幕府の職名、引付衆の頭人なり、京都六波羅に居り諸奉行を指揮し、訴訟以下の公事を裁判す、職掌鎌倉の引付衆と同じ、六波羅評定衆兼職なり(起原)承久乱後新置し、元弘三年幕府と共に滅ぶ、「ヒキツケシユウ」參看(六波羅奉行人名目抄)

ロクハラヒキツケガシラ 六波羅引付頭 鎌倉幕府の職名、引付衆の頭人なり、京都六波羅に居り諸奉行を指揮し、訴訟以下の公事を裁判す、職掌鎌倉の引付衆と同じ、六波羅評定衆兼職なり(起原)承久乱後新置し、元弘三年幕府と共に滅ぶ、「ヒキツケシユウ」參看(六波羅奉行人名目抄)

ロクハ

ロクハラヒヤウチヤウシユウ 六波羅評定衆 鎌倉幕府の職名、京都六波羅に居り、政務の席に列し、六波羅探題と共に、萬事を裁決する重任なり、職掌大抵鎌倉の評定衆と同じ、宿老の輩を以てこれに補す、六波羅問注所執事、六波羅引付頭のごとき、機務に與れる諸職、みな此衆の攝する所なり(起原)承久乱後北條泰時、同時房六波羅兩探題となるに及び、幕府に准じて之をおく、後藤龜谷の兩氏概ね世襲せり、元弘三年幕府と共に滅ぶ、「ヒヤウチヤウシユウ」參看(吾妻鏡、尊卑分脈、武家名目抄)

ロクハラフギヤウニン 六波羅奉行 鎌倉幕府の職名、京都六波羅に居り、六波羅評定衆を輔佐し、探題及び引付頭を承け、公務を沙汰し、訴訟争論の事を裁断する事を掌る、後には評定衆に加はるべき族なり、按ずるに六波羅にて奉行人といひしは、大方、引付衆をいへるなれど鎌倉に准じておもへばいまだ其衆に加はらぬ寄人、又は問注所に祇候の輩も之ありしなるべし(起原)承久の乱後これをおき、元弘三年に滅ぶ(武家名目抄)

ロクハラミツ 六波羅密 波羅密は梵語、舊譯には度といひ、新譯には到彼岸と云ふ、度は生死の海を渡る義にして、到彼岸は涅槃の岸に到る義なれば、要するに同義なり、佛教の修行要目なり、法華經に「爲求菩薩道者應説六波羅密」と見ゆ、此波羅密に六種あり、一に檀那、譯して布施といふ、是に二種あり、一は財施、二は法施なり、財施は飲食衣服田宅等を施す、法施は善法を説いて、衆生を感化誘引するなり、法界次第に「若内有信心、外有福田、有財物、三事相合、心捨法、能破三障、是爲檀那」と見ゆ、二に尺羅、譯して持戒とも、止要とも

ロクハラミツ 六波羅密 波羅密は梵語、舊譯には度といひ、新譯には到彼岸と云ふ、度は生死の海を渡る義にして、到彼岸は涅槃の岸に到る義なれば、要するに同義なり、佛教の修行要目なり、法華經に「爲求菩薩道者應説六波羅密」と見ゆ、此波羅密に六種あり、一に檀那、譯して布施といふ、是に二種あり、一は財施、二は法施なり、財施は飲食衣服田宅等を施す、法施は善法を説いて、衆生を感化誘引するなり、法界次第に「若内有信心、外有福田、有財物、三事相合、心捨法、能破三障、是爲檀那」と見ゆ、二に尺羅、譯して持戒とも、止要とも

ロクハ

ロクハラモンチユウジヨ 六波羅問注所 鎌倉幕府の役所、京都六波羅に置く、畿内近國及び四國の訴訟を沙汰し、財貨紛失等の事を統攝す(職員)長官を執事といふ、また單に問注所とも稱す、凡そ訴訟の事は、引付衆の内より、それの奉行人を定めて、數多の訴を分配し、各預り沙汰せしむることなるが、問注所執事は、問注所の長官なり、總ての訴訟に與り、本所に辭候する諸奉行人を指揮す、寄人、本所に祇候する奉行人にして、訴訟を分掌す(起原)承久の亂後之をおき、元弘三年幕府と共に亡ぶ、「モンチユウジヨ」參看(武家名目抄)

ロクフ 六府 左右兵衛府、左右近衛府、左右衛門府を云ふ、衛府(エフ)并に各條參看、

ロクワウ井 鹿王院 所在山城國葛野郡嵯峨村(山號)覺雄山(宗)臨濟宗、天龍寺に屬す、もと禪宗京都十刹の第五の本尊釋迦如來(起原)康暦年中足利義滿の創立にかゝり初め寶幢菩薩を安置して大福田寶幢寺と號し、葩苑(普明國師)を請じて開山となす、本尊釋迦佛并に左右十八弟子の像を安置す、義滿更に一院を境内に營み、開山の塔所となし鹿王院と號す、足利氏と共に衰頹し、數回の火災に罹り、荒廢して寶幢寺の名に何時しか廢絶

州牡鹿郡の沖井に亘理郡の沖、安房國長狹郡の沖に出没す、露國の船舶にして、我國の海岸に現はるゝもの、これを以てはじめとなす、而して此前後の際より露國我が北海の地を窺ひ、諸島に南下して越年を試むるものあり、明和年中に及びては、漸く夷人を撫育して爲すあらんとしつゝありしが、同八年ベニヨブスキー(普魯士の歸化人)は阿波薩摩等に漂着の體を裝ひ、密に日本の沿岸を測量して歸り、尋で安永八年露人また東蝦夷地に來り、アツキシに於て松前藩の吏員と會して通商を求め、翌年再び渡來して返答を求めたれども、松前藩は之を拒絶したれば、露船は歸途ウツプ島に冬籠し、九年歸國したれば、露船は其北海經營の策は着々として歩を進め、夷人に於て露化するもの甚だ多かりき、既に於て寛政四年、露國軍艦カザリン號、我漂氏幸太夫、磯吉を護送して箱館に至り、國書を呈し、通商貿易を求めたり、幕府即ち目付石河忠房、村上義禮を遣はし、五年六月露使と應接せしめ、貿易に關する事は長崎に於て議するの制なれば、同地に赴くべしとして艦長ラツクスマンに信牌を與へて去らしめしが、文化元年に至り、露國使節レザノフは仙臺の漂氏津太夫等四人を伴ひ、軍艦に乗じて長崎に來り、先年箱館に於て與へられし信牌を出して國書を呈し、通商を求めたり、幕府はまた目付遠山景晋を派して應接せしめ、通商の請を卻け、且其信牌を收めしめられたれば、レザノフは快々として樂まず、歸途樺太に至りて密に首肯する所あり、カムサツカに至りて其友ホーシトフに語るに樺太を略して、日本政府を威嚇するの策を以てしたれば、ホーシトフ之に賛し、軍艦に搭して、文化三年樺太の南なるアニア灣に上陸し、我衛所を襲うて狼藉を試みたり、露人が我北海を侵したること、これ

ロサン

し、鹿王院のみ存じ、織田豊臣を経て、徳川氏に及び、漸く再興の寺運を開き寛文年中、酒井忠知之を重修す、此時より天龍寺に屬すれども、十刹の格式を失はす(山城名勝志、平安通志、京華要誌)

ロサンジ 廬山寺 所在山城國京都市上京區北之邊町(興願金剛院と號す)天台宗(本尊)真源自作の像、南壇に藥師如來北壇に正觀音を安置す(起原)天慶元年僧良源(慈惠僧正)之を北山に草創して、興願金剛院と云ふ、圓融天皇勅して七堂伽藍を建營す、寛元三年後嵯峨天皇勅して船岡山の南に移し、方一町の地を賜ひ廬山天台講寺と號せしめらる、傳に云ふ中興住心上人の時一異人來りて廬山の二字を書して去ると、其地今廬山寺通と云ふ、嘉曆三年後醍醐天皇勅願寺となし、大師堂を建て、莊園を賜ふ、後小松天皇應永四年志玉照珍入宋して、法義を傳へてより、山號の上に日本の字を冠せしむ、因て日本廬山と號す、應仁の兵火に罹り、天正元年現今の地に移し、銀子を賜ひ本堂を建營し、其他堂宇は后妃の殿を賜はりしが、天明八年焼亡せり、現在の堂宇は、寛正六年下賜金を以て建營せし所なり、本寺は后妃皇子女の墳墓多きを以て、安政三年尊牌殿を新築し、明治維新の後も朝家に因縁多きを以て、宮内省より尊牌奉養料及び年々賜金あり、什寶に法然上人畫像及び撰撰本願念佛集の草本等あり(山城名勝志、平安通志、京華要誌)

ロシヤ 魯西亞 亞細亞及び歐羅巴洲に跨がる一國、没斯箇未突、莫所未得、莫斯未亞、俄羅斯、魯齊亞、鄧羅絲、羅利、羅又、老槍、老羌、倭羅斯、倭洛斯、亞斯、亞々斯、轄受斯等に書す、江戸時代には「オロシヤ」と發音せり(起原)亞細亞魯西亞は、南歐高加索地方を除き、北方北極洋に、西方歐羅巴魯西亞

ロシヤ

及び英海に、南は波斯、土耳其斯坦及び支那帝國に、東は太平洋に接す、面積六百四十六萬二千廿四方哩、北緯三十八度より七十八度に至り東經廿七度より西經百七十度に達す、歐羅巴魯西亞は、北那威及び北極洋に、西は瑞典、バルチック海、普魯士、奧地利、匈牙利、及び羅馬尼亞に、南は羅馬尼亞及び黑海高加索連山に、東は裏海、ウラル河及びウラル山脈に接す、面積二百八十八萬二千八百方哩、北緯四十度廿分に起り七十度に至り、東經十八度より六十度四十五分に至る(起原)亞細亞魯西亞は南部高加索地方、西比利亞、中央亞細亞の三部に分ち、歐羅巴魯西亞は魯西亞本部、芬蘭大公國、波蘭王國及び高加索地方の四部に分ち、尙ほ本部を六に區別して各々數行政區に區別せり、首府を「セントペテルスブルグ」といふ(起原)昔時魯西亞は蒙古種種族の下に屈せしが、西曆千四百七十七年アイバン大王といへる者出て魯西亞人を自由にせり、千六百年代の末にアイバン猛王出て蒙古人よりクイザンの地を奪ひ領土を擴む、千六百八十九年彼得大帝位に上りしより國勢頓に一變し、瑞典を伐ちてリボニヤ及び其他バルチック海邊の土地を取り、また難祖人を征服して國境を黑海に臨ましむるに至る、千七百六十二年カザリン第二世立つに及び、全くクラキミヤを征服したりしが、當時また波蘭分割の事起り、千七百七十二年、千七百九十三年、及び千七百九十五年の三度に分割ありて波蘭國は全く歐洲の地圖より消滅せり、千八百十五年和議の際、また芬蘭を得、高加索地方も同時に漸く之を蠶食せり、是より先千五百八十二年の頃より西方西比利亞より次第に東方を侵取し、遂に悉く西比利亞を領し、尙ほ裏海の東なる中央亞細亞の地方を包有し、遂に今日の形勢を爲すに至れり(起原)元文四年露船奧

州牡鹿郡の沖井に亘理郡の沖、安房國長狹郡の沖に出没す、露國の船舶にして、我國の海岸に現はるゝもの、これを以てはじめとなす、而して此前後の際より露國我が北海の地を窺ひ、諸島に南下して越年を試むるものあり、明和年中に及びては、漸く夷人を撫育して爲すあらんとしつゝありしが、同八年ベニヨブスキー(普魯士の歸化人)は阿波薩摩等に漂着の體を裝ひ、密に日本の沿岸を測量して歸り、尋で安永八年露人また東蝦夷地に來り、アツキシに於て松前藩の吏員と會して通商を求め、翌年再び渡來して返答を求めたれども、松前藩は之を拒絶したれば、露船は歸途ウツプ島に冬籠し、九年歸國したれば、露船は其北海經營の策は着々として歩を進め、夷人に於て露化するもの甚だ多かりき、既に於て寛政四年、露國軍艦カザリン號、我漂氏幸太夫、磯吉を護送して箱館に至り、國書を呈し、通商貿易を求めたり、幕府即ち目付石河忠房、村上義禮を遣はし、五年六月露使と應接せしめ、貿易に關する事は長崎に於て議するの制なれば、同地に赴くべしとして艦長ラツクスマンに信牌を與へて去らしめしが、文化元年に至り、露國使節レザノフは仙臺の漂氏津太夫等四人を伴ひ、軍艦に乗じて長崎に來り、先年箱館に於て與へられし信牌を出して國書を呈し、通商を求めたり、幕府はまた目付遠山景晋を派して應接せしめ、通商の請を卻け、且其信牌を收めしめられたれば、レザノフは快々として樂まず、歸途樺太に至りて密に首肯する所あり、カムサツカに至りて其友ホーシトフに語るに樺太を略して、日本政府を威嚇するの策を以てしたれば、ホーシトフ之に賛し、軍艦に搭して、文化三年樺太の南なるアニア灣に上陸し、我衛所を襲うて狼藉を試みたり、露人が我北海を侵したること、これ

ロシヤ

州牡鹿郡の沖井に亘理郡の沖、安房國長狹郡の沖に出没す、露國の船舶にして、我國の海岸に現はるゝもの、これを以てはじめとなす、而して此前後の際より露國我が北海の地を窺ひ、諸島に南下して越年を試むるものあり、明和年中に及びては、漸く夷人を撫育して爲すあらんとしつゝありしが、同八年ベニヨブスキー(普魯士の歸化人)は阿波薩摩等に漂着の體を裝ひ、密に日本の沿岸を測量して歸り、尋で安永八年露人また東蝦夷地に來り、アツキシに於て松前藩の吏員と會して通商を求め、翌年再び渡來して返答を求めたれども、松前藩は之を拒絶したれば、露船は歸途ウツプ島に冬籠し、九年歸國したれば、露船は其北海經營の策は着々として歩を進め、夷人に於て露化するもの甚だ多かりき、既に於て寛政四年、露國軍艦カザリン號、我漂氏幸太夫、磯吉を護送して箱館に至り、國書を呈し、通商貿易を求めたり、幕府即ち目付石河忠房、村上義禮を遣はし、五年六月露使と應接せしめ、貿易に關する事は長崎に於て議するの制なれば、同地に赴くべしとして艦長ラツクスマンに信牌を與へて去らしめしが、文化元年に至り、露國使節レザノフは仙臺の漂氏津太夫等四人を伴ひ、軍艦に乗じて長崎に來り、先年箱館に於て與へられし信牌を出して國書を呈し、通商を求めたり、幕府はまた目付遠山景晋を派して應接せしめ、通商の請を卻け、且其信牌を收めしめられたれば、レザノフは快々として樂まず、歸途樺太に至りて密に首肯する所あり、カムサツカに至りて其友ホーシトフに語るに樺太を略して、日本政府を威嚇するの策を以てしたれば、ホーシトフ之に賛し、軍艦に搭して、文化三年樺太の南なるアニア灣に上陸し、我衛所を襲うて狼藉を試みたり、露人が我北海を侵したること、これ

ロシア

を以てはじめとす、尋でホーシトフは、一旦カムサツカに歸り、翌年二月再びエトロフを侵して、ナイホの櫓、シナナの會所を焼き、更に樺太利尻の二島を抄掠せり、是に於て幕府益々北海を懸にし、露船打拂の議を決したりしが、既に同八年露船長カローニンはヤナナに搭し南千島の沿岸を測量し、五月國後島に至り、上陸して、此地を守りたる松前奉行支配佐瀬政辰と會し、薪水を請はんとしたるに、政辰は急に命を傳へてカローニンを以下數名を捕縛せしめたり、副長リユールツ時に艦内にあり、變を聞きて大に驚き、之を救はんとして成らず、一旦歸國せるの後、文化九年七月再び國後島に來り、カローニンの消息を探らんとしたれども、明かにする能はざりしがゆゑに、遂に日本船を要して事情を糺さんとし、八月國後の海上に高田屋嘉兵衛を捕へ、之をカムサツカに伴ひ、はじめてカローニン等が、なほ生存せるをりし、因て嘉兵衛と謀する所あり、十年六月また國後島に至り、九月轉じて箱館灣に入り、ホーシトフの掠略は露國政府のしる處にあらず、ホーシトフ一人の舉に過ぎざるの旨を辯明し、イルクーツク府總督より松前奉行に贈りたる陳謝状を出し、カローニンの送還を求めたれば、幕府も之を諒し、カローニンを嘉兵衛との交換を行ひ、兩國の葛藤はじめて解く(タカマヤカヘ)と參看) 越えて嘉永元年七月露國水師提督プーチャチンは軍艦四艘を率ゐて長崎に來り、國書を呈し、千島及び樺太に於ける兩國國境を議定し、且つ通商を開かんことを求めたり、幕府即ち筒井政憲川路聖謨をして急に西下せしめ、十二月プーチャチンに會し、(一)千島エトロフを限りて日本所屬となす(二)樺太は北緯五十度を以て界とする我委員の説に、露使の

ロシア

異議あるがゆゑに、實地調査の上再議すべし(三)通商の事は、之を朝廷に奏し諸侯に詢るの必要あり、然るにいま新將軍嗣立のはじめなれば、之をするには數年の歳月を要す、今日確答する能はず、然れども他日もし他國に許すことあらば、直ちに露國にも許すべしと議定したり、然るに安政元年日米及び日英の和親條約成りしを以て、同年プーチャチンは下田に渡來し、十二月また筒井川路の兩委員と會議し、和親條約を締結し(三年十一月同所に於て批准交換)且つ同條約に於て日露の境はエトロフ島とウルツツ島の間にし、エトロフ全島は日本に屬し、ウルツツ全島井にそれより北の方クルリ諸島は露國に屬し、樺太に至りては境界を分たす、舊によりて雜居すること定めたり、尋で四年四月プーチャチンまた長崎に來り、水野忠徳、荒尾成充、岩瀬忠震に會して九月追加條約を締結したりしが、五年再び江戸に來り、永井尚志、井上清直、堀利照、岩瀬忠震、津田中三郎と會し、七月十一日通商條約を締結せり(同六年七月批准交換、此時前年の追加條約を廢す)然るに文久二年に至り露國艦長ビリレフは軍艦ボサツニカに駕し、對馬國尾崎浦に碇泊し、艦船修理を名とし占領の策を講じ且つ不法の行爲あり、蓋し露國は英國と東洋に於て其衝を争はんとする際なりしに、會々英國が同島を占領せんとするの風説を聞き、政略上之に先んじ占領せんとしたるなり、對馬の士民上下舉げて激昂し、藩主宗氏もまた風聲を忍ぶこと能はず、幕府報を得て大に驚き、其四月小栗忠順等を急派し、ビリレフと接し、また對馬の人心を鎮壓せんとしたりしが、忠順は意を得ずして歸りたれば、更に野野山無寬を遣はし、更に米公使を介して露國外務大

ロシア

臣に交渉し、且つ箱館奉行村垣範正に命じ、同地に駐在せる露國領事コシケウイチと談判を開かしたるに、コシケウイチは其行違なるべきを辯疏し、書をビリレフに送れるを以て、野々山等の未だ達せざるの前、七月廿五日露艦遂に退帆せり、これより先安政元年下田條約の成るや、樺太は舊によりて雜居のとなし解決するに至らざりしが、六年七月黒龍江沿海總督ムラビヨフ批准交換の爲め來朝するに及び、再び分界のことを議したりしもまた協はざりき、其後文久二年には竹内保徳、松平康直、慶應三年には小出秀實等露都に使用して、同じくこれを議したれども、井に要領を得ず、王政維新の後ち外務卿副島種臣深く之に留意し、樺太買収の事を露國政府に交渉せるに當り、北海道開拓次官黒田清隆樺太を捨つることの得策なるを建議したるより、廟議俄に變じ、旨を露國駐在の公使榎本武揚に傳へて、露國と議する處あり、遂に明治八年五月樺太全部を露國に與へ、ウルツツ島以東占守島に至る十八島を受くるを約し、所謂樺太千島交換條約は成れり(樺太分界のことは「カバフト」の條に述べたれば、此には略述せり) 明治廿四年露國皇太子ニコラス(現皇帝)來朝ありしに、暴漢ありて之を近江國大津に傷けしも、兩國事を構ふるに至らざりき、二十八年日清條約成るや、露國は佛獨の二國を誘ひ、三國同盟して遼東半島を清國に還附を促したれば、我國も己むを得ずして之に従ひたり、此年五月改正條約を締結す、廿九年朝鮮に對する兩國の行動を妥協するが爲めに日露協約を結びたりしが、三十七年に至り、朝鮮問題に基因して、日露戰爭起る、翌年和成り、其結果樺太は北緯五十度以南を我國に讓與すること、なれり(柯太概覽、休明光記、北海道志、北海道志稿、懷舊記事、

ロシア

露盤 塔(マフ)の名所を見よ、

ロシア

松下見林の異稱日本傳に「見林以、漢朝人言語不通、

ワウ

諸王正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

露臺

開國紀原、日本幽因實記、懷往事談、幕末外交談、條約彙纂、幕末史)

露臺

殿の南廣廂との間に在る板敷の名、露代とも書き、單に臺とも云ふ、又仁壽殿の北廂と、承香殿南廂との間に在り(瀋陽)南北は紫宸殿の兩殿にて、東面四間、南第一間は即紫宸殿の北簷子にて階あり、條石を以て其壇を圍む、第二、第三、第四間に欄干あり(第四間は即仁壽殿の南簷子の東面なり)西面は未詳なれど、東面の如し、中央及び東西に渡殿あり(大内裏圖考證、平安通志)

六角氏

姓は藤原、壬生基起の末男基維を祖とす、圓基福の猶子として堂上に列し、右近衛少將從五位上となる、元祿八年三月卒す、基維の時波多と號す、其男益通元祿十三年二月六角と改む、明治に至り華族に列し、子爵を授けらる(諸家知譜拙記、系圖、華族譜)

六歌仙

柿本人丸、山部赤人、僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴黑主の六歌人をいふ(和漢名歌)六歌仙の稱いつ頃より始まりしか詳かならざれども、古今集の序に此六人の歌を批評したるより、これを併稱して歌仙とするに至りしものなるべし、また新六歌仙あり、藤原良經、慈鎮和尚、藤原俊成、同定家、同家隆、西行法師をいふ、後水尾天皇の勅撰なるよし、香果備志鈔に見えたり、各傳參看、

六禁

散齋(アライシ)を見よ、

露盤

塔(マフ)の名所を見よ、

わ

論所

江戶時代、村々にて境界を争ひ、其所屬の確定せざる土地をいふ、徳川百箇條に「論所之事、國境郡境にても雙方立會繪圖と御國繪圖と大相違無之に於ては不_レ及_二檢使_一裁許可有_レ之候入組不_レ申義に限り檢使差遣問敷事」とあり、

論人

鎌倉室町の兩時代訴訟の被告人をいふ、「ワウシヨウ」參看(沙汰未練書)

倭

支那にて我國を唱へたる稱呼、もとは委に作りてキと稱したり、後世吳音にてワと稱すること、なれり、後我邦にて改めて和の字を用ふ、前漢地理志に「東夷天性柔順、異於三方之外、故孔子悼_レ道不行、設_レ浮於海、欲_レ居_レ九夷、有_レ以也矣、樂浪海中有_レ倭人、分爲_レ百餘國、以_レ歲時_レ來獻見」とあるを初見とす(山海經に南倭北徭屬_レ燕、論衡に周時天下太平、倭人貢_レ地草」とあれど偽書として學者之をとらず)これより後漢書、魏志、隋書等皆倭と記したり、倭と稱せし原因に就ては、弘仁式序に「日本古者謂_レ之倭國、但倭義不_レ詳、或云取_レ我之音、漢人所_レ名之字也」釋日本記に「問謂_レ我國爲_レ倭奴國、其義如何、答師說此國之人、昔到_レ彼國、唐人問云、汝國之名稱如何、自指_レ東方答曰、和奴國耶云々、和奴猶言_レ我也、自_レ其後_レ謂_レ之和奴國」と云へり、これより神皇正統記、日本書紀纂疏等皆此說に従へり、然れども此說信_レ難きこと取_レ我概言、國號考等に辨あり、松下見林の異稱日本傳に「見林以、漢朝人言語不通、

王

名義二世以下なる皇胤の男女をいひ、男子を王、女を女王と稱す(皇極經世一)上古は皇親の男子は、凡て某尊某命、又は某皇子と稱し、女子は某媛某姬、又は某皇女と稱し、いまだ王、女王の稱なし、蓋し、諸王の稱は、天武天皇二年の紀に、諸王正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

名義

二世以下なる皇胤の男女をいひ、男子を王、女を女王と稱す(皇極經世一)上古は皇親の男子は、凡て某尊某命、又は某皇子と稱し、女子は某媛某姬、又は某皇女と稱し、いまだ王、女王の稱なし、蓋し、諸王の稱は、天武天皇二年の紀に、諸王正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

皇親

二世以下なる皇胤の男女をいひ、男子を王、女を女王と稱す(皇極經世一)上古は皇親の男子は、凡て某尊某命、又は某皇子と稱し、女子は某媛某姬、又は某皇女と稱し、いまだ王、女王の稱なし、蓋し、諸王の稱は、天武天皇二年の紀に、諸王正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

諸王

正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

諸王

正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

諸王

正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

諸王

正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

諸王

正四位栗隈王、又其十二年の紀に、諸王五位伊勢

ワウ

王とあるを初見とし、女王の稱は、文武天皇三年の紀に、坂合部女王とあるを初見とす、令制によれば、五世王は、もと皇親の限にあらざりしを、慶雲三年に至り、親ら絶つに忍びずとて、特に皇親の列に入る、こととなり、然るに延暦十七年に至り、奸濫の徒宗室を汚す懼れありとて、再び古制に復して、皇親の以外と定め、其名籍計帳等諸王に關する一切の事は、總て正親王にて管理したり、諸王の待遇は、親王に比して大に差降ありと雖も、また諸臣と同じからず、其辭訟ある時は、特に座席を賜ひ、皇親以外といへども、永世不課戸として、特に課役を免除する如き、優遇他に異なるものあり、位階はもと文武天皇の時は、親王と等しかりしを、令制にて諸臣と同一となり、一位より五位に至り、蔭子は初め從五位下、若くは正六位上に叙せらるゝを例とす、官は大臣、納言、神祇伯、或は大學頭等に任ぜらる、是れ諸臣の下に立たしめずして、多くは長官に任ぜらるゝ例なり、其位記官職あるものは、位田食封を賜ひ、一般の王、女王には、共に春秋二季に、時服料及び季祿を賜ふ、後諸王漸く蕃衍するに及びては、時服を賜ふべき諸王の數を限定し、其死開を待ちて、順次に之を補ふことに定められたり、中世以後、皇親漸く繁榮し、費用多端なるを以て、姓を賜うて臣籍に列すること起る、聖武天皇天平八年に、敏達天皇の玄孫葛城王に橘宿禰を賜ひしより以來、諸王賜姓のこと漸く多く、後には王號を稱する者大に減じ、獨り神祇伯を以て世職とせる白河家のみは永く王號を繼續せり、淳仁天皇以後、親王宣下のこと起るに及び、皇子皇女等、當然親王たるべきものにして、宣下なきが爲め、親王たるを得ざるあり、後白河天皇の皇子以仁王、後西院天皇の皇女貞宮の如き、及び

ワウテ

後世比丘尼御所と稱するもの、如きは、共に親王宣下を得ずして、諸王たる者なり、而して孫王と雖も、宣下を蒙れば諸王たることを得るに至り、王の制度一變ず、女王婚嫁の例に至りては、攝關、將軍、諸侯、門跡等、極めて多く、攝關にては、有栖川宮職仁親王の女孝宮の近衛經經に嫁したる、將軍にては伏見宮貞清親王の女顯子が、徳川家綱に嫁したる、諸侯にては同親王の女安宮が、徳川光貞に嫁したる、門跡にては、有栖川宮幸仁親王の女淑宮が、東本願寺光性に嫁したる如きは是なり、又諸王にして大罪あれば、先づ王名を除く、鹽燒王の獄に下されたる、長野女王の配流せられたる時の如きは是なり、但し多くは、姓を賜ひて庶人となし、然る後處罰せらるゝことを例とす、明治に至り、天皇より六世以下の男子を王、女子を女王とし、天皇支系より入りて皇統を承けたる時は、皇兄弟姉妹の王女王たる者に、特に親王内親王の號を宣賜す、婚嫁は、皇族又は勅旨により特に認許せられたる華族に限り、又養子を爲すことを得ずと規定せり、猶ほ皇親の條を參考すべし(古事類苑帝王部、皇室典範)

ワウテキ

横笛 唐樂に用ふる笛の一種、また龍笛、鳳笛、菱笛とも稱す、而して其音韻王敵に通ずるを思ひ「ヤウテウ」といへり(備前) 各所篠竹にて作る、竹の生實のまゝ、皮を剥せず、節より生ずる所の枝を去らず、故らに之を用ふるもあり或は皮上櫻皮を以て纏ひ、首の端に圓木を填め、錦帆を貼し、飾と爲すもあり、櫻皮を以て纏ふもあり、されど竹皮を去るを以て、通常の製と爲す、長さ一尺三寸二分五厘、首の端を去ること一寸五六分

ワウゼ

ワウタ

許にして節あり、首の周圍二寸九分弱、尾の周圍二寸五分強、其厚き一分三厘許、尾の端を距ること九寸許に當りて吹口あり、吹口を距ること三寸五分許、尾の端を距ること一寸二分許、其中間に七個の楕圓孔あり、每孔の間二分強、其尾にある者尤も小にして、次第に稍々大なり、名所は笛の條に擧げられたれば參看すべし(原清) 黃帝の時作り始めしとも、漢代の時作り始めしともいふ、詳かならず、而して我國へ傳來したることも何時代なりや明かならざれども、推古天皇の御宇、伎樂渡來せしが、伎樂に笛あるを見れば、既に當時傳はりたるもの、如し、大同四年二月、雅樂寮の雅樂師を定めし時、横笛師二人あり、然れど尾張濱主、承和遣唐の後之を擴めしが故に、濱主を此器の祖と爲せり、其弟子淨藏貴所、其弟子石城正枝、其弟子左近將監戸部好多、其習玉手延近、其習戸部正近と相繼ぎ、遂に戸部流を起す、正近が弟子大神是季、其習に狛行高あり、狛氏の笛是に始まる、是季が弟子、基政、即ち大神姓を稱し、大神流を始む、是季の弟子清原助貞、清原流を起す、笛(フエ)參看(和名抄、樂家錄、音樂略解、樂道類集)

ワウゼウケン

王昭君 漢樂にて性調六曲中の一、古樂にて中曲(原清) 漢元帝の時、宮人王嬙、字は昭君といへる人あり、王命に依りて匈奴に嫁す、時人其遠嫁を憐みて此歌を作る、舞は無し、此曲我國に傳來してより久しく絶え居りしが、醍醐天皇の時、式部卿眞保親王尺八の譜より横笛にうつして之を吹きしより、又、これあるを見るに至れり(龍鳴抄、禮樂志)

ワウタイハチンラク

皇帝破陳樂

唐樂の舞樂の一、唐樂變越調二十五曲中の一、又武徳太平樂、安樂太平樂と稱す、常には皇帝と稱す、新

ワウバ

樂にて大曲なり○遊聲一帖拍子なし、序一帖拍子三十、破六帖、每帖拍子十六、舞者六人、答舞新島蘇(原清) 唐玄宗皇帝國を平けて即位の時、作らしめし所のものなり、我國文武天皇の時、遣唐使栗田真人道隆、これを我國に傳へ、仁明天皇の時、藤原諸葛更に之を考定すと云へり、近世に至りて舞は絶えたり(禮樂志、歌舞音聲畧史)

ワウバクシユウ

黃磔宗

禪宗の一派、黃檗山萬福寺を本山とするが故に名づく○本宗は固より臨濟宗なりしも、明代に至り日用行事の法式、梵行、誦誦、梵唄等、唐宋の風を一變して、盡く明式明音を以てす、即ち開祖の黃檗清規、并に禪林課誦ありてより、今に至るまで凡そ二百年、舊章に率由して其規矩を改めず、これ本邦從前所傳の禪林と、其法式を異にする所以なり、而して其單傳直指の宗旨に至りては、古今臨濟宗と差異なし(原清) 隆慶(リウキョウ)を開祖とす、隆慶は明人にして、法を臨濟下三十一世の孫徑山費隱に嗣きて、承應三年(清順治十一年)始めて我國に歸化し、盛んに禪道を唱ふ、萬治二年徳川家綱山城守治に黃檗山萬福寺を創立し、師を推して開山始祖となす、此時に當り禪林大に衰凋して、宗風振はざりしが、一度黃檗宗の開立ありしより、延いて臨濟曹洞の回勢を促すに至れり、隆慶に法を承くるもの内外二十三人、皆一代の龍象たり、就中其法脈を本邦に傳ふるものを慧門、木庵、即非、慧林、獨湛、大眉、南源、獨吼以上支那人、龍溪、獨照、獨本の十一人とす、當時殊に木庵即非の兩師を稱して天下の二甘露門といへり、而して木庵は黃檗第二世の席を董して、盛んに宗風を開き、大に規矩を正せり、諸方の叢林取て標準と爲す、寛文五年靈元天皇勅して紫衣を賜ふ、黃檗山これ

ワウバ

りして益々振ふ、時に青木端山といふ者深く木庵に歸依し、江戸白金に紫雲山瑞聖寺を興し、法化を請へるが故に、木庵は江戸に下向せり、爾後黃檗山の禪風、關東に宣揚す、門下に鐵牛、慧極、潮音あり、三傑と稱せらる、鐵牛は之より先き寛文九年に上野國館林に廣濟寺を開く、これ瑞聖寺開創の前年にして、關東に於ける黃檗禪刹の始めなり、而して黃檗山は木庵の後慧林僅に一年にして寂し、獨湛其後を繼ぎたりしが、當時木庵門下の諸英俊皆關東に在りしがゆゑ、山風漸く衰頹したる而已ならず、獨湛世事を厭離し、唯念佛を事としたりしも、高泉法席を繼ぐに及び、隆慶禪師の業また稍々興る、後世稱して宗門の中興と爲す、十四代龍統に至り、始めて邦人にして法席を繼ぎしが、二十一代大成に至るまでは、なほ日清兩國法孫の混住なりしと雖も、二十二代格宗以後は全く本邦の法孫のみ住持せり、明治九年宗名を立て、黃檗宗と稱す、流派なく、本山も萬福寺のみなり、マンブクジ、センシユウ、參看(佛教各宗綱要、日本佛教史綱)

ワウバン

碗飯(碗飯)

名義 饗應の爲めに備けたる食膳をいふ、また饗應の意にも用ふ、碗は食器、これに飯を盛るなり、故に名づく、なほ盃酒といふがごとし、後世碗飯と書するは誤なり(原清) 權記長保三年八月十一日の條に「今日供眞采(中畧)殿上女房碗飯一器(明順朝臣)五年十一月十日の條に「權中納言殿上被出碗飯」また同月十七日の條に「余出碗飯、頭中將所課也」とあるを初見とす、而して此種碗飯は、いづれも公卿等が、事ありて殿上に集會せる時、一人または數人に課し衆人に饗應せしめたるものなりき、而して其饗を設くるは殿上のみならず、臺盤所、瀧口、武者所其他に

ワウバ

於てせる事あり、なほ源平盛衰記衣笠合戰事の條に「敵營するならば暇あるまじ、先靜なる時、よく兵糧つかうべしとて、酒肴碗飯昇居て是を勤む」とあり、勅仲記弘安九年三月二十七日の條に「次退出(宿所出雲權守榮光館、寺家點定之、寺家送碗飯、上下補飢)とあれば、必ずしも儀式的のものにあらずりしを知るべし、鎌倉幕府にては、歳暮、または慶賀、遊覽等のことある時は、多く碗飯あり、特に歳首の碗飯は恒例となり、正月一日より數日に亘り、千葉三浦小山宇都宮等の宿將之を催設けて、將軍を營中に饗應せり、從うて其儀も華美となり、太刀鞍馬等の引出物を加ふ、室町幕府に至りては、足利尊氏の時より、鎌倉幕府に倣ひて、毎歳首に行ひしが、足利義滿の時、更に其規矩を制定し、正月一日は管領、二日は土岐氏、三日は佐々木、京極、六角の三氏(隔年に交代す)七日は赤松氏、十五日は山名氏之を勤仕して、將軍を饗し、又右筆を以て碗飯奉行と爲して其事を司らしめしを以て、至重の儀式となりたりき、なほ鎌倉の管領も、幕府に倣ひ、家臣をして之を獻せしめしが、應仁亂後漸く衰へて、相共に廢絶せり、また此時代には、幕府管領家の外、諸大名も、儀式としてこれを行ひしものあり、大内氏のごとき、これなり、江戸時代のはじめには、まれに碗飯の稱を以て人を饗したること、塵塚談に「我等二十歳比迄は、板橋東鴨邊の百姓、相應に暮すは、毎年正月碗飯といふて、親族并に近邊の者を招請し饗應せし也、右の田舎にては近邊は一統に無之よし聞及ぶ、當時我等しれる所にては、兩町奉行所にて、正月四日比に、組方同心に碗飯と號し饗應あり、外には一切聞及ばず」と見え、昔々物語に「昔は大身小身衆は申に及ばず、下々輕き者一人も召仕程の者は、町人

ワカウ

までも、正月碗飯振舞とて、親類縁者子供迄、不、洩呼集め、それらに酒食、分限相應に結構して、日出度と、こふき歌ひの、じりて酒盛し快く遊ぶとあるにて知るべしと雖、其稱早く絶えたり、また京都地方にて節振舞といひ、元日より晦日までの間に、親戚朋友互に酒食を催して舞應することありしが、所謂碗飯振舞の遺風なるべし(西宮記、江家次第、類聚雜要抄、厨事類苑、權記、吾妻鏡、源平盛衰記、年中恒例記、年中定例記、大内家壁書、塵塚談、昔々物語、併諸歳事記、貞丈雜記、古事類苑禮式部)

ワウロク

女王祿

名義 毎年正月八日、女王に祿を給ふ儀式を云ふ、女王祿とかきてワウロクとよみ、女の字を讀まざるを故實とする由、公事根源に見えたり(此日參議一人、辨、史、承明門内西座に着す、本司の官人女王を率ゐて幡下に俟す、帷二字、安福殿の前に立てたり、次に官人ども前庭の座に着き、一同其座に着せし後、官人簿を取りて、一々其名を唱ふ、女王オと答へて進み出で、祿を受け退出す、其祿法人別に絹二匹、綿六屯なり、而して其人員は、江次第に「賜時服、王定四百九十九人、待其死關、依次補之、但改姓爲臣之關、不補其關、隨減定額數、凡賜祿女王、定二百六十二人、其隨關補代、改姓不爲關事並同上云々」と見えたり(江次第、西宮記、公事根源)

ワカウ

倭寇

名義 我邦人の支那朝鮮沿岸を寇略せるを、彼國にて唱へたる稱呼、倭は支那朝鮮にて古來より我國を呼びし稱にて、倭寇は即ち我國人寇略の義なり(起原)倭寇に關しては、我國に史料なきを以て、其の始めを詳にする能はず、高麗史には「忠定王二年二月倭寇固城、竹林、巨濟、合浦千戶崔禪都領梁瑄等戰破之、斬三百餘級、倭寇之侵始

ワカウ

此とし、(忠定王二年は我親應元年なり)東國通鑑亦此の事を記して、倭寇の始めとしたり、帝國海軍史論には高麗史に「宣宗十年秋七月癸未、西海道觀察使奏、安西都護府轄下延平島、巡檢軍捕海船一艘、所載宋人十二、倭人十九、有弓箭刀劍甲冑、并水銀眞珠硫黃法螺等物、必是兩國海賊、共欲侵邊部者也云々」とあるを以て、直に對馬の民、高麗の延平島を侵すとして、我邊民の外國を侵掠せる始めとしせり(宣宗十年は我が寛治七年なり)單に此記事のみにては、侵略せし事見えざれども、玉葉には宋商と我商人と連合して宋の地に狼藉したること見え、吾妻鏡には元暦元年對馬守親光高麗に渡り、虎を捕へし功によりて、三ヶ國を賜はり、文治元年歸國するに當りて、貢船三艘を造りし事見え、また著聞集、吾妻鏡によれば源賴朝が、高麗征伐ありし事見えたり、當時邊土の民、勇武精悍の士多かりしを以て、延平島の記事は、先づ倭寇の先驅とも見るべきか、而して正確なる書に見えたる倭寇は、蓋し建久二年とす、玉葉建久二年(南宋紹興二年、高麗明宗二十一年)二月十五日の條に「右大臣親雅持三來太宰府解、宋人楊榮陳七太等、於宋朝致狼藉事也、留府解了、爲付職事也、十九日宗朝親臣來申云、太宰府解奏聞之處、可致沙汰云々、奉仰云先可問例於官者、此事宋朝商人楊榮陳七太等、於彼朝、依致狼藉、宋朝下宣下、自今以後和朝來客可傳召之由下知云々、此事大一事也、乃件楊榮等可被處重科、達宋朝之聞之由、宰府進解狀也、此事已一大事也、早可被召、誠彼兩船頭也、而於楊榮者、於我朝所生者也、乃科斷無疑、於陳七太者、於宋朝所生云々、先例如此之者、自由不被科斷歟云々」と見えたり、此の後仗議を行ひしも其の結末詳ならず、從う

ワカウ

て宋朝にて狼藉せし事情も明らかならずと雖ども、我國の商人と宋商と連合して、狼藉せし有様は、明時代倭寇の盛時に當りて、我が商人と支那奸商と連合して、支那沿岸を寇掠せしと、全く同一方法にして、倭寇の尤古きものと見るも、強ち不當にあらざるべし、許國公奏議によるに、南宋末嘉定年中、屢々日本船の支那沿岸を侵掠せし事見え、高麗史高宗十年(我眞應二年)の條に「五月甲子倭寇金州」と見え、元史成德八年(我嘉元二年)の條に「四月丙戌置千戶所成定海、以防寇至倭寇」とあれば、王朝時代の末より鎌倉時代の始にかけて、既に我民族が、海外を侵略せしことを知るべし、高麗史東國通鑑が忠定王二年を以て起原とせるは、倭寇が特に烈しくなりしを記せるものならん、支那方面に於ては、元史至正二十三年(我正平十八年)の條に「八月丁酉朔、倭寇瀕海郡縣、至是海隅遂安」とあるを以て、殆ど朝鮮と前後して、倭寇の盛に侵略せしを以て知るべし、倭寇の原因に關しては種々なる説ありと雖ども、要するに最初貿易を目的とし、もし意に滿たざる、とあらば、武力に訴へて暴掠し、意に協へる時は、貿易を試みて歸りたりしが、後には掠奪侵略を目的とするに至りしものなるべし(朝鮮への倭寇)安貞元年(高麗の高宗十年)五月、邦人金州に寇せり(以後、屢々侵略を試みたるを以て、高宗は使を送りて之を禁せんことを請ひしことありしが、其勢力は益々熾んにして、忠定王以後は、殊に甚だしかりき、即ち正平五年(忠定王二年)には固城、竹林、巨濟等を、四年には順天府、合浦、固城、會原等を侵したりしが、朝鮮は大に之に苦しみ、正平七年(北朝文和元年、高麗恭愍王元年)之を禁止せんことを

ワカウ

我國に請ひたれども、當時の將軍足利義隆は、南北兩立し、紛亂已まざるの故を以て辭し、尋で辛禰王のはじめの時、重ねて之を請ひたれども、將軍足利義滿また之を卻く、時に藤原經光といへる者順天にありしが、全羅道元帥金先致、之を誘殺せんとして成らず、是に於て其徒激怒し、入寇することに、婦女嬰孩を屠殺し、頗る慘を極む、而して其侵掠せる地方は、大抵西南境なりしが、後轉じて江陵、洪州、淮陽より、咸州、洪原、北靑を屠り、高麗の衰亡する、其力與りて多きに居る、高麗亡び、朝鮮之に代るに及び、國王季成柱は、元中九年、北朝明德三年、朝鮮大祖元年)使を送りて倭寇を禁せんことを求めたれば、義滿は鎮西の諸將に命じて、浮屠を還さしめ、また侵略を禁するの令を布き、應永五年、同十六年また請ひて、此事ありしも、必竟空文に過ぎずして、邦人の朝鮮を侵すもの益々甚しかりき、就中永正三年(朝鮮燕山君十二年)には、對馬の民數百人、釜山、養浦を侵し、熊川城を陥れ、弘治元年(朝鮮明宗十年)には、邦人七十餘艘を以て全羅道に入り、達梁を犯し、良興、唐津の諸邑を陥れ、殺掠甚しかりき、豊臣秀吉の時に及び、や、天下統一せるを以て、倭寇の徒の勢力昔日のごとくならず、尋で漸く衰へたり(支那への倭寇)宋の時、我邊海の商人が宗の商人と連合して、侵略せしこと、起原の條に引きたる玉海建久二年の文によりて明らかなり、建久二年は南宋の光宗紹興二年に當る、又許國公奏議にも、嘉定年中屢々支那沿岸を侵せしこと見えたり、元代には、元史によれば成宗大德八年千戶所置きて、定海を成り寇を防がしめしことあり、蓋し元の世祖が我國を征せんとせしも、弘安文永の兩役共に成功せざりしより、弘安役後未だ十年ならざるに、彼

ワカウ

國に赴きて通商貿易を試み、意に滿たざる、とあらば、掠奪を行ふものあり、即ち德治二年(元の大德十一年)冬我西邊の民、元に航して慶元路に至り、吏民と争闘し、遂に其一城を燒く、爾來鎌倉時代末より南北朝時代に係りて、四國九州沿海の商人等は、元の衰微に乗じ、益々侵略を恣にせり、明の代に至りても、倭寇の徒の勢力は愈々強大となり、明の兵よく之を防ぐこと能はず、正平二十四年(明の洪武三年)使を日本に遣はして、征西將軍懷良親王に書を致しかりし而巳ならず、其の書辭の不遜なるを以て、我士民は明の沿岸諸地方に入りて貿易を營み、志を得ざれば忽に劫掠を繼にせり、故に建德元年(北朝應安三年、明の洪武三年)には山東を寇し、轉じて閩浙を掠む、明大に畏れ、建德元年再び使を太宰府に遣はし禁遏を請へり、親王仍て之を納れ、其使を禮遇し、倭寇鎮撫の策を講じたりしが、使者歸らざるに先だち、邦人また温州を掠め、海鹽、甌浦、福建の濱海諸郡を犯し、更に山東登萊等に寇したり、故に明は懷良親王に據るも功なきを見て、同月僧祖闡、克勤を遣はし博多より京都に入り、書を足利義滿に致して禁寇の事を請ひたり、然れども當時猖獗を極めたる倭寇は、一朝にして過むる能はず、益々濱海に出沒して寇掠を逞くせり、弘和三年(北朝永徳三年、明の洪武十六年)六月には、浙江の金華、平陽を犯し、明年正月には浙東諸郡に、元中四年(北朝嘉慶元年、明の洪武二十年)七月には、臺州境上に至りて居民を殺掠し、爾來山東膠海に寇し、廣東海濱を犯し、穿山浦より上陸し、軍士男女七十餘人を殺虜して財貨を掠め、其の他雷州、浙江、小央亭、遼東、

ワカウ

金州、白沙海口、浙東海濱、樂楚川等に寇し、其地の守將等皆殺されたり、然るに當時義滿は、大に財源を海外に求め、貿易を奨励せんとするの意ありしかば、先づ明の歡心を買はんとし、應永三年(洪武廿九年)彼の大使とせる倭寇の鎮壓を計り、邊民の彼に航せしものを捕へて彼に送り、次で八年(建文三年)僧祖阿、商賈肥富を彼に遣はし、辭を專うして修交を求めしを以て、明主大に喜びしが、會々同九年豐岐對馬の邊民等浙江、定海衛、穿山所等に寇し、沿岸を掠めしを以て、成祖、義滿に諭す處あり、義滿即ち其徒を追捕し、巨魁二十人を明に送る、然れども倭寇の勢は之が爲めに衰へず、應永十五年(永樂六年)山東、寧海衛を襲うて、曳山衛を寇し、其他諸寨を陥る、明年また廣東を、八年福建を犯し、十八年(永樂九年)には廣東昌化を陥れ、十九年には楚州に寇し二十三年には崇明縣治城を陥れ、官民三百餘人を捕獲せり、明廷之に苦しみて、防禦の策を講じたりとも、功なきを以て、屢々足利義持に諭す所ありしも、常に要領を得ず、然るに永享の末年以後(明の正統以後)文龜年中(弘治年中)に至る迄數十年間は、や、鎮靜に屬し、僅に四五回の倭寇ありしに過ぎざりしが、幾もなくして幕府并諸大名等の遣明使節等にして、暴動猖獗を極むるものあり、即ち大永七年(嘉靖六年)六月大内義興の使者宗設、寧波に至りしに、數日の後、細川高國の使者瑞佐、宋素卿等亦至る、從來の例によれば、到着順に閑貨筵席ありしが、宋素卿市舶太監に賂ひし爲め、宗設に先じて閑貨筵席に臨みたり、是に於て宗設大に怒りて瑞佐を攻めて其船を焚き、太監を殺し、瑞紹興城之を奪ひ、日本の名を以て倉庫を封じ、其の徒を率ゐて寧波に還り、過ぐる所掠奪を恣にし、指揮劉錦と戰

ワカウ

うて之を殺したり、天文九年(嘉靖十九年)に及び明の亡命の首魁李光頭等、邦人に黨して之を誘ひしを以て、倭寇は一層暴威を逞せり、天文二十一年(嘉靖三十年)邦人臺州に寇し、大に象山定海の諸邑を掠む、明年山東の巡撫都御史之を破る、同二十三年(嘉靖三十三年)倭兵又別に江北に赴きて大通門の諸縣を掠め、更に山東に割入せり、帝徐州兵備副使李天龍を以て王愷に代ふ、天龍其任に副せず、浙の地安からざるに至り、邦人海鹽より嘉興を侵し、更に乍浦に入り、寧海の諸縣を犯し、又海に入りて崇明、又蘇州に薄り、嘉興を掠め、蘇州の倭寇は轉じて松江を掠めたりしが、參將俞大猷に破られ、嘉興の邦人も亦選りて拓林の諸處に屯せり、明年に至り、拓林の邦人は舟を奪ひて、乍浦海寧を犯し、崇徳を攻陥し、各地を掠め、江北の邦人は淮揚諸州を犯す、既にして俞大猷大に邦人を王江涇に破りしかば、邦人皆舟に乗じて逃れたり、是を倭寇ありしより第一の戦功となす、幾もなく邦人再び海洋より來りて蘇州の地を犯し、又紹興より南京を犯す、其の他沿江の諸縣皆其の患にかへり、永祿三年(嘉靖三十九年)邦人六千餘人潮州等の地を犯す、時に浙江、直隸の倭寇稍々止みて、福建廣東の警報日に至りしが、同六年(嘉靖四十二年)に至り副總兵戚繼光之を破る、是時に當り、我國には、豐臣秀吉出で、海内を統一したると、海寇を禁じたることにより、倭寇の徒大に衰ふ、然れども其徒が明に與へたる打撃は尤も甚しく、明は之が爲めに日夜防禦に苦しみ、加ふるに財政の不足を來し、遂に明朝亡の一原因となれり【台灣への和寇】當時台灣も亦我邊民の至るものありて其勢力を振へり【ダイワン】參看【南洋への和寇】和寇の盛なるに當り、南洋方面にも赴きて寇

ワカウ

略を行ひたるが如し、梁儲言に西南は印度の諸國、安南、廣南、占城、東坡塞、暹羅、其他南海中の呂宋、巴刺臥亞、渤泥等の諸島に至り、近海諸邑を剽掠し、種々の財寶器物を奪取り來りて、其家を富ませると見えたり、かくのごとく暴行を逞くせる倭寇も、桃山時代に入り、豐臣秀吉が、天下を統一して、海寇の徒を禁じたりしと、幾もなくして社會の秩序や、整頓したるとの二原因により、江戸時代のはじめよりは、遂に其跡を絶てり○初め倭寇の徒は、多く九州、伊岐、對馬等の邊民多かりしが、室町時代には伊豫河野の一族、即ち田島、久留島、野島、村上等の諸士、并に肥前の大村、五島等の大名小名等其首領たりしが故に、比較的秩序ある行動を爲し得たるものごとし、其衆少きは數十人より多きは數千人に達し、通常七八百石の和船に、八幡大菩薩の標旗を、海風に飄したれば、支那朝鮮にては「バハン船」と稱せり【バハン船】參看【加ふるに當時戦亂の際なりしを以て、其徒の勇猛なることまたおどろくべきものあり、常に紅衣黃蓋を纏ひ、短袴を着け、好みて胡蝶陣を張り、日本刀を鞘して奮戦し、向ふ處敵なく、外人の之を恐るること、恰も鬼神の如くなりき、故に支那朝鮮の沿岸に至る處其害を被り、高麗はこれが爲に亡び、元明の二代を通して、國家の大患なりと稱するに至り、明のごときは、南倭北虜と稱して、實に亡國の一原因を爲せり○も威海衛にありし環翠樓記の石碑は、今陸軍中央幼年學校に藏せり、倭寇の壯烈なりし狀と、明軍防禦の一斑を知るに足るべき好史料なり、文長を以て省略す【元史、高麗史、東國通鑑、明史、明史紀事本末、籌海圖編、倭變事略、隣交徵書、異稱日本傳、本朝通鑑、伏敵編、支那史、朝鮮史、善隣國寶記、海の大日本史、史學雜誌

ワカカ

ワカウ

「足利時代における明への和寇」、皇典講究所講演倭寇の始末、いま市村博士が異稱日本傳以外に、和寇に關する參考書目を編せられたるものあり、左に録す、籌海圖編八卷(胡宗憲)籌海重編、萬里海防圖編二卷(鄭若會)江南經略八卷(同上)兩浙海防類考四卷(謝廷傑)同續編十卷(范德)溫處海防圖略二卷(李如華)海防類考(若干卷)兩浙海防考二卷(陸慶元年勳)海防要略十三卷(王在晉)兩浙戰船則例(李益)東海籌略(徐一鳴)海寇議一卷(萬表)嘉靖倭亂備鈔二卷、備倭考(李賢)晏海編二卷(張廷登)定海備倭紀略(梁文定)吳淞甲乙倭變志二卷(張鼎)倭變事略(采九德)靖海紀略一卷(鄭茂)洗海近事二卷(俞大猷)正氣堂集十六卷(同上)鄭端管公奏疏十四卷(鄭曉)楊慶毅公本兵奏疏十二卷(楊博)譚襄敏公奏疏(譚綸)潘司空奏疏第一卷(潘李嗣)關江集十七卷(王在晉)汪直傳一卷、徐海本末一卷(茅坤)經世要略四卷(黃仁溥)平倭四疏三卷(張煥)取倭錄九卷(王士驥)備倭記二卷(卜大同)倭情考略一卷(郭光復)

ワカカヘテ

ワカカウタンシヨ

和學講談所 國書を講習し、及び之を調査編纂する處なり、單に和學所ともいふ、林大學頭の支配に屬す【江戶】江戶町表六番町(いま上六番町)、井伊伯爵邸の向側【職員】出役頭取一人、出役頭取見習二人(以上御目見以上)、同助二人、出役三人、同手傳七人、同並五人、稽古所手傳出役二人、世話心得四人、同助六人、稽古所會頭一人、同助三人、武家放實會頭一人、同助五人【原簿】寛政五年四月、堀保己一、講談所設立の、ことを幕府に請うて許可せられ、七月はじめ

ワカカ

ワカカ

て夏六番町の地を卜して建築し、閏十月に至りて成る、七年九月、講談所永続の手當として町屋敷を賜ひ、年々納むる所の五十兩(後七百兩)を以て雜費に充てしむ、此月はじめ林大學頭の支配となり、和學御用を命ぜられたり、文化二年六月表六番町に移る、文政五年九月保己一卒し、子忠實家を襲ぎ、和學所御用を命ぜられしが、文久元年に至り、出役頭取をおき、伊丹光之丞を以て、これに補し、講談所を統管せしむ、翌二年忠實害に遇ひ、子忠實襲ぎに及び、改めて勘定格となり、二十人扶持を賜ひ、和學所附を命ぜらる、此年講談所に稽古所をおき、毎日國史讀令を生徒に講習し、且つ午前午後に分ちて輪講會讀を行ふ、また武家故實稽古あり、毎日講習し、和歌會文章あり、毎月一回之を催す、明治元年六月廢せらる【講談所の事業は堀保己一の傳中に述べたり、ハナハホキイチ】參看(和學所御用留、堀保己一傳、ハナハホキイチ)參看(和學所御用留、堀保己一傳、ハナハホキイチ)の挿圖參看(胡曹抄、藻繪草)

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

ワカカ

凡拾貳里、南北凡四里、北陸道に屬す【形勢】山勢東より西に走り丹後に連る、瀨海岬懸錯出し、瓊樓狹隘にして平地少く、土質瘠瘠【起原沿革】垂仁天皇三年、天日槍近江國より若狹を経て西但馬に至る、若狹の史に見えたる此に始まる、國郡制定の時、二郡を管す、淳和天皇長二年大飯郡を建て、三郡となる、國府を遠敷郡に置く(今の府中村)鎌倉幕府の時、惟宗忠季に今富莊を賜ひ國守に任じ、其餘の郡邑を以て藤原行光、中條家長等に分與す、寛喜の初、將軍藤原賴朝、惟宗氏の邑を収めて、北條經時に與ふ、爾後北條氏世々本國を領して京畿を控制す、北條高時伏誅の後、内大臣藤原公實國司となり、目代をして管理せしむ、足利尊氏の叛するや、族弟家兼及び佐々木高氏をして之を分轄せしむ、興國中家無の兄高經守護となり、後山名時氏、大高重成、細川清氏相繼で守護となる、正平十六年清氏吉野に歸順す、足利義詮、石橋和義を守護とす、二十一年一色範光之に代り、元中八年子詮範、山名氏清を伐て功あり、丹後を加賜し孫義實に傳ふ、永享中足利義教、武田信榮に命じて義實を殺し、信榮を以て守護となす、相傳ふる九世、元明に至り、朝倉義景に合して織田信長を拒む、義景亡び元明降を乞ふ、信長丹羽長秀をして國を監せしむ、天正十年豐臣秀吉元明を近江津津に誘致して之を殺し、武田氏亡ぶ、九世百四十餘年)長秀因て守護となる、十三年長秀卒し子長重嗣ぐ、十六年秀吉之を加賀松任に徙し、淺野長政を封す、文祿二年甲斐に轉封し、其地を分て小濱六萬石を木下勝俊に、高濱二萬石を其弟利房に賜ふ、關ヶ原後、徳川家康二人の封を没し、京極高次を封じ小濱に治す、寛永元年子忠高越前教實を加賜す、十一年之を出雲に徙し、酒井忠勝に賜ひ(拾萬石子

孫世襲す、明治維新改めて縣とし、又廢して敦賀縣より兼治す、後ち福井縣に隸す【管轄】古より管郡の變遷左表の如し、尙ほ詳しくは各郡の條を見るべし(日本地誌提要、國郡沿革考、郡名異同一覽)

日本紀	延喜式	拾芥	古	明治沿革	新郡區
大飯	和名抄抄	元祿圖	郡名考	地誌提要	郡區編
遠敷	同	同	同	同	同
三	同	同	同	同	同
方	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同

ワカサヒコノジンジャ 若狹彦神社 所在 若狹國遠敷郡遠敷村遠敷○本國の一宮、現今國幣中社【祭神】若狹彦神、若狹姫神、傳云、彦火々出見命、豐玉媛也○後世彦神を龍前村に祭りて上宮とし、姫神を遠敷村に祭りて下宮とし、合せて之を遠敷明神と云ふ【起原沿革】元正天皇靈龜元年始め垂跡すと傳ふれども確ならず、續紀寶龜元年八月の條に、伊勢諸人等を遣はして、鹿毛馬一匹を奉らしめし事あるを初見とす、延喜の制名神大社に列り、後ち當國の一の宮となる、應永年中守護一色氏崇敬して屢々社殿を修築し、正保二年酒井忠勝また修補を加ふ、凡毎年上宮祭五月十日に、漁人賞を擲げ、卯月臨時祭を行ふ、下宮二月九月の十日を例祭とす、此日西津郷堅海莊の漁人鮮魚を奉り、酉日臨時祭を行ふ(若狹郡縣志、神祇志料、官國幣社一覽、古事類苑神祇部)

ワカサンジン

和歌三神 (一)住吉社、天満宮、玉津島社(後奈良院宸記、宣風記)(二)住吉社、

ワカシ

玉津島社、柿本人丸(和歌三神考、和漢三才圖會)(三)天滿宮、山部赤人、柿本人丸(類聚名物考)(四)住吉の表筒男神、中筒男神、底筒男神(住吉祕記)等の説あり、

ワカシユウダウ

若衆道 江戸時代、男色のことをいふ、単に衆道とも稱す、ナンシヨク、カゲマシ、参看。

ワカドコロ

和歌所

和歌を講修し、またば撰集することを得る。職員長官を別當とし、其の事務を總裁す、次を開闔と云ふ、また年預とも云ふ、其の事務を整理す、次を寄人と云ふ、和歌を撰集す、共に堪能の歌人を以てこれに補したり。起原 醍醐天皇延喜五年四月紀友則、同貫之、凡河内躬恒、壬生忠孝等を以て、古今の和歌を撰集せしむ、承香殿の東、内御書所を以て、和歌撰集の所とす、然れども未だ和歌所の名なし、村上天皇天曆五年十月勅して後撰集を撰ばしむ、梨壺を以て和歌を撰ぶ所とし、清原元輔、紀時文、大中臣能宣、源順、坂上茂樹等して撰ばしめ、藤原伊尹を以て和歌所別當に任じたり、是れ和歌所の名見えし始めなり、而して以上は共に臨時のものにして、常置のものにあらず、後鳥羽天皇尤も和歌を好まされ給ひ、斯道を奨励し、歌人を優遇し給ひ、事にふれ、折にふれて歌合和歌會を屢々行はれ、百首歌合千五百番歌合等ありしを以て、藤原良経、源通親等の大臣を始め、女房等に至るまで、和歌に傑出せるもの一時に輩出するに至る、土御門天皇建仁元年七月に至りて、和歌所を置かる、和歌所は二條殿弘御所の北面にして、藤原基通、同良経、源通親、同通具、僧慈圓、藤原俊成、同有家、同定家、同家隆、同雅經、源具親、沙彌寂蓮、藤原清範、同隆信、鴨長明、藤原秀吉を寄人とし、源家長を開闔と爲

ワカド

す、尋で八月に初度御影歌合を行はせられ、後々屢々歌合和歌會を行はる、十二月通光定家、家隆、雅經、寂蓮等を以て、上古以来の和歌を撰進せしむ、此の後承久頃までありしが、其の後のこと詳かならずと雖も、開太曆延文元年十一月十三日の條に「抑御子左大納言入道年來有二三談、和歌所之體可御覽、且爲公所儀不可有身恐歎云々」と見え、拾芥抄新拾遺集の條に「貞治二年三月十五日和歌所、五條室町、自武家以行忠三品被送給言於撰者云々」と見え、惺窩先生系譜、及び冷泉系圖によれば、和歌所の所領播磨細川庄、近江小野庄を御子左家にて管領せしと云へば、承久亂以後鳥羽天皇隱岐に遷され給ひし後、院中の和歌所を御子左家に附し、俊成の第宅五條室町を以て、和歌所とせしものか、然れども和歌所の見えしは、延文の新千載、貞治の新拾遺、永享の新撰古今を撰集せし時のみなるを見れば、常置のものにあらずして、和歌撰集の時々置きしものなるべし(明月記、家長日記、開太曆、藤原記、拾芥抄) 職名、將軍に直隸して、老中支配以外の諸役人を支配し、特に旗本を統轄す、其内一名を勝手掛となし、財務の事を管せしむ、尤も權勢あり、なほ月番を定めて、事務を行ふこと、老中のごとくなりき、また參政、少老、執事、旗本支配、諸士の別當、旗本副執事ともいへり、老中に次での重職たり、帝鑑問詰、菊之間詰等の諸代大名の内、多くは側衆、奏者番、寺社奉行、大番頭を経て任補したり、人員は概ね三名乃至五名にして、位階は從五位下なり、役料なし、但し時によりて慶米五千俵を給し、また隱居もしくは部屋住のもの、これに任ずる時は役料(慶應三年役料を廢し、役金四千兩とす)を給せり、また若年寄格、若

ワカドシヨリ

若年寄

朝に吸みたるを稱せり、公事根源に「菟玉の春立日に、これを奉れば、若水とは申すにや」とあり、古來より、若水を呑めば、一年中の邪氣を除くと云ひ傳へたり。起原 醍醐朝延にては、古くは、立春以前より生氣の方の井を封じて人に汲ませず、立春の日主水司これを汲みて内裏に上り、朝餉として聞召されたりといふ、此事江家次第にも見えたり、江戸時代、武家にては、年男といふもの麻上下を着し、元旦に若水を汲むことを勤めたり、此時用ひる桶は、若水桶と稱し、暮の内に入新調し、鶴龜など目出度き繪を畫き、輪飾を附したり、此風今日に至りても、なほ一部分に行はる(公事根源、神書、日本歳事記、江戸歳事記)

ワカミドリ

若緑

襲の色目の名、表青、裏紫、春季之を着用す、カサネノイロメの挿繪参看(重色目)

ワカミヤ

若宮

(一)本宮の祭神の子を、其境内に祭りたる社(二)本宮を勧誘して祭りたる社祠をいふ、井に本宮に對する稱呼にして、後者は新宮の義なり、また老せぬ宮とも稱す、假令石水八幡の若宮は仁德天皇、水若宮は宇治稚郎子を祭る、石清水の祭神は、應仁天皇にして、仁德天皇、宇治稚郎子に并に其皇子なり、また分社の意に用ひたるは、堀岡八幡宮における若宮八幡の類これなり(神道名目類聚抄、類聚名物考)三代實錄貞觀十五年八月四日の條に、氣多若宮とあるを初見とす、

ワカミヤハチマンダウ

若宮八幡宮

山城國京都下京區五條橋東五町目〇六條八幡或は左女牛八幡とも稱す、祭神 應神天皇、神功皇后、仲哀天皇外一柱、起原 淳和天皇、神功皇后により、源賴義をして六條左女牛に創建せしむ、卜部

ワカド

年寄並、西丸若年寄、大御所付若年寄あり、而して西丸若年寄は二人を定員とし、大御所付若年寄は定員なし、待遇並に本丸の若年寄におなじ。職制(シヨクセイ)の表に示したれば、其條を見るべし。起原 治承室町時代の末葉に、諸大名等、老臣と相並びて萬事を奉行する者を、若年寄または若家老といへり、武田、里見等の諸家にて、これをわきたる事書に見えたり、江戸幕府また其稱を襲ひたるものにして、其起原に付き二説あり、一は、寛永十二年十月に、土井利隆と酒井忠朝とこれに補せられしより始まるとし(藩翰譜、徳川實紀)一は寛永十年三月に六人衆をおき、松平信綱、阿部忠秋、堀田正盛、三浦正次、太田資宗、阿部重次等を之に任じたりしが、信綱は其前年既に老中たり、忠秋、正盛もまた、同十年五月に老中となれるが故に、利隆、忠朝、及び朽木種綱を以て其闕を補ひ、正次、資宗、重次と共に六人衆たらしむ、然るに、同十五年十一月に至り、利隆、忠朝は并に其職を免ぜられ、重次、資宗も、亦他の職に轉じしかば、正次と種綱として原本の事を掌る、此二人即ち若年寄のはじめなりといへり(泰平年表、校訂補任、是非速に決しがたし、姑く記して後考を俟つ(御日記を按ずるに、寛永十二年十一月土井利隆、酒井忠朝、三浦正次、太田資宗、阿部重次の五人直月して、萬石以下の輩にあづかりし事、及び其訴訟を掌らしめ、寛永十五年十一月に、三浦正次、朽木種綱をして、旗本の輩を所屬とし、諸事を裁決せしめたる、)とあり、并に若年寄の職なり、之によりて考ふれば、後説或は是ならんか)而して寛永十五年以後は三浦正次と朽木種綱の二人、専ら旗本を管したりしが、其後正次の職を免じ(御實紀に、寛永十六年壬生の城主となりし時免職せらるらんと

ワカヤマジャウ

和歌山城

兼親之を奉行す、故に左女牛八幡の別號あり、文治中源頼朝土佐國吾川郡、及び京都六條以南西洞院以東の地を寄す、慶長二年六月豊臣秀吉今の地に遷す、舊記に樓門、築地、廻廊、拜殿、東西の經所、神宮寺の建築、別當、小別當、公文、從儀師、堂達、十禪師、三綱神主、權神主、禰宜、神人、執事、兵士等の社職あり、今の本社は承應三年、後水尾天皇の勅に因りて造營すと云ふ(平安通志)

ワカヤマ

脇坂氏(掃部野)

姓は初め物部、後に藤原、淺井秀政の三男生政の孫教政、九條殿の所領近江國膳坂庄下司となる、五世安明、佐々木義賢に仕へ、其子安治、永祿十二年明覺光秀に屬し、天正十年豊臣秀吉に仕へ、采地百五十石を賜ふ、十一年賤ヶ嶽の戦に、七本槍の一人として名あり、功を以て五千石を賜ふ、十三年攝津の内一萬石を加賜し、從五位下中務少輔に任ず、同年八月和泉高取二萬石を、同年十月淡路須本三萬石を賜ふ、文祿元年朝鮮の役に軍功あり、三千石加賜、慶長五年關ヶ原役に徳川家康に従ひ本領を安堵す、十四年二萬石

ワキサカウチ

脇坂氏(掃部野)

兼親之を奉行す、故に左女牛八幡の別號あり、文治中源頼朝土佐國吾川郡、及び京都六條以南西洞院以東の地を寄す、慶長二年六月豊臣秀吉今の地に遷す、舊記に樓門、築地、廻廊、拜殿、東西の經所、神宮寺の建築、別當、小別當、公文、從儀師、堂達、十禪師、三綱神主、權神主、禰宜、神人、執事、兵士等の社職あり、今の本社は承應三年、後水尾天皇の勅に因りて造營すと云ふ(平安通志)

ワカヤ

ワキサ

ワカマ

ワミカ

あり)慶安二年二月種綱亦罷むるに及び、旗本に關する事は、暫く老中の掌る所となり、若年寄の所職一時中絶せり、尋で寛文二年二月久世廣之、土屋敷直の二人新たに若年寄となり、爾來連綿として之に補し、幕末に際しては、萬石以下の輩にして、此職に居るものあり、人員も慶應三年には十二人の多きに及べり。○若年寄格は、文久二年八月に稻葉正巳、若年寄並は、慶應三年三月に淺野氏祐、西丸若年寄は、寛永三年に永井直敬、大久保教寛、大御所附若年寄は、延寶二年九月に加納久通、堀直尙が補せられしをばじめとす(見聞雜錄、里見義泰分限帳、松隆日記、柳營秘鑑、有司勤仕錄、泰平年表、校訂補任、藩翰譜、徳川實紀、武家名目抄、武鑑、嘉永明治年間録、續徳川實紀、御役人代々記、開國紀原、古事類苑官位部)

ワカマツシヤウ

若松城

北會津郡若松町〇一に鶴城又は黒川城ともいふ、又會津城とも稱す。起原 治承至徳元年藤原直盛之を築き、子孫在城す、天正十七年藤原氏亡び、伊達氏に屬す、同十八年豊臣秀吉之を收めて、蒲生氏郷に與ふ、氏郷増築し、始めて若松城と稱す、後上杉景勝入城、慶長五年米澤に移り、蒲生氏再封す、寛永四年二月加藤嘉明之に代る、同二十年七月保科正之山形より移封、二十三萬石を領す、子孫相傳へて維新の際に至る、明治元年八月官軍二萬之を圍む、松平容保以下、老弱を併せて防戦し官軍を憐ましむ、糧食彈丸盡きて遂に降を請ふ、攻圍殆ど一月に亘る、封甘萬石を削らる、尋で酒井忠實此に治せしが、明治四年廢城、二十年舊藩主松平容大の所有に屬す、今尙ほ樓櫓を存す(會津史、會津要書録、明治政覽)

ワカミツ

若水

名義 正月立春の日、生氣の方の井より汲みたる水をいふ、後世は、元旦の早

ワカミ

ワキサ

ワキサ

加賜、伊豫大洲に移る、元和三年安元五千石加賜、信濃飯田に移封す、承應三年二千石を叔父六左衛門に分移す、寛文十二年安政、播磨龍野に移封、五萬三千石を領す、寶永六年安清、二千石を弟安利に分封す、子孫相繼ぎて明治に至り、華族に列し子爵を授けらる(藩翰譜、徳川加除封録、華族諸家傳、華族譜)

○安治 安元 安政 安照 安清 安興

安弘 安實 安親 安董 安宅 安斐

ワキサシ

脇差(脇刺) 脇差刀の略稱、脇に差す故に名づく、又脇刀、脇物、懐脇刀、懐刀、懐劍、隠劍、守刀とも云ふ、即ち腰刀に同じ、貞丈雜記に「脇刺は、隠劍として懐中に隠して用心の爲にさす物なる故、脇さしの刀と云ふ、それを略して脇さしと計り云ふなり、古のわざは、長さ柄ともに八九寸計にて鍔なく、柄まかす、今あひくちといふ物の事なり、鞘のこじりを丸くするは、懐中する時、衣服にかゝらぬ爲にしたるなり、下緒を短くする事は、下緒のむすび玉を、帯の通りにおしはさみて、外へ取落さぬ爲なり、懐中に懐へさし置く故、わざはと云ふなり」とあり、應仁以後戦亂相次ぎしを以て、闇に利あるを宗とし、脇差の寸尺を長くして、鍔を入れ柄をまき、打刀と同じ格にして、懐の外へ出して、打刀に差し副へ、大小と稱し、昔の脇差は小刀と稱するに至り、後にはこれにも又鍔を入るゝに至り、故に大脇差、小脇差、陣脇差事の名出づるに至る(貞丈雜記、武家名目抄)

ワキモンゼキ

脇門跡 「モンゼキ」を見よ、

ワキヤヨシスケ

脇屋義助 名義通稱

ワケ

次郎 新田義貞の弟、元弘中義貞に従うて北條高時を討ち、功を以て兵庫助となる、建武元年義貞と共に京都に入り、武者所となり、駿河守護を領したりしが、二年足利尊氏の叛し、義貞東征するに及び、別に尊親王を奉じて、尊氏と竹下と戦ひ、敗れて京都に還る(マケノシタノマカヒ參看)延元元年(北朝建武三年)尊氏の京都を犯すや、諸將と共に之を敗り、西海に走らす、功を以て右衛門佐に拜し、昇殿を許さる、既にして尊氏の大舉して西上するに際し、義貞等は兵庫に防ぎて利あらず、十月義貞の北陸に赴くに及び、義助またこれに従ひ、杣山城に據らんと欲せしに、城守瓜生保保に敵に附したるを以て、金崎城に入り義貞に會したりしが、二年(建武四年)足利高経等來り圍み、危急に迫れるがゆゑに、義貞と共に城を脱して杣山に歸る、三年(曆應元年)義貞の杣山城に再舉するや、平泉城の僧徒三の峯に據りて應じ、將領を請へるを以て、義貞即ち義助をして赴いて軍事を統べしむ、會々高経の部將細川某來襲せしと雖、撃つて之を卻け、更に進みて府城を取りしが、七月義貞藤島に戦死するや、義助退いて石丸城を保ち、四年(曆應二年)七月足利羽城に高経を攻めて之を陥る、此歳後村上天皇即位するに及び、特に優詔を賜ひ、托するに軍國の事を以てす、尋で尊氏兵を遣はして高経を救ふに際し、義助破れて美濃に趣きしが、再び土岐頼遠の敗る所となり、遂に吉野に逃る、翌日刑部卿に任ず、興國元年(曆應三年)の春、伊豫國人兵を起し統帥を請へるを以て、義助命を拜して下向し、西國の軍事を督す、是に於て南海の官軍また振ふ、義助即ち入りて府に居りしが、五月病んで卒す(大日本史)

ワケ

別 名義姓の一種、其名義に就きて諸

ワケサ

説あり(一)吾君兄の借字なるべし(二)諸國を別ち賜ひて主たりしむる義なり(三)別れて始祖となるを言なるべし(和訓栞)(四)アイヌ語の官名バクにて、頭又は主長の義なり(中田素氏説)(四)別とアイヌ語のバクと同一語根なれども、アイヌ語より出でたるものにあらずして、國語の敬稱語にて、頭首、根本、多大の義を含むものなり(白鳥博士) 藤原清隆 古事記景行天皇の條に「五十九王、并八十王之中、七十七王者、悉別賜國々之國造、亦和氣及稻置、縣主也」と見え、書紀同天皇の條にも「七十餘子、皆封國郡、各如其國、故當今時、謂諸國之別者、則其別王之苗裔焉」とあり、これ別の見えたる始めなり、又孝徳紀大化二年改新の詔に「別、臣、連、伴造、國造、村首所、有部曲之民云々」とあるを見れば、上古は貴き姓たりしが如し、古事記中に、皇子にして別姓を負へるもの二十五氏あり、皆諸國の地名を以て名とせり、然るに後に滅びて氏となりしこと、續日本紀天平神護元年三月の條に「藤野別真人虛虫女、藤野別真人清隆等見たるにて知るべし、カバネ參看(古事記傳、姓序考、氏族考、倭訓栞、國家學會雜誌、可波根考) 史學雜誌「國語に於ける敬稱語の原義に就て」

ワケサ

輪袈裟 「ケサ」を見よ、

ワケノキヨマロ

和氣清盛 名義初め 氏姓を襲別公、尋で藤野別真人、または輔治能真人と改め、後更に和氣朝臣を賜ふ(系統 藤石別命の後裔、父詳かならず、姉を法均尼といふ事蹟備前藤野郡の人、從六位上に叙し、右兵衛少尉となり、天平神護中、從五位下に進み、近衛將監に移る、神護景雲三年、大宰主神中臣實宜阿曾八幡宮の託宣を奏して曰く、道鏡をして皇位に即かしめば、天

ワケ

下太平ならんと、稱徳天皇これに迷ふ、既にして天皇清隆を牀下に召して曰く、朕昨夜夢みらく、八幡神使來りていふ、大神事を奏せしめんが爲めに、尼法均を請ふと、汝宜しく、姉に代り往いて神命を聽くべしと、蓋し法均は早くより天皇に事へ、委れるに腹心を以てせられしかば、清隆また姉の緣故により、天皇の信任を忝くせるがゆゑに、此命ありしなり、發するに臨み道鏡、清隆を喚び、暮るに官爵を以てす、時に路豐永あり、清隆に謂て曰く、道鏡にして、もし天位に登らば、吾れ何の面目ありてこれに事へんやと、清隆は死を誓うて往き、神宮に詣りて教を請ふ、神託宣して曰く、我國開闢より以來、君臣の分定る、臣を以て君とすること、いまだ之あらざるなり、天日嗣は必ず皇緒を立てよ、無道の人ば、宜しく早く掃除すべしと、清隆歸り來りて奏する事神教のごとし、是に於て道鏡大に怒り、清隆の本官を解き、因幡員外介と爲す、未だ任所に赴かざるに際し、詔あり、姓名を別部磯磨と改め大隅國に流す、參議藤原百川其忠烈を怒み、備後封二十戸を割いて之に與ふ、光仁天皇踐祚し、道鏡を下野に竄する及び、寶龜元年清隆の姓名を復して召し還し、二年また本位に復し、播磨員外介と爲す、天應元年從四位下に進み、延暦中攝津大夫となり、從四位上に叙し、民部大輔、中宮大夫を兼ね、尋で正四位下に進む、時に桓武天皇長岡の新都を營み、十歳にして成らず、費す處甚多し、清隆密に奏し、遊獵に托して、萬野の地を相し、都を遷さんとを請ふ、十五年從三位に陞る、幾もなくして骸骨を乞ふ、許さず、功田二十町を賜ひ、以て子孫に傳ふ、十八年薨す、年六十七、正三位を贈る、清隆通曉する所多く、最も故事に明かなり、民部省例二十卷を撰し、また中宮の教を奉じ、和氏譜を撰し

ワケベ

て之を上る、また嘗て田一百町を備前に墾し、永く賑給の資と爲す、郷民之に頼る、嘉永四年三月詔して、高尾山神護寺なる清隆の廟に、護王大明神の神號を宣下し、正一位の神階を授けられしが、明治七年別格官幣社に列し、護王神社と改め、十九年十一月、山城國京都市上京區櫻橋岡町に遷す、明治三十一年更に正一位を贈らる(大日本史、輔世宿禰記、公卿補任)

ワシヤウ

和尙 「ワシヤウ」を見よ、

ワスレ

忘緒 名義半臂の緒をいふ、夏冬共に羅を用ふ、幅三寸五分、長さ一丈二尺あり、疊みて左の腰の前通りに垂るなり、着用二つに折り、わなの片を又三分一許に折り、引のびしたる袴のあしつきより、三四寸さがる處を見計らひ、半臂の上より、腰様に左の腰の前通りに當り、三分一に疊みたる其中程を、同じ緒にて結ぶなり、服制及び衣服の挿納并に「ハンビ」參看(雜史、裝束集

ワケ

和讃 佛教家が印度の伽陀、支那の頌に倣ひ、和語を以て文句を調へ、佛菩薩及び祖師の盛徳を讚嘆したる詞をいふ、和語の讚歌の義なり、平安朝時代の末葉、淨土教の流行に従ひ、善導の往生禮讚等の傳唱せらるゝに方り、淨土教を主唱する僧等が、漸く倣ひて作りたるものなり、横川の源信の來迎和讃、二十五菩薩和讃、山王和讃、天台大師和讃、覺超の阿彌陀和讃、及び藤原通憲の智證大師和讃と云ふものあり、是等の作者に就いて、確證なしと

ワケ

光命 光庸 光實 光邦 光寧 光貞 光利 光謙

ワシヤウ

隆長 隆照 隆建 隆仲 隆純 隆遠 隆康 隆尙 隆量 隆光 隆尹 隆長 隆照 隆建 隆仲 隆純 隆敬 隆賢 隆榮

ワシヤウ

隆長 隆照 隆建 隆仲 隆純 隆遠 隆康 隆尙 隆量 隆光 隆尹 隆長 隆照 隆建 隆仲 隆純 隆敬 隆賢 隆榮

ワタガ

成、裝束甲冑圖解

ワタガミ

綿上 織の名所「ヨロヒ」を見よ、和田倉門 江戸城内郭門の一、慶長十二年頃の圖に、和田蔵と稱せし大なる御藏

二棟を記せり、これ門名の起る所なり、藏地は後に版となりて、近年まで御馬預り曲木又六郎杯の役宅なりしが、文政中松平肥後守の添屋敷に賜へり、門衛には、譜代大名二三萬石限り、番士五人、羽織袴著、武器に鐵炮十挺、弓五張、長柄十筋、持筒二挺、持弓一組を備へ置く、番所の法令外櫻田門に同じ(御府内備考、殿居裏)

ワタジロノヲドシ

肩白威 威の一種、鏡の袖の上二段を白く威したるを云ふ、例へば赤威肩

白と云ふ、總體を茜染の糸にて威し、袖も赤威にして、袖の上二段を白糸にて威したるなり(軍用記)長門本平家物語石橋合戦の條に「大庭が云けるは、さなだは葦毛なる馬に乗たりつるが、わだじろのよるひに、すそがなものうちて云々」とあり、又肩を赤に威したるを肩赤威、紅に威したるを肩紅威、紫に威したるを肩紫威、淺黄に威したるを肩淺黄威といふ、「ヲドシ」參看、

ワタナヘウチ

渡邊氏(和泉伯太) 姓は源氏、源綱の男筒井源太久、攝津渡邊に遷住す、十八世の孫渡邊道綱、三河碧海郡浦部に移住し、延徳三年始めて松平親忠に仕へ、浦部の地七十貫を授けらる、爾來代々徳川氏に仕ふ、四世守綱、家康に仕へ、槍に名あり、槍半藏と稱せらる、永祿六年一向衆一揆の時、家康に背きしも、久しからずして亦仕へ、天正十八年武藏松山の地三千石を賜ふ、慶長六年關ヶ原役の功により千石加賜、十五年、其子重綱と共に尾張義直の傳となり、一萬石加賜、同年近江の地三千石を重

綱の次子忠綱に分與す、元和九年忠綱早世せしを以て、其地を弟吉綱に與ふ、慶安三年叙爵して丹後守と稱す、寛文元年方綱、和泉の地一萬石を賜ひ、伯太に治す、前封と合せて一萬三千石、千孫相繼ぎて明治に至り、華族に列し子爵を授けらる(藩翰譜、徳川加除封録、華族譜家傳、華族譜)

○守綱 重綱 吉綱 方綱 基綱 登綱

信綱 伊綱 豪綱 春綱 則綱 潔綱

章綱 寛綱

ワタナヘクワサン

渡邊華山 名義名

は定靜、通稱は登、字は子安、又伯登といひ、華山、隨安居士と號す、法名文忠院華山伯登居士、定通の子、田原侯三宅氏の世臣なり、寛政五年九月江戸の藩邸に生る、壯にして儒を覽見星學、佐藤一齋に、繪畫を平山文鏡、宋紫山、金子金陵、谷文晁等に學びしが、文化十一年納戸役となるに及び、公事極めて繁劇なりと雖、餘暇あれば、心を讀書給事に用ひしを以て、學識技藝共に進む、父歿するの後家を嗣ぎ八十石を食み、文政九年番頭となり、尋で側用人に轉じ、天保三年五月更に家老職に上り、祿百石を加へ、役料二十石を賜ふ、是より専ら心を民事に用ひ、補翼する所甚多し、又意を常に外警に注意し、三十二歳の時蘭學に志したれども、自ら原書を讀むの已に晩きを知り、高野長英、小關三英等を延きて、蘭籍を講せしめ、尋でまた長英、三英等と共に尙齒會を興し、政治經濟の方策を研究したりしが、英艦モリソン號渡來の風聞あるに及び、幕府が打拂の擧に出でんとするを聞き、華山は憤慨論を、長英は夢物語を著して其不可論す、憤慨論はなほ實底に藏して出さざりしも、夢物語は早く世に流布したり、此時に際し、江戸町

ワタニ

ワタラ

奉行鳥居忠輝深く蘭學を思ひ、機を見て蘭學者一派を羅織せんとするの意あり、會々山口屋金次郎といへる者、亦夙に蘭學を好みしが、同志と共に無人島に航し、之を開拓して物産を興さんとし、密に計畫する所あるや、忠輝の屬吏等この擧を以て、名を開拓に托して外人と交通せんと企つる者にして、華山長英の一派も其與黨たりと識したるがゆゑに、忠輝幕閣に説き、急に華山等を捕へて獄に下し、札問を加へしが、無人島事件は元より關係を有せざりしも、其著憤機論に於て政治を批判し、人心を迷はすの論を記したるを咎め、郷里に送致して家に禁錮す、時に天保十年十二月なりき、而して禁錮中、法を犯して門人等に書信を往復せること世に傳唱し、爲めに物議を生ず、華山累を藩主に及ぼさんとを恐れ、十二年十月十七日自盡す、年四十九、田原の城資寺に葬る、明治二十四年正四位を贈らる、華山尤も繪畫に長じ、優小派を爲す、遊相小鏡、訪景錄、憤機論、越舌小説、同或問、一掃百態(文明東漸史)

ワタニヒ

肩匂 鏡の袖の上を匂に威したるを云ふ、袖の下の方をば濃き色にして、上より二段めをば中色にして、又上の一段をば薄色にするなり、「ヲドシ」參看(軍用記)

ワタラヒノコホリ

度會郡 所在 伊勢國度會郡古へ度會縣あり、大化五年分て、度會及び多氣二郡を置き、各十郷を管す、書紀度會、又は度會に作る、和名抄に、宇治、田部、城田、湯田、伊蘇、高田、箕曲、沼木、繼橋、二見、伊氣、驛家、陽田等の郷あり、淳仁天皇の朝、此郡南境志摩國と界を接し、境域を争ふの事ありしが、後ち英虞郡の三郷を併す、正保國渡會に作り、寛知集度會に復す、元祿撰又渡會となし、郡名考度會に作り、天保撰渡會に作り、明

ワタツミノクニ

綿津見國(海神國) 太古我國一部の國名、綿津見は海つ持にして、ワタツミは海のことなり、即ち海洋を領有せるの義、所在に就きて諸説あり(一)本居宣長は、海底の國なりといひ(古事記傳、これは古傳を古傳として解釋したるものにして、太古かゝる信仰ありしは明かなり)(二)新井白石は新羅なりといひ(古史通或問)近時田口博士も之と同説を唱へ(史海)(三)中山信名は琉球なりといひ(東極雜記)(四)吉田東伍氏は饜羅即ち後世の筑前國箱屋筑紫早良三郡の地なりといひ(日韓古史斷)(五)古事記傳に引用せる一説には、薩摩國近くの小島なりといへり、未だ之を詳かにせず、暫く記して後考を俟つ、されど古事記に、火遠理尊が、綿津見神の援助を得て、火照尊を征服せることあるを以て考ふれば、其勢力の強大なりしこと想像するに足るべきなり、

ワタリリヤウ

渡領 王朝時代申葉以後、家又は職に附屬せる所領を云ふ、其家を承け、其職を繼ぎたる人々が、世襲する所なるを以て名く、天皇

上皇には後院領を渡領とす、嵯峨天皇の時より起りて、南北朝時代まで存したり、委しくは「ゴキム」を見て知るべし、藤原氏の長者に附屬したる渡領は、大和國佐保殿、備前國鹿田庄、越前國方上庄、河内國楠葉庄の四ヶ所にして、殿下渡領とも云へり、藤原氏の長者たるものは、大抵攝政關白を兼ね、攝政關白は殿下と言ひしを以てなり、四ヶ所の外殿下渡領と稱するもの多かりしと見え、源平盛衰記殿下御母立願事の條に「紀伊國田中庄は殿下渡庄なりけれども云々」とあり、其起原詳かならず、中右記嘉保元年三月十

ワタツ

ワタリ

ワツフ

ワドウ

ワドウ

ワミヤ

一日藤原師賢が、同師通に朱書奉盤、及び長者の印等を譲りし條に、渡領四ヶ所を譲りしこと見えたるは、渡領の見えたる初めとす、これより藤原長者となりし時は、庄園に朱書奉盤文書と共に、必ず傳領する例なりき、また小槻の壬生氏は若狭國國富庄、越前國久次庄、備後國神崎庄、土佐國吉原庄を渡領したりき、思ふに、此風は後鳥羽天皇建久以後始まりしなるべし、なほ東寺寺務にも渡領ありて、寺務遷替の時には、必ず之を傳領するの例なりき、攝津國垂水庄のごときは、即ち其一にして、東寺百合文書元仁元年四月二日、攝津國垂水庄預所承宣と、下司藤原家行、公文藤井重綱等と、年貢を争ひし時に、北條泰時が裁決の内、「承宣如申者、當庄者東寺寺務遷替之渡庄云々、如家行申者、爲渡庄之條無子細云々」と見えたり、此外諸家諸職等に屬せるものなほ多し(中右記、兵範記、攝關宣下類聚、壬生文書、壬生家譜、東寺百合文書)

ワツフ

割付 江戸時代、地方三帳の一にて、百姓公納年貢の目録をいふ、御年貢可納割付とも稱す、國々により之を免狀ともいふ、即ち關東にては割付といひ、駿河より以西の國々には免狀といふ、割付といふ義なり、また免狀といふは、是程年貢を納むべし、其餘は百姓の取分に免じやるといふ義なり、また所により、下ガ札といふあり、其理由詳かならざれども、小宮山氏の考には、免狀と同意にて、上より下さる、年貢の書付といふ意なるべしといへり(田園類説、地方凡例録、農政座右)

ワドウ

和銅 元明天皇御宇の年號、慶雲五年正月十一日、曩に武藏國秩父郡より和銅を獻じたるを以て元を改む、七年を経て元正天皇即位し鑑龜

ワドウ

と改元す(續紀)

ワドウカイハウ

和同開珎 名義錢貨の一種、和銅の年鑄造したるを以て此名あり、性質銀と銅との二種あり、銀錢は、徑八分、重二匁一分強、銅錢は徑八分、重一匁、銀錢一文は銅錢四文に當れるが如し、和同開珎和銅元年五月、始めて銀錢を行ひ、同年七月近江國にて銅錢を鑄造し、翌八月始めて之を行ふ、後ち太宰府、播磨等に之を鑄る、尋でまた長門國を鑄錢地と定めらる、同二年八月銀錢を廢し銅錢のみを行はしむ、淳仁天皇天平寶字年間新錢を鑄造す、「セニ」の挿繪參看(大日本貨幣史) 珎は古來より珍なりとも寶なりともいひ、兩説ありと雖も、他に神功開寶の例あるより考ふれば、寶の省字とする方信すべきなり、

ワトクモン

和徳門 「ワトクモン」を見

ワミヤウル井ジウセウ

倭名類聚抄 各種略して倭名抄ともいふ、卷第二十卷、十卷の二種あり、内容事物の和名を分類して聚め、和漢の群書を採り、文字の出處を明かにしたるものなり、蓋し本邦辭典の嚆矢と云ふべし、十卷本は天地、人倫、形體、疾病、術藝、居處、舟車、珍寶、布帛裝束、飲食、器皿、燈火、調度、飲食、羽族、毛群、牛馬、龍魚、龜貝、稻穀、桑、蔬、果、蟲、草、木の廿五部に分つ、二十卷本は、時令、樂曲、湯藥、官職、國郡、殿舎の六部多し、狩谷披論して「十卷本は原本にして、二十卷本は後人の増補する所なるべし、然れども類聚名義抄、伊呂波字類抄問々二十卷本を引用せし處あり、且つ本朝書籍目録にも、兩本を並べ擧げられたれば、後世の書にあらざるべし」といへり、序文に「上舉三天地、中次二人物、下至草木、勒成十卷、卷中分部分門、廿四部百

ワヨシ

廿八門(流布本二十卷、四十部、二百六十八門に作る)名曰和名類聚抄と見えたり、二十卷本は伊勢本尤も古く、元和中那波道圓刊行し、寛文七年、慶安元年亦刊行したり、十卷本は尾張大須寶生院本を寛政十三年刊行せり、此他寫本數本あり、文政中披齋十卷本を基とし、以上諸本を校合せるもの、尤も完備す、明治十六年四月印刷局より刊行せり

ワヨシヤウ 和與狀 鎌倉時代訴訟の時、問答中一方承諾して和解せざる時、雙方より奉行に出す文書を云ふ、奉行は其狀によりて下知狀を作り、之に授けて證となす例なり、其證判を袖に書くと、裏に書くとの二様あり、一に之を和與認可狀とも云へり(沙汰未練書、武家名目抄)

ワラハ

ワラハサウソク 童裝束 童の着用する裝束をいふ、細長(ホソナガ)と汗衫(カザミ)との二種あり、各其條につきて見るべし、

ワラハナ 童名 幼稚の時付する名、元服以前に用ふ、また小字、乳名、若名とも稱す、公家にては、攝家は何君、清華以下は何丸など、稱す、鶴君、松雄君、藤丸、鈴丸の如きこれなり、又何若丸、何千代丸とも稱し、略して何若、何千代ともいふ、武家及び其以下の庶人等は、堂上家のごとく、何若、何千代、何丸等の稱多く行はれたり、源義経が牛若丸、豊臣秀吉が日吉丸、徳川家康が竹千代といへるがごときこれ也、又何松とも付けたり、福島正則が市松、徳川忠長の國松など、いへるにて、知るべし、箱王、春王、松王、蓮花王など、何王と稱することも、早く平安朝時代の末葉より行はれたり、王はもと皇族の稱

ワラハ

なるが、轉じて庶人の幼名に付することゝなれるなり、又室町時代の末より、江戸時代の初にかけて、幼名にオ字を加へ、女の名らしく呼ぶこと行はれたり、水戸光圀の幼名長丸なるをお長といひ、本多成重の幼名仙千代なるをお仙といへるが如きこれなり、名(ナ)參看(大鏡、曾我物語、今物語、源平盛衰記、太平記、平治物語、太閤記、四季草、貞丈雜記、玉勝間、元服法、南留別志、故實拾要、類聚名物考、徳川實紀、支同筆記)

ワラハヤミ 瘡 病名、隔日に起る故にオヨリとも名づく、又冷戦寒瘰とも書す、古言ワラハヤミ、熱病の寒熱、日を隔て時を定めて發る、其發るをフルフと云ふ、

ワリモトソウダイ 割元總代 大庄屋に同じ、單に割元とも稱す、「オホシヤウヤ」參看、

國史大辭典終

發賣所



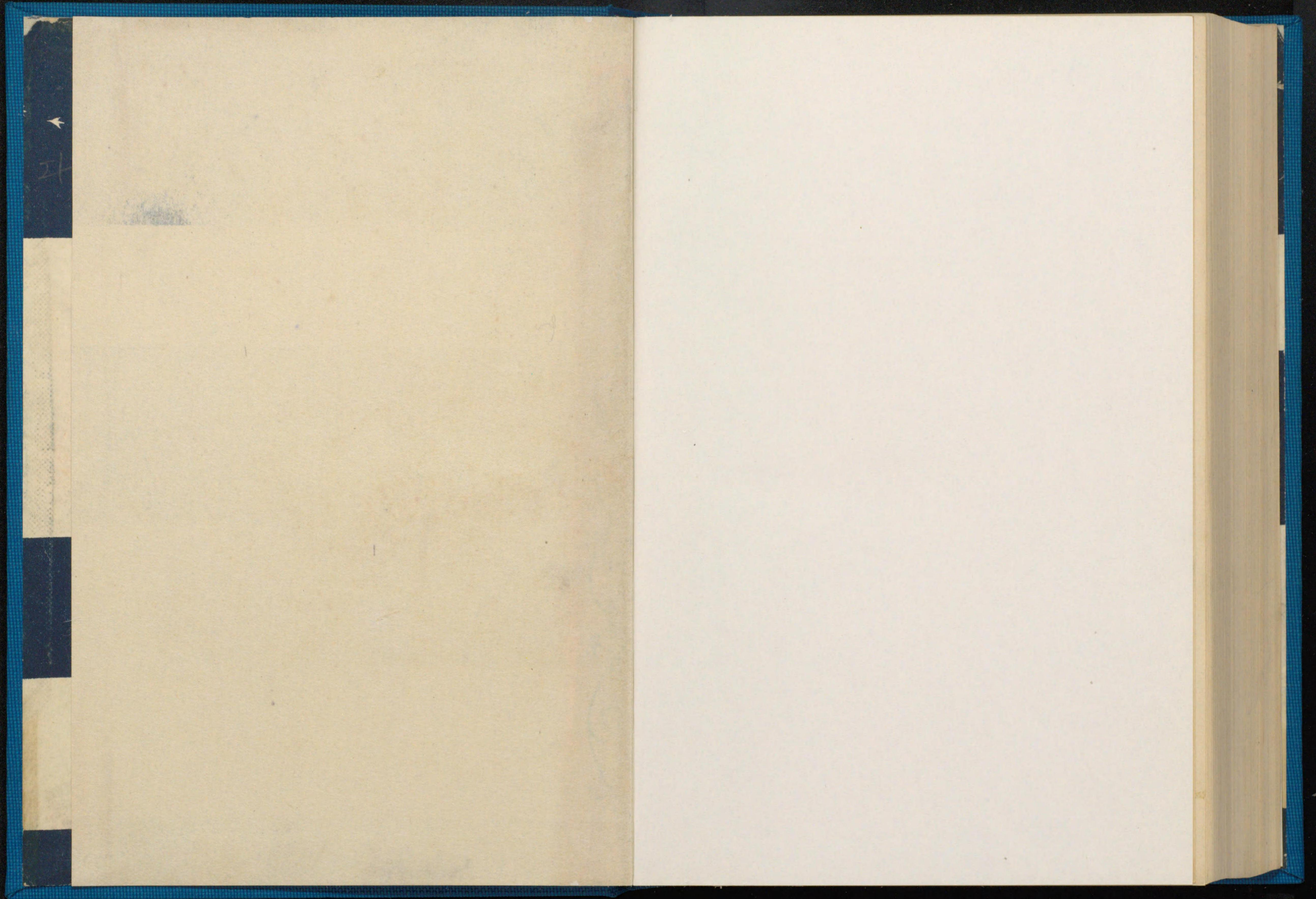
明治四十一年七月十一日印刷
 昭和二年十月二十五日大増訂印刷
 昭和二年十月二十五日大増訂發行

大正四年五月五日増訂發行
 大正十四年八月十五日大増訂發行

編纂者 文學博士 八代 國治
 同 早川 純三郎
 同 井野 邊茂雄
 發行兼印刷者 東京市京橋區鈴木町一二番地 吉川 半七
 印刷所 三原縣四日市市留田三七六番地 四日市印刷株式會社
 發行所 東京市京橋區鈴木町一二番地 吉川弘文館

東京市日本橋區數寄屋町六 合資會社 柳原書店
 大阪市東區北久太郎町四丁目 合資會社 瀨川書店
 名古屋市西區下長者町四丁目 合資會社 日川書房
 東京市京橋區鈴木町 國際美術社
 東京市牛込區早稻田鶴卷町三三

IA 88



INASS

ウ

ウ

INASS

